
幻象-Phenomenon

闇十郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻象 -Phenomenon-

【ZPDF】

Z0226G

【作者名】

闇十郎

【あらすじ】

日常の隙間でひそかに起きていく怪事や変事。その根源は人にはらざる存在、『幻象』。奴らは不気味なまでの自然さで、暴力的に我々の平和を乱してくる。明確な悪意を持つ者や悪戯好きな者。色んな奴がいる。憐れ、それらと一度出合つてしまえば非常識に引きずり込まれ、泥沼の恐怖を味わうことになる。日常に突如ひらく小さな穴、その穴に落ちた者達の戦慄の体験を御覧いただこう。感想・評価募集中。ツイッター始めました。よかつたらフォローして下さい。@yamijiyo

プロローグ・邂逅 - m a d n e s s v i s i t o r (前書き)

初投稿で、処女作です。至らぬところもあるでしょうが、お付き合いいただければ幸いです。

何が起きたか分からなかつた。

壊れた電灯がチカチカと明滅し、とあるアパートの一室を照らしている。

そこはこの世の地獄だつた。

腹を裂かれて中身をぶちまけた女性。男性とおぼしき死体は首から上を無くし、紅い液体を延々垂れ流し続けている。その中心に少年と少女がいた。

黒地に紅いラインが幾つも入つたゴスロリ服。肩よりも長い灰色の髪と異様に白い肌、闇を称えて光る深紅の双眸。

ただでさえ異様な容姿の少女は2人の人間を惨殺し返り血を浴びて笑つており、ますます怪異な雰囲気を醸し出していた。対する少年は両親を殺されたショックから顔も上げられず、俯き震えるばかりである。

開け放たれた窓から月明かりが部屋に降り注いでいる。緩やかな春風が抜け、血と腐臭を沸き上がらせた。

異質な、けれども幻想的な美しさが漂う光景。生の季節に吹く死の風に華奢な身体を任せた少女もまた、妖花のような美を誇つていた。

少女は感極まつたように泣きそうな声で言つた。

「ずっとずっと会いたかったよ。^{あき}明ちゃん」

死人同然の顔で少年は少女を見上げる。目が離せない。ほとんど思考はできないが、この少女に何か見覚えがあつた。

「ゆっくりしていきたいけど、私には時間がないの。また会いに来るから。待つてね」

そう言つて少女は名残惜しそうに姿を消した。

静寂が辺りを包む。

少年は呪縛から解放され再び頭を垂れた。

少年の視界が歪んでノイズが混じる。部屋の色々なモノが消えていく。

様々な家具、撒き散らされた両親の欠片、床だけに留まらず壁さえも塗装している2人分の血液。

それは混乱の極みが引き起こした現象か。はたまたこの悪夢の続
きなのか。

考える暇もなく少年の意識は黒に閉ざされた。

第1話・蔽和 - peace (前書き)

隠蔽 + 平和 = 蔽和です。

第1話・蔽和 -peace-

静かな朝。

普通の家庭なら人が廊下を歩く音や朝食を準備する音、挨拶なんかが聞こえるはずの時間帯。

しかし、榎原家は無音。耳鳴りも恋しくくらいに完全に沈黙している。

この家は半年前の悲劇から音と温度を喪失している。しかしながら、こここの住人はその実感がないのである。

「ふわああ……」

唯一の音源は事件の生き残りである長男、榎原明人。彼の欠伸が静寂を破る。

「今日はクラシックでもかけてみるか」
リビングに出てオーディオのスイッチを入れる。安らかな曲が空虚なアパートの一室を満たしていく。

「今日もいい天気だな」

カーテンを開けると秋晴れの空が目の前に広がる。12階建てアパートの8階に位置するこの部屋は見晴らしあんまりない。見る限りは緋森市は自然と文明が共生共栄する街という印象を与えるかもしれない。

だが実際は交通網を発達させ都会化するといつ計画が中途半端な状態で頓挫しただけなのだ。

「……おつと」

ちょっと物思いに耽っていた明人はトースターの音で現実に引き戻された。そして食事が終わるとすぐ支度して家を出た。

「いってきます」

もちろん返事は無い。だが虚しい挨拶が毎日の習慣になっていた。

それでも、虚しいとは思わない。やはり当人には自覚がないのである。

駐輪場まで降りてチャリに跨がる。

ケータイに繋がるイヤホンを装着して走り出す。

ディスプレイには毎朝恒例の新着メッセージがあった。開くと音声が再生されはじめた。

『おつはよー！ お兄ちゃん。今日も元気？ 今日は米国最後のテストが帰ってきたよ。数学以外は最高なんだ！ ラストだし、かなり気合い入れたから当然だよね。それじゃおやすみなさい。あともうすぐ会えるね！ バイバイ』

「ああ、もうすぐだ」

ぼそりと一人呟く。

朝から元気過ぎる声に頭が痛い。頭は良いはずだが、アメリカとは時差があることをなかなか理解してくれない。案外わざとかもしない。

これは男子たる者誰もが一度はして欲しいと思うであろう美少女からのモーニング「ホール」という類いのもの。

そんなささやかな願いを叶えたのは明人の場合、現在アメリカに一年間だけ留学中の妹、藍あいだった。

相手が妹なので明人に特別な感情は無かつた。

だが明人の友人で藍と面識がある奴らにこのサービスを知られた時は酷かつた。

ほんの数時間後には学校中の男共に広まり、散々茶化された。しかし最終的に奴らは嫉妬に狂っていた。

更には藍の熱烈なファンがケータイを強奪する作戦に出たりもした。

結局その騒動は明人の慈悲によつて沈静化された。

次第に慈悲はエスカレート。

今ではたまに写メで送られてくる画像までも餌にしてリスクペクト

を大量獲得して明人はある意味教祖の立場に君臨していた。

今では落ち着きを取り戻し、犯罪になりそうなこれらの行為から足を洗つた。

しかし、あと約2日で本人が帰国する。そうすれば必然的にばれてしまうだろう。

「ま、別にいいんだけどな」

藍にお灸を据えられること必死なのだが、その反応を見るのは楽しみである。

ニヤリと口元が緩んだ。

「何笑つてんだ？ 明人。変態の素質があるんじゃないのか」

「ふん。そんなこと知り合つて一瞬で分かつただろ」

「それもそうか」

しばらくこいでいると友人が数人合流した。

交友関係は広く浅くがモットーだ。男子も女子も関係ない。遊ぶ相手には事欠かさないが、親友と呼べる奴はない。

「悲しいとは思わないな」

明人の口が勝手に言葉を紡ぐ。すかさず、友人がツッコんでくる。

「お前、独り言多すぎ。その癖何とかならぬーの？」

「三つ子の魂百まで。直るもんじやない」

「3歳からブツブツ言つてたのか、キモいな」

「そうじやなくてだな……」

騒がしい登校。両親は長期旅行中、妹は留学で実質一人暮らしの身には嬉しい。

「有意義な生活だよな」

自転車小屋にチャリを置くとまた独り言が漏れた。

第2話・夢惨 - t r a p o - c (錄音モード)

夢 + 惨 (t r a p o - c) = 夢惨です。

第2話・夢惨 - tragic

明人が2階にある教室に向かう途中で状況は一変した。

「キヤーーッ！」

突然女子の悲鳴が校内に響き渡った。

「なんだ？」

不安を感じながらも好奇心に駆られて走った。悲鳴は上の階から聞こえた。

2、3階は異常無し。4階の廊下に出ると一つの教室に野次馬が集まりつつあるのが見えた。

遠目からでもかなり恐々としているのが見てとれる。

「ごめん、ちょっと通して」

本能が行くのを拒否している。しかし、踏み出す足も人を搔き分ける手も止まらない。

そして4階の特別講義室にたどり着く。

「あ」

見てしまった。

朝の陽光に照らされ真紅に輝く教室の中央にそれはあった。

普通の教室よりもかなり大きな部屋に大量の机を繋げた粗末な舞台ができていた。その上にそびえる巨大で醜悪な肉のオブジェ。

舞台の縁には10本の腕が環状に生えていた。肘から先を輪切りにされその断面を机にくつつけて。

その中心には誰だか分からない5人の生徒がいる。

そのうち4人の男子は頭部と両腕を無くしている。そしてそれぞれが外側に向かつて無い頭を垂れ、そのグロテスクな切り口から赤黒い液体をこぼしつづけている。

その4人が作るさらなる輪の中に1人の女子がいる。やはり腕は

無い。

彼女は天井からぶら下がっている鎖に繋がつた返し付きの杭に両肩と後頭部を貫かれ、支えられながら不安定に立っていた。

普通なら俯く頭を短い鎖が無理矢理あげさせている。それは憐れな女子の子の表情を晒すためだろうか。
目を裂けんばかりに見開き、半開きの口からはだらだらと血を流す。そんな歪んだ顔を。

パシヤア

気の抜けた音に明人の思考が中断される。

振り向くと男子も女子もケータイで血のオブジェを写真に収めている。

「なにしてんだ！ やめ、うわ」

明人は誰かに押されて教室に放り込まれた。
血の海と化した床で滑つてひっくり返り、立ち上がることもままならずもがいた。

その間生徒達は明人と血のオブジェを耳障りな音と共に撮り続ける。

前後のドアだけでは足りないらしく廊下の窓をぶち破りスペースを確保する奴もいる。

狂気のカメラマン達は飛散したガラスなど氣にも留めずすぐにその場所を埋め尽くした。

明人を見つめる顔顔顔顔顔。誰も彼も気が触れた面持ちで撮影を繰り返す。

突然シャッター音が止んだ。そして狂人達は一斉に黒板を指差した。

気持ち悪いくらい息が合っている。

明人は恐る恐る指差された場所を見た。

『SOON』

緑、黄、赤、白と色とりどりのチョークでさも楽しい落書きのように描かれた単語。

理解不能だつた。何が『すぐに』なのだろう。

「キネンサツエー」

誰かが奇声を発した。

パシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤ
すぐさま撮影が再開された。

あまりの意味の分からなさで、何かが切れたような気がした。

明人は意味不明な言葉を叫びながら狂人の群れに飛び掛かろうとした。

しかし、血で滑つて激しく転倒する。暴れて起き上がろうとした時机を蹴り倒してしまった。

それは、オブジェの崩壊を招いた。

時の流れがゆるやかになつていいくようだった。

腕と男子の体がゆつくりと落ちてくる。

ただ一つ。吊るされた女の子は足場を失い、ぶらぶらと揺れてい る。

明人と女の子の目が合つた。抜け殻の瞳。

完全に命を失つたはずの女の子は表情を変えて、嗤つた。

「うああああああ！」

椅子と机が弾き飛んだ。

「ど、どうした！？」 榎原

教師の質問。不思議そうにこちらを見つめるクラスメイト達。黒板には訳の分からぬ数式。

「…………へ？」

状況が飲み込めず突つ立つたままの明人の口からは驚くほど間抜けな咳きしか出なかつた。

「ブツ、ヒツハツハツ」

「何だよ、明人、つく、ははっ」

「キモ～イ」

誰かが吹き出したのを皮切りに教室中が爆笑の渦に巻き込まれた。数学教師まで堪えきれず、くつくと笑つてゐる。

明人は体温が急上昇するのが分かつた。

「ああクソッ！」

全力で教室から飛び出した。

授業中にも関わらず廊下は何があつたのか確かめようとする教師と生徒で溢れていた。みな好奇心旺盛な視線を投げ掛けてくる。

今なら陸上競技で全国を狙えそうな速さで明人はその中を駆け抜けた。

「失礼します！体調が悪いのでベットを借ります」

明人はスライド式のドアを破壊せんばかりに開け保健室に飛び込

んだ。

「え、ちょっと！待ちなさい」

校医の制止を振り切り空いていたベットに突進しカーテンを閉めた。

カーテンの向こうで校医はしばらくおりおりしていたが、結局何も言わずに仕事を戻つた。

（んだよ、夢かよ。もう最悪。引きこもりたくなっちゃったよ）
恥ずかしさと酸素を求める脳の指令と今後の学校生活の事で頭は
カオス状態だった。

頭が整理されてようやく冷静さを取り戻したのは10分後。
ケータイを確認すると本日最後の授業の真っ只中だった。
それが終われば明人の恥態が電光石火で全生徒に知れ渡るだろう。
明人は放課後、生徒が全て出払うまでここに居ようと決心した。
そして残りの時間は誰も面会に来ないことを祈った。まあ、授業
をサボつてまで来るわけはないのだが。

終礼開始のチャイムが鳴った。

それからもう数分後、帰宅する生徒や外で活動する部の部員達の
話し声が聞こえ始めた。

幸運にも保健室は1階、昇降口のすぐ近くにあるのでそういうた
く状况は手に取るようになれる。

校医の先生も「榎原くん、帰る前に机の上のプリントに書いとい
てね」と言つていなくなつた。おそらく職員会議に行つたんだと思
う。

保健室には明人一人が残された。

昇降口から人の気配が消えるのを今か今かと待つてると唐突に
保健室のドアが開いて誰かが入ってきた。
(まさか、クラスの悪魔共が来た!?)

夕日に照らされたカーテンに少女のシルエットが大きく映る。

「特別講義室に来て」

「誰?」

飛び起きてカーテンを開けたがその女の子はいなかつた。

「しかし特別講義室とはまたタイムリーな」

特別講義室は4階にあり主に補習に使われるため普段人は来ない。

密会にはうつてつけだらう。

しかし明人が先ほど見た夢。はっきりとは思い出せないがあれも4階が舞台ではなかつただらうか。

背中に悪寒が走った。

やめてしまおうか。でもたかが居眠りして見た夢にびびるのも不甲斐ない。それに女の子に誘われて行かないのもどうかと思う。

「分かったよ。行つてやる」

散々悩んだ末、明人が決断した時にはもう校舎に人気はなかつた。ひとけ

第3話・幻実 - feel like heaven (前書き)

現実 + 幻 = 幻実

feel like heaven ≪天国みたいな感じ≫

一部文字化けを意識して書いているところがあります。

第3話・幻実 -feel like heaven-

保健室を後にした明人は無駄に階段を時間をかけて登つていた。足が震えるし気分は最悪だ。

「なんで自分の学校をこんな怖がつてんだよ。バカみたいじゃん。でもなあ…」

あの夢を思い出そうとすると頭の片隅がチリチリと痛んだ。しばらく考えてあんまり鬱々していると今から会う女の子に嫌われるだろう、という結論に至った。

明人はぐだぐだ考えるのをやめた。

「やっぱり…」

特別講義室のある4階は夢で見たのとほぼ同じだった。

あの光景から人混みを取り除いただけ。そして窓からは昇る太陽ではなく沈む太陽が見える。

「もう、どうにでもなれよ」
意を決してドアを開けた。

茜色に染まる無人の教室。そこには、もちろん机で作られた舞台も血の海もない。

ただ窓の外を見つめる一人の少女がいた。

「俺を呼んだよね？」

明人は踏み込んでドアを閉めた。

少女がゆっくり振り向く。

豊かな茶髪をアップに纏めたポニーテールが揺れる。小柄な顔に愛嬌のある八重歯と大きな瞳が印象的な美少女だった。

(この子初めて見るなあ)

明人は人間関係において広く浅くをモットーにしていた。

そのため学校でかなり顔が広い明人にとってはこういう事態は珍しいことである。

しかも相手はかなりの美人。噂くらい聞いたことがあつてもいいものだ。

「はじめてまして、だよね？ 榊原くん」

凛とした声が響いた。

「こちらこそはじめまして。俺は榎原明人、よろしく」

堅苦しい挨拶なんかする気はなかつたが何故かやつてしまつた。

「霜崎遙^{しもさきはるか}つていいます。こっちこそよろしく」

2人は軽く会釈を交わした。

「それで用は？」

今の聞き方は少々無愛想だつたかもしねりない。

妙に緊張しているのは、悪夢で出てきた場所にいるからか。

「ちょっと聞きにくいんだけど…榊原くんのご両親つて今ど^こにいるの？」

遙はそんなこと気にしてない様子で奇妙な質問を投げ掛けてきた。それを聞いた途端、明人はひどい頭痛を覚えて顔をしかめた。

「俺の親？ ……2人とも長期旅行に出かけて日本にはいない、けど？」

明人は自分の喋る言葉がやけにたどたどしいことに気付いた。しかも立ち眩みに似た感覚まで襲つてきた。熱でもあるのかと思つてしまつ。

「ちょっと榊原くん、顔色悪いよ。大丈夫？」

心配そうに顔を覗きこんでくる遙。それは嬉しいのだが本当に体調が優れない。

明人は遙から視線を逸らした。

黒板の前に首がない男と切り裂かれた腹から臓物を覗かせている女が目に飛び込んできた。

「ツ！」

「榊原くん！ 落ち着いて！」

遙は急に暴れだした明人を正面から抱いた。この可憐な身体のど

こに男を押さえる力があるのだろう。

しかし、そんなことを考える余裕は明人にはない。

「大丈夫、私がついてるから」

遙は母が子供にしてやるように優しく抱擁し続けた。

しばらくそうしていると明人も正氣を取り戻してきた。

明人は正氣になると今しがた知り合ったばかりの美少女に抱きつかれているのに気付いた。

「うわ！ ちょっと、と霜崎さん！？」

明人は正直焦った。初対面で積極的過ぎやしないか。

「え？ ……あわわわわ！？ イタツ」

遙も明人の声に自分のしていることが分かつたらしい。顔を赤らめものすごいスピードで後退つて見事に転けた。乱れたスカートから見えるスラッとした太ももが男共に対して凶悪な破壊力を持つていた。

「だ、大丈夫？」

危ない妄想を60%断ち切り明人は手を差しのべた。

「ああ、あの、ありがとうございます」

手を握つたままぶんぶん振つて礼を言つ。

忙しい子だなと思う。第一印象と中身がだいぶ違うので変な感じがしたが、こんな子も面白いと思う。

明人は遙の手を離し、ちらりと黒板の方を見た。さつきの幻影はもう無かつた。

「あまり思い詰めるのは身体に毒だな」

そう思つて思索を止める。何だか心地よい諦めを感じた。

その時、突如遙が手を握つてきた。同時に明人の頭痛も退いていつた。

「ありがとう」

遙のおかげかは分からぬがとりあえず礼を述べた。

「気にしないで。それより、あなたの『両親亡くなつたんでしょ？』

半年前に

また変な質問が繰り返される。

さつきは居場所を聞いたのに今度は親が死んだのか、と聞かれる。
しかも確信しているように聞こえる。

「いや、だから半年前に旅行に行つたんだよ」

遙は嫌いじゃないが意味が分からぬ質問はやめて欲しかつたので、今度は語氣を強めて言い返した。

「よく思い出して。旅行になんか行つてないはずだよ」

遙は動じず手を握る力を強めた。不思議な感覚が明人に流れ込んできた。

「違う違う。確か夜中に家を出で、うつ」

封印したはずの出来事が首をもたげはじめた。

それは暗い闇の中。

『ずっとずっと会つたかったよ。明ちゃん』
あき

「女の子が、家に來た」

人間味のない不気味な少女。どこか懐かしい女の子。

「そいつは今どこにいるの？」

遙の声が鋭くなつた気がする。

「分からない。でも…」

『また会いに来るから』

彼女は予言を残して消えた。

『また来るらしい』

「そう…。他には何か思い出せない？」

遙は詰問するよつに尋ね続ける。

「それから…」

この先の記憶は更にぐじやぐじやだった。

それでも無理に禍去かごの映像が再生される。

『 f y 戯 R s w c アイチ@_ - か、いないわね』

不気味な少女は狭いアパートの部屋を物色するように見て回っていた。

『時間がかかり経つたし藍／＊）？？変わつて＊よね』
空港で別れる直前に家族で撮つた写真。それを少女は持つていった。

「藍……」

明人は混沌した記憶の海から一つの名前を擱い上げた。

「藍つて誰？」

遙が聞いてくる。彼女は真剣そのものだ。

「俺の妹だ。今アメリカにいるがもうすぐ帰つてくる」

整理されてきた頭はある事件の絶望的な部分を掘り出した。

『彼女を探しに行かなくちゃ。それから連れ戻して明ちゃんの目の前で殺してやる』

「藍が危ない！」

何かが全身を突き抜けて身の毛がよだつた。イヤな汗が流れ出る。

「神原くん！ し！ Q × 齒 e f . # & a m p ; 極」

遙が叫んでいるがよく聞き取れない。もつとハツキリ喋つてくれ。すぐに遙の姿も朧になり、そして影も残さず消滅した。

特別講義室の風景も変容してきた。

部屋中の『表面』と言つべきものが剥がれ落ち消えていく。
そしてその裏に隠されていたものが姿を現した。

黒板には『SOON』の落書き。廊下には人が湧き始めた。

何もない空間に机と5人の男女が出現し、何者かに次々と腕を切断されていく。あつという間に血のオブジェが造られた。

昼間の夢、幻とは一味違う惨劇の舞台が完成した。

それは現実以上のリアリティーを有していた。少なくとも明人は

そう感じた。

そりたつ影。

明人が見上げたのは血のオブジェ。その悪趣味の程度を倍増させる吊るされた女の子。

明人は彼女を見たことがある。いつも一緒にいた。それは妹だった。

「そんな……藍」

困惑、理解、混乱、錯乱、狂乱、激昂、悲壯、消沈、そして絶望。明人は身も心も魂さえも損失したかに思えた。

「くくつ、誰もいないじゃないか」

明人は力タカタと笑い血の海に座り込んだ。家族は皆死に、天涯孤独になってしまったのだ。

その目は抜け殻。死体と同じ。

「大丈夫だよ。これからは私がずっと一緒にいてあげるから」

少女は明人の傍に寄り添い、優しい響きが目一杯詰め込まれた言葉を囁く。

彼女は榎原家の家族を皆殺しにした張本人。どす黒いゴスロリ服においては目立たないが、驚くほど白い肌を返り血で紅く汚している。

「本当か!?」

明人の目に闇から発せられた希望の光が射した。

「でも条件があるわ」

「なんだよ？ 僕何でもするから、一緒にいてくれ」

支えを喪った者は弱い。

「私は明人の禍去の過ちを赦してあげる。だから明人も私の行いを赦してね」

支えを得る条件は至極簡単。

「赦す、赦すよ」

弱い人間が飛び付くのも無理はない。

「良かつた。これからはずっと一緒にだね、明ちゃん！」

「ああ、もちろんさ。小夜」

少年とその家族を殺した少女。不和の関係にあるはずの2人は今

やお互いに名前を呼び合い、抱きしめあつている。

「キネンサツエー！」

パシャパシャパシャパシャパシャパシャ

いつの間にやら黙つて2人を見つめていた狂氣のケータイカメラ
マン達が一斉にフラッシュを焚いて乱写する。

「オメデトー」「オメデトー！」「オメデトーウー…」

バカみたいな喝采がカメラマン達から沸き起る。

白い光と祝福の奇声で視覚も聴覚も役に立たなくなつてきた。

明人は少女を抱き寄せた。少女の温もりだけがこの異形の世界で
確かなものだつた。

そして2人は深淵の暗黒に墮ちていった。

第4話・魍想 - Lord of Elysion (前書き)

魑魅魍魎ちみもうりょう
+ 妄想 = 眇想

第4話・懸想 -Lord of Elysion

顔はちょっと良いかな。これが遙が明人に抱いた第一印象だった。だが彼を人の来ない教室に呼び出したのは、特に恋愛感情を持つていたからではない。

もとよりこの学校の人間ではないし、明人と会うのも初めてだつた。

明人が持つトラウマ。そこから『幻象』の情報を得るためである。遙は調査の末、確信に近いものを持って明人にコンタクトした。案の定、彼の様子がめまぐるしく変わると自分は間違つてなかつたと思えた。

どうやら明人は事件に関する記憶を別のものに置き換えているらしかつた。

彼の両親が行方不明だと確かにこの地方の新聞で見た。こんな中規模都市ではあまりない事件なので結構大きく載せられていた。

しかし、明人は両親は旅行中だと言う。

酷い事故や災害に見舞われた時、人は記憶を失つたりその記憶を封じ込んでしまうことがある。それは人間の防衛本能の一つでさほど珍しいことではない。

明人はそれと似たようなもので嫌な記憶をマシなものにすり替えてしまつていいようだ。おそらく現実では彼の親は天国に旅立つているのだろう。

だが、説明のつかないこともある。

遙がこの学校で聞き込みをしたところ、教師も生徒も明人の親は旅行で家にいないと答えた。しかも彼らは誰も遙の存在に違和感を覚えていないらしかつた。

誰もが明人を気遣つていて、と考えてみたがそんなことはあるわけがない。

やはり認識を弄るような『幻象』が校内にいるのは明らかだつた。

「藍が危ない！」

不意に大声を出されて遙はちょっとビビった。聞いてはいたが意識は半分以上思案に流れていた。

明人はさっきまで鬼気迫る表情で何やら呟いていたが急に現実に戻されたようだった。

遙が思い出した内容を詳しく聞こうと口を開けた時、遙と向き合う明人の背後から白っぽい光弾が発せられた。

それは驚異的なスピードで明人に迫った。遙が明人を突き飛ばそうとしたときにはもう光弾はその背中に吸い込まれていた。

明人は何かが全身を突き抜けたようにぶるつと一度震えた後、目が虚ろになり糸のきれた操り人形のようだらりと座り込んだ。

「神原くん！ しつかりして」

遙は周囲を警戒しながら明人を足でつついてみた。何の反応もない。息もしているようで、少なくとも生きてはいるようだ。

遙は少し安堵した。苦労して見つけた情報源に簡単に死なれては困る。

「はやく出てきなさいよ。いるんでしょう？」

いつの間にか夕日は山の輪郭を赤く染めるほどに沈み、部屋は暗がりに支配されかかっていた。

遙は素早く視線を走らせた。

整頓されていない机の群れ、教壇、閉め切られたドアと窓の外。誰もいないが確かに『幻象』の気配を感じた。

「うわ～戦うヒロインがいるよ～」

耳元で馬鹿にしたような女の子の声が聞こえた。刹那、遙は振り向きざまに蹴りを放つた。手ごたえはなく細い足が力強く風を切る音だけが聞こえた。

「ちつ」

遙が舌打ちすると四方八方からケラケラと笑い声がした。

「いい動きだねえ。つこで元気つと//ースカで回し蹴りは氣を付けてほうが良いよ」

「ふん」

遥は氣を緩めない。

「そうキレイでよ。お詫びに姿見せるから」

少女の声は遥の怒声など気にかけず余裕たっぷりに言った。

「呼ばれて飛び出で…はじめてだね」

氣付いた時には見知らぬ少女が教壇の上にいた。
色とりどりのヘアピンをつけたミニディアムショートの黒髪。奇抜な髪型である。服装こそこの学校の制服だが、シャツのボタンは上2つほど外れておりネクタイはぶら下がっているだけで機能を果たしていない。

その隙間からブラと別段大きくない乳房が見えている。

露出狂なのかだらしないだけなのか。どちらにしろ遥は少女に女性として嫌悪感を覚えた。

「反応薄いよ。なにやつてんの」

少女は遥の厳しい視線に気付きもしない。子供っぽい笑みを浮かべ文句を垂れている。

「ああ、そうか！自己紹介してないからか。私は綾瀬、広橋綾瀬」と申します。……」それで良いよね？」

スカートの裾を摘んでなかなか優雅にお辞儀した。

「アホ丸出しのところすまないけど榎原くんに何をしたの？」

あきれた遥は綾瀬を無視することにした。『太郎の話をまじめに聞くほどお人好しではなかつた。

「あんただつて頭のおかしい戦ツヒロインのくせにアホとはなんぞ！？ アホとは？！

「あのさ、やつきかひ言つてる戦ツヒロインって何なの？ アホみたいだからやめなよ」

「うわヒドッ。くそアマが……」

前言撤回。遥は綾瀬を挑発して隙を窺うこととした。

綾瀬は教壇の上をウロウロしながら「ふくれと向やう毒づいてる。傍から見なくても十分異常である。

そんなただのアホかと思つたが、遙が『普通』ではなく常人なんかより数倍優れた戦闘能力を持つてゐる、まさに『戦うヒロイン』だということを一瞬で看破したのには少々驚いた。

こいつが事件を隠蔽しようとしている幻象ね、と容易く結論は出た。

「……私ね、夢があるの」

綾瀬は独り言を止め、語り始めた。

意味が分からずおもわず首を傾げてしまう。

「それはね・・・戦う女の子をぶち殺すこと

「つ！」

言つが早いか綾瀬が壇上の机を蹴飛ばした。矢のような速さと锐さで机が飛んでいく。

遙は虚を突かれながらも間一髪それを横に転がつて避けた。同時に金属のへしゃげる音がして背後の壁がへこんだ。

「うんうん。イイねイイね。常人は死んでるよ、今ので」しきりに頷いて満足そうな綾瀬。やつてゐる事と煌めく笑顔が相当ミスマッチである。

遙は呼吸を整えながら、綾瀬を憎悪を込めて睨みつけた。自分の奇襲が成就する前に攻撃されたのが悔しかつた。

「怖いわあ。そんな顔しないでよ、遙」

綾瀬が愉しそうな声を出す。全然怖がっていない。

「あんたこそ、その緊張感の無い笑顔止めたら？」

馴れ馴れしく名前を呼ばれたことにムツとしながらも、冷たく挑発する。遙としてはさつと綾瀬を片付けて明人の記憶を探りたかった。

「性格悪いね。そんな悪い遙ちゃんは私の妄想劇場で肅清してやる！」

後半の意味不明な部分を声を荒げて強調した。綾瀬はこれでキレ

ているらしかった。

「性格だもん仕方ないでしょ。それにやれるもんならやってみなさいよ」

遥は不敵に応えた。その右手にはビームから出したのか夕闇の中でも鏡のような輝きを放つ西洋風の剣があった。敵と戦うため、斬り殺すために洗練されたフォルム。

「おお！？ 剣が出た！ これは雰囲気出るね～。遙分かつてんじやん。じゃあ早速戦う美少女惨殺！」ことをはじめるよお歓喜を抑えきれない様子で綾瀬が開戦を告げた。

「……え？」

次の瞬間綾瀬はすっ頓狂な声をあげていた。その腹部には剣が突き刺さり後ろの黒板に彼女の身体を留めていた。

剣を伝って鮮やかな血が床に滴る。

「もう終わり？ 開始して1秒も経つたかしら」

遥は剣の柄を握つて笑つている。

先ほど綾瀬が教台をどかしてくれたおかげで刺突を遮るものは無くなっていた。開幕の余韻に浸つていた綾瀬には凄まじい不意打ちであった。

「くっ、これくらいで、死ぬわけないじやん」

そう言って血の唾を遙の顔に吐きつけた。

「汚つ！ こいつ……」

眼には入らなかつたのは幸いだが相当不快だつた。怒りに任せて遙は綾瀬を突き刺したままの剣でなぎ払つた。

剣は黒板を削りながら綾瀬の胴体をへその辺りから分断した。綾瀬は声も無く崩れ落ち教壇を赤に染めた。

「全然たいしたこと無いわね」

呼吸を乱しながら毒づいた。これでまた1体幻象を滅ぼした、遙は満足感に漫つていた。

「どこ見てんの？ 私はこっちだよ」

「な……」

さつと振り返ると動かない明人の隣で綾瀬が小躍りしていた。

遥は剣を構えなおした。

「私死んでるじゃん。カワイイソ、あつ」

今度は綾瀬の身体が袈裟斬りにされた。様々な内臓と大量の血が床を飾った。それでも綾瀬の声は止まない。

「あはっ。まだだよ。もつと殺してえ」

その望みはすぐに叶う。遥は剣を振るいどこからともなく湧き出る綾瀬を斬殺していく。

同じ顔の死体が絨毯のようになつても切り裂き続ける。

いつの間にか部屋中の物に綾瀬の顔が浮き出て騒ぎ立てる。

遥はその全てを叩き斬つた。身体が疲れを覚え始めても綾瀬を斬りつづける。

「霜崎さん。こっち向いて」

突然静止していた明人が立ち上がつた。その顔は綾瀬だった。口

ンマ数秒でその身体は解体された。

明人から得られる情報は今やどうでもよかつた。今は広橋綾瀬を殺すことのほうが重要だった。

「もういいでしょ！ こんなに殺したんだからいい加減死んでよおおおおお！」

遙は絶望的に絶叫した。そして尚も斬り続ける。これは現実じゃないと頭の片隅で思つても、殺戮は止まらない。

綾瀬に明人、壁につけた亀裂、抉られた天井、窓ガラス、机、カーテン、時計、照明……。

遙が斬つたありとあらゆるものからどろどろと紅い液体が流れる。遙自身も頭の先から靴の先まで真っ赤になつっていた。

「最後の私はここですよ」

その声は遙の口から出でていた。遙は剣を首に当てた。

もう何もかも壊した。だから最後は自分なのだと何となく理解した。

「それで終わりにしてやる」

そして寸分の躊躇もなく頸動脈を素早く断ち切つた。紅い噴水は実に美しかつた。

綾瀬は虚ろな瞳で床に転がり悶えている遙を楽しそうに見ていた。
エリューション

『虚構の樂園』

自分の因子を埋め込んだ相手を自分が妄想した悪夢的な幻覚に陥らせる能力。
肉体には無害だが、精神を崩壊させるくらいはたやすい。危険極まりない力だ。

我が身に授か^たこの異能には何度感謝したか分からぬ。

最近はすこし明人の居りをいしくして柏原家の事件が明るみに出ないようにするのに使つていただけだった。今朝は気まぐれで明人をからかつてみたり、この部屋の因子を他の場所より濃くしておいたりしたのだが。

だから、遙の介入は綾瀬にとって好きではないが暇つぶしには最適の戦闘になつたので喜ばしいハプニングだった。

遙は生き返って次は……あ、電話鳴ってる

が聞こえてきた。

には『藍』の文字があつた。

お兄ちやーん！」

大音量で可愛らしい声が部屋中に響き渡った。心臓が止まるくらい

いビビッておもわずケータイを取り落としてしまった。

「ごめん大声出しちゃって。もう会えるまで24時間きつたから嬉しいで。今から友達とお別れ

「驚かせるないでよね、まったく」

ほつておいてもうるさいので綾瀬はケータイを切った。

「遊ぶ気削がれちゃったなあ。もういや殺しちゃおつ」

綾瀬はポケットから小振りのナイフを取り出し遙に歩み寄った。

綾瀬では能力で心は殺せても肉体は無理なのである。人間以上に腕力なんもあるのだが、拳で撲殺なんてしたくなかった。

綾瀬はなんか邪魔になりそうな遙の制服を脱がしにかかりた。

「別に百合つ氣があるわけじゃないんだからね！ 最期に弄つてみるのも面白いかな、なんて」

この世界には明人とゴスロリ服の少女しかいない。見えるのはお互いの姿だけ。聞こえるのもお互いの声だけ。

そんな生活がどれほど続いたらう。それは永遠ともいえるし須臾ともいえた。

だが終わりは唐突にきた。自分を呼ぶ声が世界を揺らし始めたのだ。しだいに世界は変容していった。

目のまえにいる少女の姿が家族を殺した殺人鬼の姿と合致した。明人の中に怨嗟が溢れ、思い切り少女を殴つた。

するとガラスが碎けるような音がして殺人鬼である少女は粉々になつた。

そして目が醒めた。

外はすっかり暗くなっていた。窓からの月光が部屋を明るく照らしていた。

段々と意識がはつきりしてくると窓際に人がいることに気が付いた。誰だか分からぬがはだけた服の女の子がナイフを持って仰向け

の遙に馬乗りになつていた。

遙の服が邪魔なのか制服の上着とカーティガントを脱がせている。

どういうわけか抵抗ひとつしない遙が気になつたが殺そうといるのは誰の目にも明らかだつた。

「やめろ！」

無我夢中で叫んだ。驚愕で呆けたような表情の綾瀬がカクカクと振り返る。全く状況を理解できていないうだ。

本当のところ、明人がエリュシオンから解放されたのは綾瀬が出た電話のせいだ自業自得なわけである。

明人は素早く綾瀬の腕を掴んだ。

「イタツ」

力を入れると小さく悲鳴を上げナイフを手放した。

「何してんだよお前！」

「うそよ……私の力がただの人間に破られるわけない」

綾瀬は震えながら理解不能なことを呟いている。明人の叱責は聞こえていないうだ。

何かで心を病んで凶行に走つたのかもしれないなど明人は思つた。「はつ？！ まだ生きてる」

遙も寝言みたいなことを言いながら目を醒ました。

「ほら君。立つて、どいてくれ」

明人が脇に腕を通し引きずるように遙の上から綾瀬をどかして傍に座らせた。その間も女の子は何かをぶつぶつ言つてはいる。心ここにあらずといつた感じだ。

「霜崎さん、怪我は無い？」

「なんとかね」

「そりやよかつた」

明人は遙の手を取り立たせてあげた。半分脱がされた上着から見える白い肌が目に入りおもわず視線を逸らした。

「どうしたのよ？ 顔が赤いわ」

全く気が付いていない遙が不思議そうな顔をする。

「ど、どりあえず服着たほうが良いと思ひ……よ」

「……やああ！」

世界が回転して明人は床に突つ伏していた。頬をひつぱたかれたと理解するには遙の力は強すぎた。

「なあ。あの子お前を殺そうとしてたけど何なんだ？」

しばらくして落ち着いた明人はまだ力なく座つている綾瀬をちらつと見て聞いた。

「聞きたいの？ 聞いたらもう日常に戻れないけど、それでもいい？」

遙は脅しの色を含んだ声で確認を求める。明人に迷いは無かつた。

「ああ。なんか知らないといけない気がするんだ」

「そう」

いつからだろつか。いつも頭のどこかが濛々としていた。そこにある記憶を探り出そうとすれば頭痛に苛まれた。

しかし、あの夢から醒めた後頭は妙にクリアになつていた。

今しようとしている話は頭痛を引き起こす種類のものだろうと自然と分かつたが痛みはない。

それが良いことなのか、どうのかは分からない。ただ、ある種の使命感のようなものが湧いてきた。

何故か？その理由を探したとき夢の中にいた少女の姿が幻視された。その理由もまた不明だが、この話をして答へに近づける気がする。

明人は遙に先を促した。遙が口を開く。

「彼女は……「あはっあははははははー?!」」

甲高い狂つた哄笑が遙の言葉を裂いて響き渡つた。その背筋が凍るような奇声に2人は悪寒を覚えて顧みる。

そこには先ほどまで死人同然だつた綾瀬が幽鬼のようなおぼつかなさで立ち上がっていた。

しばらく虚空を彷徨っていた瞳が2人を捉えた。
「コンティーニューだよ。私は使命(ミッション)を遂行する！」

第5話・再現 - return to reality(前書き)

再帰 + 現実 = 再現 なんだこれ。普通に使う文字じゃないか

第5話・再現 - return to reality

「コンティニューだよ。私は使命ミッションを遂行する」立ち直つたような綾瀬だつたが心の中ではまだパニックに陥つていた。

『虚構の樂園』^{リコシオン}は人間であることを捨てて手に入れたもの。夢に見ていた超常的な力。それをよりによつて半年間も自分に踊らされていた非力な男に突如破られた。それが綾瀬の自尊心に付けた傷は計り知れなかつた。

しかも込めた力が弱かつたとはいえ『虚構の樂園』が看破された理由は不明だ。

「クヒヒッ。今すぐ幻葬してやるよ」

不気味な笑みを浮かべ両手を拳銃つぼくして遙に向ける。

幼稚に見えるが綾瀬はこのスタイルが気に入つていった。1番弾を放つイメージが浮かびやすいからだ。

「必死な顔して何やつてんだか。どうでもいいけどアンタの夢物語はもう幕よ」

言うが早いか遙の姿がかき消え、その拳が鳩尾みぞおづにめり込んでいた。

「かはっ……」

速すぎて反応できなかつた。その衝撃に身体の芯が軋むようだつた。

立つたままの体勢を維持できなくなり、拳が引っ込むと綾瀬はリノリウムの床に俯せて倒れた。口腔には苦くて酸っぱい液体が大量に込み上ってきた。やがて溢れたそれは口の端から床に滴つた。

その姿はあまりに無様過ぎた。悔しさと慘めさと痛みとで涙が零れ落ち、氣を失いたいくらい恥ずかしいが幻象の身体がそれを許さない。

「一太刀で逝かせてあげる。苦しみは、無いわ」

遙は無表情で剣を綾瀬の上に掲げた。

すると剣は次第に歪曲していった。変形が終わると遙の手には3本の歪んだ刀身を持つ曲刀が握られていた。持ち主の4分の3程の長さがあり、銀色の大蛇を思わせるフォルムだ。

その歪な曲刀が現れた時綾瀬の中に巨大な恐怖心が生まれた。絶命に対するものではなかつた。

幻象は名前の通り生き物ではない。例え死んだとしても条件さえ揃えば再び顕現することができる。だがこの感覚は違う。幻象である自分の存在の根幹が揺さぶられる恐怖であつた。

「……何をする気なの？ 斬つたくらいじゃ死はないんだから」

「ふふつ、今に分かるわ」

綾瀬は精一杯の強がりを吐いて、怨念の籠つた瞳で遙を睨み上げた。

すると、応じるように遙の目がスッと細くなつて笑つた。無慈悲で冷酷な死神の微笑みだつた。

遙の足が綾瀬を乱暴に転がして仰向けにさせた。左腕が変な格好で身体の下敷きになり鈍い痛みが走つた。

そして、歪な剣の切つ先を綾瀬の半分露出した左胸に向けた。

綾瀬が消滅を覚悟したその時、意外な所から救いの手が差しのべられた。

「霜崎さん、剣を戻してくれ」

声の主は神原明人だつた。その声は震えてはいるものの強い意志が感じられた。綾瀬を死の淵に追い詰めた元凶が今度は救おうとしていた。

偶然どうしても皮肉に感じられ頭にきた。

「何で？」

遙は振り向きもせず凍てつくような静かな声で聞いた。

「その子は何もしていないだろ。ナイフを向けた、ただそれだけだ」

「分かつてないわね。どういうモノかは知らないけど榎原くんも幻覚を見たはずよ」

「ああ、見たよ。妹が殺されたし、親を殺した女の子と平然と抱き合つた」

綾瀬が作った悪夢を思い出したのか明人の顔に苦々しい表情が浮かんだ。

「それはコイツが見せたモノよ。許せないでしょ？ 許せるわけないんだよ！」

「ぐえつ」

急に冷静さを欠いた遙はいきり立つて、綾瀬の脇腹を蹴り上げた。重い一撃だつた。幾つか肋骨あばいがねが折れたような感覚を覚えた。

「やめろつて言つてるだろ！ それには現実には誰も死んじやいない。ただの幻覚なんだよ」

対する明人は冷静だつた。自分が非日常に踏み込んでいることは気付いているだろう。おそらく遙の話も事実として受け入れかけている。

それでも彼は綾瀬を庇つていた。

綾瀬にはその心境は知り得ないが彼が心根の優しい人なのだとは分かつた。

「うつさい！ 何にも知らないくせに」

まるで敵かたきを見るかのような憎々にくにくしい顔で遙が向き直つた。

「そりや分からなさい。急に変な剣が出てくるし、殺し合いは始まるし。でも目の前で人が殺されそうなのをほつとけるわけないだろ」

明人はキッパリと言い切つた。だが、これで遙と決裂してしまえばすぐに殺されてしまうだろう。そうなれば綾瀬の消滅も確定する。綾瀬は彼の短慮に失望した。

「コイツは人じやない。有害なだけのモノよ」

もはや自分で道を切り開くしかなかつた。部屋に展開している『虚構の楽園』をさつき遙を仕留める時に使つてしまつた。後は自ら

因子を放つしかない。

綾瀬は無事な右手で銃を作り遙に向けた。

刹那、白銀の光が一閃した。

「いぎやあああ！？」

弾丸は出なかつた。そこにあるべき銃身の役割を担う人差し指がなくなつていたから。

「本当にバカね」

遙がせせら嗤い、再び閃光が走る。

その精密な剣捌きに何か思う間も無く、次は綾瀬の右手首から先が斬り落とされた。

「――ツ！」

想像を絶する痛みに言葉にならない唸りを上げて綾瀬は転げ回つた。

鮮血が噴き出し、みるまに部屋を深紅に塗装していった。

「霜崎！」

その光景を見るなり明人が遙に突進した。殴るなり蹴るなりして凶行を止めさせるつもりなのだろう。

しかし、それは人の身では無謀でしかない。

彼の拳が遙に届く前に刀身を収束させた剣がその胸を貫いていた。明人は愕然とした表情で自身の身体に埋もれている剣をぼんやりと眺めていた。

「さよなら」

遙そんな彼を見上げて静かに永劫の別れを告げた。

しかし、そこで不測の事態が発生した。曲刀が光を放ち部屋が昼間のように明るくなつた。

「がああっ！？」

遙は低い悲鳴を上げて壁に叩きつけられた。そしてその華奢な身体が壁を伝つてズルズルと崩れ落ちた。

明人を刺し貫いた曲刀も遙の傍に転がつていた。

時が止まつたかのような静寂が部屋に満ちた。この場にいる者全員が状況を飲み込めず困惑していた。

最初に静けさを破つたのは綾瀬だった。

「早く逃げて！」

綾瀬は劇痛に苛まれながらも立ち上がって叫び、自分も出入口に向かつて走つた。だが自身の血液で塗装されたリノリウムの床は残酷なまでに滑りやすかつた。数歩も行かないうちに前のめりに転倒してしまう。

綾瀬は思わず先程捻つた左腕で身体を支えてしまった。

「くあっ…うつ…！」

鈍痛が腕を駆け抜けた。そしてそのままバランスを崩して倒れ伏してしまう。

染み込んだ血でワイシャツが肌に張り付くのと、錆鉄のような独特の悪臭が不快感を催した。身体から力が抜けていき起き上がることはおろか這うことさえままならない。

「待つてろ今行く」

呆気に取られていた明人が傍まで走つて來た。幸い彼は滑らなかつた。

綾瀬の傷ついた両腕に触れないように何とか起こそうとしているが時間の無駄だ。

「腕はいいから急いで！」

綾瀬は切羽詰まつた調子で叫んだ。

彼女には遙が剣に寄りかかり立ち上るのが見えていた。衰弱してはいるがその姿からは顕になつた殺戮の執念が感じられた。

「ごめん痛いかも」

遂に意を決したらしい明人は綾瀬をお姫様抱っこした。

斬られた腕が明人の制服と擦れた。それだけでもかなりの苦痛だが綾瀬はビクツと震えただけで暴れなかつた。

明人は立ち上るとドアに向かつて慎重に走つた。

「逃がすか！」

遙の鋭い声に明人が怯えているのが分かつた。綾瀬も怖くて仕方なかつただが今は明人に身を委ねるしかない。

どうにか廊下に明人は飛び出した。

綾瀬はその腕の中で首を捻つて後ろを見ると曲刀の3つの刀身が蔓のように伸びて恐ろしいスピードで迫っていた。

だがそれが一人を貫くことはなかつた。

「我が異能『虚構の楽園』の真骨頂を拝みなさい！」

とつぐに準備を終えた綾瀬は力強く言い放つた。するとたちまち

『樂園』が発生した。

床に広がる血の海が壁を遡り、天井を這つた。だだつ広い教室は紅く染められた。

「何？！ きやあああ！」

綾瀬の血から沸き上がった完全な闇が教室全体を呑み込んだ。恐怖に満ちた遙の断末魔もその中に吸収された。

その暗黒の中で何が起きているのか。それは『虚構の楽園』の主である綾瀬のみが知り得ることだつた。

その綾瀬は明人の腕の中で力尽き意識を失つた。

静寂が戻ってきた。聞こえるのは自分自身の興奮と疲労を含んだ息遣いと早鐘のような鼓動だけ。

開け放たれたドアの向こうには闇が満ちており、時折霧が風に吹かれて渦巻くように揺れ動く。

それを見ていると段々と頭がぼんやりしてきた。

中にあるであろう遙の事が気になつた。自分を本気で殺そうとした奇怪な剣を持つ少女。

彼女の言つていたことはかなりファンシーだったが、実際に目の前でまざまざと怪奇現象を見せられてはこの世に色々と超常じみた物事があると信じざるをえない。それにあの剣が心臓を貫通した時

にはどうなるかと思つたが少しの痛みもなく、今もこうして生きている。実に不可解だつた。

まさか自分がファンタジーに有りがちな『強大な力を持っているのに気付かず普通に生活している人』というわけではないだろう。いや、ないと信じたい。

まあ、目の前であれだけ異常を見せられては死なない理由など幾千と考えられる。

思索に耽つっていた精神が身体に帰ってきた気がした。と同時に腕に重量がかかっているのを感じた。

見れば綾瀬が眠つていた。彼女の状態を考えれば寝ているというより気絶しているのだろう。

全身血まみれ、右手首から先は欠損し、顔も大量出血のせいが色がない。

止血もしていないし、常人というか人間ならとっくに死んでいるはずだが綾瀬は浅いながらも安定した呼吸をしている。腕の出血も止まつていた。

やはり化け物なのかもしけないと思った。それでも、関わってしまつたのだから後始末はするつもりだ。

「まずは病院かな」

不思議と慌てる気持ちは生まれなかつた。今日1日で色々な事がありすぎて感情が麻痺しているのかもしえない。

明人は暗闇に閉ざされた教室に見切りをつけ、ひどく緩慢な動きで階段を降りていった。

職員室には行かないつもりだ。校内でゴタゴタが起きたとなれば面倒なことになる。特に現場のあの部屋に入れるのは気が退けた。

とりあえず学校を出て他の場所で病院に電話することにした。

都合良く廊下にも昇降口にも人はおらず、明人はさつさと靴を履き替え校舎を後にした。

現在午後9時数分前。学校は緋森市街から離れた場所にあるためこの時間帯は周辺に人気がない。

住宅はあるものの帰宅ラッシュも終わり、大抵の人は家に入ってしまっているだろう。

「こ、この辺で良いだろ？」

人目を避けて綾瀬を学校の近くの路地に運び込むことには成功した。

なかなかスリルがあつて楽しかつたが腕が痛い。おぶる事も考えたが何となくお姫様抱っこの方がカッコいい気がしたので脳内で却下された。

ボタンを上2つ外すという滅茶苦茶な服装をしている綾瀬を見て、何らかの邪な感情が働いていたのを抑えるのが大変だった。というのは秘密だ。

明人は綾瀬を壁に寄り掛からせて、ケータイを開いた。119と番号を打ち込むと女性が対応に出た。

「どうされました？」

「大怪我を負った女の子を見つけたんです。場所は緋森高校の北にある路地です」

「どんな怪我ですか？」

「腕を切断されいて意識がありません」

「分かりました。すぐに救急車を向かわせます」

「ありがとうございます」

電話を切つてケータイをしまつ。

応対してくれた女性はかなり緊迫した様子だった。それはそうだろ？。こんな片田舎では稀にみる凶悪事件なのだから。

「さて、と救急車が来るまで10分くらいか。どうすつかな……」

「……うん」

しばらぐすると、小さな呻き声を上げて綾瀬が目覚めた。やはりまだ蒼白な顔でぼんやりしている。

「ここの……どこ?..」

「学校の裏手だよ。先生に見つかると面倒なんで、ここで救急車を呼んだ」

「ふうん……、病院行きたくない」

「どうしてだよ?」

「コレ。見て分かんないの?」

綾瀬は無くなってしまった右手を振つてみせた。

白い骨と黒く固まつた血肉のコントラストが気持ち悪かつた。痛むであろうその傷を平然と見せびらかす綾瀬にも悪寒を感じずにはいられなかつた。

それで明人は目を背けてしまつた。

「ふふふつ、ごめんね。でも人間なら死んじゃうよね、普通。だから行きたくないの」

そんな明人に反省の色が見えない愉しそうな謝罪をして、綾瀬は笑つた。

「やつぱり人間じゃないのか……」

「元人間よ。そうだ、名前言つてないよね? 広橋綾瀬よ。よろしく榎原明人くん」

綾瀬はにこやかに干切れた腕を差し出した。

それがあまりにシユールで明人は苦笑するしかなかつた。

「それで、人間じゃないなら何なんだ?」

「おおつ、遂に諦めて世界の裏側に踏み入る気になつたのかね? でも今はだめ。だつて……」

綾瀬が耳を澄ます仕草をする。なるほど救急車とパトカー、2種

類のサイレンが聞こえてきた。

その音にえもいわれぬ焦りと緊張を感じさせる力があった。

「どうか行くあてあるのか？」

「そりゃもちろん……」

綾瀬は意味深な眼差しを向けてきた。

「俺の家か」

嬉しいのやら悲しいのやら、よく分からぬ表情が明人の顔に浮かぶ。

「大正解。そうと決まれば早くしてよ」

綾瀬はそんなこと気にも留めておらず、傷ついた両腕を伸ばしてきた。

「今度は何？」

「おんぶして。腕が使えない歩くのもキツいの」
座った姿勢から上目遣いで甘えたようにねだつてくる血まみれ美少女。

「……卑怯だな」

明人には折れる以外の選択肢はなかつた。

第6話・冥夜 - a n t o o n y c o n t a c t (前書き)

後半に性的暴行シーンがあります。苦手な方は注意してください。
どうまで書いていいものか分からぬので軽めですが。

「ほら。走れ榎原っ！」

開口一番、綾瀬は偉そうに命令した。さっきまでの死にかけた様子を微塵も感じさせない明るく楽しそうな声だ。

ムカつく所だが徐々に大きくなつていく2つのサイレンに急かされて明人は渋々歩き出した。学校の裏を通り、反対の道から家に向かう。

「遅い。警察に捕まつたら榎原が犯人だつて言つてやる」

綾瀬は負傷した腕を明人の目の前で揺らしながら不満を垂れた。

「んな理不尽な話があるか！ それにグロいからやめろって」

「大声出さない。アンタはただひたすらに黙々と素早く私を連れて

家に帰ればいいの」

「うわ、マジウゼエ。早く降りろよ」

「嫌ですぅ」

数時間前に会つたばかりなのに綾瀬は無礼極まりなく、やたら馴れ馴れしい。まるで人との接し方を知らないかのようだ。苛立ちを覚えるのが当然とも思える状況だった。だが、明人はそんな綾瀬とでも喋つていると嬉しさが込み上げてきた。

別に綾瀬との会話に限つたことではないかもしれない。今なら学校の不良グループと雑談しても面白く感じるかもしれない。

それほど先ほどから生じ始めた新鮮かつ解放感に満ちた不思議な感覚が圧倒的に大きかった。

それは晴天の下、芝生なんかを素足で踏む感覚と似ていた。

この不思議な感覚は会話だけに止まらない。踏みしめるアスファルトや、燐然と輝く星彩の天蓋や、肺に満ちる涼しい夜氣。いや身の回りの万象全てが真実味を帶びて感慨深く感じられた。

明人は生まれ変わったような心地になつた。それに合わせて高揚

してきた気分に足取りも軽くなり駆け出した。

自分でも何がしたいのか分からないがとにかく走った。

「ちょっと!? いきなりなによ」

驚いた綾瀬は明人にしがみついた。手が使えないのに腕を首に回すようにした。

それは自然と明人の首を絞める形となり、呼吸と一緒に暴走も止めた。

「ぐえっ」

「ああっ。『じめん……』」

綾瀬はそのますますのりと背中から降りた。

「なんで急に走るかな? 焦らなくても追い付かれないよ」

綾瀬が眉を寄せて、咳き込む明人を覗き込んだ。

明人はその時、サイレンが鳴り止んでいることを知った。

「違うんだ。なんというか、嬉しくてさ」

「何がよ?」

「生まれ変わった気分とか、生き返ったようだとか、そんな感じなんだ」

「…………？」

訝然としない表情をしている綾瀬を見て、明人は更に説明を加えた。

「見るもの、触れるもの全てが鮮明で感動しちゃってさ」

こんなことをいきなり言われても綾瀬は理解できないだろうが、なんとかこの感じを分かつて欲しかった。

「…………そ、よかつたね」

綾瀬は少々暗影を含んだ表情で返した。

「どうした。もしかして、傷に障つたりした?」

「ううん。へーめ。でも、早く帰ろう」

綾瀬の先ほどまでの活性っぷりは半減し、消沈していた。そのまま、明人の背に身体を預けることもせずさつさと歩いていつてしまつた。

「アーツのせいで、力が弱つたか…」

ぼそりと綾瀬が呟いた言葉は、秋の激しい夜風に消し飛ばされた。どうしたものか、と明人もその後を追つ。

「なあ。何か気に障ることでも言つたか？」

「ううん。榎原は悪くないよ」

「そうなのか」

「気にしないでよ。私、躁病で鬱病患者だから」

綾瀬は、困ったような薄い笑みを浮かべて、『冗談か本気か分別できな』ことを言つた。

「そんな事言われても、逆に心配になるんだが」

だよね、と小さく笑う綾瀬。ふざけた様子がないのをみて、明人は言葉通り余計心配になつた。

なんとなくだが明人は、綾瀬のおかげで今の感覚を味わえている気がしていた。

『元人間』だと言う綾瀬の悩みを解消できるか分からぬが、その根拠のない恩義からほうつてはおけなかつた。

「あ、そうだ。今夜はサカキの家に泊めてよ」

微妙な空氣を変えるためか、綾瀬はまたとんでもない事を言い出した。ついさつき、心に決めたけれどこれは事が大きかつた。

ついでに、呼称が急に『サカキ』に変わつてゐる。『バラ』くらいあつても同じだろうに。

「……襲うかもしれないぞ。やめといた方がいい」

建前として遠慮しておぐが、内心大歓迎なのはやはり秘密だ。

「そんなことできるの？意氣地無しのサカキが、サカキはへたれだから、やるとしたらお風呂覗くくらいじゃない？」

綾瀬は小馬鹿にしたように言つた。また、調子が戻ってきたようで明人はほつとした。

「へたれでもやるときや やる」

言つた瞬間後悔した。今のは身に余る失言だ。

「うわ変態だ！ 男なんてみんな紳士という皮を被つた変態なんだ」

「スゲー貶すのな」

「変態が悪いんだよ、変態が。おまわりさん！ タスケテー」

散々悪口を言うと、突然綾瀬はスキップしながら街灯の少ない暗い通りを駆けていき、たちまち姿が見えなくなってしまった。

「ほんと情緒不安定だな」

明人は綾瀬の目も当てられない奇行に呆れつつ、後を追つて暗がりを進んだ。

完全に遊ばれているようだが、放つておくのも気が退けた。それに都合良くこの道はアパートへ向かっている。

結局綾瀬に追い付いたのは、明人のアパートの近くだった。何故家を知っているのかとか、怪我してるので足速すぎだろとか、疑問は尽きない。

そんなことは後で聞けるので、成り行き上綾瀬を案内することにした。

「人はいないみたいだな。ついてこい」

エントランスを確認し、エレベーターに乗った。明人がボタンを押すより早く綾瀬が8階のボタンを押していた。

「あつてるでしょ？」

「……ああ」

ニコツと笑いかけられたがちょっと怖かつた。

そのままエレベーターは動き出した。すぐに目的階に到着した。

その間、綾瀬は黒く塗り潰された街を見下ろして微笑んでおり、明人はまた冷たいものを感じるはめになつた。

8階の廊下にも人影はなかつた。難なくこの階の角に位置する自室にたどり着けた。誰かに会わない方が面倒が無くて良いのだが、

多少薄気味悪かつた。

「ほり、入れよ」

「おじやましまーす」

明人がドアを開けてやると、綾瀬は意外にも靴を揃えて上がり込んだ。「アメリカンスタイル！」とか言つて、土足で上がらなかつたのは純粋に嬉しい。掃除的な意味で。

「さてさて、お風呂はどこかな？」

まるで子供のような好奇心に満ちた瞳で綾瀬はキヨロキヨロと家を見渡した。

「風呂はそのドアの奥だけど、溜まつてないからな。ちょっと待つててよ」

明人は廊下とリビングの明かりをつけながら言った。

「うん」

綾瀬は素直に返事をしてリビングに入つていった。それを見届けて明人も風呂場へ向う。やはり、ここでもアノ感覺は健在だった。自分を覆つっていた半透明の膜がべろりと剥がれたよう、そんな剥き出しの新鮮さを我が家でも味わえた。

明人があ湯を出して戻つてくると、綾瀬はリビングにある棚やら小物やらを嬉々として物色していた。

面白いので、入口に立つてしばらく観察してみる。何か盗もうとしているわけではないので安心した。

綾瀬が無駄に元氣で平氣そうなので忘れかけていたが、改めて見ると彼女の欠損重傷具合は気分が悪くなりそうだ。

「あ、盗み見なんてタチが悪いわ」

そんなことを思つていると綾瀬に見つかってしまった。第一隠れて見ていたわけではないのだが。

「来て早々に他人の家をあばいてる方がよっぽど悪い」

「親愛の証なんだから問題ないよ」

理解不能の綾瀬理論が説かれたが、気分が良いので明人としては気にならなかつた。

「なら俺とお前は盗み盗まれる関係つてことだな」

「変態め、私から何を盗むつもり？ まさか……じゅんけつ……」
それは盗むとは言わない、と訂正しそうになつたが更なる自己嫌悪に繋がりそうなので自重した。

「はあ……なんでそこに持つていくんだ。もう病院が来てくれ」
明人はお手上げという感じでソファーに倒れ臥した。

どうして連れてきたのか、今となつては理由が思い出せない。それくらい後悔した。

「ところで、服が無いよな？」

ほどぼりが冷め、風呂も溜まつたころ明人は再び話しかけた。

「あ～、それは盲点だつたな」

キヨトンとして綾瀬が言つた。本当に忘れていたらしい。

「いや……確定的に明らかだつたと思うぞ」

さらに明人は本人がどうこうというより、自分が気になるのでもう一つ聞くことにした。

「その傷で風呂なんて入れるのか？」

「ん~。全然オッケー」

綾瀬はしげしげと自分の惨状を確認し、なんとも思つていない風に答えた。

「そ、そつか」

非人間的な反応に言葉が出なかつた。やはり、『元人間』と言いつるだけはある。帰りの様は仮怪我（？）だったのではないかと疑つてしまつ。

「風呂場を過ぎたところに妹の部屋がある。とりあえず服はそこにあるのを適当に使つてくれ」

気を取り直して明人は綾瀬に色々と注意を促した。

「それと、風呂を紅くしないでくれよ？血の海には入りたくないからな」

「イエッサー！ ジャあ遠慮なく使わせてもらいつります」「綾瀬はぴょんとソファーから飛び降りて、出ていった。すれ違い様に微かな血の匂いが渦巻いた。

「ふう……」

やつと一息つけた気がする。久しぶりに吸った『本当』の我が家 の空氣によつやく落ち着けた。その安堵故か途端に腹が鳴つた。

「そういや、飯がまだだつたな」

探してみたところ2人分の食べ物は無かつた。食パン数切れはあつたが、それは明日の朝食べることにした。

「仕方ない……、買つてくるか」

明人はもう一度出かけることにした。幸いにも近くにコンビニがある。そこで適当に買おつ。

「ちょっと出掛けてくる」

明人は風呂場に声をかけてから出発した。

「は～い」

その背中を綾瀬の喜悦に満つた声が追つた。

明人が戻つてしまふすると、藍のパジャマを着て綾瀬がリビングにやつてきた。

カラフルなヘアピンが外れた髪がしつとりと濡れて艶やかだ。

「う～つ、キレイサッパリ！ やっぱり風呂つていいよね。今日みたいな日は余計ありがたみが分かるよ」

そして『両手』を組んで大きく伸びをした。

「……え？」

明人の口から素つ頓狂な声が飛び出した。

綾瀬の切斷された右手首は元に戻り、内出血して変色していた左腕もものの見事に治っていた。

「どうしたことだ」

「それは後で教えてあげるから。その袋は？ ディナー？」

明人の疑問を軽くいなし、綾瀬は期待に目を輝かせて袋を見つめた。

「そんな大層な物じゃないが、まあメシだ」

明人はテーブルに買つた物を並べた。

秋の限定品らしいパスタ2種類とサラダ。明人自身は普段サラダは買わないのだが、綾瀬のために気を利かせて買つてみた。

「え～、デザートは無いの？」

不満そうに口を尖らせながらも、綾瀬は食べる気満々なようだ。

「図々しい奴だな」

「それが私だからね」

綾瀬は胸を張つてそう言つた。

「そんなこと自慢気に言われてもな……。とにかくデザートはないんで、どつちか決めてくれ」

「ブー！」

「豚か？」

「不満のブー、だよ！」

終わりが見えないので、明人はさつさと片方のパスタを選んでソファーに腰を下ろした。

綾瀬もしぶしぶ余り物を手に取つて隣に座つた。

「安物にしては美味しいわね」

自分の物を吸い込むように完食した綾瀬は、隣に座る明人のパスタにフォークを伸ばした。

「失敬な。せつからだから、少し奮発したつもりなのに」
明人は反抗しても掃除が大変になるだけだと思い、それを黙認した。

「へえ……、だつたら『ザートもつければ良いじゃない』
「まだ言つか」

この話題にほとほと嫌気が差し、遂に明人は本題を切り出すことにした。

「今日の怪奇現象もろもろの説明をしてくれないか？」

実際に率直でつまらないものの聞き方だが、こうしないと綾瀬がまともに答えてくれない気がした。

「……聞いて幸せになることなんてないよ？」

綾瀬は明人の気迫に驚いた表情を見せ、その物言いにちょっと不満げな様子で勧告してきた。これが最後警告だろう。

「それでも構わない」

自分がこの怪異に巻き込まれれば、当然妹にも災厄が降りかかる。それは避けたかった。

すでに両親の死という悲劇が藍には控えているのだ。残った唯一の家族を更なる危険な目に遭わせたくない。

そんな明人の決意を感じてか、綾瀬も真摯な態度で口を開いた。

「私たちの名称は《幻象》^{フエノミナ}って言ってね、字が違うけど意味は現象と同じ。条件さえ揃えば消滅してもまた発生するの。たぶん、そこから来てるんだと思う。誰が付けたか知らないけど、奇々怪々で非生物的な私たちにはピッタリな名前でしょ」

何か質問は、といった感じで綾瀬が目線を投げ掛ける。

「なるほどね。それでの傷も治ったのか」

なるほど、で済む話ではない。理解できないが、気になつたらまた後で聞けばいい。

「そういうこと。でもね……」

綾瀬が左手で明人の手を掴み、自分の右手に乗せた。正確には乗るはずだったと言うべきか。

「な……！？」

明人は目を見張った。自分の手が綾瀬の右手にめり込んでいるのだ。

それはゲームで近接するキャラクター同士が重なっている状態を彷彿させた。

明人は、慌てて手を引っ込んだ。何の音も感触もなくあつけなく手は離れた。

「実はここだけ直らなかつたの」

綾瀬は右手を握つたり閉じたりしてみせた。自然に見えて、それは中身を伴わない虚像。その中では赤い肉が露出しているのだ。明人は背中を何かが這い上がる感覚を払拭できなかつた。

「……そこは確か、霜崎に斬られた所だよな」

明人は少し震える声で聞いた。麗美な剣を振るう残酷な少女を想起しながら。彼女もまた『幻象』であるらしい。

「そう。今までだつて大怪我は何度もしたけど、元に戻らないのは初めて」

その声は驚愕や悲愴も含んでいるが、感心している節もあつた。

「どうしてだと思う？俺も刺されたけど無傷だつたし」

明人としても謎だつた部分だが、綾瀬はあっさりと答えてしまつた。

「アイツの能力じゃないの。相当幻象を嫌つてるようだつたし」

「なんか関係あるのか？それと霜崎の能力が」

「大ありよ。幻象は、この状態に生まれ変わる直前に抱いた想いに縛られる。それが幻象の存在意義で魂といえる部分になるの。これがほとんど能力に直結するわ」

「じゃあ、霜崎は幻象を殺したいほど憎んでるってわけか」

「そうなるんじやない。となるとアイツは天敵ね」

憎たらしそうに綾瀬が呟いた。しかし、同時に笑っていた。

「何が可笑しいんだ？」綾瀬にしたら生命の危機だろ」「明人は訝しそうに言つた。

「甘いな人間。そのスリルを楽しんでこそその人生よ！」

綾瀬は高らかと言い放つた。どう？ カツコイイ？ みたいな目つきがなければもつといいのに。

明人は思わず感嘆の呻きを漏らした。あの綾瀬から恐れ入るようなカリスマ発言を聞けるとは思つてもみなかつた。

それに彼女の正体が何であれ、自分に正直に生きている所は大概の人間より人間らしいと感じられた。

「そういえば、綾瀬はどういうことができるんだ？」

話を聞いているとなかなか好奇心をくすぐられたのだ。

「サカキも見たでしょ？ 教室でのアレやコレ」

くつく、と意地の悪い笑みを浮かべる綾瀬。

「……アレをやつたのはお前か！」

遙の言つたことは正しかつたらしい。それを聞いていたし、あたりに非現実的で綾瀬に對して怒りやら憎しみはさほど生まれなかつた。

明人は次第に甦る悪夢の中に両親を奪つた少女の姿を見た。彼女に対しても微々たるほどの憎悪しか抱いていなかつた。

それよりも彼女は誰なのだろう、という疑念が大きい。それは思い出せそうで思い出せない歯がゆい記憶。

「俺さ、夢の中でゴスロリな服の女の子に会つたんだけど。お前何か知つてるだろ？」

あれは綾瀬が作つた夢だ。その内容を当人が知らないはずがないと明人は踏んだ。

「彼女は……私の友達、かな。サカキにそつこんなんだとさ」綾瀬にしては珍しく考えて物を言つてゐる様子が見て取れた。

「俺に惚れてる、だつて？」

これまたあまりに急な告白だ。でも、かすれつつある夢の中の言動を思い起こせば合点もいった。

「ええ。私はその気持ちを見せてただけ」

「彼女の名前は？ 今どこにいる？」

明人は心中のもやを晴らすため畳み掛けるように聞いた。

「なまえ？ あ～、え～、で、でもどつか遠くにいるよ」

目は泳ぐ、不自然。じらばつくれているのは誰の目にも明らかだつた。

「変な奴だな。綾瀬は」

どうも喋りたくないようなので、明人もそれ以上追及しなかつた。それよりもこんなに感情だだ漏れで、嘘もつけない人間は初めて見た。世間一般としては善人だろうが、ある意味不憫に見えてしまう。

「ところで、幻象絡みで俺に直接関係がある事はないのか？」

なおも明人は、語り切ったかのようにテーブルに突っ伏してしまつた綾瀬に聞いてみた。ないに越したことはないのだが、このまま雰囲気に流されて説明終了してしまいそうだ。そのまま不可避の悲劇、という流れはごめんだ。

「ない。私もう疲れたから寝る」

何が気に食わないのかぶつきらぼうな声だ。そして唐突に綾瀬は立ち上がり部屋を出ていこうとした。

「本当か？ ちょっと待てよ。そこが一番重要だろ」

明人はすかさず手を取り引き止めようとしたが、叶わなかつた。

掴んだのは実体のない右手だつた。

綾瀬の頑固^{おっくう}で自分勝手な性格を考えると、明人は立つて追いかけることも億劫になり俯いてしまつた。

「部屋、借りるからね」

リビングを出るとき綾瀬は、肩越しにちらりと向いて言った。その表情はどこか浮かないようで翳っていた。

「ダメって言つてもどうせ聞かないだろ。俺はここで寝るから勝手にしる」

しかし、一瞬の怒りから明人は顔を揚げず綾瀬の表情を見なかつた。

「よく、分かつてるじゃない」

皮肉を言いながらも綾瀬はしばらく立ち止まつていた。何かを期待しているようだつたが、結局明人が顔を揚げた時にはもういなかつた。

「何なんだアイツ」

明人は憤りを感じずにはいられなかつた。コロコロと態度が変わる様子は見ていて面白い。しかし、この状況では煩わしいだけであつた。

怒らせてしまつただろうか、言い方がキツかつただろうか。後悔が押し寄せてきて、謝ろうかと考えた。

だが、こちらが卑屈になるのは理に敵つていらない。人の気持ちも考えず身勝手なことをしている綾瀬が悪いのだ。

葛藤の末、明人は謝罪を後回しにした。綾瀬のことだ、明日になればまたケロッとしているに違いない。そんな期待もしていた。それでも心の中には暗いしこりが残り、気分は晴れなかつた。

「……風呂にでも入ろうか」

夜11時過ぎ。明人は遅めの入浴を済ませた。お湯は紅にこそなつていなかつたが、そういうぬるくなつており暗鬱な気分を助長させれるようだつた。

仕方なくさつさと上がってソファーに転がる。布団を自分の部屋から取つて来たいが綾瀬に会うのは気まずい。

「どうか何故アイツは俺の部屋を使つてるんだ。藍の部屋使えよ」文句を言つても意味がない。明人はしまつてあつた別のを出してくるまつた。

秋の夜長は寒く、ソファーもしつくりこない。寝心地は最悪だが混沌とした非現実的な1日の疲れから、明人はすぐ深い眠りに落ちた。

アメリカ北部の街。暗い夜道にカツカツと規則的な靴音が響く。
(すつかり遅くなっちゃったよ…。明日朝早いのに)

神原藍は帰路を急いでいた。自責の念を抱きながらも、その表情は満ち足りていた。先ほどあつたクラスメイト達との送別会の残り香に浸っているのだろう。

(色々あつたけど、アメリカンライフも楽しかったなあ)

その心に浮かぶのは一年間の数多の思い出。

日本で通っていた学校が国際交流に積極的だったことが始まりだつた。つまりは交換留学である。

教師の熱狂的な勧誘と家族の承諾に押され、藍自身が決断したことだ。

藍は留学についてあまり不安を感じていなかつた。数人の同学年の生徒が一緒に来るのだし、なにより校区内に少女の実家と仲が良い親戚の家があつた。

現にこの一年間、他の生徒が寮生活なのに対し、藍は自宅から通つているようなものだつた。

そんなことができるのか、といえば自由の国の力と言わざるえない。

たまに寮生活をしてみたくなつて、週1ペースで泊まりに行く事があるくらいだつた。

そこから始まり、思い出される日々の数々に、暗黒に染まる人気のない道も明るく見えた。

「……きやつ！？」

藍が角を曲がつた時、大柄な男とぶつかってしまった。藍に緊張が走る。

「気を付けるよ」

男はただ注意して通りすぎた。

「はい」

藍は一瞬恐怖を覚えたが、男が何もしなかったことに安堵した。しかし気が緩んだその時、後ろから太い腕が彼女を羽交い締めにした。

「きや、むぐつ！？ んんー！」

藍は悲鳴を上げようとしたが、湿ったハンカチのよつなもので口を遮れてしまつた。

（なに、この、におい…）

同時に鼻腔に刺激の強い匂いが流れ込み、藍の意識が遠退いていく。

ぐつたりとした藍を男はその剛腕で軽々と抱ぎ上げ、素早く近くに停めてあつた車に乗せた。藍と男を乗せた車は、その黒いボディを闇に溶かすよつに走り去つた。

（じじは……？）

藍が目覚めたのは、明度の極端に低い蛍光灯に照らされた古い倉庫のような場所だつた。

かびと埃の臭いが染み付いたこの部屋には大小様々な棚や、大きな台、道具が溢れた用具箱などが散乱していた。ここが長らく使われていないことが伺える。

「うう……んん！」

漂う悪臭に耐えかね藍は口を開けようとした。それは何かで阻害されていた。

藍からは見えないが、その口にはボールギヤグが噛まされている。両手は後ろで拘束され、服もボロボロにされ白い肌と下着が露出していた。

藍は縄縛状態で床に転がされていた。

藍の後方で金属のドアが重々しく開く音がした。藍が首を捻つて

後ろを見ると、数人の覆面男が立っていた。その中にはさつき藍を運んだ男も見られた。

「グッドモーニン」

1人の男が嘲りの挨拶を投げ掛けた。それは他の男たちに低い笑い声を上げさせた。

すぐさま藍の瞳は純粋な恐怖で彩られた。これから何が起こるかなど想像したくもなかつた。

蒼白な顔に冷や汗が垂れ、華奢な身体の震えも止まらない。

しかし、抵抗も忘れない。それは身体をもぞもぞとくねらせ男たちから離れる、という無様なものなのだが。

ついでにそれは男に余計な欲を奮い起こさせてしまうことに藍は気付かない。

そんな藍に絡み付くような視線を送り、男たちは黒い欲望を募らせる。そして悪意を撒き散らしながら、飢えた獣たちはゅっくりと藍に近づいていった。

初めは激しく抵抗していたが、今では藍も疲労の色を露にし、男たちにされるがままになつていた。

男が腰を動かす度に下腹部への劇痛と絶望と行為終了への渴望、そして自分を犯している者への憎悪が生まれ出る。

それらは我先にと少女の塞がれた口から飛び出よつとした。その結果、何の意味も持たない混沌としてぐもつた喘ぎが断続的に零れた。

これが本来は本当に快樂に繋がるのだろうか、藍は甚だ疑問に思つた。その答えを模索し氣を紛らわすことを切に願い続けた。

何時間経つただろうか。一体何人に槍を突き立てられただろうか。もう何も考えられない。藍の頭の中は真っ白だつた。

破瓜の血、野獸達の体液、自分の体液。グロテスクに混ざりあつ

たそれらは相應の腐臭を放ち、男たちが去つた今でも藍の呼吸器を犯していた。

いつしかボールギヤグも外され自由になつた口からは、壊れた玩具のように「あう」とか「うあ」とか意味不明な音が出ていた。

光を失い影に支配された藍の瞳は、遙か遠く虚空を映していた。耳も腐っていると言つてもいい。称賛されるべき英語力のせいで、下劣で卑猥な罵詈雑言を少なからず聞いて理解してしまつたためだ。もはや人間としてではなく、肉人形として乱暴に扱われた少女。そんな陰惨無比な状態で彼女は、穢らわしい液体にまみれ床に転がつていた。まさに茫然自失の境。藍は肉体的にも精神的にも崩壊しかかっていた。

「酷い……。あなた大丈夫ですか？」

その時誰かが倉庫に入ってきた。その人物は藍に気付いて駆け寄つてきた。

それは藍と同じくらいか、年下らしい日本人の少女だった。薔薇と十字架がたくさんついたゴスロリ服を着ている。髪も染めているようで灰色をしている。藍が肉を持った人形として扱われたならば、少女は正規のアンティーグ人形のようだ。どこかミステリアスで人間味が薄い。

明らかにこの薄汚い倉庫とは不釣り合いで、奇妙な存在である。しかし未曾有の不幸に襲われ思考も回らない藍には、少女は神々しく見えた。

「今病院に電話しますから」

少女はケータイを取りだしボタンを押す。

「ま、まつて」

藍は呂律の回つていらない口調で少女を制し、ガクガクと震える足を叱咤し立ち上がるうとする。

「無理しないでください。肩貸しますよ？」

少女の微笑みは慈愛に満ちていて、藍は安心して身を任せた。

「ありがと……」

少女は綺麗な服が台無しになるのも構い無しに、ベトベトに汚れた藍を支えた。

「病院は本当に行かなくてもよいのですか？」

心底心配そうな表情で少女が尋ねる。藍はそれに力なく頷く。

「そうですか。それでどうしましようか？　あなたのお家はビルです？」

「いや、家には帰りたくない」……

「どうして？　お家の方が心配しますよ」

「こんな、こんな姿、見せられな」……

そのまま泣き崩れそうになる藍。

「そうですね、私がうつかりしてました。でも、困りましたね。あ、私の家に来ます？　独り暮らしなんですよ。もうすぐ、日本に帰る予定ですけど」

少女はそれを受け止めて、しばらく逡巡して言った。

「ほんとですか！？　い、行かせてください」

冷静に考えれば奇妙極まりない提案であるが、レイプされたショックと家族に知られたくない一心で藍はその提案を必死に受け入れた。青白かった顔にも少し生気が宿った。

「分かりました。でもちゃんとお家に連絡はしてくださいね。私が誘拐犯になってしまいますから」

藍の様子に一ツコリ笑うと少女は、藍を労る^{いたわ}ようにゆっくりと歩き出した。

藍は少女の動作一つ一つに深い優しさを感じた。服装は変わっているが彼女にとつては天使や女神も同然に見えた。

「あ、あたし、神原藍って言います。えっと、あなたは？」

「小夜です。森谷小夜。よろしく、藍ちゃん」

2人の少女は歩き出す。(冥い冥い)(くらいくらいく)夜の深みに。沈むように、溶けるように。

第6話・冥夜 - a-h-o-o-m-y n-e-a-r (後書き)

かなり間が空いてしまいました。 読者の皆様に申し訳ない。

第7話 A・決意 - awakening of a venger (前書き)

蟲が出ます。そして過剰な暴力シーンを伴います。苦手な方は気を付けて読んでください。

第7話A・決意 - awakening of avenger

灰色の雲は厚く遍く天を覆い、気の滅入るような冷たい細雨を吐き出していた。世界はまだ夜の色を濃く残しているが、早いながらも朝を迎えていた。

遙は身体を半ば引き摺るように、学校の廊下を歩いていた。虚ろな瞳と制服に散りばめられた赤黒い染みは、ただならぬ雰囲気を醸し出している。

誰かに見つかれば事件に発展するだろうが、休日でしかも時間が早いのでその心配はないようだ。

遙の目に映る無機質な白い壁は寒さを助長させ、窓越しの薄汚い世界は惨めな気持ちにさせた。

遙の中でどす黒い塊が脈打つ。邪悪で陰惨な毒^{きおへ}が流れ出る。

あの時教室を覆った綾瀬の血液は、一寸先も見えない闇を作り出し教室を包んだ。

その中では最高純度の悪夢がこの世に顕現していた。それは性質^{たち}の悪い現実と思えるほどにリアルな幻覚だった。部屋の風景は洞窟内の巨大な円形ホールのような場所に変わった。灰褐色の寒々しい岩肌に覆われたそこは、どこからともなく淡い光明が降り注ぎ、洞窟であるにも関わらず多少日が利いた。

だが、遙の目には洞窟より嫌なものが映った。ここに住民である。ゲームに出てくるオーガのような亜人系や巨大な獣もいたが、何と表現してよいか分からず奇々怪々なデザインの怪物が大量にひしめいていた。どれもこれも生理的嫌悪感の結晶というべき姿をし

ている。

「いい趣味してるわね」

遙が呟いた。それは小さく自分以外に聞こえるような声ではなかつたが、怪物たちは一斉に遙の方を向いた。目のあるモノ無いモノ、顔がどこだか分からぬモノも遙を認識した。

「グオオオオ……！」

濁つた咆哮を上げ、怪物たちは彼らの住みかに墜ちてきた憐れな犠牲者を歓迎しているようだつた。

怪物たちは攻撃をすることなく、遙から離れてこのホールに繋がる多数の通路に入つていつた。

（一体何が……）

遙が訝しげに思つていると一匹の怪物が穴から進み出た。

遙の2倍はある血色の悪い巨大な肉の塊で、それに見合つ不恰好な手足と頭部がついている。

それはコラリコラリと巨体を揺らしながら、ゆっくりと遙に接近してきた。

「さしづめ闘技場での決闘といったところね」

遙が不愉快そうに言つと、肉塊の上部が横に大きく裂け呼応するように低い音を出した。どうやらアレが口らしい。

遙は出現させた三つ又の剣を構えたが、肉塊はただ巨大な体躯を搖するだけだつた。

それをチャンスと見て遙は肉塊に向けて走つた。そのスピードは肉塊の無い目に止まるものではなく、遙はすれ違ひ様に深く斬りつけ肉塊から十分な距離を置いた。

肉塊の腕らしき部分が地面に落ち、汚ならしい膿のような液体を流した。

（効いてない……？）

それでも全く動じない肉塊に驚きながらも、遙は再度肉塊の周囲を駆け抜け片足を斬り捨てた。

肉塊は凶太い腕を振り回したが、もう遙はその範囲にはいない。

そしてそのままバランスを崩し地響きを立てて転倒した。

「……イタツ」

突然遙は腕に焼けるような痛みを感じた。見ると肉塊から出た液体が少しかかっていた。

慌てて制服のスカートで拭う。見たところ痛いだけで赤くもなっていない。

（酸かな。でも服とか地面は溶けてないし。……まあ、夢だから何でもありか）

内容はシユールだが、あまりのリアルさに眞実を忘れそうになる。

のたうつ肉塊と怪物たちが消えたホールの際の暗闇を観察しながら、遙は思考を巡らせていた。

（再生はしない。斬り落とした肉が動き出すわけでもない……）
しかし予想外のことが起きた。

肉塊が動かなくなると同時に、斬り落とした四肢共々爆発したのだ。

「ひぎやあああああ！？」

全身に体液と肉片を浴び、遙は生きたまま火葬されるような痛みに絶叫した。乱舞して痛みに悶える遙を尻目に暗闇からまた怪物が一匹輩出された。

それは蟲と幼い少女を合成したような怪物だつた。

少女は全裸。その未発達な肢体の肩口からは無数の長大なムカデが生え、腰から下はヌラリと光る黒い蜘蛛という有り様だ。

少女自体は無表情ながらも可愛いらしいが、それが蟲と合わざることで度を超して痛々しく見える。いうなれば『合蟲少女』である。遙は痛みに耐えながら、新しい相手を見やつた。

（子供……化け物とはいえ殺りにくいわね）

朦朧とする意識の中遙が標的を確認し躊躇していると、少女は蜘蛛の足を器用に使って壁を登り、天井の闇が溜まっている場所に消

えた。

どうしたものかと悩んでいると、視界の端でキラリと何かが光つた。

反射的に遙は横に素早く跳躍した。

(糸……！？)

壁には針金くらいの蜘蛛の糸らしきものが刺さっていた。それを確認して、遙はまた飛んだ。

ガガガガガッ

遙がいた場所を連射された矢のように糸が抉った。糸とは思えない硬度と破壊力である。

(速い。けど動いていれば避けることは可能)

そう分析し遙は走り出した。一歩遅れて糸が壁を突く音がついてくる。

(でも、これじゃ反撃できないわね)

天井は高く、刀身を伸ばす攻撃も届かないだらう。それにこんな状況では立ち止まることも容易ではない。

「…………げえ！？」

突然走っていた遙の身体が後ろに引き戻された。何かが首に引っ掛かり絞めつけながら、遙の身体を宙吊りにする。

「あ…………う…………かはっ！」

ジタバタともがいでいる内に、首に例の糸が巻き付いていたことが分かつた。それはちょうど首吊り自殺の時に使うロープの形状をしていた。ホールにはいつしかこのトラップが大量に仕掛けたらしい。

怪しくなる呼吸に急かされ、遙は剣で糸を斬り落とした。すぐさまそれを阻止せんと糸がその腕を貫いた。

「ぐつ！？ しまつ……！」

怯んだ隙に剣が手から滑り落ち、カラーンと音を立て地面に転がった。

続いて全身に何本もの糸が刺さる。骨を貫通したものもあり、凄

まじい痛みが遙を襲つた。代わりに首縊めから解放されて、遙はむせるほど空気を貪つた。

「ぐふっ、は、はああ…」

だが、獲物の呼吸が安定するのを狩人が待つはずがなかつた。糸には釣り針のような返しがついており、それで遙を吊り上げ洞窟の高みへ運んだ。重力に従い落下しようとする身体を支える糸は鋭い苦痛を生み出していた。返しは肌を破つて食い込み、身体の中を通る糸は揺れる度に肉を切る。滲み出た血が制服を濡らし、眼下の地面に落ちていく。

発狂して暴れそうになるの身体を遙は必死に制御した。今下手に動けば身体がバラバラになりかねない。

上昇していくにつれ、暗がりに潜む少女の姿が見えてきた。蜘蛛の脚で逆さまにぶら下がり、無数のムカデ状の腕で器用に糸を持ち遙を操り人形のように弄んでいた。

（化け物が、私をどうするつもりだ？）

遙は抵抗虚しく少女の目の前に持ち上げられた。

少女が「イツと嗤う。するとムカデたちが糸を手放し、遙は宙に舞つた。

「ぐ、そ……ああぐつ！」

想定外のことで焦つたが、なんとか体勢を立て直して、着地し受身をとつた。全身が痛みに軋んだが、地面に叩きつけられるよりはマシだつた。

少女もまた天井の暗がりから這い出し、遙の近くへ降り立つた。そしていとも簡単にそのおぞましいムカデの腕で遙を絡めとつた。

「は、放せ！ 気持ち悪い！」

全身を這い回る何千という脚。その不快感はある意味先ほどの攻撃より威力があつた。

しかも蟲のくせに異様に力が強く、疲弊した今の状態では外せそうになかった。

「この子たちが、お姉ちゃんを食べたいって

少女が初めて口を利いた。人間部分の見た目同様幼く無邪気な声
なだけに、余計に恐ろしかつた。

「そんな、ことしたら殺すわよ！」

顔以外をムカデに覆われながら、遙が叫んだ。その表情は言葉ほど
厳しくなく、嫌悪感に歪んでいた。

「つるさいよ」

苛立つた声に反応して、ムカデが抱擁を強めた。

「がはつ…！『ごぼお。……や、やめで、はなして…』」

強烈なベアハッグを受け、遙は身体を弓なりに反らせた。スレン
ダーな身体の線が強調される。

骨が折れて内臓を損傷したようで、赤黒い塊を吐き出した。その
血をムカデが先を争うように啜る。吐血程度の量では足りるはずも
なく、ムカデたちは遙の口に殺到した。

「むぐつ！？」

口腔は蠢く足と触覚との凄まじい感覚に満たされた。全身の毛が
逆立ち、肌が泡立った。

「ダメだよ。おんなじとこに行つたら、みんな食べられないでし
ょ」

少女は楽しげに言つて、一回口から『腕』を抜いて抱擁も解いた。
(こまのうちに…)

恐怖で震え役に立たない足に見切りをつけ、遙は無理やり転がつ
て剣を奪取した。

「にげないでよ」

反撃に転じる間もなく、遙の白い足にムカデが伸びてきて鋭い顎
で咬みついた。

「ぐ！ この…！」

遙は更にまとわりつこうとするムカデを斬り伏せた。数匹が頭部
を斬られ黄色い体液を滴らせる。

「痛つ！」

少女は小さく悲鳴を上げた。感情が分かる所はただの蟲より戦い

安い。

「覚悟しなさい。今から地獄を見せてやりゅー！」

言つた瞬間遙はしまったと思い、口を押された。

「『やりゅ』だつてカワイイー」

「う、うるさい！」

遙の方は恥ずかしくて怒鳴つた。なんとも自然にそつなつたので、多少混乱していた。

「それ、ただの『噛んだ』じゃないんだよ」

意地悪そうに少女が口元を歪めた。そしてゆづくつと遙との聞合いを詰めていく。

遙の身体が電流が走つたようにビクッと震えた。突然遙は立つだけの力を失い、崩れるように膝を着いた。全身の筋肉が弛緩して力が入らなかつた。

「な、なんれ…！？ はあ、はあ…」

苦しげに喘ぎながら、遙は自分を見下ろす少女を睨み付けた。

「この子の毒だよ。お姉ちゃん、もううごけないね」

少女は得意げに『腕』を振つた。褒められて嬉しいのか、ムカデたちはキチキチと不気味な音を発して長い身体をくねらせた。

(これは…ヤバいわね)

遙は悔尤の念に浸りながら、嘲笑する怪物を睨むしかなかつた。

「みんなおまたせ。ぜんぶ食べて moiーよ」

ついに少女が死の宣告を下した。同時にムカデたちは歓喜して遙に襲いかかつた。握つていた剣を弾き飛ばし、無力な肢体に群がる。我先にムカデたちが集まつたのは口だつた。

閉ざそうとしても毒の効力でつまといかない。為す術なく侵入を許してしまう。

「んぐつ！？ んんむぐ！」

舌で押し戻そうとすれば、多脚がその上を行進する。そのあまりの氣味悪さに抵抗する氣力が失せ、食道への進入を許してしまつ。

「つぐつ、んひいー！ んー！」

無数の爪を食道に突き立てながら、血と唾液と嘔吐物が混ざつたものを退けながらムカデたちは更に奥を田指す。

気道を塞がれ息をするのも困難になる。痺れて言つことを聞かない身体は時々反射的にビクンビクンと跳ねているだけである。その振動で、早くも生氣が欠如した瞳に溜まっていた涙が頬を伝つた。

「ほら、みんなにもあげなさい」

少女は下準備が整つたのを確認し、『腕』に次なる指令を与えた。ムカデたちは遙の胃を占拠し、更に奥に進行しようとしていた。しかし合図に従つて、身を捻ると肉壁に牙を立て喰い破りはじめた。

「ぐぎぎぎっ！」

遙はかつと田を見開いた苦悶の表情で、声にならない咽びを絞り出した。ムカデが腹腔を引きちぎり、急速に身体の表面に迫るのが分かつた。

そして遙が見ている田の前で、ムカデたちは腹部を穿いて登場した。赤黒い血と粘液で濡れた体節がキチキチと耳障りな音を鳴らす。それは先陣に加われなかつたムカデたちにとって、メインディッシュの蓋が取り払われたということだ。猛然と遙の腹部に突進し、穴を喰い広げた。赤いプールに溺れるような体勢で血を啜り、臓腑を喰い散らかす。

少女は苦痛に歪む遙の顔を見やすくするために、遙の口から『腕』を引っ張り出そうとした。ムカデたちが食欲のあまり激しく抵抗するのでほとんど無理矢理する形になつた。

果てしなく無惨な音がした。何千もの鋭い爪を持つ脚が咽喉をズタズタに切り裂いたのだ。体内から出たムカデたちも、すぐに腹部に猛進して先陣に加わつた。

遙は血液が跳ね、肉と骨が削りとられる音を集めた曲を聞いていた。何も感じない。

（痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！）
痛み以外は何も感じなくなってきた。

おぞましい蟲が己の欲望を満たすために、少女のたおやかな肢体

に群がり躊躇する様は筆録しがたいものがある。

その間遙は意識を失うことも目を逸らすことができず、未曾有の激痛に絶叫しながら自分の身体が減っていくのを見るしかなかった。声が出ていたのかも自分では分からぬ。なにしろ生き物としての機能は破壊されているのだから。

遙が魂の苦痛から解放されたのは心臓を貪り食われた後だった。

遙は意図せず再び覚醒することになった。とは言え、目も耳も鼻も機能しておらず唯一触感だけがある状態だ。そんな遙を変な感覺が襲つた。

全身がむず痒い。でも何となく気持ち良さもある。

これが夢であることを思い出した。もしかしたら、もう終わつたのかもしれない。あまりに過激な体験に身体がショックしているから、こんな状態なのではないか。希望が瞬いたが、すぐに現実に引き戻された。背中には洞窟の「ゴツゴツした感触がある」と気付いた。

それでもこの苦痛のない現状になら身を委ねてもいいと思った。それは勘違いも甚だしい。今は『治療』の真っ最中である。遙がそれを知るのは、視覚が回復してからだ。

眩しさに目が眩んだ。久しぶりに見た光は、岩窟を照らす不思議な光だつた。決して強くはなかつたから、すぐに目が慣れた。

「ひつ！？」

『治療』を目撃して、遙は思わず息を飲んだ。

へし折られて身体から飛び出した骨は、赤黒い膜を張りつけた白い芋虫よろしく元に戻ろうと不器用に動き回つていた。

裂かれた皮膚はノロノロと伸縮し繋がつた。かと思えば力を無くしてちぎれたりしている。

全身の部位が別の生き物のように蠢いている。純粹な恐怖が渦巻いた。

声を出すやつとして、口や喉の皮膚も再生していることに気付いた。体内でも同じこと起きていることを想像すると、身体が強張った。好き勝手に動き回る自分の一部は、刺激したら一斉に振り向いてきそうで怖かつた。

そう考えると目が離せない。ついに好きでもないホラー映画を見てしまう感覚と似ている。『治療』を見せつけること。それは遙の身体を癒し、心を毒すものであった。

最終的にはもう一度戦えるほどに身体は修復された。すると、待つてましたとばかりに怪物がまた一匹ホールに躍り出た。

遙はこの『治療』を再び受けないために力を振り絞って戦いに挑んだ。勝つのは無理でも、なんとか悪夢の終了まで時間を稼ぎたかった。

その油断も隙もない遙を嘲笑つかのよう、思いもよらぬ所に罷はあつた。

「ひぐうう！ がああっ！」

遙が醜い怪物に何度も斬撃をあたえようとする時に、それはきた。治つたかに見えた細い足を喰い破るようになじきられたような断面の骨が顔を出したのだ。

呆気に取られたのは一瞬。すぐに凄まじい痛みに転げることになつた。悶えれば悶えるだけ、遙の身体は腐つた果実のようにズルズルと自壊していく。

その状態で遙は怪物に轟き殺され、また『治療』を受けることになつた。しかも『治療』は完璧な時もあれば、少し動くと身体が壊れる時もあった。

遙はいつまた身体が崩壊するやもしれぬ恐怖と、怪物に轟き殺される恐怖との板挟みに苦しみながらも戦うしかなかつた。

救いようのない狂氣的な想像力が作り出した、どこまでも惨悽な夢。結局それは、綾瀬の右手に宿っていた力を使い果たした時点で終わった。

「……」

脳裏に染み付き、隙あらば思考の表層に浮かび上がらうとするそれを遙は懸命に振り払った。

今は疲弊しきった心身を休める場所を探すのが肝要である。悪夢を回想し、無駄に精神を病む必要はない。

（体力が回復したら、アイツをぶつた斬る）

綾瀬の邪悪な内面を隠すような眩しい笑顔を思い浮かべると、遙の本能が目覚め始めた。

『復讐の女神』 ネメシス

それが遙の幻象としての名前だ。唯一幻象を造り出す能力を持ち、遙を血塗られた運命に決定付けた幻象、『起源』。それが復讐の対象である。

今度は在りし日の思い出が脳裏を掠めた。

血まみれの少年を抱きしめ、泣きじゃくる少女の姿。全てが変わったあの日

その幻想をも遙は振り払った。

（過去を憂いて悲しむ時間は私にはない…）

遙は剣を出現させ、目を閉じその刀身に祈るように額をつけた。

美しくも歪なこの三ツ又の剣は、斬った幻象を再発生させずに消滅させる力がある。同時に周囲の幻象の存在を感じできる。だが、デメリットもある。

まず人間は斬れない。これは、明人を刺した時に初めて知った。最たるものとしては、幻象への殺戮衝動が起こることだ。このせいで遙は憎んでもいない同族を殺戮していった。

彼らは望む望まないは別として、『起源』に人生を変えられた仲間のはずだ。それを自分勝手な欲求だけで殺すのは辛かつた。これでは、あのムカデたちと何ら変わらない。

だが、止めようと思つても止められず、無理に我慢すれば意識を失つたりもした。そして目覚めた時には、必ずと言つてもいいほど手は血に染まっていた。

遙はそんな自分が怖かつたし、嫌いだつた。しかし殺戮行為を止めると自己否定になるらしく、消滅しかかつたこともある。

復讐を果たすためには殺るしかなかつた。

だから、この衝動を多少コントロールする術を身に付けた。だが次第に肥大化する欲望を完全に制御するのは不可能だつた。

遙は衝動に身を任せ、殺人の快樂を求めるようになつていった。復讐と保身の板挟みに遭つた精神の一種の防衛機能である。

もはや『復讐の女神』などという大層なものではないのかもしれない。『辻斬り』『通り魔』そんな呼び名の方が似合つている。

幻象を殺しても消滅する為証拠は残らないが、目撃者には大量殺人犯として見られている。幻象とも人間とも相容れない。遙は孤独な存在になつていた。

それを悲しく思つたのは最初だけだつた。その後は『起源』を探しながら、出会う幻象を殺し飢えを満たした。

能力ゆえ、傷つくことはあれど負けることはほとんど無かつた。

今回は久しぶりに大敗を喫したことになる。この綾瀬というなかなか骨のある獲物は、遙の心はいつになく沸き立たせた。

殺人衝動以外の理由で剣を振るう機会は久しく無かつた。

剣から額を離し、遙は目を開いた。その赤い瞳から虚ろな光は消

え、並々ならぬ狂氣と強い意思が宿っていた。

「生きるためには殺すしかないのね」

いや違うか。これは贖罪だ。あの日、この狂つた獣の欲望で大切な人を殺したことに対する。それは綺麗事だ。本当はもつと単純に、殺したいだけなのだ。だが、殺人の重圧は幻象になつたとしても軽くなるものではない。だから、手頃な理由が欲しいだけ。「どうでも良いわ」

浮かんできた様々な想いを一蹴して、遙は再び歩き出した。

第7話B・決意 - never forget

遥が決意を新たに学校を脱出してしばらく時が経つた。榎原家では家主が起床した。

ソファーで寝るのは要領を得なかつたらしく、明人は目覚ましがわりに全身を床にぶつけた。

「ついてねえ……」

不満を垂れながら顔を洗つて、歯を磨いて、着替えを済ませた。毎朝何かしら音楽を聴いていたが、今日は静かな雨音がBGMである。

「アイツまだ寝てんのかな」

アイツとは綾瀬のことである。

昨夜はよくわからない内に雰囲気が悪くなり、明人の部屋に逃げてしまつた。騒がしいのが居ないのに気付くと途端に寂しさを覚えるものだ。

綾瀬の性格からすれば、今朝はケロッとして起きてきそうだ。そうだとしても何となく罪悪感があつた。

「謝つとくか、一応」

悪いのは確実に綾瀬なのだが、彼女から謝罪が聞けることはまず無いと思った。こういう時は謝つた者勝ち、ともいう。なんだかんだ言つて綾瀬が心配なのである。

明人は自室に足を向けた。

「あれ？」

ドアが開かない。鍵などは付けていないので、中で何かが引っ掛かっているらしい。

「完全引きこもり宣言か」

出会つて数時間で人の部屋を我が物顔で使う奴は初めて見た。

「止めといた方がいいか。アイツにも何か事情があるみたいだし」
そう結論づけて、明人は大人しく引き下がることにした。無理に起こしても不機嫌になるだけで大変だろう。

明人はリビングに戻つて、思い出したようにケータイを開いた。
「留守電もメールも無し、か。どうしたんだ藍？」
この鬱陶しい天候のせいで、妙な気分になり余計な心配までしてしまう。確かにモーニングコールはほとんど毎日あつたが、今日は帰国する日なのだ。

早く家を出なくてはいけないだらうし、実際に会えるのだからしなくとも不思議ではない。

「さて、何をするか……」

つぐづぐ自分は独り言が多いと感じた。

今思えば両親が旅行に出かけてから 死が何者かに隠蔽されてから は特に顯著だったようだ。

犯人はあるゴスロリだろうが、別にどうでもいい。

時間は万病の秘薬。

死体も出ないし、半年間も死んだことを知らずに過ごしていたのだから、今さら実感もない。本当は警察に届け出る必要があるだろうが、そんな気も起こらない。

今はただ藍のことが気になる。この事を知つたらどうするだらう。泣いてしまうだらうか、それとも自分と同じで実感が沸かないのだろうか。

やはり警察に届け出るべきか。だとしても半年経つて『親がいなくななりました』等とのたまうのはバカらしい。妙な疑いをかけられては困る。

他に選択肢は何がある？

「……思いつかねえ」

明人はうなだれた。実は自分が家族のことを別になんとも思つて

ないことを思い知らされたことに。」

「最悪だ」

自分に妹を迎える資格はあるのだろうか。アメリカにいた方が幸せだと思わせてしまうのではないか。負の自問スパイラルに陥り、だんだんと悲しくなってきた。

ガタガタと物を動かす音が聞こえてきた。どうやら彼女の要塞が開放されるらしかった。

片手しかない少女が一体どうしているのか疑問である。

「ふああ……、おはよ～」

怠惰の塊みたいな声が聞こえた。綾瀬が寝ぼけまなこでリビングにやつってきた。

「よく寝れたなあ。むふふ、布団が気持ち良いんだよね、サカキっぽい匂いがして」

明人に聞かせたいのか、綾瀬も独り言患者なのか。恥ずかしくなるような台詞を惜しげもなく言い放っている。

「おかげで良い夢見れたりし、体調はバツチリ！ 手ないけど」

綾瀬はペラペラと一通り喋ると、ロターンして洗面所に行つてしまつた。

「何なんだアイツは」

空氣読め、という方が難しいかもしれないが察して欲しかった。じゃぶじゃぶと無遠慮な水音が耳に響くのに鼻につく。

戻ってきた綾瀬に今の状態を見せたくなかつたが、どうにも身体は動いてくれなかつた。結局俯いたまま出迎えことになつた。

明人を気に掛けているのか、気まぐれなのか綾瀬は無言で朝食の準備を開始した。

トースターでパンを焼いたり、冷蔵庫から何やら取り出して調理

を始めた。

明人は顔を上げず、その音を聞いていた。感謝と情けなさを感じながら。

「ブレックファーストは大切だよね。1番を壊す。なんていうの、2番が1番な感じ？」

静寂が嫌いみたいで、綾瀬は一人ボケ始めた。

「意味わかんねえ」

シカトを決め込んでいた明人も思わずツッコんでしまった。

「あ、やつと元気になつた」

顔を上げると綾瀬がエプロン姿でニコニコと笑っていた。今のが元気になつたと言えるなら、気の触れたオウムでも元気なんだろう。「朝から落ち込んでるなんて不健康だよ。パーツと明るく楽しく行くべきです」

「……そうかもな」

まさか綾瀬に叱咤されるとは思つてもみなかつた。明人は照れくさくなつて顔を背けた。人に弱みを見せるのは初めてかもしかなかつた。

「もうちょいで出来るから待つてよ」

綾瀬は上機嫌だつた。加速していく独り言に律儀にツッコむ明人も大変である。

「うむ。会心の出来だね。私の分だけ」

「は？！ ちょっと待て。最後辺りに不穏なワードが聞こえたぞ」

綾瀬が運んできたお盆をのぞきこむと、見事なまでの黒い物体が皿に乗つているのと普通に美味そうな朝食の皿がある。両方ともまたもなスクランブルエッグが付いているが、見た目は天国と地獄である。

「嫌がらせか。どうやつたら一緒に焼いて片方だけ炭化するんだ？」疑問を投げ掛けつつ視覚と嗅覚を刺激する方の皿に手を伸ばす。

「トースターに嫌われるんだよ、きっと。見た目悪いけど、ビタ

「チヨコだと思えば食べられないことないよ?」

綾瀬は素早くその皿をひつたくつた。

そしてパンに失礼なくらいジャムを塗りたくつた。甘い物が好きとこりより、悪ふざけにしか見えない。

「じゃあお前食えよ。代わりにその甘党の夢みたいなヤツを貰うか

ら

「えへ、イイよ」

綾瀬はなんとも簡単に承諾した。

絶対裏がある。表から裏が透けて見えるくらい明らかだ。

「ほらよ」

明人は一応渡してみた。正直、何をしてくるか分からぬ。

「…ブラックスクエア。ダイオキシンと同じカテゴリーに入るらしい超有害物質。見てこれ、黒いよマジパネえ!」

「そんな危険なシロモノが家庭で簡単に作れるとは驚きだよね。で、

喰えや」

明人が急かすように言つた。

「私がこの猛毒で苦しむのがそんなに見たいか!」このダメめ言つてることが支離滅裂である。

「自分から進んで喰うつて言つたら!」このダメめ

明人は逆ギレに逆ギレで返して、砂糖漬けみたいなトーストを口に運んだ。持つただけで、指がジャムまみれになる。

「これ1斤で1日分の砂糖、つて感じだな」

明人は何かのCM風にコメントして、パンを綾瀬の皿に戻した。

「それ、おいしつてこと?」

不思議そうに綾瀬が見てくる。炭は放置されている。

「不味い。頭がどうかしてるつて意味だ」

「えへ、糖分は脳を活性化させるつてアルファベットの探偵さんが言つてたよ」

「ま、名探偵には必要だうな。でも頭使つてなさそりなお前にはいらん」

口直しに牛乳を一口飲んだ。甘ったるジャムと混ざってなかなか美味しい。

「あ、サカキの味がする」

「ブツ！」

強烈な不意打ちに明人が噴き出した。

綾瀬はそんなことは気にも留めず、サクサクと小気味の良い音を出しながら、ベトベトな甘党専用を平らげていく。彼女も牛乳と交互に食べるのが好きらしい。というか、これはドリンクが無いと考問みたいな代物である。

「……」

返す言葉が無い。こんなシユチューハー・ショーンは一次限定だ。

「……ちょっと！ なんか言いなさいよ。いつもがはずかしくなるでしょ」

綾瀬の頬が少し紅潮した。でも幸せそうなのは甘い物のおかげか、間接キスもどきのおかげか。明人には分からなかつた。

「デレたな。はずかしい奴」

からかわれっぱなしもつまらないので、明人も反撃した。

「あ、ひどっ！ ブラックスクエア喰つてろ、ばーか！」

反撃は予想以上に効いたようで、綾瀬はふいつとそっぽを向いてふてくされてしまった。

「……すまん、調子に乗りすぎた」

非は十割ほど綾瀬にある。なぜ謝っているのか明人本人も分からぬ。

「食べたらゆるしてあげる」

振り向きもせずに綾瀬が小さく呟いた。

「何をだ？」

薄々気付いているが、聞いてみた。そうでなかつたら、という願いを込めて。

「ブラックスクエア」

「やっぱりか。つーか、その名前氣に入つてんのか？」

「うつさい、早く喰え。じゃないとサカキの部屋に引かれりむるよ」

「マジかよ。じゃあ同棲生活だな」

「それ良いかも」

綾瀬は遠い目をして何か危険なものを空想している。

「じゃあ早いとこ喰つて阻止しないとな」

綾瀬のデレを蹴つて、大きく一口かじった。

口中をボソボソ感と苦味が占領して

「ん！」

炭はとにかく甘かつた。さつき食べたパンと同じ味だ。

「ブツ」

綾瀬が少し噴いたかと思えば、破裂したように笑い出した。

「きやはははは！ サカキはやっぱダメだね。見破れたらスゴいけどさ」

パチンと綾瀬が指を鳴らす。

持っていた炭の塊がぐにゃりと歪んだかと思うと、ビン一つを空けたくらいのジャムがかかつた物体に変わった。正確には戻つたというべきか。

「は？」

「おはようサカキ。朝ごはんが黒こげってナイトメア～」

悪戯がキマつたガキの笑顔。単なるガキなら頷けるが、綾瀬は高校生おである。その思考幼稚すぎやしないだろうか。

「そりや悪夢だらうけど……」

まんまとはめられた。綾瀬は間接キスをゲットし、明人は醜態を晒してさらりと喜ばせたに過ぎなかつた。

パンの一件は気に食わなかつたが、スクランブルエッグはトロトロしていて美味しかつた。

「お前が作ったにしちゃ上出来だ」

素直に誉めておく。デレると可愛いし面白い。

「良かつたあ。料理なんて久しぶりにやつたから

綾瀬は心から安堵しているようだつた。

だから明人は「まあ、スクランブルエッジなんて誰でも作れるけどな」という意地悪は飲み込むことにした。

「ところでさつきのは幻象フヨーミナつてやつの力か？ アレは……」

明人の疑問は真剣みを帯びた声に中断させられた。

「そこで！ サカキに言わなきやいけないことがあるの」

綾瀬が唐突に真摯な態度を取る。しつかり明人を見つめる赤い双眸には強い意志が宿つていた。

「驚かないで見てて。あと、怒つたらヤダから」

忠告もそこそこに、綾瀬は立ち上がり部屋の中央に移動した。明人が何か言う前に部屋は奇妙な空気に包まれ始めた。蛍光灯の明度が段階的に下がつたように感じられる。

「『虚構の樂園』よ、眞実を白日の元に曝せ」

綾瀬が仰々しい呪文めいたワードを朗々と唱えた。

すると、ガラスが碎け散るような音がそこらじゅうから聞こえてきた。

「何だよ一体？！」

頭の中がぐらぐらする。視界に音相応の亀裂が走る。眼と耳を塞ぐしかなかつた。それでもしないとイカしてしまいそうだ。

「サカキ、眼を開けて」

綾瀬の柔らかな声に明人は恐る恐る瞼を上げた。

フローリングは黒々とした『ワックス』で塗られている。床のみならず壁、天井、家具類も全て真つ黒だ。

「これが眞実」

ゆっくりと振り向くと薄い闇の中に綾瀬がいた。

彼女の周りにはおかしな蝶々が舞っていた。おぼろげに光る体は

ガラス細工のようで、一目で生物でないのが理解できた。

「まさか……」

明人は絶句した。捨て去った記憶が濁流の如く流れ込んでくる。乾いた血が覆う部屋にいるだけが理由ではない。綾瀬が『虚構の樂園』を解いたことで一部制限されていた記憶が蘇つたのだ。

「ごめんなさい。サカキのここ半年間は私が作った幻実よ

綾瀬が悲しげに独白し出した。

とうてい冷静には慣れないが、明人は黙つて聞くしかない。

「半年前、私はたまたまこの街に来ていた。フラフラ放浪してたら本当に偶然。そこであのゴスロリと知り合つたの。私の力を知つたアイツは懇願してきたわ。『明ちゃんを傷付けずに邪魔な奴等を消したい』って。ちょっとした幻象助けだと思つて協力したの。暇だつたし。

最初は普通にサカキに会いに行くだけみたいだつたけど、何を思ったかサカキの親に会つた瞬間アイツは2人を手にかけた。そのままアイツはアメリカに行くとか言つて消えてしまった。煉獄のようなこの部屋とサカキを残してね。

私はその後始末を進んでやることにしたの。だからこの半年間は、ずっとサカキの隣で過ごしてきたつて訳。理由はよく分かんない。気まぐれだと思ってた。でも違うみたい。私サカキが好き』

綾瀬は凶行に至つた経緯を語り、常軌を逸したタイミングで告白してきた。一体どういう思考回路を持った生物なのかと考えたところで、この少女は生きていないし死んでもない。更に常識不適応者だつた。

「そうか」

明人は短くそう答えた。綾瀬の願いを聞き入れた訳ではないが、怒りどころか悲しみも湧かない。

「なんで今コレを見せたんだ？」

「だつてアイツにサカキを盗られるのは癪だもん。それに昨日の夜、喧嘩別れした原因これだし」

「お前なりに考えてくれたつてことか。でも、言つちまつて良いのか？」これを知つたらアレは何するか分からんぞ」

「何」と言いつつ明人の心配事は一つだった。

ゴスロリの言葉が蘇る。

『藍ちゃんを探し出して、殺すわ』

今朝連絡が無かつたのはもう殺されてしまつていたからかもしれない。

「たぶんね。慕つてる人の家族を殺す動機は不明だけど」

明人の心情を知つてか知らずか話は『アイツ』の方に流れていった。

「アイツって言うけど、名前があるだろ。教えてくれよ」「森谷小夜って名乗つてたわ。幻象としての名前は言つてなかつたけど」

「森谷小夜……」

その名前を反芻するとチクリと頭痛がした。

小夜が明人に何か（綾瀬の口ぶりからすれば恋心だらう）を抱いているなら、以前会つたことがあるはずだ。

街でちょっと見かけて好きになつたから家族を殺しました、とかならこの国はもう終わりだ。

そういうわけで、思い出せないが案外近くにいた人物なのだろう。明人は自分の過去を顧みない性分を残念に思つた。以前のクラスのメンバーなんかろくに覚えていない。

「アイツはサカキへの執着心の塊ね。ずっと明ちゃん明ちゃん、つて言つて未練たらたら。昔仲良かつたんじやない？」

綾瀬は小夜の名前を呼ばない。恋敵と認識しているらしく震むような口調だ。

「かもしけない」

「ふうん。で、あの名前に覚えは？」

「さあ、記憶にないな」

明人は両手を軽く上げてみせた。少なくとも高校ではそんな奴は知らない。

「ふふっ、そうなんだ」

綾瀬はちつとも残念そうではないし、むしろ嬉しそうに笑っていた。

「楽しそうだな」

「だつてアイツは幻象になつてまでサカキを追つてきたのよ。なのに覚えてもらえてないんだもの。かわいそう」

綾瀬は口元を三日月みたいにして噛つた。並びの良い白い歯が覗いた。

「案外黒いなお前」

明人は苦笑した。小夜も普通に出会えたら良かつたのに。何も殺人を犯して好感度を地の底に落とす必要はない。

「救われないな」

明人はポツリと呟いた。

「そうだ、アルバム。何か手掛けたりがあるかもしけん」

この閃きを実行すべく、再び部屋を見渡して気分が悪くなつた。会話の中で冷やされた頭で見ると、室内は更に陰惨さを増していった。

「そういうや、死体はどこへやつた？」

「アイツがほうりだして行つちゃつたから、あっちの山に埋めた」

綾瀬は窓の外、雨のベールの向こうを指差して言った。

「そうか」

それを聞いてもやはり何の感情も浮かばなかつた。

(末期だな、俺も)

「怒らないの？」

綾瀬が不安そうに見上げている。常識から逸脱している幻象の少女からしても、これほどの無感動は驚きなのだろう。

「元からこうなんだ。虚無主義ってやつらしい」明人はやんわりと

言った。

十数分後、2人は『虚構の樂園』^{エフュージョン}の力で造られた日常的な非日常に戻ってきた。

綾瀬がこの部屋を再度封印し、入る者の認識をすり替える工作を施した。綾瀬がいなくともこのシステムは半永久的に稼働し続けるらしい。これで虚構は時を経て事実に成り代わる。

明人はそれで満足だつた。平和に暮らすなら知らない方が良いことも多い。特に薄皮一枚剥がしたら血まみれルームが顔を出すのは、御免だつた。

「サカキは良いとして。妹ちゃんは大丈夫なの？」

パラパラと中学の卒業アルバムを捲りながら綾瀬が言った。

「ああ。帰ってきて親が死んでるって知つたら、どうなるか分からん。永久に応急措置だよ」

アルバムに目を走らせながら明人は隣にいる幻象の説明を思い出していた。

多種多様、禍福も自在。先ほど見た蝶々は綾瀬曰く「血と汗と涙と想像力の結晶」らしい。やたら水分が多い。それを憑依させれば、あとは綾瀬の意志一つで夢幻の虜となる。

幻覚の性能の優劣で言えば、銃弾く蝶く血液や身体の一部ということらしい。

部屋のシステムに加え、帰ってきた藍には家の外用に蝶もつけてもらうことにした。

「ただこの蝶々作るのめちゃくちゃ手間だし疲れるから、いつもはこれよ。ぱあん！」

綾瀬は手で銃を作つて射撃してみせた。

そんなことを言いながら嫌な顔一つしないで協力してくれる。明人は言い尽くせないくらいの感謝を述べた。

「ひつ、さ、サカキ」

綾瀬が怯えた声を出した。

感傷に浸つっていた明人は驚いて指されたページを見た。

「……きみわりいな」

アルバムは中学時代明人の所属していたクラスのページに差し掛かっていた。

クラスメイト全員の顔写真を載せたページのある一ヵ所が黒のマジックで乱暴に塗り消されていた。

「三好、守田、じゃあここは……」

森谷が来るのはないか。2人は同時に結論を導き戦慄した。

「他のページは？」

綾瀬に促され、体育祭とか文化祭等の思い出深い行事のページを開いた。

綾瀬が息を飲んだ。

黒塗りの部分はやはりあった。女子の集団の中に多く見受けられ、意味する所はおそらく黒塗りも女子であるうといふこと。一緒にいるがどれもこれも遠くに写つており、女子との仲は良くなかったようだ。

だが消されているのは2年の秋辺りまでで、その後には禍々しいマジックは見当たらなかつた。

「消されてないけど、この中にアイツがいるのかな」

ジックと写真を見つめる綾瀬に明人が諭した。

「消す必要が無かつたんだる。この先に森谷小夜はいない」

「そうともとれるけど、何で断言できるの？」

「うちのクラスは36人、行事の度に集合写真を撮つてゐるようだが、常に1人ほど足りない」

欠席している奴もいるだろうが、どの写真を数えても最高は35人である。

「じゃあ中学2年の秋くらいに幻象になつたみたいね」「する3年前になるな」

結果としてその程度のことしか分からなかつた。嫌な思いの割合

の方が大きい。

アルバムは押し入れの奥にしまっておいた。一度と見ることはないだろう。

「あれを塗つたのは誰だろうね？」

綾瀬が分かつていいるくせにあえて聞いてきた。

「俺がやつたんだ。森谷小夜との間に何かあつて、衝動的なここまできて何も思い出せない。明人は不甲斐なさを感じずにはいられなかつた。

その後明人は綾瀬の腕の事を思いだし、義手について調べてみた。だが、到底手の出る値段ではないし、綾瀬もいらないと言う。外へ出られないので談笑していると、いつの間にか雨は止んでいた。

夕方、明人と綾瀬は電車に揺られていた。藍を迎えて空港に向かっているところである。

国際線の出ている空港などもちろん緋森市には無い。幸い隣県にそういつた空港があるので、そこへ向かつている。

さつきから綾瀬は席に膝立ちになつて窓の外を眺めている。服を持つてないなどとのたまつので、またしても藍の服を借りて着ている。

今は男の子っぽい活動的な長袖Tシャツ、ジーンズという出で立ちだ。

もつとヒラヒラな服が好みかと思っていたが、これも似合つている。アイデンティティなのか、髪はヘアピンで加工されたままだ。「普段はどうしてる?」

嫌な予感がして聞いてみると、予想通りの答えが返ってきた。

「服以外もお金はないけど、お店から借りてる」

「それは万引きと言つて犯罪だ。覚えとけ」

言ひ割に明人は何とも思つていない。店が潰れようが興味がなか

つた。

「幻象に人間のルールは適応されない。覚えておきたまえ」

綾瀬は本当に何にも縛られない生活を送っているらしかった。

しかし幻覚が効かない機械は誤魔化せないらしく、監視カメラを筆頭にセキュリティシステムは苦手。でも捕まえに来るのは人間だから遅れば取らない。

雨は昼過ぎに止み、散り散りの雲の隙間から夕陽が射して茜色に染まる街並みは実に美しい。

「日本の車窓から、サンセット殺人事件」

綾瀬は相変わらず奇天烈な独り言を繰り返している。彼女の脳内ではサスペンスの定番BGMと共に血みどろ殺人が起きているに違いない。

（我慢だ、無視だ、他人のフリをするんだ。今に始まったことじゃない。例え他の乗客の前でぶつぶつ言つても、ツッこんだらダメだ）

同じく独り言が多い明人も人の事を言える立場ではない。だとしても思い付いた妄想を駄々漏れにするほどの重症患者と同列でない事は確かだ。

「おい、お前。傍若無人って言葉知つてつか？」

限界である。決意は虚しく2秒で崩れた。

「傍に若く無い人がいる」

高齢社会をそのまま表した言葉よね、ヒツツ「まれるのを待ちかねていたように綾瀬は勝手な解釈を垂れる。

「オーケー。言葉を変えよう。そのブツブツ止めろボケが！」

「えへ、肌綺麗だと思うんだけど……」

「なら、襲つて確「國家権力の出番だね！」

こんな痴話を繰り広げても乗客達は見向きもしない。それというのも綾瀬が能力を使ってこの車両を『虚構の乐园』^{エリュシオン}で変えてしまっ

たからである。ここにいる人間は誰一人2人を認識していない。

羞恥心を持ち合わせていない疑いのある綾瀬は別として、明人は十数人に囲まれての喧嘩など気が気がではない（楽しんでいるが）

「便利だな。その能力」

「でしょう？ 何せ私が自由に楽しく過ごすためのモノだからね」「なるほど。それがこないだ言ってた一つの思いつてやつ？」

すると綾瀬がちょっと目を大きくした。

「意外に鋭いね」

「まあな。多少自分が巻き込まれたモンに興味があるんで」「それじゃあ、幻象の出生の話でもしてあげる」

綾瀬はキッチンと座り直して、語り始めた。

「まず『起源』って幻象がいて、彼が幻象を創るの。あ、創るつていうか人を変身させるつていうか。彼は強い願望がある人の所にやつて来て、その周囲の人間関係をぶつ壊した後、最終的に当人を襲つて殺そうとするんだって。それで死にかけてパニクつた人間に問うの『お前の望みは何だ？』つてね。めっちゃ怖いんだから。まさに死ぬほど。そこで、願いを言つたらそれに見合う幻象になる。でもチャンスは1回。男も女も一言はできない。あくまで最初に言った願望だけよ。だから可哀想なのは『死にたくない』とか『殺さないで』つて問われた後に叫んだ奴。そいつらは自分で消滅できない幻象になつて、多分地球最期の日までこの世に存在なきやいけないかも。最初は良いけど段々心が磨耗して最期には狂うらしいよ。それは置いといて、見事幻象になつたら急に優しくなつて、そいつの幻象名を決めたり、不安でくたばりそうな私達にあれこれ教えてくれるの。案外いい人かもね」

色々と驚かされる内容である。起源の性格にはいささか問題があるように思えた。

要するにその男は人間を試して遊んでる訳だ。願いが叶う人は良

い、だがそんな状況でまともに答えられる奴が何人いるだろうか。大概の人は生も死もない存在地獄。無限の苦しみを味わうことになるのだろう。

「だから我ながら凄いと思うんだ。私の精神力」
綾瀬が誇らしげに言った。

「ああ、大したものだ」

それは本心からの称賛だった。現在の性格がどうあれ綾瀬だつて普通の女の子だつたはずだ。彼女を取り巻いていた環境がどう変化し、どんな形で命の危機にさらされたかは知りもしない。だが、そんな中で「自由に楽しく生きる」などと言えるのは心底凄いと思った。

意地悪く裏を返せば死にたくないと同じだが起源には詮無きことらしい。

その一方で目的こそ不明だが人を弄んでいる起源には嫌悪感を持たざるを得ない。

「ねえ、会つてからずっとただどなんでも『お前』つて言つの？ 名前で呼んでよ」

「は、何だ？ 急に」

シリアルスさも抜けきらぬまま、別の話題に飛んだことでちょっと焦つた。

「私は明人の彼女だつて設定だから。しつかり妹ちゃんに紹介してよね」

「そうか……つて、はあー？」

そいつは初耳だ。

「ほらはやく。練習。綾瀬つて呼びなさい」

有無を言わせぬ真面目な雰囲気。心中ではニヤニヤしているのが丸見えだ。

「改まるなよ。無駄に恥ずかしくなる

「……」

大きな瞳が上目遣いに明人を見ている。もの欲しそうに見上げてくれる。

小動物の可愛さがあった。ここまま大人しくしていれば、普通に美少女で通るであろうに。

「わーったよ。呼べばいいんだろ、呼べば。……あ、綾瀬」
こんな会話今時、中学生でもしねえよと思いつながらも、意外に恥ずかしい。

「フツ、その反応。貴様草食系だな」

勇気を出して真っ赤になつて言つてみれば、綾瀬は変なキャラを構築して鼻で笑つた。

明人は仕返しに黙りを決め込んだ。

「いじけてるの？ バカね、名前呼ぶくらい普通じやん
「……」

「無視しないでえ。さみしいと死んじゃうの」

綾瀬は腕にすがり付いてきた。

つい鬱陶しくなつて明人は吐き捨てるよつに言つた。

「なら死ね。どうせすぐ生き返るんだろ」

さつきの会話で綾瀬が幻象であることに誇りを持っていることには気付いていたはずだった。なのに完璧な侮辱に当たる発言をしてしまつた。

「ひどい……ちょっとふざけただけなのに」

みるまに綾瀬の表情が険しくなる。

泣きそうになりながらも怒りを露にしており、微々たる刺激で決壊しそうなのが分かる。

その悲惨な気に当てられて身動きができない明人を尻目に、綾瀬は別の車両に逃げ出した。同時に綾瀬が造つた空間が崩壊し、普通の電車に戻つた。リアルな揺れと騒音を体感できた。

戻ってきた日常に何かを感じる間もなく、アナウンスが目的地に到着したことを報せた。

空港の近くということで人の出入りが激しい。明人は押し流されるままホームへ降り立つた。

「どこ行つた

明人は人混みから外れてホームの端に移動し、忙しなく流れる人の波に目を凝らした。

電車は止まつたかと思えばすぐに行つてしまつ。アナウンスがあつたのでここで降りることは分かつてゐるはずだが。あのまま乗つていつてしまつたのかと考え始めた時、ヘアピンを大量に着けたカラフルヘッドが明人とは反対側の出入口に走つて向かうのが見えた。あれはあれで可愛いし、放つておけない感じがするのである。

追いかけようと一步踏み出した時に、明人は意外な人物の横顔を目についた。

銀のような冷たさと美しさを兼ね備えた幻象の少女。
「霜崎遙」

彼女も同じ電車に乗つていたらしい。

黒のロングコートに身を包み、長いポニーテールを揺らしながら明人とは逆の方向へ足早に移動していく。その意味する所は火を見るより明らかだつた。

「まさか……！」

昨夜の凶悪な記憶が克明に浮かんできた。

一度は死を免れたものの二度とはないかもしない。そんな究極的な恐怖が、追いかけようとする足を地面に縛り付けた。

その呪縛を解いたのはケータイのバイブだった。慌てて開くと藍からのメールが届いていた。

「無事だつたか」

安否を確認できて一息つくも、今は一刻を争う事態である。

『……あと20分くらいで着くよ。……』

絵文字で飾られた文章から最低限を読んで即返信した。

『おくれる』

藍には悪いが幻想に堕ちてもらう予定だ。それは綾瀬がいなれば成し得ない。そしてその当人に消滅の危機が迫っている。

「無事でいる」

明人の決断は早かつた。

あえて2人を追わず、すぐ近くの階段を一段飛ばしで駆け降りた。降りた所で明人の正面の出入口に2人の姿が見えないのを確かめ、反対の出入口に突っ走った。そちらの方が人が少ないと感じたからだ。

そこは彼女達が通つた階段の行き着く先である。必死の形相で疾走する明人に周囲の人々は驚きと好奇の視線を投げ掛けるが、そんなことを気にしていては守ることなど出来はしない。

(明人のバカ。私の気持ちも知らないで)

一方綾瀬はもうすでに駅から出て、街道を走っていた。

走るのを止めたかったが、追いかけてくるであろう明人に捕まりたくないかった。その想いと矛盾して、早く追い付いて欲しいとも思つていた。

謝つてくれたら一発殴つて許すくらいの覚悟は出来ていた。

そのせいか綾瀬の足は遠回りながらも自然と空港に向かっていた。仲直りした後にすぐ2人で藍に会うためだ。

だが、綾瀬は無意識に入気のない小さな道を選んでいた。その選択が自分を追う死神をほくそ笑ませているとは知らず。

「いぐつ！？」

何の前触れもなく綾瀬は右の大腿に衝撃を受け、前のめりに倒れこんだ。初めて感じる焼けるような痛みが身体を抜けた。

「ぐえあ！　がつ！」

ひとまず立ち上がりうつ伏せの姿勢から左手をつくと、今度は猛烈な蹴りが胸部を襲った。綾瀬の華奢な身体は為す術なく地面を転がった。

口から血を滴らせながらすぐに身体を起こす。綾瀬はそこで初めて襲撃者の姿を視認した。

涼やかな秋の微風に揺らぐ黒の『コード』は、徐々に深くなる夕闇と混ざり闇色と化しつつあった。悪魔の槍に似た三ツ又の剣は、微かに残る落日の陽光を受け鈍く光る。

そこにいたのはまさに死神同然の美少女だった。

「昨日は素敵な悪夢をありがと。おかげでよく魔されたわ」

遥は得物と同じく冷淡な態度で、先ほど跳ね飛ばした綾瀬にゆっくり歩み寄ってきた。

「あら、私の特製幻覚がお気に召して？　何度味わつても結構よ」

遙がたかだか半日程度で立ち直るなど、にわかに信じがたかつた。だが、現に目の前にいる。綾瀬は挨拶もそこそこに左手の『銃』を遙に向けて乱射した。

「ふん」

高速で迫る弾幕を歪な剣で器用に弾きながら、遙は懐から黒い物体を取り出した。

「本物を見せてあげるわ」

「ぐあっ……！」

黒い物体が乾いた音と共に火を噴き、綾瀬の左肩を鉛の弾が貫いた。衝撃で綾瀬は後頭部を地面に打ち付けた。

唯一の武器だった左手は使い物にならなくなり、だらりと地に落ちてしまった。

「きやああ……うえつ！？」

攻撃手段を失った綾瀬は悲鳴を上げようとしたが、瞬時に遙の手が首を捉え嗚咽にしかならなかつた。

「叫ばれても厄介ね」

遙はポケットからタオル地のハンカチを摘まみ出して綾瀬の口腔に詰め込んだ。呼吸がもちろん困難であるが、唾液をハンカチが吸うことでの口中はカラカラになり不快感が増した。

「ふぐう…」

遙はうーうー、と苦しげに呻く綾瀬を片手で吊り上げて立たせ、壁に叩きつけた。

「殺す前に痛めつけないと私の気が收まらないな」
しげしげと綾瀬の身体を眺めていた遙の視線がある場所で止まつた。

「やつぱり再生しないみたいね」

自分が斬り落とした綾瀬の右手を見る。手首から先はなく血が滲んで袖を染めていた。綾瀬がかけていた『手があるように見える』幻覚は多大なダメージで解けてしまつたようだ。

「ここにあつたモノが昨日の夢の源か」

遙はイカれているとしか思えない笑顔を浮かべた。

「むむー！ うぐー！」

綾瀬はより一層の狂氣を感じて、イヤイヤと首を振つた。自然と涙も零れ落ちる。

ぐちゅ

獲物の懇願など受け入れられるはずもなく、遙は剣を消して空いた手で無遠慮に丸い肉の断面を撫でた。大きく綾瀬の身体が跳ね、暴れだした。

「動かないで」

遙の警告は耳に届かなかつたようで、綾瀬はあらんかぎり絶叫しながら暴れ続ける。

「あくまで、従ってくれないわけか」

ずちや

遙は躊躇いもなく、その血が溢れる輪切りの腕をコンクリートの壁に押し当たた。

コツツと骨が壁に当たる音がする。離してみると、スタンプのような後がくつきりと残っていた。

「次はもっと痛いから、ハンカチを噛み締めておきなさい」
言うが早いか、今度は叩きつけるように腕を壁にぶつけた。
身の毛もよだつ醜い音がして肉が潰れ、骨が削がれた。
身に余る苦痛に綾瀬は目を見開いた。その目に涙はあれど光はなく、目の前にいる暴力の化身も壊された手も映つてはいない。
絶望の淵に叩き込まれた瞳だった。

そろそろ殺さないと人が来るかも。そう考え剣を出すため手を離すと、綾瀬は糸の切れた操り人形の如くふしだらに座り込んだ。

「おい！ 霜崎！」

遙の予想は早すぎるほどに的中した。おぼろげな光を纏った人影が路地に現れた。

その人物の登場には驚いたものの、それが驚異にもならないことが分かつた。

「神原明人」

路地に入った明人は、例の剣を携え脚立する遙と力無く地面に腰を下ろしている綾瀬を発見した。

「お前が何故ここにいる？」

「どこへ行こうが俺の勝手だろ」

明人は人の形をした死神を恐れることなく歩を進めた。今は綾瀬の無事を祈る気持ちしかなかつた。

「俺の大切な彼女を返してくれないか」

明人は遙と1mほどの距離で立ち止まつた。彼に付きまとつてい

た非生物的な蝶々が遙の横を通り過ぎて綾瀬の頭に止まった。

「彼女？ お前正氣か」

遙がせせら笑つたが、どことなく曇つてゐる様子に見えた。

「当たり前だ。早く綾瀬から離れる！ さもないと……」

「さもないと、どうするつもりだ？ 私を殺すのか」

遙はコートから9mmハンドガンを取り出して銃口を明人に向けた。遙自身は人間を攻撃できないが、これなら無問題であった。

「そんなモンまで……」

明人は少しだじろいだ。昨日とは全く別人のような遙の豹変っぷりは、こちらが本性であると分かるものだし、本物の銃はその象徴みたいに見える。

遙が自分を攻撃できないと思いやつてきたのだが、そうでなければ勝機などなかつた。

「幻象と関わつて悲惨な運命を辿る前に私が終わらせてあげる。そのくだらない恋愛を！」

「くそ！」

明人が突進すると、遙が剣を振り上げ、引き金を引いたのは同時だった。

剣は地面を叩き、遙に殴りかかるうとした明人も止められた。射撃音だけが尾を引いていた。

「んくっ！」

明人の目の前で綾瀬が崩れ落ちた。

明人に取り憑いていた蝶々を自身に還元し、その僅かなエネルギーで明人を庇つたのだ。

「綾瀬、しつかりしろ」

明人は倒れる綾瀬を受け止め、真つ赤に染まつたハンカチを口から取つてやつた。

「あ、あきとお……、げほつ。ケガ、してない？」

苦しそうに息を荒げながら綾瀬は囁くような声で聞いた。

「ああ大丈夫だ。それより自分の心配しる」

「良かつたあ。明人が死んだら、きっと妹ちゃん悲しむよ……」

「喋るな」

「嬉しかつた、私のこと彼女だなん、て」

その言葉を無視して虫の息で言葉を繋ぐ綾瀬を明人は抱きしめた。数発の銃弾を受けた綾瀬の背は血がべつとりとついていた。命が流れ出していくようで止めてやりたかったが、どうしようもなかつた。

「もう喋らないでくれ。お前が嫌がつても病院に連れていくから、それまで…」

「もう、助からないから、良いよ。それよ、り、妹ちゃんを迎えてに行つてあ、ツ…げて」

苦痛のノイズが混じつたか細い声。あまりに痛々しく、儚い響きがする。

「藍は無事だ。それより俺のせいでお前がこんなことに」

込み上げる熱いものを明人は必死で堪えた。辛くなつて顔を上げると、遙が逃げるように走り去つていくのが見えた。

撃つたのは彼女、撃たせる状況を作つたのは自分。明人はその背中を複雑な思いで見ていた。

「あは、なぐる力もないや……。でも、謝つてくれたし気にしてない、から。わたし、がいなくても、お家には残つた蝶々がいる…。完全じゃないけど、事件を隠してくれる」

綾瀬の言葉に視線を戻すと、綾瀬は笑つていた。

「そんなこと言うなつて。お前は強いんだから死なないさ

『どうせ死んでも生き返るだろ』

明人はその言葉が持つ残酷さを理解した。人が死ぬ。それは生き返ろうが何だろうが心を抉る。

それを笑つて許してくれた綾瀬は本当に強いのだと感じた。

「結局、明人の彼女だったの1時間も、なかつたね。……でも、楽

しかつた

「違うな、始まつたばかりだ。いつまでも待つてゐるから戻つてこい」「明人……。うん、また会いに行くから……」

綾瀬は最期にギュッと抱きついてこと切れた。

力を失つた綾瀬の身体は、何ともつかない物質に変化し立ち込め
る夕闇に融解して消えた。その場に残されたのは彼女が愛用してい
たヘアピンと藍から借りた服だけだった。付着した血液さえも最初
からなかつたように無くなりつつある。

「綾瀬……」

止めどなく涙が流れた。悲しい。だが、それも刹那の感情に過ぎ
ない。

俺は過去は振り返らない人間だ。簡単に思い出を捨てられる薄情
な男だ。取り返しがつかない両親の死も綾瀬の死にも何の価値も感
じない。俺にとって価値があるのは今と未来だ。だから俺が考える
のは常に次何をするか、だ。

綾瀬にいつ会えるのか、そんなもの見当も付かない。それでも彼女
と交わした約束が果たされるのは『これから』のことである。
そう思つても完全に立ち直るのは不可能だ。これはガキの強がりな
んだ、と心の何処かで誰かが語る。

それでも今は唯一の家族である藍を迎えよう。

「完全に『おくれる』だな。アイツ怒るかな」

涙を拭い去り明人は遺品の服とヘアピンをそつと鞄に仕舞つて、
路地を後にした。

第7話B・決意 - never forget (後書き)

これで終わりじゃないんだ。前半は終わりですけど。
なんか遙が悪い奴すぎるのですが、ホントはそんなことないです。

では、ここで終わつときや良かったな、にならないよつ後半も頑張ります。

最後にこんなグロい駄文に付き合つてもひりつている読者様に感謝。

ターミナルは混雑していた。

忙しなく行き交う人と荷物。彼らは旅の疲れと思い出を引きずり帰ってきた。もしくは様々な思いを胸に旅立つ。すぐそこで起きた刹那の悲劇など知りもしない。仕事で疲労困憊だろうが、隔離される程の病にかかるといふが明人には妬ましいほど幸せに見えた。それほどまでに綾瀬を失ったことは大いに明人の精神を痛めつけた。

暗い気分を打ち消すように明人は妹の姿を探した。藍に会えれば自分らしくもない未練を断ち切ることができる、という期待があった。

すぐに十数人の団体が休憩所にいるのを見つかった。
数人の学生と教師。そしてその学生達の親。

明人はその中に懐かしい顔を見つけた。焦つて険しい表情を和らげ、そちらに歩を進めた。彼女も明人に気付いて大きく手を振る。

「お兄ちゃん、こっちこっち！」

毎日電話越しに聞いていた明るく温かい声が荒んだ心を癒すようだった。

「よう、藍。元気だつたか？」

「つ、ちょっと！？ お兄ちゃん！」

明人は気分を変えるためテンションを上げて藍をハグしてみた。ふんわりとした感触とシャンプーの香りを堪能しようとすると、藍は小さく息を飲み、ビクッと大きく身体を震わせ直後に明人を両手で押し退けた。

「どうした。アツチじや挨拶はこんなだろ？ あ、キスが良かつたのか？」

明人は怪訝そうに妹を見つめた。

周囲の視線が2人に集まっていた。一緒に留学していた生徒は理解があるようだが、その親からは変な目で見られていた。

「ただけど、ここ日本だし」

藍は顔を赤らめ俯いてしまった。

「すまん。ちょっと変態チックだつたか」

明人が周りに目を走らせると、すぐにおかしな物を見るような視線は散り散りになつた。

「そ、そ、うだよ。キスでもハグでも日本だつたらカップルでやるもの…」

「そ、うだよ、つてひどいな。もうしないよ。日本の風土には合っていないみたいだし」

「分かつたなら良いの」

藍は少し間隔を空けるように後退つた。どことなく冷淡なその反応が癪に触る。いけない、いけない。どうも他人の態度に過敏になつていいようだ。俺は同情して欲しいのか。何がしたいんだ。

せつかくの再会なのに明人はイライラしてしまつていた。

ここで何も知らない藍に当たつても仕方がない。明人は何をしかかすか分からない気持ちをぐっと封じ込めた。

明人は気を紛らわすために一年ぶりに会う藍を観察してみた。またも変態チックなのはいたし方あるまい。

出立前と背は変わつていないようだ。極端に低い訳ではないが、小さい方だろう。瞳が大きいのも相まって幼げな印象を与える。

それらが歳が1つしか違わないにしろ妹らしくて明人は好きだった。

肩を少し越える程度の薄茶色の長髪を、白のリボンを使ってサイドアップとかいうツインテールとストレートを足した髪型にセットしてある。昔は髪が短めだったので新鮮である。

明人の視線は頭から下がっていく。セーラー服とスカート、そこ

から覗く健康的に焼けた脚。

「何見てるのよ！ バカ兄い！」

これには藍の堪忍袋の緒が切れたらしい。口調が変わっていた。

「さすが我が妹。ツツコミが容赦ねえ！」

悪びれる様子も無い明人に藍は更に腹を立てたようで、身体ごとそっぽを向いてしまった。同時に膨らんだ手提げが明人の腹に振るわれたが、容易く避けた。

「これがアメリカンクオリティか。凄まじい豹変っぷり。でも悪くない」

「何ブツブツ言ってるの。キモがられるよ」

もつとおしとやかだったと思うが、何も言つまい。今の彼女を受け入れてやればいい。突然の変容も含め、明人は再会に満足していた。

しばし時間が過ぎ、教師の号令でようやく解散となつた。

「じゃあ。帰るか」

「うん。あ……それよりお母さんとお父さんは？」

藍も最初に思つたことだが、明人のせいで聞くのが遅れていた。

「ああ、その事か。帰つてから話すよ」

明人は落ち着いて対応したが、良心の呵責を感じずにはいられない。

「なによお。そつか、サプライズもあるんでしょ？」

藍は何の疑いも持たず、虚言をそう解釈した。その輝くような笑顔が明人を傷付ける凶器として用いられているとは知らず。

「詮索するなよ。楽しみが減っちゃう」

「当たりね。楽しみだなあ」

明人からすれば「き両親にそんな粋な真似ができたかは疑問だつた。一年間異国之地で頑張った家族を迎えて来るのが当たり前のはずだ。

明人はあまりに自然と受け取られたことを不思議に思つたが、歐米文化に感化されているのだと考えた。

「早く～」

「はいはい」

明人はいつの間にか止まつていた歩みを再開した。

帰りたいようで、ずっと立ち尽くしてみたい。進みたいけど、逆行してみたい。今まで感じた事のない感情が明人の中に芽生えていた。

「前ばかり見すぎたか。人間そう簡単に割り切つて生きられねえな」

「なに？ ブツブツ言っちゃって」

「ただの独り言。気にすんな」

そう言つて心配そうな表情の藍の頭を撫でてやる。藍はまたビクリと揺れたが、大人しく撫でられていた。

「そういえば、目が赤いよ。どうしたの？」

藍は目ざとく悲劇の残り火を見つけてしまった。

「そつか？ 自分の眼は見れないから分からんが」

「もう。ひねくれ者なんだから。でも前からこんなだつたっけ？」

「ああ、お前の兄貴はけつこうネジがトンデるぜ」

「……変なお兄ちゃん」

呆れられてしまつたようだ。だがそこで厭な話題は終わってくれたので、あれこれ聞かることはなかつた。

「お前も変だらう。さつきからびくびくして」

次は藍が立ち止まる番だつた。その表情には濃い蔭かげがありありと射していた。

「そんなことないよ。何でもない、なんでも……」

以前から藍は嘘を吐くのが苦手だつた。それは相変わらずのようだ。だが、今度ばかりはただの嘘ではない。何か暗い巨大なモノを抱えているのが伝わつてくる。それくらい簡単に判断できた。

「厭なことがあつたら相談してくれ。力になる」

明人は励ますよつに力強く言った。藍が傷付くことは嫌だつた。

唯一の家族には幸せでいて欲しい。重りを背負うのは一人で十分だ。

「ありがと…」

悲哀が滲み出た震えた声だった。何があつたか知らないがとてつもなく不憫に見える。

明人はそつと手を引いて藍を外へ連れ出した。今度は手を握つてもおかしな反応は見られなかつた。

そんな兄妹の顛末を森谷小夜は物陰から観察していた。

今は目立つゴスロリな服装ではない。小夜の中ではあの服は幻象としての衣装と決まつていた。だから今は人間のつもりだつた。

小夜は藍の行動を振り返つてみた。

男である明人に触られた時、小夜が思つたほど深刻な反応は見られなかつた。それは兄だからなのだろうか。

それとも私がアメリカ最後の夜にずっと慰めてあげていたことが原因なのか。だとすれば、完全に逆効果である。

しかしこれは布石なのだ。

小夜はこれから絶望に打ちひしがれる藍の姿に胸を膨らませた。レイプされ、帰り着いた我が家は地獄。

「そして、あたしに殺されるのですから。カワソウ」

信じていた友人に裏切られ殺される。あまりに悲惨な末路ではないか。

そんな末路を用意したら、あの御方は願いを聞いてくれるかもしれない。小夜はアドバイスをくれた同胞に感謝した。

去り行く2人の背中を眺め小夜の表情は綻んだ。

「だから最高のシチュエーションを用意しなくては」

小夜はケータイで綾瀬に電話を掛けた。

アメリカで別れ、次の日には日本のしかも自分の街に小夜が現れたのではアホらしいにも程がある。他にも計画に関係する奴らの認識を色々弄つてもらわなければならぬ。

小夜は大掛かりな舞台を整えるスキルを持っていない。それゆえ、偶然綾瀬と出会えた事はとてつもない幸運だったのだ。

「出ないわね」

ため息が出てしまう。お留守番サービスを名乗る女の声を中断させて小夜はケータイを閉じた。

一刻も早く明人の情報が欲しい。

今日帰る事は連絡したから綾瀬も知っているだろうし、どうしたものか。しばらく小夜は思索していた。

当の綾瀬と明人は結託し、藍に襲い来る絶望の第一波を防ぐ策を弄していた。そして兄妹の住む街には幻象の天敵と呼べる霜崎遙が滞在している。どちらも小夜の計画に少なからず影響を及ぼす因子であることは間違いない。

そして小夜はこのことを知らない。

数回掛けたが一向に出る気配が無いので小夜は仕方なく空港を出た。

秋も半ばを過ぎ日没は段々と早くなっていた。それに合わせて日に日に気温も下がっているようだ。

「寒つ」

小夜は身を縮ませ、空を仰いだ。

薄くかかる雲の上から月がネオンの溢れる街を遠慮がちに照らしている。こんな儂げな月でも見ていると、えも言われぬ活力が小夜の中で生まれてきた。

その喜びしい感覚に小夜は内心ほくそ笑んだ。幻象になつて後、小夜と月夜は切つても切れない関係になつていた。

それは小夜を正規の幻象たらしめ、長年の悲願を成就するための力を授けてくれる。

小夜は重たい旅行鞄を引きずつて懐かしい日本の夜街に歩き出した。

遙は緋森市内の安宿の一室にいた。部屋を真っ暗にして隅の方で震えていた。

毛布にくるまつても身体の奥底から沸く悪寒は消えない。その起因は自身の犯した殺人への罪悪感なのだから当然である。

「ふふふ、気にするな。いつもの事だらう」

誰かが話しかけてくる。深海から響いてくるような暗く低い声に背筋がざわめいた。

幻象になつて以来、この声は遙が一人で鬱々としている時に語りかけてきた。軽い耳鳴り程度だったものが、今では会話すら可能になつていた。

遙は顔を上げなかつた。上げても誰もいないのだ。この声は自分の殺戮を快楽とする人格がもたらす幻聴なのだと感じていた。

「今回はいつもよりスッとしたねえ。ずたぼろにされた女に報復できたし、バカな男の人生を修正できた。おまけにあなたも満足よね」同情するような、蔑むような口調で声が続ける。

「……」

遙は耳を押さえ、不可視の存在からの戯れ言を締め出そつとした。そんなことはお構い無しに邪声は頭の中にこだまする。

「嬉しいんだろ、気持ち良いんだろ、ホントは。そろそろ私と交代したら?」

「……消えて」

蚊の鳴くような声で遙は言つたが、愉しそうに声は続けた。

「そんなこと言つなつて。仲良くなつよ、ね?」

「黙れ! 私は起源を殺せれば良い。他の幻象なんか知らない」

遙は耐えかねて怒鳴つた。怒声が空虚な部屋に響いた。

「くすくす、強がつちやつて。今に殺したくてたまらなくなるわ。快樂殺人鬼の遙ちゃん」

イラつく猫なで声で責め立て、声はピタリと止んだ。

「ううつ……、違うの、そんなんじゃないのに……なんで？」

遙は嗚咽を漏らした。自分でも気付かぬ内に涙が頬を伝っていた。

寒くて辛くて、遙は悪魔が潜む我が身を抱いた。

何処までも孤独だつた。狂氣を孕むこの心身を誰かに慰めて欲しい。今宵はいつも抱えている願望が一際強く感じられた。

遙は同時に閃いた。

その思い付きはろくなものではなかつたが、少なからず空っぽの我が身を満たせるかも知れなかつた。

「榎原明人……」

ついさつき、自らの手で殺した幻象の恋人とかいう少年の名である。

恋人の仇がノコノコ現れるのもおかしな話だが、会つて謝つてきたかつた。それに幻象と仲良くなれるような稀有な性格の人間なら、何かしら得られるものがあると踏んだ。

遙は少なからず彼に興味と下心を持っていた。やはり、遙にとって彼は『起源』^{オリジン}の情報ソースなのだ。

彼の家の場所は知っている。今朝学校を出た後、綾瀬の居所を探査していく偶然見つけたのだった。まさか同棲しているとは思つてもみなかつたが。

もうこの街に用はなかつた。もとより起源の手口と似た事件が発生したことを知つて来てみただけである。しかし半年もブランクがあつたせいで収穫は無いに等しく、無駄骨であつた。

何故今になつて情報が出てきたのかは謎のままであるが。

ちょうど次の行き先を決めて立ち去ろうと考えていたところだ。

しかしネットカフェ等で調べても起源の新たな手掛けりは皆無だつたので渋つっていた。

だから明日明人にコンタクトを取つてそれを期に復讐を果たす宛もない旅に出てもいいと思つた。明人と会う。自己救済のために選

んだ道は容易く人を傷付けるひどく悪辣なものだとは十二分に分かっていた。

明人の心を深く抉る可能性も高い。

もしそうなつて、万一『起源』に付け込まれるよつなことになれば

「私と同じ、幻象になるかも」

意図せず口を突いて出た最悪の結末に、遙は戦慄した。

私を終わらせてくれる存在。

生きていると誰かを苦しめる。それが遙の苦痛になつてきている

今現在、この思い付きは恐ろしくも魅力的な結末に感じられた。

「ダメよ」

遙は浮かんできた破滅的な思考を振り払つた。歪な剣を召喚し、刀身に額を当てる。貫くような冷たさが遙を律した。

どれだけ傷付こうとも起源を殺して悪夢と化した人生にケリを付ける。幻象になつた夜、大切な彼の亡骸を抱いて誓つた。

他者を傷付けずにはいられないこの身、この剣。最初から血濡られた道なのだ。ならば、最期まで外道に徹してやろう。冷酷に、貪欲に、自身に必要なモノを求めれば良い。

明人はその対象でしかない。

「そうよ。そのまま、私を受け入れなさい」

再びあの声が脳内に響いた。

顔を上げると『遙』が立つて、座りこむ遙に手を差し出していた。

「誰が!」

「強情なヤツ…」

幻影はポツリと言い残して闇に溶けた。

「自分のことは自分で決めるわ。欲望の使徒で快樂殺人鬼の遙ちゃん」

「

私はもう迷うことないだろ。

色々と根に持つ性格であると自覚していたが、こうもすんなり悩みが断ち切れる逆に猜疑的な気分になつた。

遙は寝床の準備をしながら思つた。

だが気分が良いのは悪いことではない。今日は久しぶりにぐっすり眠れそうだ。そう考える間にも遙の身体からは力が抜け、心地よいまどろみが全身を包んだ。

視界を埋める闇は限りなく優しかつた。

第8話・俘虜 - apostles of greed (後書き)

俘虜 ふりよ 何かの虜となつた人。 捕虜

apostles of greed

(訳) 欲望の使徒

彼のキリストは敬虔な弟子たちを使徒として布教に遣わされた。
欲望に遣わされた使徒たちは、我欲を満たさんがため他者を捨て奔走する飢えた獣に他ならない。
信するものは己が欲望のみなり。

第9話・変容 - *Vicissitudes* (前書き)

Vicissitudes 『変容』そのまま

電車に揺られることしばし。明人と藍は緋森市街の駅で下車した。2人の家は市街地からは距離があるものの、手軽に遊びに行けないほどではない。

明人はガラガラと耳障りな音を立てるトランクを引いて歩いた。さすがに洗濯物やら何やらが大量にあるので、残りは郵送してもうつららしい。これには最低限の物しか入ってない。

る。

「そうだな。有名企業のグループがこの辺にも進出してたし。ここも劇的発展してるぜ」

楽しそうな藍の顔を見て、明人もにこやかになつた。上手く笑えていると思う。

「へえ、ただの田舎だと思ってたけど違うんだね」「カントリーサイドサイドがカントリーサイドになつたくらいだ。大差無い」

大差無い

「大違いよ。明日日曜だし、誰かと遊び行こつかな」

「帰つて早々それかよ」

「だつて話したい」とたくさんあるし。色々見たいじゃない

観光気分か、学校の話では良い...、しかしまあどうせやかく話はむか

「やつやつ。黙つてなさい」

「そういえばおなか空いたなあ。ね、何か食べて帰ろうよ」

「電車に乗って随分時間経ったしな。そつするか。で、何が食いたい？」

「え~っとね……」

「ズバリ、ラーメンでしょうな」

日本人ラーメン大好きだろ、という推測から言つてみた。

「何でわかったの？」

藍は意外そうにこちらを見た。案外単純なのかもしれない。

「お前のことなら何でも知つてる。何故なら……」

「システムだから?」

「何を言うか！」

「どうせ私のコール、楽しみにしてたんでしょ」

「……くそっ、アメリカめ。俺の妹に変な能力植え付けやがって」

それらしく苦々しい表情を浮かべておく。

「今の間は何よ？ マジでキモい人なの？」

漫才まがいの会話を楽しみながら、2人は店を探して歩いた。

威勢の良い挨拶が2人を出迎えた。店内は喧騒と食欲をそそる香りで満たされていた。店内は喧騒と美味そうな香りが充満していた。

学生、会社員、家族連れ。多様な人々が思い思いに食事しており、概ね繁盛しているようだった。

店員に案内され、今ちょうど空いたとおぼしき席に座った。

「お腹空いたあ。どれにしようかな」

向かいに座る藍がメニューをテーブルに広げた。

「スタンダードだな」

明人はざつと目を通してがっかりした。自分でもよく分からぬが変な物が食べたかった。

「私これにしよ」

「じゃ、これで」

注文してからの空き時間は退屈する」とはなかつた。一年分の土産話があるのだから当然だつた。

藍はどちらから話せばいいのか混乱していく、話にまとまりがなか

つたが、それほど思い出がたくさんあるということだ。それは微笑ましいことであった。

話が弾んできた所で「おまたせいたしました」とラーメンが運ばれて來た。

「ちょっとお兄ちゃん？！ 何たのんだの？」

明人の前に置かれた物を見て藍はギョッとした。

「何、つて担々麺だけど」

「明らかにメニューと色が違うよ。真っ赤っかじやん」

メニューには濃いオレンジ色の見本が載っていたのだが、目の前にあるのは血かマグマみたいな色のスープである。

「そういうお前は冒険心の欠片も無い醤油ではないか」

「コレ1番人気って書いてあつたし。だいたい、地雷源に突っ込むのは冒険心で言わない」

「いやいや、コレ裏の人気メニューだから。確かに当社比云々十%アップだつたか」

「またテキトーなこと言つて。ひねくれ者」

藍は愛想を尽かしてラーメンを口に運んだ。

「あ、美味しい。やっぱ向こうのとは根本から違うわね」

感激して食べ進めていく藍に遅れまいと明人も赤いスープを一口啜つた。

「……うん、イケる。適度な辛味が脳天に突き刺さる」

限界まで辛くと注文したのだが、職人は自分のラーメンを凶器にはしたくなかったようだ。見かけはひどくレッドなもの、味はちゃんとしていた。

美味しい料理と絶えない談笑。

綾瀬といった時もそうであるが、意図せず独り暮らしが続いていた明人にはやはり新鮮なものであった。

藍からは様々な話題が飛び出した。ニュースでしか知らない外国の見聞も広められた気がして明人は何倍も得した気分だった。

「どうかでケーキでも買ってやるよ」

「ホントに…？ 今日は奮発するね～」

会計を済ませて2人は店を出て通りを歩いていた。

緋森市街の夜は意外に人がいて、あまり夜の街に繰り出したことがなかつた明人は驚いていた。

「再会を祝すんだから当然だ」

「実はお母さん達が買い忘れたケーキを買うだけとか…、ああっ…」「ん、どうした？」

「夕御飯食べちゃった。どうしよう……」

「別に食うことだけがパーティーって訳じやないだろ」

そうは言つても明人もその事をすっかり忘れていた。即席の嘘であつたから仕方ないと自分に言い訳しておく。

「お母さんの料理とか楽しみじやない。お兄ちゃん何で言つてくれないのよ」

「すまんすまん、お前の話が面白かったからつい、な」

感づかれまいと身構えたがしつかりしてよね、とだけ言つて藍はその話を止めた。

そんな緊迫した空気が去つて暫く後、2人はオシャレなスイーツショップを見つけることができた。評判云々は知らないが、最初に見つけたのでとりあえず入ることにした。

「ここで買おつか」

藍に連れられ店に入ろうとした時に、ポケットでケータイが振動した。

「ちょっと待つて」

藍に一声かけて、明人はケータイを取り出した。着信があつたのは明人ではなく綾瀬のだつた。

「お兄ちゃん、ケータイ変えたの？ なんか女の子っぽいけど…」

確かにキラキラのシールやネコのストラップでコレーションされたピンクのケータイは到底男の物には見えない。

「俺の彼女のケータイだ。別に盗んでメール見たりしてるわけじゃないぞ」

言いつつこの機会に電源を切つておこうと思ひ開けたところ、明人は奇妙なモノを発見した。

『病照ちゃん』

綾瀬はこのなんと読むのかも定かでない文字で電話の相手を登録していた。

この相手がどうも何回か掛けできているらしく、不在着信が溜まっていた。明人も空港にいる間の着信には気付いていなかつた。

「早く）。彼女だからって勝手に見たら怒るよ」

藍が急かしたが、今はこつちが重要に思えた。

「ちょっと先に行つて見といてくれ。俺のヤツも決めていいから」有無を言わせぬ口調に藍は苛立つたようだが、明人が電話に出てしまつたので仕方なく店に入つていつた。

『もしもし？ やつと出たわね。今どこよ』

相手の女の声には聞き覚えがあつた。いつだつたか知れないが、確かにあつた。

『黙つてないで何とか言つたら。綾瀬さん？』

『もしもし』

『……』

相手は驚きのあまり沈黙したようであつた。知らない男が友人の電話に出たのだ。当たり前の反応である。

しかし、次に発した言葉は思いもよらないものだつた。

『ああ、明ちゃんか。久しぶり』

親しげな挨拶。偶然街で会つた時のような軽いノリであつた。しかもこの呼び方である。電話をしているのは自動的に決つた。

『誰だ？ お前』

『ひどいなあ。あれだけいじめたのにまだ思い出せないの？ でも当然と言えば当然よね』

『訳わからんねえ。名前言えよ』

言われなくても分かつていて。あくまで形式的な質問だ。小夜に綾瀬との関係を悟られてはいけないと直感した。

『森谷小夜、よ。昔みたいに小夜ちゃんって呼んでも良いわよ』

「知りもしない奴を誰が呼ぶか！」

『あらら、『機嫌斜めのようね。でも見ず知らずの相手にそんなに怒鳴れるなんて変だと思わない？』

痛い所を突かれ、明人はだんまりを決め込むしかなかつた。

『ま、何でも良いわ。そのうち語り合うことになるのだし。それよりそのケータイの持ち主はどこかしら？』

「知らないな。部屋に落ちてたから拾つたまでだ」

『ふふふ、あの子もドジね。ケータイ忘れてフラフラしてるなんて』

小馬鹿にした笑いが聞こえ、明人はムツとした。

『そつそつ、せっかく話してるのだし、もう一つ聞くこつかな。妹はお元気？ 空港でちょっと変だつたけど』

「どういう意味だ？」

『さあ？ どういう意味でしそうね』

「ふざけんな！ 藍に手を出したらタダじゃおかないからな！」

『ふふふ、ごめんなさい。なら私はタダじゃ済まないコトになりそうね』

怒りを露にする明人に對して、小夜はケラケラと笑い残酷な言葉を放つた。

「てめえ、何をした！」

『本人に聞けば？ お互に傷の舐め合いでもするが良いわ。さよなら』

更に追及しようとしたが、一方的に切られてしまった。

藍が無事に帰つてきたことで、小夜の脅威は去つたと勘違ひしていたようだ。藍もまた、何らかの事件に巻き込まれていたらしい。最初に藍から感じた違和感の正体はこれだったのである。

綾瀬がいない今、ただの人間である明人が幻象に敵うはずもない。

襲われれば確実に死ぬ。「どうする？ 何か手は……」

「ぶつぶつと呴きながら思案する明人に近づく影があった。

「大丈夫？」

「うわっ！？ なんだ藍か、ケーキ買った？」

肩に手を乗せられただけで、明人は情けないほど飛び上がった。
「なに怒鳴つてたの？」

「いや、心配するな。何でもない。ただのケンカ。勝手にケータイ使つた俺が悪いんだ」

口から出任せの弁解はまるで願望のようだ。電話の相手が綾瀬ならどれだけ良かつたことか。「嘘……ちゃんと話してよ」

「えつ、何をだ？」

突然変わった藍の口調は真剣で、ある種の冷たさを感じられた。それに対しても反射的にとぼける自分に明人は憤りを覚えた。

「分かるよ。悩みがあるんでしょ？ さっきは俺を頼れとか言つてたくせに、私には頼つてくれないの？」

「悩み。この俺が？」

藍は平生から妙に鋭い所があった。今もその勘が働いているのだろ？ 今はそれが忌々しい。

「向こうでのほほんと暮らしてたお前には分からんよ」

「……お兄ちゃん、変わったね。だって、こんな酷い」と言つんだもん」

藍が消え入りそうな声で呴く。捨てられたペットのような雰囲気もある。

明人が何と声をかけようか渋つていると、藍は独り言を呴いた。

「……私だって色々あつたんだから……」

これにより、明人は小夜が発した『タダじや済まされない事』が実際にあつたと確信した。今は喧嘩などしている場合ではない。やつと脳が冷静な判断を下し、明人は落ち着くことができた。

「ごめん。俺がどうかしてた」

素直に非を認めたが、言った所で何か策が見つかるとは思えない。

藍に苦痛を与えてしまうだけかもしれない。明人の面持ちはますます陰険になるばかりである。

「誤魔化したりせずに話してよ。どんなに辛い真実でも隠されることはマシなんだから」

俺の周りには強い女の子が多すぎる。

それでも俺は弱いままなのだ。男として、何より人間として。

「家で話そう」

だから

「そうだね」

帰るしかない。綾瀬の置き土産がある我が家へと。街の灯りに負けたのか、それとも広がる雲に隠れたのか、歩き出した2人の頭上に星は見えない。

藍との間に会話が無い。話のネタは尽きないはずなのに。その内に段々とネオンは薄れ、夜の闇が勢力を強める寂しい道に入つてつた。

緋森市は極端な街である。

駅前付近は平均的な都市風景だが、ビルが立ち並ぶのは市の中心だけで、そこから離れれば森と畠の比率が増えてくる。

今はそんな街から離れた住宅地を2人で歩いていた。

バスでも使えば早く帰れるが、秋の夜長に散歩するのも悪くない。気分が晴れれば言つことはないが、到底望み薄であった。

人気はない。明かりの無い建物と光度の低い街灯がポツポツと並び、沈黙する通りに灯りを投げ掛けている。

この道に差し掛かると、藍は明人の左腕を抱くようにして歩くようになつた。落ち着きなく周囲の目を走らせる姿は捕食者に怯えている小動物に見えた。

「大丈夫か、震ってるぞ」

「暗いのも静かなのも嫌い。でも今日はお兄ちゃんがいるから……」
藍は鬱屈とした声を漏らす。

前は夜道を怖がることなどなかつたように思つ。なら、今の状況は何なのだろう。すぐに、安直に、小夜の言葉と結びつく。
しかし、どんなものでもトラウマを掘り起こすのは気が退けて、明人は押し黙つた。

電灯が少なく、異常なほど静まり返る通り。

それが連想させるのは、藍が体験した理不尽な暴力であった。

今にも大男が出てきて拐われてしまつのではないかと藍は気が気ではなかつた。

この瞬間、兄に、いや男にしがみついているのも本当は嫌だつた。
だが、今頼れるのは兄しかいない。男しかいない。ともすれば恐怖で崩れ落ちそうな身体を支えてくれるのは、兄しかいない。

2人なら襲われるわけない。その確信と共に藍は仕方なく縋るしかなかつた。

その時、神経質になつていた藍は奇妙な音を捉えた。
地面を擦るような、さつさつという乾いた音がだんだんと近付いてくる。

「なに、この音」

何でもない音が怖い。藍はますます身を縮めてしまう。

「藍、怖がりすぎ。お前そんなにビビりじゃないだろ」「

明人にも聞こえていたが、それはやや季節外れな草履の音だと分かつた。

「誰か来るよ……」

「安心しろ、来ない方がホラーだ」

「からかわないでよ！」

突然藍が癪癩を起こしたように叫んだ。明人から離れて、そうはいつも離れすぎるのは怖いようで中途半端な位置で立ち尽くして

いる。

「おいおい」

明人が何と声を掛けるか決めあぐねていると、話しかけてくる者がいた。

「どうしやした？ 大声出して」

「あ、いえ。何でもない、です」

明人は急なことにしどろもどろになりながら返事をした。見れば声を掛けたのは珍妙な人物だった。

まるで落語の舞台を終えそのまま出てきたような薄墨色の和服を着た男。

男は異臭を孕む霧を漂わせる。それは男の持つ馴染みのない道具キセルから出ていた。

「嘘言つちやいけねえ、お嬢ちゃんすっかり怯えちまつてますよ」

明人と藍を交互に見て男は言った。

「そうですけど、あなたには関係無いことじやないですか」

「ははは、何ですかその態度は。この唐変木がつ！」

男は哄笑すると凄味のある声で言い放った。

「は？」

「兄さん、人の情を無下扱つちやあいけやせんぜ」

「……ああ、そうですね。すいません」

明人は素直に謝罪した。絡まれるのは御免だつたし、奇妙な男の言い分は理に敵っていた。

「いやあ、すいませんねえ。つい熱くなつてしまいやして。これはあつしの親切心なんですがね、本当大丈夫ですか？」

「ええと、何かあなたの草履の音が怖かつたらしくて」

「ははつ、そいつはすまないこととした。この格好は気に入つてしましてね、止むに止まれないんでさあ」

「へえ」

明人は、時代劇の町商人風の変な喋り方をするこの男をラリつた

犯人かと思つていた。そうは見えても言動から良識は持ち合せていそうのが不思議だつた。

好き好んで関わりたいわけではないが。

「そんな暗い顔しないで、元気出してくだせえ」

男は取つ付きやすい笑顔を浮かべ藍に話しかけた。

「あ、え……」

藍はおどおどとするばかりで言葉にならない。

「心配しなさんな。何もしゃしません」

男は微笑んだ。俗っぽい。それゆえ親しみ深い。そんな笑いだつた。

「すみません、」迷惑お掛けして

藍がおずおずと謝る。

非があるとすればこの男であつて、藍ではない。

明人は藍の態度に苛立ちを感じた。

「冥い夜は誰だって怖いものでさあ。」の黒を見ていると、厭なモノが蘇つてきますからね

「そう、ですね」

心の中を見透かしたような発言に藍は男から目を背けた。

「ほんならもう行きますわ。あつしは縁つてヤツを大事にしてるんでさあ。今宵の出会いも何かの縁。また何処かで会つたらよろしく頼みます」

最後に明人の肩を叩いて男は夜風に衣を靡かせ歩きだしそうとした。

「あの、お名前を伺つてもよろしいでしょうか？」

意を決して藍は質問した。

「おつと、あつしとしたことが名乗りもせずにベラベラと。姓を九鬼、名を政孝まさたかと申します」

九鬼は答えて優雅にお辞儀した。和服なのに西洋で紳士が淑女にするようなお辞儀で、なんとも滑稽だ。

「ふふ、九鬼さんですか。私、神原藍と言います。」つちは兄の明

人です」

それがおかしくて藍は笑みをこぼした。

「なんど『ご』兄弟でございやしたか。あつしはてつきりカップルかと」

「そ、そなんですか」

「このまま禁断の恋に走れるぞ。良かつたな藍」

九鬼の勘違いにぎこちないながらも笑いが起ころ。その波に乗つて明人も釣り餌を垂らしてみた。

「何がよ！」

見事藍が釣れた。純粹な良い奴である。

「ははは、藍さん元気になりやしたね」

「あ……、はい」

九鬼に言われて藍はいつもの調子を取り戻したこと気に付いた。

「ありがとうございます。九鬼さん」

藍と明人は2人してお礼を言った。張りつめた空気を破つたのは他ならぬ九鬼であったから。

九鬼はそれを見て、柔軟な笑みを浮かべた。

「なんのなんの。困ったときはお互い様、でござんしょ？」

「何だかご立派ですね」

藍は心から感心しているようだ。

明人も今どきこんな人は珍しいのだろうと思つ。だが九鬼をどことなく胡散臭く思つてもいるのだった。

「そう思つていただけるんなら、嬉しいことであ。さあて、そろそろお暇いたしやせんと」

九鬼は明人たちとは反対の方向へ歩き去つた。しばらくは小気味よい草履の摺り音が聞こえていた。

藍にとつて今度は恐ろしい音ではなく、名残惜しい響きに感じられた。

「変わった人だつたな」

九鬼を見送り、再び家に向かいながら明人が言つた。会話は自然と生まれていた。

「だね。私最初は時代劇ヲタクかと思ったよ。でもなかなかイイ人じゃなかつた？」

「なんというか義理と人情の男の気配が漂つてたな。けど、何か匂う」

「やっぱりそう思うよね」

明人の言い分に藍も異論はなかつた。

果たしてただの通りすがりがあれだけ親身になつてくれるのか。藍はこんな事を考える自分に良心の呵責を覚えた。だがそれ以上にまた犯罪に巻き込まれるよりはマシだと思っていた。

「氣を付けるよ藍。お前単純だから、イイヒトダナ」とか言つてついていきそうで心配だよ」

「そんなバカじゃないもん！」

子供っぽく頬を膨らませる藍に明人は思わず吹き出した。

「ブツ！ くくく」

「何よ！ 何がおかしいっていうの？！」

途端に不機嫌になつて藍は明人に食つて掛かつた。

「い、いや…、おまつ、クツクツ」

「このバカ兄！ いい加減に、しろーつ！」

「何ぞつ、イデッ？！」

明人の尻に強烈な蹴りが炸裂した。

その細い脚のどこにそんな力があるのか。あまりの痛みに跳ね回り、訳も分からず笑いたくなつた。

「年末に何度も叩かれてる人達の気持ちがよく分かつたよ

「私の気持ちを分かりなさいよ」

藍はまだご立腹だが、氣分が昂揚して怖くなくなつたらしく1人でスタスマと歩いていつてしまう。

「ちよつ、置いてくな。危ないぞー」

シカト。

まあ、いい。家はすぐそこだ。明人には黙つて追いかけるしかないようだ。

2人はそのままアパートに入った。

怪しげな男であつたが九鬼との遭遇でイイ感じになつていった明人のテンションは萎みだしてきた。

エレベーターで登つていく間、明人の心臓は早鐘を打つていた。もうすぐ誰もいない家を藍が見る。そう思つと緊張せずにいらぬ。綾瀬が何か仕掛けを施してくれたようだが、実際どんなもののかは教えてくれなかつた。

綾瀬の不慮の死がこれからに多大な影響を与える今、問い合わせ良かつたと後悔した。遂にエレベーター内部の電光表示が8階を指し止まつた。

「変わつてないね」

明人の心配をよそに藍が廊下を見てのほほんと呟いた。

「廊下は変わらんだろう」

そつか、とやや天然っぽい返答がもらえた。どうやらサプライズパーティーというのを本気で信じているらしく、心ここにあらずという様子である。

「何でカギ閉めるの？」

明人が家のドアを開けようとカギを挿した。

中に親がいると思つてゐる藍には変な行動に見えたのだ。

「まあ良いじゃないか。さあ、どうぞ」

「うん。ただし、まあ……？」

明人がドアを開けてやると、藍は元気良く叫ぼうとした言葉を絶やしてしまつた。

「どうした？」

形式的に聞く。中には誰もいない、明かりも無い、気配すらない。

「電気付いてないよ。誰も居ないし。どうこう」と、お兄ちゃん?」「

無人の闇が漠然と広がる我が家。

様々な感情が交錯した表情で藍は振り返った。

「……分かるだろ。言わせるなよ」

サプライズ、サプライズと連呼しては意味がない。父さん母さんは気合いで入ってるんだよ。そういう意味だ。

「あ！ なるほどね」

藍もそれを理解した。靴を脱いで上がり込む。

明人もそれに続く。床が異様に冷たく感じられた。

藍がリビングのドアに手を掛けた。

明人は廊下の電気をつけながら、固唾を呑んで見守る。

力チャヤリ。

藍がリビングに入る。

何も起こらない。明人にとっても、藍にとっても。

「お母さん、お父さん？ ただいま~」

藍はリビングの電気をつけようとした。

破裂音、破裂音。

「きやあ！？」

「藍、お帰り！」

両親がクラッカーを鳴らして藍を出迎えた。

藍はありつたけの喜びを表現し、両親に抱きついた。両親も藍の努力を褒め称える。

頭を優しく撫でられて、藍は自分の努力が実ったことを実感した。親元を離れ異国之地で、長い時間を過ごすのは楽しいけれど、やっぱり辛い。だが、それを補つて余りある愛情そして達成感が藍を癒した。

そこは常闇。藍は一人、笑い、泣き、歓喜する。

藍の周りをひらひらと嘲笑うかのように蒼白い《幻象》^{フエノミナ}の蝶が数匹舞っている。

あまりに憐れな光景に明人は言葉を失つた。

駆け寄つて眼を醒ませてやりたいが、その気持ちより目の前で繰り広げられる1人芝居への恐怖が強い。

「サカキへのサプライズだよ」

藍の周りに浮いていた蝶の1つが明人の前にやつてきた。それは姿を変え、少女の身体を真似た。

「綾瀬……」

綾瀬はリビングの入口に立つており、その後ろでは藍が1人楽しそうに漆黒と話している。

「心配しないで、妹ちゃんは苦しんでないから。最高級の幻覚よ」説明する綾瀬を良く見るとつすら透けていた。彼女は明人だけに見える幻覚である。

これは本人ではない。粗悪に造られたガイドだった。

「両親はすぐに旅行に出かける設定よ。サカキは妹ちゃんに話を合させてよ。多少融通は効くけどあまり突っ込んだ話をするとエリュシオンが壊れるから」

プログラムされたことを言い終わると綾瀬の幻は霧散した。

同時に奥で藍が均衡を保てなくなつてグラリと揺れた。

何かを考える間もなく明人は駆け出して、藍を支えた。

藍の頭には例の蝶が止まって、ゆっくりと羽を開閉していた。

「だ、大丈夫か？」

「へいき、ひょつとめまいがしたらけ」

藍はとろんとした遠い眼をしているし、泥酔しているかのようだ。

呂律も回つていない。明らかに異常をきたしていた。

「藍、しつかりしろ！」

だいぶ説明が足りないのでどういう状態なのかさっぱり分からない。先の痛々しい再会は意味があつたのだろうか。

あれが綾瀬の享楽心からきたお遊びであるなら質が悪い。帰つてきたらお灸を据えてやろう。引っ掛かることはあれど、明人は全面的に綾瀬を信頼していた。

「安心しろ。すぐに良くなる」

明人は朦朧としている藍を抱き抱え、ソファーに寝ころばせた。藍はしばらく天井を眺めてぼーっとしていたが、やがて規則的な寝息を立てはじめた。

「ふう、一体何だつて言うんだ」

明人は藍の向かいに座り様子を見ていた。

しばらくして綺麗というより妖しい蝶がドロリと形をなくし、藍の身体に溶け込んだ。

「これ、大丈夫かよ？」

空気が緊迫した。明人の心配は杞憂に終わり、結局藍は苦しみもしなければ、表情も変わらない。すやすやと穏やかな眠りを満喫しているようであった。

明人はそれを見た途端どつと疲労を感じて眼を閉じた。

長過ぎるし、濃厚過ぎる24時間だった。まだ経つてないかもしない。今何時なのか、正直時計を見るのも億劫だ。

安らかな睡魔に誘われて、明人は深い眠りに落ちた。

第10話・宥和 - approach your heart

明人は、自分以外の出す生活音で眼が覚めた。

それは長い間無かつたことで、常々感じていた微量の孤独を和らげた。寝ぼけ眼でソファーから身を起こし音のする方を見やる。窓から差し込む陽光の中、藍が掃除機を引っ張つて活発に動きまわっていた。

「おはよう

掃除機に負けじと多少ボリュームを上げて挨拶をした。

「あ、お兄ちゃん。おはよう」

藍は朗らかに笑つて返した。顔色も良く健康そうだった。昨夜のこととはあまり影響が無いようで安心できた。

「大丈夫か？」

「何が？」

「時差ボケとかしてないかなって「割と自然に訊いたことだつたが、藍は呆れたと「うん」と溜息をついた。

「もう帰つて1週間だよ。学校にも行つてゐし、治つたに決まつてるじゃない」

「……ああ、そうだな。寝ぼけてたよ」

「しつかりしてよ。お母さんたちいないんだから」

それを聞いて驚かないようにするのは苦労した。ああ、そういうえば綾瀬の幻影がそんなことを言つていたな、と思い出した。

両親の不在という巨大な違和感は綾瀬によつてうまく嚥下されたようだ。明人は安堵の溜息をついた。

「あ、そうだ。遅いから1人で朝ごはん食べたりやつたよ」

藍はテーブルにある明人の分の皿を指して、掃除を再開した。

「朝から働くなあ

心配事が一つ消え、明人は時計を見た。

「もう9時か。俺にしちゃ遅い。いてつ」

慣れない姿勢で寝たせいか、身体の節々が痛い。しかも昨日から着替えていなかつた服が気持ち悪い。一日連續ソファードで寝たこともよろしくない。今夜は自分の部屋で寝ようと、ぼんやりと考えた。生ぬるい日常の拍子抜けしたような空気を噛みしめながら、明人は自室に向かつた。

「なんじゃこりやー！」

部屋は荒らされ放題。本とかだけならまだしも、タンスやベッドまで動いていた。朝からハイになるくらいの乱雑ぶりだ。

明人は昨日の出来事を回顧してみた。

ドアが開かなかつたのはこいつらがバリケードを作つていたからだと氣付く。そして、この部屋を占拠していた人物も思い出す。

「綾瀬め。好き勝手してくれたな」

この反応を見て大笑いしている様が眼に浮かぶ。

今もそこにいるのではないか、という錯覚が脳裏をよぎる。もちろん部屋を見ても、スラムを彷彿させる荒れようしか目に入らない。明人は幻想を振り払つて、片付けを始めた。もう存在していない少女のことを想つても仕方がない。

「案外未練がましいよな、俺。気にしないのが特技だったのに」

結局のところ藍の部屋の掃除も合わさつて、家中大掃除になつてしまつた。

その後シャワーで汗を流し、すっかりきれいになつた家で明人はくつろいでいた。

最終的に11時という中途半端な時間になつてしまい、気は進まないが藍が作ったものだからと朝食を頂いていた。

ベーコンエッグとトースト。どっちも冷たい。

藍は明人が掃除している間に買出しに行つて今も不在。

「三食はキチンと摂りたいんだがな…」

朝だからと軽めにしてあつたのが幸いで、完食して腹五分目といったところか。

食べ終わって窓の外を眺めた。空は青くて空虚だ。藍のいない家は静かで、鳥の騒ぎも聞き取れる。

「本日は晴天なり。何して過ごそうか。とりあえず小夜の情報が欲しいな。あと武器も」

独り言が尽きない。その中で、「小夜」と呼んだことが恨めしい。

これもやはり何らかの繋がりがあった所為なのか。記憶はまだ黒く塗りつぶされている。思い出さないほうがいいのかかもしれない。

「お兄ちゃん！ 变な手紙がきてるよ」

遠い空を眺めて物思いに耽りかけた矢先、藍の声で現実に引き戻された。

帰ってきた藍は差出人不明の封筒を持つてきた。ドラマ以外でもあるもんだなと思つ。更に住所も無ければ、切手も無い。どうやって届けたんだ。

「不気味だな。コーヒーのないカフェオレくらい」

「それミルク」

「そう、ミルク並みに白い封筒だ」

口ではお茶らけて見たものの、脅迫状だつたらどうしようかと悩む。小夜あたりからの。

「そんなことどうでもいいから開けてみてよ」

何も知らない藍に急かされるまま明人は封を千切つて、中にあつた手紙を引っ張り出す。中身も味氣ないもので、短い文章と差出人の名前だけが書かれていた。

それを見た瞬間、明人は手紙を藍から遠ざけた。

「どんなの？ 見せてよ」

「俺宛だ。それに見たらチーンメールを友達に送らなきゃならん」

「アナログのチーンメットあるの？ ま、しょうもない悪戯ね」

藍は明人の言葉を鵜呑みにして、興味を失つたらしかつた。とうより、薄々そんな物だろうと気付いていたのかもしね。そして藍は買つてきたものを冷蔵庫に入れたりする作業に入つた。

うまく誤魔化せたはずだ。

明人は自分の部屋に戻り、手紙を見直した。

『迷惑なのは分かっています。それでも会つて話したい。駅前通りにあるドアーズという喫茶店で1・2時に。霜崎遙』

脅迫状より恐ろしい殺人者からの呼び出しであつた。

昨日の今日で、あまりにぶつ飛んだ提案である。不条理過ぎて思考が止まる。

「何考えてやがる。行くかボケ！」

明人は手紙をグシャグシャにして床に叩きつけた。興奮して変な汗が出た。

会えれば感情を抑えられる自信が無い。暴力沙汰になつて補導されでもしたら、親が行方不明だと知られてしまつ。それで藍の幻覚が解けたら元も子もない。それはなんとしてでも避けなければならなかつた。

「くそつ！」

今自分はどんな顔をしているのだろう。

沈痛か、憎悪か、はたまた未来への諦観か。

そんな顔を藍に見せたくないの、明人は部屋をうろついた。

歩きながら幻象とは一体何なのだろうか、と考える。狂つているとしか思えない。しかし、綾瀬のことを悪く思うのが憚られてすぐには邪な思案は沈静化された。同時に頭も冷やされていく。

「……まで、これはチャンスかもしれないな」

藍を護るには力が足りない。その不足は満たしようも無く、どう足搔いても人の身で、しかも一高校生には到底不可能だろう。

綾瀬は殺された。他ならぬこの遙に。

しかし、それが弱味だ。負い目だ。人間的な感情が遙にあればの

話だが。だが自分で殺しておいて、会いたいと言つてくるのがその証拠とも思える。

明人はしわくちゃの手紙を拾い上げた。決断は早かつた。

「藍、ちょっと出かけてくるな。昼飯も食つて帰る」

「え？ あ、うん。分かった。気をつけてね」

藍が手を振つて見送つた。

「ちゃんと戸締りしどけよ」

「はーい」という元気な返事に背中を押され、明人は家を出た。マンションの外に出ると蒼空にはちじれた雲がまばらに浮かんでいた。家にいたときには見えなかつたものだ。

あれは、不確定因子なのだろうか。集まれば翳りが生まれる。消えれば透き通る蒼が現れる。

空を見上げて明人はそんなことを思つた。

約束の12時。

ドアーズというのはわりかし趣味のいい喫茶店と評判だ。この辺の学生なら知らない奴はそうそういうだろつ。大きくはないが、落ち着いた雰囲気で店内はクラシックミュージックが流れている。ドアがいっぱいあるわけではない。

明人が店に入った時、遙は奥の方の席でガラス越しに人の往来を眺めていた。どこか物憂げな雰囲気が漂つてゐる。

間もなく遙は明人の気配に気付き、片手を挙げて場所を示した。今日の遙の出で立ちは、ゆつたりとした白いワンピースと黒のジヤケット。

今までの印象からもつと動きやすい服かと明人は考えていたが、なんともおしとやかな感じである。

明人がこの状況で不謹慎にもカワイイと思つてしまつのも致し方ないくらい、イイ感じの女の子だ。

もう最初に出会った時の可愛げのある普通の少女では決して無い。あれが演技であつたなら相当巧者である。

「で、何の用かな？」

席に座るなり、明人は尋ねた。

酷薄そうに言つたのだが、遙は顔色一つ変えない。そのままもはや定着した抑揚の無い声で謝り、少し身を引いて遙が頭を垂れた。

「……本当にすいませんでした」

この無防備に差し出された頭をテーブルに叩きつけてやりたかった。

「それだけを言うためにここに来たんじゃないだろ？」

明人は顔の筋肉が強張らせながら聞いた。謝罪なんか聞きたくなかった。

「……変に思われるかもしませんが、残りの半日私と付き合つてもらえませんか？」

「は？」

明人は話がおかしな方向に流れていきそうな気がした。

「平たく言えばデートしてください、です」

恐ろしく前置きに適つた要求を遙は真顔で言い切つた。

「つまり、お前と綾瀬のように話したり、買い物したりしろということか」

言いながら、明人は予期していた通りますます自分の顔が引きつるのを感じた。

「それが罪滅ぼしになると思つていますし」

裏があるに決まっている。明人は直感した。そんなことを本気で思つているのなら脳みその所在を疑う。

明人は握り拳を震わせて、じつと憤怒の獣が鎮まるのを待つた。

一方、遙は顔を上げ冷ややかな眼差しで明人を見ていた。

この険悪な空気の只中にコーヒーを2つウェイトレスが運んできただ。ドアーズなのにコーヒーである。

彼女はできるだけこの客たちを刺激しないようコーヒーを置いた。

遙が軽く会釈したのに応じて、彼女はそそくさと逃げ去った。

「いいぞ」

明人は唸るように言つてコーヒー カップを引っ掴み、中身を飲み下した。ブラックなのだが苦味は感じない。色のついた冷水と同じだ。

「ありがと。あなたにそんなに想われて彼女幸せね」

「言つたな。もう済んだことだ」

明人は苦しそうに呻いた。苦渋の決断だったのは遙の眼にも見えていた。

遙は胸が圧迫される感触を覚えた。この期に及んでまだ罪悪感を覚える自分に苛立ち、それを押し流すためコーヒーに手を伸ばす。私は復讐者だ。手段は選ばない。そう、自分に言い聞かせる。シロップとミルクを入れたコーヒーはなおも根源的な苦さを持つていた。

仮初めのカッブルが、欺瞞に満ちたスケジュールを決めている最中、事件は起きた。

ぐぐもつた悲鳴が聞こえたかと思うと、爆発に近い破碎音と振動が喫茶店を揺るがした。

2人は必死に眼を瞑つた。

「おい、なんだよ……あれ？」

眼を開けると明人は言葉を失つた。向かいに座る遙も眼を見開いている。

日光を反射しダイヤのように輝くガラス片がスローで舞い散つていた。ある意味幻想的ともいえる光景に一際アクセントを与える物體がある。

黒のワゴン車が店内に突っ込んでいるのだ。

カウンターとの衝突でボンネットが歪に潰れている。

「うわあああ！？」

客、店員、野次馬、その全員が状況を理解できない内に、運転手らしき男がエアバッグを押しのけ半狂乱になつて車を飛び出してきた。

「こっちょ

車からはヤバげな液体が漏れ出しており、明人がそれが何たるか思いつく暇もなく、遙に車が突入してきた窓から通りに連れ出された。

数テンポ遅れて他の人たちもバカのようにわめきながら散り散りにドアーズから湧き出してゆく。

明人たちが脱出して10秒もしないうちに、車は地響きと熱風を放つて爆発炎上した。

明人らは爆風が立ち尽くす身体を揺らす程度だったが、避難が間に合わなかつた人々は見るに耐えない有様であつた。

黒煙を伴い荒れ狂う業火が店と逃げ遅れた人々を喰らつてゐる。服に引火し転げまわる人。爆発の衝撃で地面に投げ出され、ろくな抵抗もできず高温に晒される人。怪我人を助けようとしている者もいれば、しきりにケータイで撮影している者もいる。

立て続けにまた爆発が起きた。先の物より大きく、どうやら店のガスに火がついたらしい。

熱風が火葬場の臭いを運ぶ、この地獄絵図に明人はただ驚愕をもつて突つ立つていた。燃え盛る業炎に視神經が悲鳴を上げようと、眼を離すことはできなかつた。

その隣では、遙が店とは関係ない場所に眼を光らせている。

遠巻きに事故を見物している輩などではない。遙は彼女にしか分からぬモノを探していた。

「榎原くん、大丈夫？」

遙に身体を揺すられ明人はようやく紅い呪縛から解放され、眼を擦つた。

「ああ、すまん。こんな事故は初めてだつたんで」

「事故なんかよりタチが悪いわ。近くに『幻象』^{フエノミナ}がいるの」

「じゃあ今のもソイツがやつたのか？」

「たぶん。普通こんな真昼間に暴れるヤツなんてほとんどないんだけどね」

「それで、ソイツは今どこに？」

明人も炎の残像が残る視界を見回してみるが人間と幻象の区別がつかない。かすかに耳がサイレンの音を捉えただけだ。

「それが……場所を特定できないの。気配が霧みたいにこの辺一帯に広がってるだけで」

「なんだそりゃ」

明人はがっかりして、人だから抜けた。遙もその後を追う。ここにいても得することはないと判断したからである。本当の彼女ではなさそうだから。

人は野次馬精神豊富なようで、皆事故のあつた方へ引き寄せられていく。

その流れに逆らい明人らは歩いた。もうドアーズは見えなくなり、振り返れば黒煙が立ち上っているのが見えるだけだ。

「好奇心は猫をも殺す」

明人は思いついたことわざを口に出してみた。

「それがどうかした？」

「死にかけた俺らから見たらあいつらはよっぽど命知らずに見えるな」

「そうね。また爆発が起きないといいわね」

「まったくだ」

明人は遙に一応他人を思いやる心があることを知った。ただ話を合わせてきただけかもしれないが。

「さっきの幻象の方はどうなってる？」

「気配が半径5メートルくらいの円状に広がって、私たちを追つてきてる」

遙は意識を集中させるためか眼を閉じ、しばらくして答えた。

「それしか分からぬのか？」

「ごめんなさい」

遙は戸惑っていた。幻象の居場所が分からぬなど未曾有の事態である。

遙の索敵能力は幻象の位置を平面的に捉える。漁船のソナーみたいなものである。距離は掴めてもその幻象の強弱など、その他の情報は全く入つてこない。実際に会つまでどんな奴か分からないのがネックである。

肝心の『起源』^{オリジン}についても同様で、それゆえ遙は復讐を果たせないでいた。

さらに使用には意識を集中させる必要があり、他の行動と平行して行うことはできない。慣れでいくらかマシになつたが、やはり動きは鈍くなってしまう。

巨大な欠陥の代わりに有効範囲だけは広大で、やろうと思えばこの緋森市全体、あるいはそれ以上の範囲をも見ることもできた。

明人が何も言わず先に歩き出す。

遙は何とか力にならうともう一度精神を集中させ襲撃者の位置を割り出そうとした。

歩みを止めた遙の頭上に、ここぞとばかりに巨大な影が覆いかぶさつた。遙は索敵のため反応が遅れてしまう。見上げればビルの側面に架かつた看板が降つてきていた。

遙の身体能力ならかわせないスピードではない。しかし遙の足は凍りついたように動かなかつた。焦燥と驚愕が生む恐怖で遙は眼を見開いた。

「危ねえ！」

それは何たる偶然だろ？

明人は遙の頭上の看板が不穏な動きをしているのを目撃していた。ついてこない遙を確認するため、振り向いたときに視界の端に蠢いたのである。

明人は自然と地を蹴っていた。そこには一切の躊躇も氣後れも無

い。

次の瞬間、明人は遙と一緒に歩道に転がっていた。

地面が揺れる揺れる。金属が歪みねじれて潰れる轟音が耳を撃つ。
「はあ……はあ、怪我、してないか？」

「う、うん。大丈夫……」

明人も遙も心臓が飛び出さんばかりに跳動していた。抱き合う格好の2人は互いにそれを感じることができた。

明人は無事を確認すると、密着状態だった遙を腕から解放し座り込んだ。チラリとビルを仰ぎ見る。屋上に小さな人影を一瞬捉えたが、その姿はすぐに焼き消えた。

「ほら、立てよ。騒がしくなるし、もう行くぞ」

周囲にはすでに野次馬共が集まってきて、不幸な事故から生還した2人を好奇の目で見ていた。

遙は差し出された明人の手を掴み、立ち上がった。

明人はそのまま手を引いて、何か急くように大またで歩き出した。

「どうして助けたのよ。あなたにとつて私は仇でしょ？」

身動き1つできなかつたことへの悔しさが、遙にお礼よりも憎まれ口を叩かせた。

「ああ、その通り。俺は別にお前が死んだって構わない」

放たれた低い声は案の定というべきか、予想外というべきか。ああは言つたものの遙にとつては後者である。

遙はカチンときて明人の手を振り払つて逃げようとした。

寂しさを癒すために近づいたのに、憎悪の籠もつた呪詛のような、荒々しい刃のような言葉を吐きかけられるなら孤独のまままでいい。

しかし、明人は放さない。逆に遙を強引に振り向かせた。

「でもな、これ以上俺の周りで人が死ぬのは御免だ。前にも言つたがな」

遙は明人の眼を見た。彼の眼は自分が直面している不条理な運命

に深く悲嘆していて、それでもなお抗おうとする強靭な意志が宿つていた。

「私は……人間じや、ない」

遥は弱弱しい最終防衛線を張った。

明人は容易くこれを突破した。案の定というべきか、予想外といふべきか。遥にとつては前者であり願望であった。

「いや違うね。どれだけ超常的でも、お前の本質は人間だ」

遥の中で滯っていた濁みが浄化され、昇華された。

それは遥が常に望み、常に叶わずして心を冒されていた病。『幻象』だけど人間として接して欲しいという願望。

「うつあああ……！」

遥は感情を抑えられなくなり、声をあげて泣いた。明人の胸に顔を埋めながら。

明人は何も言わない。道行く人が怪訝な目つきで見ようとも、ただ遙の滑らかな長髪を撫でるだけ。冷たい光を瞳に宿しながら。

明人は初めて会ったときの遥を思い出していた。

あの親しみ深く、ちょっとおてんばな感じの少女は張りぼてではなかつたらしい。実はあれが元来の遥ではないのか。

『幻象』としての遥とこう在りたいと願う遥を対比させると、人は変わるんだなという、虚しさのような感情が生まれた。

場違いに思えるその感情はすぐに消滅することとなつた。明人はそれを期に遥を抱きしめてみた。

遙も抱き返してくる。人の温もりといつこに数年感じたことの無いものを全身で享受していた。

そして自分が殺めた綾瀬という『幻象』と同じ気分を味わつていることに気付き、初めて心の底から罪悪感を覚えた。

「気は済んだか？」

「……うん」

「そうか」

近くのベンチで遙が落ち着くまで少し休憩してから、2人は明人の家に向かつて歩き出した。

遙の涙で濡れた服のまま出歩く氣にはなれなかつたし、遙もそんな調子ではない。

遙は泣きはらした目を隠すためかうつむき加減で明人と平行歩いている。時折ヒックヒックとかすれた音を出しているのが憐れに見える。

こういう時の接し方が分からぬので、明人は言葉少なになりがちだつた。ほどぼりが冷めるにつれて妙に意識してしまつているものもあるのだろう。

しかしそつとしておぐのが一番だと考え無闇に沈黙を破ろうとはしなかつた。

「着いたぞ。お前もくるよな」

いつの間にかアパートの前までやつてきていた。

遙を連れ込むのは綾瀬に対して後ろめたさを感じる行為であつたが、ここで見捨てるわけにもいかず聞いてみたのだった。

「私なんかが上がつてもいいの？」

遙は控えめに質問に質問で返してきた。

どちらかといえばクールな遙がいいので、明人は早く立ち直つて欲しかつた。遙を籠絡して戦力に加えることが今回誘いに乗つた主な目的だ。

憎悪から生まれた作戦だつたが、今では邪気が抜けてしまい酷く扱おうという気持ちも消えていた。抵抗されなければな。

「ああ。遠慮することは無い」

エレベーターに乗り込むと、すぐに8階に到達した。

まつすぐ自宅のドアへ向かい、鍵を開けようとしたが、遙に止められた。

「ちょっと、ちょっと待つて。私ひどい顔してないかな？」

妹がいると教えたので、泣いた跡を見られるのは嫌であるらしい。

「んー、大丈夫だ」

見られても藍なら空氣を読んでスルーしてくれると思つ。明人は率直な感想を答え、鍵を開けた。

「そう。良かつた」

遙も安心したようで、明人について家に入った。

明人は玄関に入るとすぐ違和感を感じた。
何がが違う。なんだ、なんのことは無い。藍の友達のものらしき靴が並べてあるだけだ。

明人はそんなものに気をとられたのが馬鹿馬鹿しくなつてさつさと上がつた。遙も後に続く。

「ただいま」

「お邪魔します」

「おかえり。早かつたね。およ? もしかしてその人が例のカノジョさん?」

藍の楽しそうな言葉は明人の耳に届いてこない。全神経が視覚にまわっていた。藍の向かいに座る少女に。

「こんにちわ。お兄さん。お邪魔してます」

例のゴスロリ服ではない。あの夜の禍々しさも感じられない。それでも、そこに藍と一緒にいるのは紛れもなく森谷小夜、その人であつた。

例え瞬きのように短くとも、平穏は大切にな。
禍福は波のようにやつてくる。

第11話・契約 - can - t break(前書き)

can - t break ≪破りえぬ≫ の意味

第11話・契約 - can't break

小夜を見た瞬間、明人の呼吸は止まった。身の毛がよだつ。昼食を抜いてしまったことによる空腹さえ感じなくなった。あの月夜の悪夢が目の前に実体化しているのだ。

記憶の中より短くなつたが灰色の髪と真紅の双眸は変わらず、これといった差異は禍々しいあの衣装に身を包んでいないことだけだ。そんなちょっとした事で恐怖は拭えない。

明人は過去の自分がしたように、今この時を塗り潰したくなつた。

小夜はそんな明人を見ていなかつた。矮小な人間に抱く危惧など道端の小石に対するそれと同程度しかない。

その瞳には明人の後ろに立つ遙しか映つていない。

何故コイツがいる。どうして明ちゃんと一緒にいる。『復讐の女神』の名を冠する『幻象』にして忌むべき裏切り者。高慢にも起源、ひいては他の幻象に仇成す反逆者め。

だが今は行動を慎まなければならない。コイツは憎たらしくも強大な幻象であるのだ。

小夜は恐怖と敵意を押し隠しつつ遙を見上げた。

そうしているとあるうことか遙は小夜に微笑みかけてきた。その笑顔が何を示しているのか、考えれば考えるだけ混乱してしまう。小夜は気まずくなつて視線を藍に戻した。

「今ニュースでやつてたけど、駅前でいろいろ事故があつたんだって。それでお兄ちゃん大丈夫かなつて話してたところよ」

藍がのんびりと話す。無知ゆえにさぞ幸せな心地なのだろう。

「あ、俺たち実はその現場にいたんだ」

言いながら明人は不思議に思ったことがある。

小夜は事故のとき家にいたらしい。なら屋上にいた人影は一体誰なんだ。

「えええ！？ 怪我とかしてないよね？」

それを聞いて藍の態度が豹変した。いさかオーバーではなかろうか。

「ああ。この遙のおかげで九死に一生を得た感じだ」

明人は後ろに隠れるようにして立っている遙を向いて言った。遙がこのヤバイ状況を理解してくれるよう願いつつ。

「お邪魔します」

当の遙は穏やかに挨拶なんかをしている。浮かぶ微笑みが眩しい。「ここにちは。あつ！ すいません。座つてください。今飲み物とか持つてきますから」

藍は遙を見るなり自分の粗相に気付き、立ちっぱなしの明人らを座らせようとした。

「いや俺の部屋に行くからいいよ。自分で持つてく」

どうしてこんな状況になつているのか情報も欲しかつたが、明人は撤退することにした。

殺すつもりならもうやつているだろつから、しばらくは大丈夫という推測のもとの決定だ。

とはいっても明人が戻ってきたことで小夜の考えが変わる可能性もある。

それが心配ではあるが部屋で当初の作戦を遙に伝え、すぐに戻つてくれればやはり問題はないはずだ。

ちょうど藍が買ってきたであろうお菓子とジュースを持って明人はこの部屋を後にした。引きざまに小夜を見ると、どこか安堵したような顔をしているように見えた。

明人は掃除したばかりのキレイな部屋に遙を招き入れ、ドアを閉

めた。

早速遙を座らせ、話を切り出した。

「お前アレに気付いたか？」

「あの『幻象』の子のこと？ 気付いたけど」

アレとはもちろん小夜のことである。

それは2人の共通理解になつてたが、遙は特に驚いた様子が無い。明人は不審に思った。

実のところ、遙は明人の傍に他の幻象がいたのを不思議に思つていなかつた。相手をしているのが藍である違いはあれど、自分や綾瀬のようなのがもう1人いたというだけだ。

『幻象』が一所に複数体発生しているのは稀ではあるが。

「アレが学校で話した両親を殺した幻象だよ」

「え？ そ、そんな奴がどうして！？ しかもあんなに馴染んで」 その一言で、状況が遙の思つていたような微笑ましいものではないことを思い知らされた。

明人の落ち着き払つた態度も理解できず、柄にも無く取り乱してしまう。

「さあな。藍は事件の時留学してたんだが、アレはどうもそれを追つていって知り合つたらしい」

当惑する遙に明人は自分の推測を語つた。小夜からの電話のこともあるので、ほとんど確信に近いものである。

「ふうん。なんでアイツが襲つてくるのか分かる？」

『幻象』は個々の発生の起因に固執するものであり、それが行動原理になつてゐる。例えるなら肉体を持つ怨霊みたいな物よね、と遙は自虐的に付け加える。

明人がそんな事はないと否定しようとした。よくは知らないが『幻象』自体はそんな忌むべき存在ではない気がする。

遙は明人を遮り話を進めた。

「だからそれが分かれば解決してあげられるかもしねない」

静かな悲哀に満ちた独白。

その対象は俺なのか、小夜なのか、明人には分からなかつた。

綾瀬が言つていたように遙は《幻象》を憎んで恨んでいて、だから殺そうとしているのだと考えていた。

しかし今のを聞く限りそんな風には思えない。

「お前はなんで《幻象》になつたんだ？」

時間は惜しいが、いい機会なので聞いてみることにした。これからやううとしていることに相互理解は不可欠な要素である。

「今そんなこと話してる場合じゃ……」

遙は扉の方をチラチラ見ながら、困惑した表情を浮かべている。

「大丈夫だ。アレにその氣があるなら藍はもうこの世にいない」

言つていて胸が痛んだ。藍が殺されるなんて想像もしたくない。

「じゃあ手短に話すわ。……私は『ぐぐく普通の女子高生だつた。母と父と弟がいて、みんな仲も良かつたしお金持ちじやなかつたけど十分幸せだつたわ。いま思えば……』

「そんなのつてありかよ」

話を聞き終わり明人は絶望感に襲われた。

例えようもない凄惨なドラマ。話し終えた遙も思い出したことでひどく沈痛な面持ちになり俯いてしまつた。

「余計なこと聞いたらな。『ごめん』

「いいよ。気にしてないし。むしろ、ありがとうだよ」

顔を上げた遙は満足したように苦笑していた。

「『』の話をしたの初めてだけど、共有してくれる人がいるつていいなつて思ったから」

初めてにしては話がまとまっていた。もしかするとずっと誰かに話したくて練習していたけれど、話す機会が無かつたのかも知れない。

「そうか。なら俺も力になれてよかつたよ」

その言葉は本心であつたが後ろめたさもある。

今のは意図せずこれから言おうとしていることが余計に残酷になってしまったからだ。しかし、成功確率も上がったと思われる。少しお近づきにはなれたのだから。

「ちょっと間が悪いけど、お願ひがあるんだ」

明人は本当に申し訳ないという表情で遂に人としての禁忌を切り出した。

「なに？」

「実はアレを、妹の隣にいた幻象を殺して欲しい」

「何を言って……？」

「このままだと平穀無事には過ごせないんだ。俺にはできないし、綾瀬もいない。お前しか頼れないんだよ」

ここで綾瀬の件を持ち出してくるなんて非道だとは思ひ。でもこそ譲れない。

遙も綾瀬と聞いて翳りが見えた。

「それが私に会いに来た理由なの？」

遙の口調が冷気を帯びた。逆に彼女が怒りに燃えているのは痛いほどよく分かる。

「ああ」

ここで嘘を吐いても意味は無い。明人は正直に返事をした。

「私帰る」

遙はポソリと咳き、立ち上がりつてドアに手をかけた。

期待した私がバカだつた。彼は生存の手段としか私を見ていなかつたのだ。奈落に突き落とされたような気分だ。

そこへさらなる追撃をかける一言が明人から放たれた。

「俺さ、たぶんその『起源』^{オリジン}つて奴のこと知ってるわ」「え？」

遙は驚いて振り返つた。

「アレを殺してくれたら、続きを教えるけど。どうする?」

悪魔だ。遙はそう思った。

先ほどの話を聞いて、このタイミングで『起源』の話をする。遙が存在理由そのものの情報をみすみす逃すことなどできないと知っているのだ。

「あなたホントに人間？ こんな酷い事を言つて……」「

「なんとでも言つてくれ。俺と妹が生き延びるためににはこれしかないんだ」

明人自身も苦しくないはずが無かつた。

遙に優しくしていたのはこのためだけではない。本心からの親しみがあつたからだ。

だけれど弱き人間ゆえそんなことは言えない。本音の叫びは遙に届かない。そこには綾瀬という障壁がある。

「私は、誰も殺したくないのに。そう、話したじゃない」

遙は泣きそうな声を漏らしながら立ち尽くしている。

交錯する2つの感情がせめぎ合つていた。『幻象』として『起源』を滅ぼしたいという欲望と、人間としての良心がない混ぜになつているのである。

「知つてるよ。でもあえて言つんだ。他に手は無いから」

明人は遙を追い詰めるように言葉を繰り返す。

そして

「……やつてあげる。でも勘違いしないで、私は自分のためにやるの。お前のためじゃない」

遙の態度は一変していた。

もう明人を人間として見てはいなかつた。『起源』の情報が無ければとつぶに殺されていただろう。そう考へると身体が震えるのを禁じえない。

「ありがとう。……本当にごめん」

「いいから。わざわざ作戦を教えなさい」

実のところ明人が持つて いる情報などたかが知れてい る。
この街に『起源』がいる。その程度だ。

遙にはとんでもない犠牲を払わせるのに、得られる情報の少なさ
に殺されたって文句は言えない。それだけ非道なことをやっている
のだから。

それで自分が死んでも、藍が無事でいてくれるなら……。

第11話・契約 - can - break（後書き）

今回遙の過去バナが省略されますが、別個の話として載せるので
ご心配なく。

「……とまあ、こんなもんだ」

「ふうん。なら、私は取り押さえるくらいでいいんだ?」

「ああ、その間に俺が説得する。聞かないようなら……頼む」

「そ。榎原君もそこまで鬼じやないんだね」

「そりゃあ人が死ぬのは見たくないだろ」

作戦は極々単純かつうまくいけば一滴の血も流れないで済むものであつた。遙としてもそれは望むところで、明人の株の下落も止まつたところだ。

だからと言つて殺人の道具として使われるのはやはり気分のいいものではない。

こんな形で人に頼られるなんて。

そう思わずにはいられなかつたが、『起源』の情報のため我慢することにした。

くきゅう。

緊迫した空気が一時弛んだせいか遙のお腹が可憐らしく鳴つた。この沈黙の中ではやけに大きく聞こえるものである。

実のところ車が店に突っ込んだり、看板が落ちてきたりしたいでこの2人は昼食を食いそびれていたので、致し方ないことではある。

「な、何よ?!

遙はかあつと赤くなつて睨んできた。完熟トマト的な赤さだ。

「いや何も言つてないし、あぶねつ!」

ドアの近くにいた遙は戻つてきて明人に平手を食らわせよつとした。明人の鼻先を掠めたそれはホラーな速度だった。

「まあ、座れや。お菓子なうござにあるぞ」

「ふん」

ふてくされたような態度で遙は腰を下ろし、チョコの袋を開けた。一粒口に入れ、ゆっくりと味わいながら溶かしていく。

「そんなに美味しいか？」

明人はたかがスーパーのチョコにうつとりしている遙に聞いてみた。

「うん」

「ガーナとかのプランテーションで働く貧しい子供達の血と汗の結晶だからな」

「う、なんで今言うのよ」

至福の時を邪魔されぎろりと睨みつけてくる。

また平手が飛んできそなので明人は射程から退いた。
「知識としていいかなと思つて、ん美味しいな。そう思うと人類発祥の地アフリカの味がする」

「なにそれどんな味よ」

一応聞いてくれるあたりノリはそこそこイイらしい。

「デザートの味」

「……あげる座布団ないよ

なるほどッシ「ヨミもこなせるようだ。

「山田め。仕事しろ」

「あ、え、クッショーンならあるけど」

遙が自分の座つていたやつを差し出す。それがどうにも天然っぽくつて吹き出しそうになる。

「い、いや。別にお前に山田役をやれってわけじゃ」

「あんまりにも入れ込んでるみたいだから」

「わかった分かった。そんな意外な一面見せてお近づきになりたい

腹か」

「そ、そんなんじゃない！ バカじゃないの」

そっぽを向いても、チョコはほおばる。

案外かわいい所もあるんだなと、思つて見ていると大げさな音を立てて謎の物体が窓を突き破り、2人の飲んでいたコップを粉碎し

た。

「な、なんだ？！」

明人は腰が抜けかけて立てないでいた。首は動くので見てみると、その物体は歪な形の金属だつた。鈍い銀色の欠片で四角く尖つて当たつていたらただでは済まない。

遙はすでに臨戦態勢で剣こそ出していないものの、狩りをする肉食獣のような雰囲気を纏つっている。

「あのもやもやした気配の『幻象』が近くにいる」

「もやもやつて、ここ8階だぞ。近くつたつて」

もちろん窓の外は鳥が飛んでいるような高さである。

はつとした瞬間立てるようになり、明人は部屋を飛び出した。リビングのドアを開けると田の前に藍と小夜がいて眼を丸くしていた。

「いま凄い音がしたけど、何だったの？」

藍たちも音を聞きつけて見に行こうとしているところだったようだ。

「俺の部屋になんか投げ込まれた」

そう言いつつ小夜を見る。当然の『じとく』状況が分からずポカンとしている。どうやら疑う余地はないようだ。

「なんかつて何？ 石とか？」

「金属片ならぬ金属塊だ。当たつてたら命が無くなるの」

言つていて初めて安心した。本当に危ないと心がけたのだ。

「お兄さん、誰がやつたのか心当たりあります？」

小夜が初めて口を利いた。葉が摺れるような静かな声だ。

「いや、ない。藍は？」

端的に答えて、藍に振る。明人は何となく話したくないような、片意地のような感覚を味わっていた。

「ううん。やつき友達にメールしたけど、こんな帰国のお祝いはやだな」

これはアメリカンジョークなのか。コメントじづらじらしく小夜さえ、苦笑とする始末である。

「あ、あれ？ 变なこと言つたかな、私
どうしたものか。」

「榎原くん。掃除機持つてきて」

微妙な空氣は遙の声で破られ、3人は止まつた時が動き出したよう
にあたふたと戸づけを始めた。

「せつかく掃除したのに今度は窓無しかよ。3日連續ソファで寝る
のはキツイな」

「贅沢ね、平氣よ。私野宿したことあるし」

やはりお腹が減つてゐるようで他の人よりもお菓子を口に運び
ながら、遙は平然と言つた。「このご時勢に女の子が一人野宿など
考えられないことだが。

「たくましいな」「大丈夫だつたんですね?」「へえ」

三者三様の反応が返される。

皮肉つたような明人と心配そうな藍。小夜は興味なさそうである。
もとより遙を警戒しているのである。

居場所が無くなつた明人と遙は予定とは違えどリビングに戻つて
きていた。

現在の時刻は午後5時半過ぎ。秋も深まりつつあるゆえ外はもう
暗くなつてきているが、今宵は雲も少ないので明るい月が拝めそ
うだ。

「小夜ちゃん、暗くなつてきたけど、どうする?」

藍がだいぶ前に灯りの点き始めた街を見て言つた。藍は友人で、
しかも女の子に暗いところを歩かせるのは抵抗があった。

「そうですね……、じゃあそろそろ帰ります」

小夜も頷いて支度を始めた。

明人はそれとなく遙に合図した。遙は当然気乗りしなさそうな顔
をしていたがこればかりはしようがない。

小夜の気が変わつていて元から殺す気がなかつたとしても、確か

める意味で決行するしかなかつた。

「下まで送つてくよ」

「ありがと。お兄さんと彼女さん、お邪魔しました」

「ああ、やっぱり彼女だよね」

小夜は玄関のところでお辞儀して藍と連れ添つて出て行つた。加えて2人とも決定的な誤解をしていた。

「俺達も行くか。彼女さん」

「誰が。アンタなんかと」

小夜の位置は完璧に追跡できた。遙の能力をもつてすれば朝飯前である。

途中藍をすれ違つた時はヒヤリとしたが、遙を送つてているのだと思つてゐるようなので何も怪しまれるはずもない。

今は小夜の後ろ姿を前方に捉え、ひそかに後をつけていた。

どの道を行つてもあまり人影はない。帰宅ラッシュもまだだらう。第一小夜が通る道は昼間はともかく平生から人通りが無い。こうして追つてゐるのもなるべくウチから距離をとるためだ。

「ん……？」

急に小夜が振り向いた。その視界にあるものは明度の乏しい街灯に照らされた寂しい道だけだった。脇は空き地と草むらばかりで人影はない。前方も似たようなものだ。

そのまま直前に明人は直感としか言いようの無いものに突き動かされ、枝分かれした道に逸れていた。

怪しい興奮が全身に染み渡つていた。心臓は高鳴り、たぎる血液を送り出し続ける。身体が火照つていて。

「なに笑つてるの？」

隣にいる遙が怪訝な表情をしている。

自分ではそんなつもりは無いのだが、どうも頬が緩んでいるらしい。

「分からない。一つだけ言えるのは今かなり樂しいつて事」

「変態」

遙は明人の言葉に多大な嫌悪を抱いた。男とは時としてこうこう生き物なのかもしれない、という認識が生まれた。

そういうしている内に小夜は歩き出していた。

「この道はかなり長い一本道だ。俺はこっちから先回りするから、遙は見張つといてくれ。あとケータイの電話は繋げたままにしといて」

つまりはアルファベットの「D」の縦線のところに小夜を挟むつもりである。

「分かった」

このあたりの土地勘がない遙は従うしかなかつた。短く返事をすると、すでに明人は音も無く走り去つていた。

走つていると夜風が気持ちいい。こんな時間に走ることなど万年帰宅部には縁のないことだし。

体力に自信がある方ではないが、交感神経が活発なせいか疲れを微塵も感じない。

ケータイに繋がるイヤホンから時折遙の声が聞こえる。小夜の歩くスピードは先ほどと変わらず、十分に追いつけるものと思われた。

「おい神原。こんなところで何してんだ？」

「ちつ、山下」

反対からクラスメイトの男子が自転車に乗つてやつてきた。思わず障害に明人は舌打ちした。

「どうした。お前ジョギングなんかするようなやつだっけ？」

「たまにはな。思い立つたその1回でやめちまうけど」

「はあ、ダメな奴だな。そういうや昨日だつたよな、藍ちゃんの帰国そんなことはどうでもいいただのキッカケ作りで、山下は本題の藍のことを切り出した。こいつもファンの1人なのだ。」

「ああ。お前に見せるシラは無いってさ」

長くなりそうな気配に苛立ちながら答える。山下のほうは気にし

た様子も無く、あれこれ聞こえうとしてくる。脳内春男が。

イヤホンから遙の声が聞こえるが、どう山下をやり過ぐそつか必死で明人は正確に聞いていなかつた。

「明日は学校に来るよな？ 全校朝礼で帰ってきた生徒が挨拶する予定だし」

「たぶん藍じやないと思つが。そんな練習してる素振りもないし」「そりや残念。けど……」

「しまつた！ 一旦運動し始めたらしばらくは続けないと筋肉的な意味が無いんだつた」

しびれを切らした明人はテキトーなことを言つて話を中断し、走り出した。

「お、おづ。じゃまたな」

呆気にとられる山下の声などもつ聞こえなかつた。

『榎原くん、今どこ？ 私いつ出れば』

「今ディーの頂点だ。小夜は田の前まで来てるし、取り押さえるのもこのまま俺がやる。はあ、手を上げたら攻撃してくれ」

明人は焦りに似た感情に駆られケータイを切つた。

ギリギリ間に合つたようで小夜はまだ通路にいる。

明人は呼吸を整え、また後ろを振り向いている小夜に向かつて歩き出した。

「きや！？」

小夜の肩を突き飛ばすようにして、脇に生えている木に押し付け動きを止める。小夜の手からケータイが落ちたので、それを届かないところに蹴つておく。

一連の動作は自分でも驚くほどスムーズにできたのが何とも言えず嬉しかつた。

小夜は逃れようとして抵抗していたが、その力は《幻象》とは思えないくらいか弱く拘束し続けるのは容易かつた。そして明人の顔

を見るなりもがくのをやめた。

「久しぶりですね。藍ちゃんのお兄さん」

家にいた時の口調そのもので話すのがむかついた。

「黙れ殺人鬼。気安く妹の名前を呼ぶんじゃない。なんで俺の親を殺した？ なんで藍に近づいた？」

肩を掴む手に力を入れると小夜の表情が歪んだが、毅然とした態度で答えた。

「幸せになるためよ」

「ふざけんな！」

感情を爆発させながら小夜を木に叩きつける。ブレークが壊れてしまつたような気がした。

「いたつ、痛いよお」

しばらく続けていると小夜は弱氣になり、呻くだけになつた。それが嗜虐心と復讐心を掻き立てた。自分の変態性に気付かされるものではあるが、さして気にならない。

「俺が受けた痛みは、こんなもんじゃねえ」

呼吸も荒々しく明人は乱暴に小夜を突き飛ばした。小さな身体はアスファルトに転がり、うわ言のように痛い痛いと繰り返した。

「俺の生活を弄くり回して、何が目的だ？ 答えろ、化け物！」

小夜は泣いていた。月明かりの下、紅い瞳から零れた涙が雪のように白い頬を光りながら伝つていく。服も所々破れており、同様に真っ白な肌が見えていた。

なんだか以前見たことのある光景に思えて仕方がない。

『あなたもわたしを虐めるの？』

塗りつぶされた記憶の一片が去来し頭を揺さぶった。生まれ出でる頭痛と共にこの症状の原因である小夜に怒りを覚えた。

明人は泣きじゃくる小夜の腕を引っ張り無理やり立たせた。

『ごめんなさいごめんなさい……』

小夜は俯きぶつぶつと恥々しい謝罪の言葉を垂れ流すだけだった。

こんなだからますます虐められるのだと、明人は思つた。だから歯止めが利かなくなりまた手を上げてしまつた。

「お兄ちゃん！」

明人の手が振り下ろされる瞬間、全身全靈を込めた藍のパンチが明人の顔面を打つた。

明人は獸のような唸りを上げてよろけ、結果小夜を解放してしまつた。

小夜から誰かにつけられてる、という電話をもらつて、藍は家を飛び出した。言い表せない不吉な予感が満ちていた。

多くの場合このような予感は現実となる。今回も例外ではなかつた。

駆けつけてみれば、男（兄）が少女（小夜）を襲つていた。

その光景は藍に陵辱の夜を思い出させるに十分足りえた。そして満身創痍といった感じの小夜を見た瞬間藍の心は決まった。そこからの行動に何の迷いも恐怖も無かつた。

もう誰にもあんな目に遭つてほしくない。大切な友達を助けたい一心だつた。

小夜を背中に隠し、藍は明人と対峙した。

「何してるのよ！　お兄ちゃん！」

藍は怒鳴つた。

なんでお兄ちゃんがこんなことを。その気持ちでいっぱいだった。

「藍、藍か……。は、ははっ、してやられたというわけだ」

明人は空を見上げて囁つていた。それはどうみても異常をきたしているように見えた。

藍の拳はもちろん痛かつたが、精神的なダメージの方が大きかつた。そのせいか、この状況の全てを悟つた心地になつた。

「俺は全部思い出したよ。結局、俺が悪かつたんだな。因果応報つてワケだ」

自虐的に嗤いながら明人は独り言ちた。

「ねえ、何言つてるの？」

藍の声は明人に届いていない。明人は熱に浮かされたような目つきで小夜を見つめて問うた。

「満足か？」

「……」

対する小夜は無言。明人は少し声を大きくして今一度聞いた。

「藍まで利用して、俺に仕返しができて満足かと聞いているんだ」

「……私はそんなの望んでいません」

小夜はそれだけ言つてまた藍の後ろに隠れた。

「はははっ、そうなのか。はづれか、残念だ」

明人の眼が数瞬殺意に染まつた。そして間隔を空けず、右腕を白光と暗黒の空へ突き上げた。それは殺せといつ合図。

通りの暗所から小夜の背中に田掛けて銀色に輝く三つ又の刃が凄まじい速度で迫つた。

「ぐああっ！？」

明人は己が耳目を疑つた。

それは誰一人として反応できるはずの無い完璧な強襲だった。にも関わらず遙の悲鳴が聞こえたのは何故だ？

答えは目の前にある。

「あれ？ 何とも無い……」

妹の、藍の胸には3本の刀身が沈んでいた。

藍はきつく閉じた眼を恐る恐る開けてそれを確認した。ワケが分からなかつたが、すぐに剣は暗がりへと戻つていった。

藍が剣を跳ね返したということは藍はやはり人間である。しかし人間が今の奇襲に反応できるものだろうか。

理由を考える間もなく、暗がりから現れた遙が低い姿勢で刺突を繰り出した。

「やめてっ！」

同じ方向から来た攻撃だったので、藍はすぐに反応し両手を広げて立ちふさがる。

なんで遙さんまで。今夜の事態は藍の許容量をゆうに超えていた。

「無駄よ」

伸びた剣の切つ先は蛇行し藍を避けて小夜に襲い掛かつた。

小夜は身体を引く程度の最小限の動きで3本の刃をかわすと、立ち尽くす明人の背後に素早く回り込んだ。そのまま明人の腕を後ろに捻り上げる。

「全員動かないで」

その静かな、それでいて有無を言わせぬ命令に皆従う他なかつた。遙は苦虫を噛み潰したような表情で小夜に敵意を浴びせていたが、観念したのか三つ又の剣を消し去つた。

「私はこの男に襲われました。木に叩きつけられて、とても痛かったです。それを藍ちゃんに知られたから、今そこの協力者に私たち2人を殺させようとしたのです」

被害者になりきつて小夜は語り始めた。

その内容は脚色されたものであるが、今何か言つたところで現行犯の言い訳に過ぎないのは重々分かつていた。

明人から見た小夜の表情は、ほくそ笑みを堪えたようになつて、これから始まるであろう明人の公開処刑を導いていた。

「警察に電話しようよ」

敵を見るような眼で明人を見つめながら藍が言つた。

「いえ、その必要はありません」

「なつ！？」

明人はこのまま警察に突き出されるものと思つていたので、間抜けな声を上げてしまつた。

「私はよく虐められてたんです。このアルビノの体質のせいです。その頃はもっと酷いこともたくさんされましたし、今日のなんかはどうつてことないです。だから見逃してあげます」

小夜は色素欠乏症である。白い肌と紅い眼はそのためだ。《幻象

『 になつても消えることはなかつた。

明人も思い出していた。

加えて今の証言に決定的な欠落があることも分かつた。

「お前を助けて！」

「お前を助けたのは俺だ」 そう言おうとしたのを小夜の察したのだろう。腕が折れそうなくらい締め上げられた。

「ホントに、それでいいの？」

藍は家族が捕まるのは嫌だが、それで小夜の気持ちが収まるのかも不安だった。

チラリと明人を見る。さっきは何を言いかけたのだろう。本当に自ら望んで犯罪を犯したのだろうか。

怒りと諦めと救いを求める感情がごちゃまぜになつて憐れな顔をしている兄。

なんだか少し、ほんの微々たるものだが、小夜は満足そうな表情をしているみたいに見える。

そして変な剣みたいなものを持つていた兄の彼女。彼女もまた悔しさを前面に押し出した様子が窺える。

私は何か勘違いをしているの？ 何がが引っかかる。錯覚としてもいいくらいの微かな違和感を藍は感じ取った。

「はい。藍ちゃんに知られただことで、彼も反省したはずです。帰りますよう」

小夜は誰にも分からぬように明人の手に紙切れを握らせて解放した。

藍と手を繋いで歩き出す。その時遙に一瞥をくれた。

『 私には盾がある』 そんな脅しが込められているように見えた。

「う、うん。そうだ家まで送るよ。心配だもん」

小夜に言って藍は最後に明人を見た。

「藍……聞いてもいいか？」

幾分冷静になつた口調で明人が尋ねた。

「何？」

「どうして、遙のことが分かった？」

他に聞くべきことはあるだろうが、明人はこれを選択した。

「私ね、お兄ちゃんのことなら何でも分かるから。小夜ちゃんに暴行したのは予想できなかつたけど、話してるときおかしくなつたふりして企んでるなつて思ったの」

これは藍が心に秘めているものだが、もう一つの理由はレイプされた後異常なまでの気配察知能力を得てしまつており、それで遙の隠れていた位置が分かつたのだった。

「仲の良さが裏目に出たのか。それより死ぬのは怖くなかったのか」「どんな攻撃が来るのか藍が知るわけがない。もしかしたら銃とかナイフだつたかもしれないのに小夜を庇つたのが不思議でならない。「もう誰にもあんな目に遭つて欲しくないし、小夜ちゃんは大事な友達だから……」

「そうか」

「あんな目。何があつたんだ。聞きたい。でも手の届く範囲にはもう寄つてこないだろう。」

明人は去り行く2人の背中を見送つた。その寂しげな表情は本人でさえ知らない。

「してやられたわね」

「ああ」

「あなたは唯一の家族の信頼を失い。誰も味方はいない」

「お前は？　お前もいなくなるのか？」

「そうね。さあ、『起源』の情報を教えなさい」

「……この街にいる。正確にはここから東にある山の廃寺だ」

「何で知ってるの、いや、やめとく。それじゃ、もう会つこともないわね。ありがと、そしてさよなら」

遙がいなくなつても明人はしばらくそこにいた。

「……小夜。お前は何がしたいんだ？」

明人は手の中のメモを握り締めて呟いた。そこにあるのは遙に教えた寺の住所だった。

「これが虚無か」

何もない、何も。全ては小夜の思い通りになつて、自分は全てを喪失した。

妹も、親も、綾瀬も、遙も。家にも入れてもらえないに違いない。金も無い。財布は家にある。

これが《幻象》に觸わった者の末路なのか。

「はつ、終わつてたまるか！ 過ぎ去つたことに意味があるのか。未来だけ見れば、いい。今までだつてそうしてきた。だからこれからも

心の片隅に溜まる闇は決意を嘲笑う。

お前はただのガキだ。不都合なものは切り捨てる、自分の信念を唯一無比の完全と思い込んで頑なにしがみ付く、傲慢なガキだ。過去を背負うことの大切さも、高を括る拙劣さも理解しない愚かしい存在だ、と。

燐然と輝く星と満ちていく月に反吐が出来そうな心地だ。顔を撫でる涼風も軽やかな虫の声も気に入らない。何もかも。

第1-2話・破滅 - ruination (後書き)

人もをし 人もうりめし あぢきなく 世を思ふゆゑに もの思つ
身は

第1-3話A・發生 - Nemesis (前書き)

『復讐の女神』^{ネメシス}である遙の過去話。
いつも以上に闇色のお話になっています。

明人から情報を得た後、遙は一旦寝泊まりしている宿に戻った。制服に着替えて、黒いコートを羽織る。コートの中には、様々な武器が隠されている。

『起源』^{オリジン}を狩る準備は整つた。

外は暗く、喧騒も遠い別次元のものを感じれる。

戦場に赴く遙は明人に話した自らの過去を思い出していた。想えど変わらぬ、忘れようもなく絡みついてくる記憶。

あれは高校1年の窒息しそうに蒸し暑い夏のことだった。肺が爛れてしまいそうな風の季節。

私には優しい彼がいて、友達もいっぱいいて、暑さで苛立つ教師達の下らない授業を聞きに学校に行くのも苦にはならなかった。そんなある日、親しかった友達の1人が自殺した。線路に身を投げて、電車に轢かれて。

動機は全く不明。いじめがあつた気配はまるでないし、自殺を考えるまで思い詰めた様子だつて微塵も感じられなかつた。

ただ単に自殺。あまりにも証拠が無く、捜査はテキトーに済ませられた。

それを認めなかつた友達がいた。亡くなつた子の1番の親友。

私も信じられなかつたから、彼女に誘われたときに一つ返事で協力することにした。

調査と言つてもただの自己満足だったのかもしれない。聞き込みも情報収集も中途半端。生半可な正義感を振りかざした挙句得られ

たものは、とある噂一つ。

最近ここからで和服の怪しい男を見るようになったという話だけ。それも『誰々が見たっていうのを聞いた』とかばかりで目撃者に出会えない。

しかし、親友の子はそれを頼りに捜査に燃えた。何が彼女をそこまで駆り立てるのか、私には分からなかつた。

私たちが捜査を抜けても、彼女は一人友人の幻影を探し続けた。

しばらくしてその子は失踪してしまつた。まるでこれ以上踏み込むなどいう警告のようだつた。大きすぎる犠牲を払つて私はやつと事の重大さに気付けたのだ。

怖くなつた私は、彼女が和服の男を追つていったことを警察に言つて、その後この事件に関わるのを止めた。

それで犯人が捕まつて解決すれば良かつた。でも失踪事件は続き、犠牲者は8人にまで上つた。それは全て、私の彼氏を含む友人達であつた。

私は嘆き悲しむこと、姿無き犯人を恨み続けることしかできなかつた。

かつての生活はもう無い。学校は色褪せ、そこにいるのは皆私より幸福な人々だけ。

いじめ？ 病気？ お金が無い？ ましてや恋の悩み？

そんなものはいくらでも解決法がある。私の苦悩に光り輝く道は無い。

闇の牢獄に放り込まれた私を、檻の外から幸せ者が笑覧する。

同情は凶器、励ましは毒。

檻の中、囚われの私にそんな汚物みたいなものが投げ入れられる。彼らは慈悲だと思っているだろうが、ただの偽善に思えてしまう。

中には本当に心から私のことを考えてくれていた人もいたと思う。だけど私はこの悲哀が他者に理解できるはずがないと塞ぎ込み、孤独な悲劇のヒロインに身をやつして拒絕した。

結局の所、私はそんな汚物でも欲しかったのかもしれない。ただ事件で傷つき捻じ曲がった私の心が、慰めが含有する微々たる嘲りを拡大視し、純真無垢な善意から眼を閉ざしただけなのかも知れない。

本当は宝石のように煌びやかで温かいものなのに。

その時点で道は定まってしまった。

感謝の無い不遜な私には、いわれもない誹謗中傷と社会的制裁が加えられる。その内学校のみならず地域にも悪評が伝播していった。災難を被つたのは私なのに、責め立てられるのも私。世の不公平を呪うには申し分ない屈辱だった。

自分のことで精一杯だった私は、その時失踪事件が収まっていたことに気付かなかつた。まるで私の受難を楽しむかのように。

しばらくするとみんな私を構うことをやめたみたいだつた。

平穀無事に2ヶ月が経とうとしていた。事件は未解決だが収束を迎えたらしい気配に人々は安心して、私への興味は削がれたらしかつた。私を見ると嫌な顔をするのだけれど、以前のような暴力的な反応は無くなつていた。

私も暗鬱に過ごすのは嫌だつたから、勇気を振り絞つて教室に戻つてみた。

それまでの私は保健室に入り浸つて極力他人と顔を合わせないようになっていた。

そしたら何のことは無かつた。

最初は話しかけても粗悪な人形繰りみたいにぎこちない反応が返つてきたり、冷ややかな視線に晒された。でも私も必死だつた。日常を取り戻すために。

それが伝わつたのかみんな少しづつだけど私を見ててくれて、クラスに溶け込ませてくれた。

話を聞いてみると事件が残した傷跡は私にだけあつたんじやなかつた。

それは当然の事。だけどその時初めて気付いたのかかもしれない。失踪した友達にも家族はいるし、私以外の友達だつてもちろんいる。

やつぱり私は傲慢に一人で悲劇のヒロインを氣取つていただけ。みんなはそれが気に入らなかつただけなのだ。

被害者はこの街の住人全員。

遅すぎる認識に私は啞然とした。でもこれで、やつと平静な暮らしが戻るのだ。

私は崩壊した関係の修復により一層力を注いだ。私の努力をみんなは認めてくれて急速に世界は色づき、未来を差し示す光がのさばる闇を滅ぼした。

失つたものも多い。戻らないものも多くある。それでも、これから得るものだつて捨てたものじゃない。

今まで通りの世界とはいかないけれど、精一杯前を向いて歩くことはできる。

自分で言うのもアレだけど、悲劇を超克した人間は強いと思う。この世の知らなくてもいい悲しい側面を覗いたから。自分の非力を知ることで他人を認められるようになるはずだから。

季節は巡り春になつた。明るくてあつたかくて幸せな、私の好きな季節。

2年に進級し私はバスケ部で活躍していた。1年の頃から入つていたが事件のせいではしばらく休んでいたので、復帰してからは遅れを取り戻そうと懸命だつた。

日が長いから練習も長い。帰るのはどうしても遅くなつていた。学校の近くの学校最寄の駅から電車で約10分、着いた小さな駅から徒歩5分で家に着く。

駅の近くでふと誰かに名前を呼ばれた気がして、振り返つてみる。けれど誰もいない。微かに懐かしい匂いがした。なおも眼を凝らしていると雑踏の中、思い出となつてしまつた後ろ姿が見えては消えた。

「ユウ……」

知らず知らずの内に私はいなくなつてしまつた彼の名を呟いて、私は直感的に駆け出していた。

離れず追いつけない距離を保つて私とユウは追いかけっこをしていた。

ユウはゆらりゆらりと人垣を抜け滑るように歩いていく。まるで亡靈だ。

私はなかなか追いつけないことに苛立ちながらも、無我夢中に光に集まる羽虫のように彼だけを見て追跡した。

いつの間にか私はユウについて、町外れの廃工場に入つていった。たしか缶詰かなにかを作つていた所だと聞いたことがあつた。そこは私が小さい頃に閉鎖され、未だ買い手があらず淘汰された場所だつた。

どうしてユウがこんなところに用があるのか、全然検討も付かなかつた。

中はひどく暗くて薄気味悪く、ホコリとカビの臭いが鼻を突く。こんな汚らしい場所でも利用者がいるらしい。

壁の至る所に稚拙なラクガキが描き殴られ、スプレー缶やタバコの吸殻やアルコールの容器が散乱している。

ああ、ここは危ない奴らの溜まり場なんだなど理解し、辺りを見回すとユウはもういなかつた。

ヤバイことに巻き込まれるのは嫌だつたが、ユウが巻き込まれているかもしれないのをほつとけなかつた。

ただの善意が再び私を日常の立ち入り禁止区域に踏み込ませてしまつた。

今度こそ戻れない暗流に足を滑らせ墮ちたのだ。

第13話 A・発生 - Nemesis（後書き）

今回から一つの話を2つくらいに分けてアップしようと画策中。
1話アゲルのに時間がかかるといけないので。

そこで見たことは一生の思い出になった。

同廃工場の広めのフロア。天井に張り付いた薄汚れた窓と空いた穴から漏れる日光で部屋は明るい。

大小様々な廃棄機材が並んでいて、終末的な雰囲気を醸している。
「お願いします！ もう1粒、もう1粒だけ柘榴かくろをぐええ！」

声がユウの情けない懇願を聞いてすぐ逃げればよかつたのだけど、私は反射的に物陰に身を潜め様子を窺つてしまつた。

柘榴？ あまり馴染みの無いフルーツ。何の話をしているの？
「何度も来ても無駄だ。金もねえ奴にやれるかボケがつ！」

メリケンサックや鉄パイプで武装したいかにもな連中にユウがボコボコにされはじめた。

私は早くも来たことを後悔した。しかし、見つかることがどうしようもなく怖くて全く動けなかつた。

しばらくすると暴行は終わり、私の死角から透き通るようなのに悪意に汚れた少女の声が聞こえてきた。

「ホント使えないわね。人間って」

また意味が分からない。まるで自分は違うみたいな言い方。

「まあ、そう言いなさんな。あつしあくれてやつても良いとおもいますがねえ」

今度は低い男の声が聞こえた。これは喋り方が変に時代がかつていた。

「これはアタシの仕事よ。アンタに従う筋合いなんて無いわ、《起オリジン源》」

オリジンって何？ この人たちは何者？ 疑問は尽きない。

「くっく、ちがえねえ。正論でかえされちゃあ、このあつしも言い

返せませんぜ」

「その話し方、癪だわ。ていうか何でここにいるの? 用が無いなら消えて」

少女はどう考えても年上の男に高圧的な態度を取っている。対する男は穏やかといつか余裕の有り余つている様子。少女の言うとおりイライラする。

「迷惑かもしませんが、まだここに残りやすよ」

「迷惑よ。どうして?」

「なに、新たな同胞を生むだけである。ちよことアンタの仕事にも絡みますがねえ」

「勝手に決めないでくれる? どうじょいつもなく皿の中ね」

「ははっ。テメエにだけは言われたくありませんぜ」

「なんですって?! 貴様、殺すわよ」

口喧嘩の最中恐ろしい波動が部屋を揺るがした。

常人の私でさえ分かる鋭く濃厚な感覚。殺氣とか邪氣とかそんな感じのもの。私は叫んでしまいそうになり慌てて息を止めた。

「ん? 今なにか動きやしたね」

「気のせいでしょう。アンタの」

「シツ! 隠れても無駄ですよ」

男は何か言いたそうな少女を制し、見えないはずの私に語りかけた。と同時に私の身体を何かが突き抜けた。ドアノブ静電気を強くしたような痛みが走る。

「いたつ! ?」

私は鋭い痛みに思わず飛び上がり、結果としてこの部屋に居並ぶ者を確認することとなつた。

うつぶせて動かないユウと武装した5人のチンピラ。それだけなら納得もいくけど、小学校中学年くらいにしか見えない小柄な女子と紫苑の羽織を着た男は場違いだ。

和服の男は気味悪い笑みを浮かべて、それ以外は驚きを隠せないようで止まっていた。

その隙に私は一目散に逃走した。幸い足には自信がある。さつと逃げ切れる。ユウには悪いがやはり命は惜しい。

「どこに行こうってんですかい？ お嬢さん」

「ひい！？」

開け放しの出口まで行くと和服の男がニヤニヤ嗤いながら待っていた。

いつ来たの？ 理解できない現象に恐怖が背中を這い上がってきたが、私はまだ諦めなかつた。すぐに別の出口を探そうとして踵を返すと

「がつ……！」

お腹にスイングされた鉄パイプがめり込んでいた。振るつたのはチンピラの一人だつた。

痛みが浸透して自分の身体が崩れ落ちるのを感じた。

跪いて、犯罪者たちを見上げているのが屈辱的だつた。

「《起源》、コレが貴方の獲物つてわけ？」

「ええ

「ふうん」

いつ来たのか少女が私を見下ろしていた。

暗黒色のドレスで盛装していて、流れるようなプラチナブロンドが映える。闇夜と星の群れを思わせる綺麗な出で立ち。

だけど、私を見下ろすブルーの瞳は冷酷さと邪悪さを惜しげもなく発散する。

初めて人間を怖いと思った。いえ、初めてはあの孤立した時代。今目の前にいるのは、もつと違う何か。

「ユウを、返してください……」

幼い少女に哀願するのは情けなく思つたのだが、逃げられないだらうからせめてユウだけでも助けたい。それに怖い。

「アンタ、ユウって名前だつたんだ。虫けら」

少女が後ろに佇むユウに話しかける。虫けらと呼ばれても、怒る様子はない。絶対におかしい。

「はい」

「コレどどんな関係？」

「昔の、彼女です」

「へえ、それは面白いわね。《起源》、コレをひょっと借りるわよ。私を指差して、物みたいな扱いをする。気に食わない。はあ、あつしのものだというのに……。ま、何するかによりますな」

「私は、お前達の所有物じゃない」

お腹の痛みを堪え、憤りを言い放った。

「この私に口答えをするの。虫けら風情が、調子に乗るな」

「《墜落の魔姫》さん、話が先に進みませんぜ。ほつといて、続きを話しな」

私を蹴りとばそうとした少女を和服男が宥めた。オリジンだのハーデスだの、意味不明なコードネームを使いつかれた連中だと想つ。

「……ええ。さしずめ貴方の気に入りそうな神話の再現よ」

「ほつ。怪我はしないんで?」

「もちろんよ」

「なら許可しますわ。ですが、あまり時間をかけすぎないよつ」

「分かつてゐるわ」

嫌な予感しかしない。このビームでもふさけた連中は何をするつもりだろうか。

「さあ、始めましょうか。冥府の王の審判を」

私は、はじめてユウがいた部屋に連れ戻された。近くにユウもいる。「どうするつもりなの?」

静寂に耐えかねて私は少女に聞いた。

「ゲームよ。勝てたら、逃げていわ。それを私たちが追うこともない」

「ホントに? 約束よ」

思わぬところにあつた救いの綱。私は必死に飛びついた。

「ええ。ルールは簡単。その虫けらと2人で工場から出られれば勝ちよ。ここが大事だけね、途中で振り返つたら負けよ」

和服男がほう、と溜息を漏らした。

「それだけ？」

「もちろん私だって邪魔はするけれど、暴力はしないわ。そんなところかしら」

勝てる。

そう思える条件だった。

ユウは顔色が悪くて、何かに怯えるようにキヨロキヨロとして落ち着きがない。勝利に不可欠な彼にはしつかりしてもらわなければならぬ。

遠い昔のようで、実は1年も経っていない。私はその間の寂しさを全部吐き出すみたいに甘えてみた。

「ねえ、ユウ。何があつたの？ いなくなつた時すごく悲しかったんだから」

「あ、あ、ごめん。俺……い、いや……」

しつかりと受け止めてくれると思っていたのに、期待は裏切られた。ユウの反応は痛々しくて目も当てられない。

ユウの拳動はまるで保健で習つた薬物患者だ。それなら話が繋がる。

「ここにたむろしている連中は麻薬の虜となつた憐れな人たち。和服男と少女は麻薬ディーラーのような存在なのだろう。

男はともかく、少女に疑いを持つのは変かもしれないが、傲慢な態度や歳不相応な大人びた喋り方には何か異質なものを感じずにはいられない。

「しつかりして！ 昔のユウに戻つてよ！ ねえ！ こっち見てよ。

話聞いてよ」

ユウはもつと頼れる男子だったはず。こんな状態になるなんて、よっぽどひどい目に遭つたらしい。

「無駄話は済みまして？」

疑問形なのに、圧倒的な命令が込められた声。まだ話は全然終わっていない。

私はきつと少女を睨み、その軽薄な笑みをたたえた顔に敵意を剥き出しにした。

少女はそれが気に食わない様子で笑みを消し、凍えるような憤怒を露にしていた。ちょっと仕返しできたみたいで子氣味よい。

「ほら、立つて。行くよ、ユウ」

「お、おう」

少女を尻目に、私はユウの手を引いて駆け出した。スタートなんて宣言されなくて構いやしない。

手を握ると汗で湿ったユウの手も握り返してくれる。

『俺をここから救い出してくれ』

そんな無言の期待が込められているみたいで、私に力をくれた。甘えてばかりの私だつたけど、今度は私がユウを護つてみせる！

走り出しても後ろの連中は何もしてこない。

逆に不気味で振り向きたくなるが、ルールを思い出してもはつとする。危ないところだった。

手を繋いだユウの足取りはおぼつかなく、否応なしに進むのが遅れてしまう。怪我でもしてて障つているのかと思われたが、振り向くわけにはいかない。

焦りが生まれる。至る所に仕掛けられた『無』からくる不安という微細な罠が注意を後ろに向けさせようとする。細心の注意が必要だつた。

「何があつても絶対振り向こいやダメだよ

「……」

「ユウ？」

ユウは答えない。

握る手の感触はあるのに、そこにいるのかと聞かれれば分からな

い言つてしまいそう。

どうしようもないので私は歩き続けた。

曲がりくねつて迷宮を成す遺物達が視界に現れた。広大なこのフロアは「ミ」で埋まつていた。どこで道を間違えたのかこの部屋は初めて来る。

迷路はかなり人為的なもので奇妙極まりない。

奴らがわざわざ造つたのだ。となると、私は手招きしていた奴らの元へ自ら身を投じたことになる。コウは活餌だつたのだ。和服男と少女の嘲笑が聞こえるようだ。そんなものに引っかかる自分と奴らに腹が立つた。

来た道ではない。しかし、後戻りはできない。万が一、袋小路に辿り着こうものならそれはゲームの敗北を意味する。慎重に選ぼう。「つまらない、興ざめ。人間は暇つぶしにもならないわね」

真後ろで少女の声が聞こえた。

冷や汗が流れ、瞳が無意識に後方を向こうとするのを必死に止めた。前を見ながら少女に聞いてみた。

「出口はちゃんとあるんでしきうね」

「当たり前でしょ。勝つと分かっている試合ほど低劣なものはないわ」

小ばかにした調子で少女は話す。

本当は勝ち目なんてないのかもしれない。心を暗影が通り過ぎた。私は迷路を作る「ミ」壁から突き出していた鉄パイプを引っ込抜いていた。いざとなつたら、こんな幼い子でも……。

「そんなものでこの私が殺せるとでも？」

今度は完全にバカにした微笑を含んだ口調で嘲られた。

「お前みたいなやつに殺す価値なんか無い」

私はわざと少女をキレさせるように言葉を選んだ。沸騰しやすい性格なのだと、会話から読んでいた。

「ツ……人間風情がつ！ もういい、死ね！ 殺してやるー！」

思つたとおり少女は感情を爆発させた。少女の中にある何か凶悪な気配がドバードバと溢れ、後ろでうねりを上げている。

後ろを向けないわけではない。もう契約は破棄されたのだから。でも私は振り返らない。膨張していく怪異と目を合わせたら、発狂しかねないとthoughtたから。

怖くないわけが無い。極限の憤怒を直に浴びるという未知の経験に震えが止まらない。しかし、私にはまたしても確信があつたのだ。

「肉体と精神が砂となるまで殺し尽してあげるわ！」

少女が絶叫し、形あるもの全てを切り裂く暴風が私の背中に迫つた。私は頼りないコウの手を握り締め、眼を閉じた。

「アイギス 《不壊》」

男の声が聞こえ、私の身には何も起きなかつた。

車の衝突みたいな暴音が数回聞こえ、辺りが静かになつた。そこで私は後ろを向いた。

「やつぱり助けてくれたんだ」

「やつぱり？なるほど、はめられたというわけでさあね

キレるかもしないと構えたけど和服男が愉快そうに返してきた。彼は私たちと少女の間にいて、予想通り先の攻撃から護つてくれたようだ。

「その子の仲間じゃないの？」

私は何があつたのか地面に転がっている少女を指して聞いてみた。「いやあ？あっしらは基本単獨行動である。協力なんてえのはその時々でね」

男は変な言葉遣いながら声が弾んでいて、よく分からぬが楽ししそうである。

「あの、私たち、帰つていいいですか？」

無理とは知りながら聞いてみる。今までの会話から私たちに用があるのは少女ではなく、この男らしいが。

「はははっ。そいつは聞けねえ相談でさあ」

「やつぱり……」

分かつてもらえない。だつたらやることば一つ。

「えええい！」

私は鉄パイプを振り上げ、思いつきり男の胴を殴りつけた。ガキンとおおよそ人を殴ったのに相応しくない音がして、腕が千切れそうなくらい痺れた。鉄パイプは衝撃で吹っ飛んでいった。

「くうつ……！ な、何なのよ」

「そんなの効きませんぜ。諦めて話を聞いてくだせえ。貴方の友人を自殺させたり、失踪させたりした不肖のあつしの話を」

「えつ……？」

数瞬は不理解が脳を支配した。たつた数瞬。

「あ、あなたがみんなを……つ！」

人生をめちゃくちゃにした男を目の前にして、私の理性は崩壊寸前だった。

殴つても蹴つても効かないという認識だけが、私を暴力の衝動から遠ざけていた。

「姉さんの人生は変わったな。暗闇とそこからの脱出を経て、強くなつた。さあ、最後の試練でさあ！ 存分に享受し、行き着く先をあつしに見せなせえ！」

爛々と目を輝かせながら和服男が高らかに宣言した。

「支配と束縛、逃れえぬ永遠の快楽をここに。『冥界の柘榴』！」
（ポメグラネイトインハーバス）

和服男の言葉を合図に少女の奇怪な言葉と共に赤い閃光が一帯を包み、その強烈な光に眼がくらんだ。

ユウの身体がビクンと跳ねて、稚拙な人形繰りのような動きで私のほうを向いた。

「大丈夫？ ユウ顔色悪いけど」

「平気だよ。むしろ気分が良すぎるくらいさ」

本当に自然にユウの手が私の首にかかつた。だから全く反応はできなかつた。

「どうし、やめ、て……」

息が苦しい。押し退けようと伸ばす腕も力を失つていいくのが分かる。そのままユウは私を押し倒した。

霞みつつある視界にユウを捉える。ユウは無言で私の首を絞め続けている。眼の焦点は合つておらず、キトキトと忙しく動き回っている。

「私を侮辱した罰よ。愛する虫けらに殺されろ！」

いつの間にか立ち上がった少女が悪魔じみた高笑いを響かせている。

護つてくれるものと思つていた和服男さえ直立不動でこいつを見ているだけだ。

「足搔いてみなせえ。人間、生に執着してこそのモノでああ」

「かつてな、いいぐさ、ねつ！」

飛びそだつた意識が負感情のキメラに引きずり戻され、融合した。

刹那、私の脚がユウを跳ね除けていた。

私は起立し、息を切らせながら悪魔²匹を見据えた。今相当怖い顔をしているんだろうな。

「ユウを元に戻して！」

「いやよ。コレはもう私のものなんだから。ああ、証拠を見せてあげようか。それなら納得でしょ」

少女がその小さな手を広げてみせた。すると、見る間に紅く輝くあめ玉大の粒がいくつも手のひらに現れた。まるで手からルビーが湧いているような光景だ。

「ほら、虫けら。お前の欲しくて欲しくてたまらないものよ」

それを地面に落とすと、死体のように動かなかつたユウがものす

「」い勢いで起き上がり紅い粒に飛びついた。

ホコリまみれでも何でも構わないみたい。ユウはただただ紅い粒を口に入れ、惜しむように落ちた床を舐めていた。

「や、いやあ……。ユウ、なんでそんなこと……？」

ショックが大きすぎた。

いくら呼んでも、彼氏は、ユウは、その人間は、犬のように這いつくばりせつせと舌を使って紅い粒の余韻を集めている。

類を何かの液体が伝つていった。

「あ、そうだ。前に『起源』からもらった『出来損ない』がいたんだつたわ」

とてつもない悪意を発露させながら、少女は指を鳴らした。
何者かの足音が少女の背後から聞こえてきた。

見たくない。もういや。

眼を閉じたくてもできない。できたことなんて、自分が泣いているのに気づいたことだけ。

「紹介するわ。愚かで卑しくて汚い虫けらどもよ」

少女がまた紅い粒をばら撒いた。人の形をした虫けらが嬉々して群がる。

「いやあああ！」

絶叫なんかしても無駄。事実は変わらない。でも止まらないのは、たぶん精神を守るためになんだと思います。

虫けらは全部で8匹。どれもこれも知った顔。

だつて、それは、失踪した友人たちのなれの果てなんだから。

第13話B・發生・Nemesis（後書き）

一人称つて難しい。変な所があつたら教えてほしいなあ。

あと、この小説に何が足りないかと考えたところ……比喩希望主題
差別化台詞回し、そして何よりもバックボーンが足りない。

第1-3話C・發生 - Nemesis (前書き)

遙過去編最終章です。

「働くがざる者死すべし。汚らわしい虫けら共、食事は終わりよ。その愚か者を捕まえて連れてきなさい」

陰湿な微笑を浮かべ、少女が命令を飛ばす。

虫けらと呼ばれた私の友人たちが、よだれを垂らしながら床から顔を上げた。みんな虚ろな目をして、でも私を見てほんの少し戸惑っているみたいにも見える。

「やめてよみんな。正氣に戻つて……」

私はか細い声で頼んだ。悪魔2匹への怨恨は不活性化してしまっていた。

「俺達は正氣さ。働いて、給料をもらつて、また働く

「就職したのと同じようなもんさ」

「遙もおいですよ。キモチイイし、楽チンだからさ」

全ての苦から脱したような穏やかな仕草。もう蟻のようにならず、紅い粒を舐つていた時の面影はない。不気味さを通り越して、懐かしささえ感じてしまう。

だけど、それが私を眺る。

「イヤ。こないでよ」

私は耐え切れなくなつてゴリラの迷路の中に駆け込んだ。

「待つてよ。アタシたち友達でしょ」

追つてくるのは友人たち。万に一つも鬼ごっこをしているわけじゃないのがとても辛い。

「《墜落の魔姫》^{ハーデス}さん、あなたはヒドイお方だ。神話のハーデスなどもまだ人間味があるといつのに」

「私は人間じやないのよ。そんなもの要らないわ」

「そうですか。ああ、あなたの持ち時間は10分くらいでよろしいですかな？」

「何の話よ？」

「あなたが彼女を追い掛け回す時間でさあ」

「ええ、十分よ」

「ふむ、つまらない洒落でさあ」

「何言わせんのよ、クソヤロー！」

「淑女たる者そんな口の利き方はよろしくないと思いますがね」

「ああ、もう！ お前嫌い！ この時間はさつき私を殴った仕返しに充てさせてもらうわ」

少女がどこからとも無く持ち主と同じくらいの大鎌を持ち出して構えた。

刃まで完全な黒に覆われており、柄にはルビーがいくつもはめられている。さじづめ、全身に紅い眼を持つ暗黒の大蛇のよう。

「死を統率する神の名、身をもつて知りなさい！」

「その名はあつしが付けたということをお忘れなく」

元凶の2人が戦闘けんかを始めたことなど知る由も無く、私はガラクタ迷路を突き進んだ。

高さ180センチくらいの迷宮壁を作っているのは、主に鉄パイプと学校机と工場の廃材。どこから集めたのか知らないけど、途方もない量だと思う。

通路は人一人通れるくらいのものから、車でも行けそうなものまである。それが分岐だらけなので犬でも目標を探すのに苦労するだろう。

そして1番問題なのは隠れる場所が無いことだった。壁には潜り込む隙間がない。

だから走るしかない。体力には自信があるが、相手は8人もいる。挟まられでもしたら一巻の終わりだ。

壁を登ることもできるが所詮机なので何とも不安定で頼りない。倒れできたら、と考えるとあまり有効な手ではないかも知れない。

「早く出口を見つけて……」

壁の向こうで足音が聞こえたので、私は慎重に歩き出した。

「あ、ハルはっけーん！ これでご褒美は私のもの」

「ヒナちゃん……」

迷路で初めて出くわしたのはヒナちゃんだった。

ぽやぽやした性格で人気があった子。足は遅かったはず。

「じめん」

私はユーターンして、近くの選ばなかつた分岐を曲がった。しまつた！

道が狭すぎて前から他の子が来たら挟まる。

「まつてよ～」

ヒナちゃんが追いついてきた。もう進むしかない。

私は駆け出した。

けつこう長い一本道で、早く脱出したいのに別れ道が無い。

「おっ、遙いた！ こちら琴美、遙を発見した。現場に急行せよ」

そこに横道があるのか、ふと前方に人影が現れた。その人影は私を見るなり大声で無線機に喋りだした。

『急行つて、どこに行けばいいのか分かんない』

「バカ！ 気合で何とかしなさい」

『ふええ……』

無線からは情けない声が放出されている。

聞いていて思わず口元がほころんだ。

(琴美と……由香里かな。変わってないなあ)

2人は、いいにくいんだけど、その、れ、れずつ気が附つて付き合っていた。今もそれは変わらないらしい。

どうしてこんなことになつてるの。心がチクリとした。

「がんばって！ 捕まえたらキスしてあげる。あつ遙が逃げた」

琴美がラブコールをしている隙に私は意を決して壁を登った。

机部分に足をかけて、ゆっくり慎重に……よし、上れた。

「ヒナ！ アンタがとろいから逃げられたじゃない」

「そんなん。コトちゃんが百合百合ゆりゆりしてたのが悪いんだよ

合流した2人が下で騒いでいるのを尻目に、私は隣の通路を確認

していた。広いし人気もない無い。

かなり高く感じられ、下を見ると眼が眩んだ。でも飛ばないと他のみんなが集まつてくる。それからじや遅い。

私は机の縁に腰掛け、手で机を押して飛び降りた。

嫌な揺れが両手に伝わって、壁がヒナと琴美の方へ倒れていく気が配がした。

着地して見よう見まねで受身を取ると、ちょうど壁が崩壊するところだった。

「ひいやあああ！」

金属のなだれに2人分の悲鳴が飲み込まれた。

左右の壁もつられて倒れしていく。圧倒的な質量の鉄が歪む鳥肌の立つような音で耳が壊れるかと思うほど響きわたる。

「あ、ああっ。ヒナちゃん、琴美……私が、殺したの？」

ぼんやりとそれだけが実感できた。

せつかく会えたのに、病院に行けばクスリを止めてまた一緒に遊べたかもしれないのに。あれじゃ助からない。

「琴美！ 琴美い！ ねえ、返事してよ！？」

見計らつていたかのように今1番会いたくなかった人物がやつてきた。泣きながら無線を握り締めている由香里である。

「遙！ 琴美に何したの！？」

私を捕まえることなど頭に無い様子で由香里が突つかかってきた。後悔の想いから制服の襟を掴まれるにも何の抵抗もしなかつた。

「私の琴美を、よくもおおお！」

鬼のような形相で睨みつけられ、私は顔を背けてしまった。

いくら禁忌的な同性との恋であつても、相手を失う辛さには何の

変わりも無い。私だつてユウを殺されたら何をするか分からぬ。

由香里の手が首に上つていき、力が込められる。

「殺してやる。命令なんてどうだつていい！」

「ぐ……」

死んじゃつてもいいかな。それで、由香里の気が済むんだつたら。諦めていれば後はすぐ終わる、はず。

あれ、いつの間にか身体が浮いてる。由香里が私を宙吊りにしてる。こんな、ちからが、あつたんだ……。

「由香里！ やめなさい！」

「ふえっ……！？」

突然尻に衝撃を受け、遠のいていた意識が戻ってきた。

私は地面に座り込んだ姿勢のまま、霞む瞳で由香里が私をほつたらかしにして駆けていくのを見た。

「私は平氣だから。ほら、じつちおいでの」

「うええ……、琴美いい」

「よしよし、泣かないの」

信じられない。

崩れた鉄パイプと机の中から琴美が這い出していた。服こそ破れているものの無傷に見える。

今も号泣している由香里を抱き止め、平然と立つている。

チャンス。このワケのわからない状況を理解しようとはせず、私は酸素不足で喘ぐ身体に鞭打つてこの場から立ち去ろうとした。

その矢先、長身の人物とぶつかつた。

「待てよ。」ここで逃げられちゃ、また見つけるのに苦労するんでな

「うっ、……アキラ」

「久しぶりだな」

アキラは口調だけなら男子と勘違いされそだけど、れつきとした女子である。柔道とかやってて強くて頼りがいのある人。

そういえば、私の周りが狂い始めた発端となつた女子の自殺の調査を最後まで諦めなかつたのがこのアキラだつた。つまり私たちのグループ中で一番最初に失踪した人なのだ。

「あんだけ大きな音がしたのに来てるのは3人だけか」

呆れたように咳きながら、アキラは私を羽交い絞めにした。

痛くないよう気を遣つてくれているらしく拘束は堅くない。逃げ出そうと思えばできるかも知れないけど、おとなしくしようとにした。

「いや、さつきヒナの声もしたしな。埋もれてんのか?」

「う、うん」

聞かれて思わず答えてしまつた。アキラの態度も失踪前と何も変わつてなかつたからかもしれない。

「ならスゴイのが見れるかも知れない」

アキラが妖しく笑つた。以前はしなかつた笑みだ。

「いつたああ!」

ヒナちゃんの声が聞こえたけど姿は見えない。すると、目的を忘れていちやいちやしている琴美と由香里の後ろの鉄山が噴火した。パイプやら机を吹き飛ばして出てきたのは探していたヒナちゃんその人だつた。

「ひつー?」

私は目を見張ると同時に戦慄した。

ヒナちゃんのお腹と右脚にはパイプが刺さつてゐる。血が滴つてものすゞく痛そうなのに、いつもと変わらない態度が恐ろしかつた。

「ヒナ。無事だつたか」

「おー、アキも来たんだ」

「そりや、褒美がほしいからな。それより、その刺さつてるの抜いたらどうだ?」

「うひやあ。グロいねえ。いろはが好きそうだけど、いろははいつも

よ」

ズブリ、と嫌な音がして2本のパイプが引き抜かれた。無論痛か

つたみたいで、ヒナちゃんもその時は顔を歪めていた。

血が止まることは無いが、それでも抜いてしまえば何ともないのか、ヒナちゃんは傷を服で隠してピンピンしている。

「なんで、そんな……」

見た目は変わらなくても、中身が根本的に変容してしまった友人たちを前に私は茫然自失していた。

「ご主人はな、ちょっと変わった仕事をしてるんだ。その時部下のアタシらが脆かつたら使い物にならんわけよ」

「そう。それで、ちょっとぴり改造とか強化されてるってところね」

アキラの説明に割り込んできたのは、いろはだった。

相変わらずミステリアスな雰囲気を漂わせてる子。実はスプラッター大好きであって、ヒナちゃんの発言はそれを受けているのであつた。

「そんな、ワケ分かんない話……」

「あるわけない。」

私の口から出たのは最大の疑問だった。

ここへ来てから感じ続けている異質な感覚の正体。おそらくは誰も信じないだろ？非現実的な現象の連鎖。

気付いたら周りは5人の友人達に囲まれていた。

ヒナちゃん、琴美と由香里、いろは、そしてアキラ。

「あるんだよ、それが。私たちは、『幻象』^{フエノミナ}。自らを世界の理に組み込み不死となりし超常の現象」

アキラが劇役者染みたセリフを言った。

「ふえのみな？ 不死？ 超常？ なにそれ？」

認めたくない心に絶望的なほど非現実的な光景が脳裏に甦る。

少女の手に湧いた出した紅い粒。警察が何も掴めなかつた事件の黒幕、オリジンと呼ばれていた男。鉄の洪水に巻き込まれても平気な友達。

「さて、ここまで喋つたんだしもう飲ませるか？」

「遙もやつと仲間入りだね。全然怖いことなんかないから」「だつて死ななくなるんだから」

アキラは私を拘束したまま、他のみんなが楽しそうな笑顔でにじり寄つてくる。手に手に例の紅い粒を持つて。

「やめてよ！ こんなのおかしいよ。意味わかんないし！」

必死にもがいてもアキラには敵わない。私はガツチリとホールドされ成す術がない。

「由香里～。あ～んして～」

「あ～ん。はあああ～、とりよける……」

私に食べさせるのに4人も要らないと思ったのか、琴美と由香里がお互いの持つていた粒を食べさせ合いだした。

2人は急速に浸透する極限の悦楽に呆けたような表情になつて、へたりこんだ。さつき少女がばら撒いていた粒よりはるかに強力そうだ。

「それハルに食べせるやつなのにー」

ヒナちゃんが不平を漏らす。彼女自身も食べたくて仕方ないみたい。

「ほつとけ。アタシたちは、主人からもらえばいい」

「……そだね。はい、ハル。おとなしくお口開けててね」

ヒナちゃんが再び迫つてきたので、私は硬く口を結んだ。ちらりと横を見ると、いろはが紅い粒をこつそり口にしていた。

「開けてくれないと食べれないんだけど」

「なら鼻から入れる」

怖いことを言うアキラ。

「それじゃハルが痛いよ。私ムリ」

「なら代わつて。拷問チックなことには興味があつて」

いろはがしゃしゃり出てきて、ヒナちゃんの粒をひつたくつた。紅い粒の影響に耐えているのか顔が赤い。それが興奮しているみたいに見えてゾッとした。

「ほどほどにしろよ」

「わかつてますつて」

メガネが怪しく光る。その奥の瞳にも狂氣と呼べるもののが微かにチラついていた。

「ぜつたいムリ！ やめてよ！ お願、んくつ」

最後の懇願をするために開けた私の口に紅い粒が吸い込まれた。これが狙いだつたんだと今さら気付いた。

「けほつけほつ、い、イヤだ……バケモノになんかなりたくない……」

全身を駆け巡る快楽の電流。思考を止め、四肢から力を奪つていぐ。

抗うことのできない快感に私はビクビクと肢体を震わせ、ひたすら身悶えた。

自分の身体が別の中にも変化していく悪感が満ち溢れる。その一方で、やつとみんなと一緒になるという安堵も生まれていた。ああ、世界が優しい霧に溶けていく。目が、覚めたら、また、みなんなど……。

生暖かい液体が顔にかかる。ぬるぬるとじていて気持ち悪い。それに臭い。

ぼんやりしている頭を叩き起こして目を開く。

「う、ん……」

赤い。あたり一面。

誰かが怒鳴つている。

「虫けらー！ こっちにきて護りなさい」

「命の無駄使いでさあ。《出来損ない》でもないヤツを差し向けるなんてなあ」

甲高い悲鳴が巻き起こり再び赤い雨が降ってきた。

こんな所で寝てたら風邪引いちやう。そう思つて、身体を起こす

と今度はちゃんとした物体がお腹に落ちてきた。

なんだろう？ぬるぬる濡れた黒い糸。白い丸いのが上に2つ、赤い部分に挟まれて下にはずらりと並んで、やっぱり赤い液体を流して。

これじゃまるで人の顔みたい。

「やめつ！？イタイイタイー！」

「そんな病気時代遅れですぜ」

次は蒼白い光がバチバチ唸つて、小柄な何かを襲っている。小柄な何かはくねくねがって、なんだかエロい。

お裾分けみたいに私にもビリッときた。それで頭がシャキッとした。

「いやあああ！」

私はお腹に乗っていたいの頭部を投げ捨て、あらん限り叫び泣いた。

「おはよっ！」せえます。遙さん

和服男がヒナちゃんを片手に持つてプラプラさせていたのを放して、私に向き直った。

落ちたヒナちゃんは人肉が焼ける異臭を纏つて、ピクリとも動かない。

「すいませんねえ。そこのちつこいのがけしかけてくるもんですから、殺しちまいましたよ」

しゃがんで目線を合わせてきた。苦悶の表情が張り付いたいの生首を持つて。

見るのに耐えかねて眼を逸らす。

頸で指された少女は不機嫌そうに鎌を回していた。あとは死体ばかり。迷路に逃げる前に会ったチンピラと女の子2人のものだ。女の子のものは、たぶんあの時失踪した薫と奈緒だと思つ。みんな胴体が真つ二つになつてている。

これ、みんなこの人が……？こんな酷いことをして。なんで楽しそうに笑つてるの？

「怖い眼をしてまさあ。彼女らを支配してますのはそこの口りでつせ。あつしは攻撃されたんで反撃したまでさあ」

私は反応しない。言葉も首の振り方も忘れたかのようだ。

少女が鎌を振った。深紅の宝玉が暗い光を放つと、迷路では会わなかつたユウと純が進み出た。

和服男は頷くと、腰に挿していた鞘から見事な日本刀を抜き放つた。武器というより芸術品の域に達するような輝く麗美なフォルムだ。

そのまま何の前触れも無く純を肩から斜めに切り伏せた。瞬きの合間に刃が発光したかと思うと人間が悪臭を放つ肉塊に成り下がつていた。

乾いた血がこびり付いた刃をユウの首に添えながら、男は私を見つめた。

「やめて。ユウには手を出さないで……」

必死に声を絞り出した。意味も無く殺された純のことも辛いけど、私にはやっぱりユウだった。

「ははは」

無慈悲に跳ね飛ぶユウの首。

首を刎ねた男の哄笑と噴出した温かい鮮血を浴びて、私は壊れた。

私は意味を伝える機能を欠いた音を吐き出し、男に殴りかかった。失うものは無い。あるとしたらすでに価値を失つたこの命。

「さあ、遙さん！ 新たな人生、第一の生。何を望みまさあ！」

有頂天にいるかのような調子で男が叫んだ。まるで歓迎しているみたい。

「殺す！ お前らを殺してやる！！」

ありつたけの憎悪と怨念、殺意と呪詛を込めて私は絶叫した。

「願わくば、その望み果たされんことを」

男の声を最後に匂いが消え、音が消え、光が消えた。私の拳は男

に届くことはなかつた。

身体は得体の知れないモノ混ざり合い、心は碎け形を失くす。魂さえも揺らぎだす。

要した時間は永遠にして須臾かもしけず、範囲としては極所的で全域で、程度にすると膨大で過小な変異が鎮まつた。
紅い粒を呑まされた時より急激な変化だつた。死んでいるのか、生きているのかも定かではない。

「うりああ！」

「ぐううう！」

響き渡る金属の慟哭。

私の斬撃は届かなかつたが、男は見えない盾と一緒にぶつ飛んで迷路の崩壊に巻き込まれた。

「オリジン！？ もう手に負えない。退くわよ」

少女の声が耳に入つた時には、身体が勝手に動いていた。

「お前もあの男の仲間だろ」

自分のものとは思えない低い声が出た。私は目で捉えることしかできないからどうしようもない。

手に持つ柄から伸びた白銀の蛇たちが対象を切り刻もうとのたちまわる。

少女は一瞬怯えを見せたが、すぐに嘲笑を浮かべた。

「お前は『柘榴』を摑つた。すでに私の手の中よ」

少女が手をかざすと途端に私の身体は動作を止めた。何も考えられない。収まつていた快樂が大急ぎで起動したような感覚。

「これ没収。『赤ん坊』に持たせても害しかないわ」

私の手から動くのをやめた剣が抜き取られた。

「ぐえつ！？」

また血だ。切り裂かれた少女の喉元から溢れ出る。

剣はひとりでに暴れて何回か斬り付けると少女の手を離れ床に落

ちた。

私の身体に自由が戻ってきた。蛇を結合したような剣を拾い上げる。

「！」主人！』

アキラがひゅうひゅうと息を漏らすことしかできない少女に駆け寄る。私を睨みつけて何か言おうとしていたみたいだつたけど、蛇にお腹を刺されて投げ飛ばされた。

「まずいよ。早く逃げないと。走つて！」

「い、イエッサ！」

琴美と由香里が逃走する。

危ない！ 蛇が後ろに……

警告しようとしたけど間に合つことなく2人は胸を貫かれて倒れてしまつた。最後にキスしようとにじり寄つたのに、蛇がめつちゃやたらに串刺しにしたので叶わなかつた。

「ひゅう……」

微かな呼吸音が聞こえ、視点が戻された。

じりじりと這つて無様な敗走を見せてくれる少女がいる。

「しぶといな。なんだ、その目は」

恨みがましい瞳を向けてきた少女が前方に『ロロロロ』と行つてしまつた。蹴りがこんなに強いなんて知らなかつた。

私は生にしがみついて何とか逃げ延びようと頑張つているちつぽけな存在を追い詰めていく。あつといつ間に追いついてしまつて面白くない。

「私の友達を薬漬けにして飼いならしていた罪は重い」

冷たい鋼鉄の蛇が少女の背中を這う。まったく自然な感じでザクザクと滅多刺しにしていく。腹ペコ蛇の池に突き落としたらこんなだろうな。

一方少女は色々と不随になつて動けない。また蹴られて、転がつて全身を強打しながら生の終点に近づいていく。

「遺言を聞いてあげたいけど、喋れないんじゃムリだな。さよなら」少女が何を求めてか手を振るので斬りおとしてあげた。この一撃で葬る予定を狂わされて、私は「立腹のようだ。

「死ねッ！」

あ、あれ？ 和服じゃない男が串刺しになつた。誰これ。

「……はるか……まさかこんなことになるなんて」

虫の息で話しかけてくる男。血が止めどなく流れているのを見ていると何だか悲しくなつてきた。

「わた、わたしのなまえ……」

やめる。そんな名で呼ぶな。

私を支配していた何かが音を立てて瓦解していく。猛り盛つていたどす黒い感情が萎んでいく。

「ホント、ダメな彼氏で」「めん。お前だけは巻き込みたくなかった」この男との思い出が走馬灯のように頭を、心を走りぬける。知らないはずなのに何故か涙が出た。

ああ、もしかしてこの人は

「ユウ、なの……？」

「そうッ、ぎいいい！」

「ユウを刺し貫いていた蛇が死後痙攣を起こしたように蠢いて消えた。それが、トドメになつた。

「ユウどうしたの？ 続き話してよ」

ほら、立つて。力入れて。ここから出よっ！

外はあつたかいよ。桜だつて咲いてる。そつそう、私きれいなところ知ってるんだ、見に行こうよ。

寒いの？ だつて震えてる。身体冷たいし。熱もあるの？ でも、熱なら身体つてあつく……

もういい！ 私が連れて行つてあげる。

もつと踏ん張つて。私の子なんだから、肉体労働向いてないか

「ユウ！？ 怪我したの？ こんなに血が出てる。あはは、お花見なんかより病院だつたね。

「見て見て！ こんなに花が散つて、風強いね今日」

とつても久しづりのお天道様が眩しい。ユウもおんなんじみたいで俯いてる。

私は目を細めて上を見上げた。サクラ吹雪の優しい空は、悲しいほど青く澄んでいた。胸が痛いな。

そこからの記憶は曖昧だ。

警察が来て病院に行つて家族と話した。何を聞かれても何のことだか分からぬ。

破壊尽くされた工場からは大量のガラクタしかでなかつたそうだ。懐かしいあの人達はどこへ。

医者によると極度の疲労状態と記憶障害をきたしており、少し入院した方がいいとのこと。様子を見て、精神病院に移ることもありえるとも言われた。

そこから何時間、何十時間経つただろうか。初めての、もしかしたら幾度目かの病院での夜に誰にも気付かれず、影のように闇に溶けて面会人がやってきた。

私は眼が冴えて眠れなかつたので、天井とにらめっこしていくところだつた。

「遙さん、気分はどうですか？」

私が無言でいると、男は独白にはいった。

「名前ネメシスが決まつたんで伝えに来たんでさあ。あなたの名は《復讐の女神》。原義は義憤でありますがどうでもいいでござんしょ。呵責ない復讐者の側面とそれをなだめる慈愛の側面を持ち、その狭間で苦しむ女神でさあ」

一旦話が止まつた。何の反応も示さない私を見て男は落胆したようだつた。

「ふむ、心が壊れてんですか。我々《幻象》は銃や剣より精神的な損失がよっぽど致命的だというのに。ああ、剣といえばあなたの得物もそうでしたな」

銀色の蛇が脳裏に浮かんだ。触れるものを容易くハツ裂きにする三つ首の蛇。

「《怨疾毒蛇》^{ヘリーゴエス}。あなたの深遠たる怨嗟が生んだその剣は、我らにとつては劇毒の塊。受けた傷は治りませんぜ。血に飢えた復讐の三女神が撃つ鞭のようださあね」

雲がどいて月明かりの元、男の全容が露になつた。あの和服男だ。ざんばらに切つた黒髪。痩せた長躯の影を部屋に伸ばして、腰帯に刀の鞘が挿つた和服を着込みニヤリと嗤つていた。心なしか眼は嗤つていないう�に見えた。

「もう普通の生活は望めませんぜ。殺意と狂気を糧に追つて来なせえ。あつしは《起源》。悠久を生き、永遠を分け与える者なり」

そうして男は去つていった。

数週間後、再び身体が乗つ取られたようになった。その日の夜、病院を抜け出した。

そして街にいた名も知らぬ《幻象》を殺した。そのときの快感といつたら例えようもない。

気がついたら血塗れで、その血はだんだん消えて行つて、何が何だか分からぬまま病院に連れ戻された。

自らの異質性を実感し、他人にばれることを恐れた。

私は家族にも何一つ告げることなく病院を脱出し、故郷を捨て果てしない復讐の旅路についた。

木々に囲まれた石造りの階段を上り、色褪せているであろう鳥居をくぐつて、遙は指定された廃寺の境内に到着した。

外界は寒々しい月夜だというのに、ここはあちこちに立てられた

蠅燭のおかげで朧げな温かい光に満ちていた。

「約束どおり殺しに来たぞ。『起源』！」

遙の声に蠅燭の焰が厳かに揺れた。

第1-3話 C・発生 - Nemesis (後書き)

グダグダと長くなっているので、コンパクトにまとめる術を勉強中。

第14話 A・災会 - happy? reunion (前書き)

タイトルは災難 + 再会

第14話 A・災会 - happy? reunion

無人の道に靴音が響く。酒が回っているような不揃いのリズムを奏でて、深秋に見合つた哀愁を感じさせる。

精神が荒んでしまいそうな冷たい風に身を縮ませながら、榎原明人はさまよっていた。

いつもなら独り言を漏らしながら歩いていそудだが、今はそんな気力も持ち合わせていらないようだ。

つい10分前に妹・藍の信頼を始めとして様々なモノを失った彼は、今や浮浪者やホームレスと同格に落ちぶれていた。築いてきたモノが一瞬で消し飛ぶ。派遣切りや株価大暴落に遭つたらこんな気持ちなんだろうな、とまだ見ぬ大人たちの世界に想いを馳せてみたりしている。

ひとまず晩御飯と泊まる所を探さねばならない。この時期、食事を抜いて公園で寝ようものなら黄泉の国への約束手形が発行される可能性は極めて大である。

こういう非常時にネットワークが広いと便利だ。人脈があればなんでもできる。

明人はケータイを取り出した。

「よお親友。俺だ。今家を叩き出されたところなんだが、そっちに泊めてくれないか。理由？ 詳しいことはあとで説明してやるから。……こつそりだな、オッケ。じゃあな」

今のは空元氣である。精神状態はそれはそれは陰惨なものだ。

本来なら藍を助けに行くのが道理だろうが、完膚なきまでに打ちひしがれでいるのである。
泊めてもらえるのはもう確定した。明人は友人に会うまでにテンションを取り戻しつつ、今後の行動をどうするか思索することにした。

何においても最初に藍を奪還しなければならない。

小夜が『起源』^{オリジン}の情報を流したおかげで、遙と分断されてしまいこちらの戦力は皆無だ。このまま行けば簡単にぐびり殺されて試合終了。

だいたい同じ作戦会議を前にやつた。その時は遙を利用することを思いついたが、今は弄する策もなし。

考えたところで答えなんか出やしなかった。ただの強い人間ならまだしも、相手は常識を超えた未知の存在である。

「力が欲しいな」

渴望が思わず口を突いて出た。それは誰にも届かないはずだったが、闇の中から応える者がいた。

「へえ。 なんだ

「誰だ！？」

相槌など予想もしていなかつたので慌てて辺りを見回す。無人。どうしようもない状況を打破したいという欲求が幻聴を耳に届けたのかもしれない。だが今のは誰かの声に似ていた。

僅かに期待していたこともあり肩を落として前を向き直ると、眼球前数センチの所にナイフがあつた。

月光を受けて凶悪に光る刃の向こうでは、見知った顔が笑っていた。

「明人、ひさしぶり～

「あ、綾瀬？」

消滅したはずの綾瀬がそこにいた。復活には相当の時間がかかるだろうと勝手に考えていたのだが、どうやら間違いだつたらしい。驚きと嬉しさそして愛しさのあまり飛びついでハグしてやりたくなつたが、綾瀬は華が咲いたような笑顔のままでナイフを下ろさない。どうも様子がおかしい。

「どうした？」

「明人、明人っ、あははっ！」

突然笑い出した綾瀬に冷たいモノを感じて咄嗟に身を引いた。案の定、明人の首があつた位置にナイフが白い軌跡を描いた。

「なんで避けるの？ 私がキライなの？」

綾瀬は露骨に嫌な顔をして見上げてきた。

「そういう問題じゃねえ。当たつたら死んでたんだぞ」

「えへ、死んだりしないよ。だつて明人は車の爆発も当たらなかつたし、看板も避けたじやん」

どういう理屈なのだろう。綾瀬理論はつねに常識の遙か上を行く。

「あれをやつたのはお前か？」

「うん そだよ」

明人は昼間の謎の襲撃のことを想起した。となると、遙が言つ『もやもやした気配の幻象』は綾瀬で、部屋に金属片を投げ込んだのも綾瀬ということになる。

しかし、動機が不明だ。恋の続きを約束して一時死別した綾瀬に襲われる心当たりなど皆無だった。

「なんであるなことを……」

「うーん、お家に帰れないし妹ちゃんにも嫌われた明人には関係ないんじゃないかな」

「それとこれとは関係ないだろ。一体どうしたんだ？」

綾瀬に非があるように振舞いつつ、明人は己の内に原因を探つた。まるつきり見当も付かない。

「明人がさあ、ハルカたんなんか家に呼んでさ、いちやいちやしてるから。おめめがグリーンアイドモンスター」

綾瀬のほうから答えが示された。女の子は怖いな、と明人は身にしみて感じるのだった。

しかも実際に綾瀬の瞳は茶色から暗い緑に変わっていた。

「とんだ愛憎劇に発展しちまつてるぜ。あと意味が分からん」

明人は驚き呆れるばかりだ。

綾瀬が本気で怒っているのか、じやれているのか清々しいくらい解釈不能である。太陽みたいな笑顔が、完全な正体不明の怪物の頭

部に見えててしまう。

「ああ、そういえばかわいいリボンだな」

綾瀬はヘアピンの代わりに大きな赤いリボンで髪を結んでいた。風が吹くと蝶がのんびり羽ばたいてとまっているように見える。

ちなみに服は明人の学校の制服。一体どこで何をしていたのやら。「かわいいだつて。いやあんもつ、明人つたら殺したくてたまんないつ！」

「なんでそ娘娘る！」

褒めて正気に戻るかと思つたら、悪化した。

再びナイフを振つてきたとき、説得は無理だと悟つた。綾瀬は全然脈絡の無い、ますます不可解な存在になつてしまつたようだ。こんな危ない子を連れて行つたら友達も迷惑するので、宿泊はふいになるかも知れないと関係ない思考が働く。

そんな中、明人は一つの可能性に辿り着いた。最初に思いつくべきところではあるが。

「分かつた。また幻覚だろ？ ふざけて遊んでるんだな。かわいいヤツめ」

眼のこともあるので自信があつた。

「なら、検証しちゃおうか。明人とらぶらぶ無理心中！」

「までまでまで、お前ナイフじや死ねないだろ。ただの他殺だよそれ」

「……ばーれーたーかー」

徒労だった。というよりためしてショウウテン、する勇気なんか持つちゃいない。思考が全く読めないのが綾瀬の歪んだパーソナリティであると再確認しだけだつた。

どうしてこんな子と付き合つてるんだか、今じゃ理由が浮かばない。

月と星がこの^{「メティ}喜劇をケラケラ嗤つて見てているような気がする。そう思つてゐるならそのありもしない目は腐つてゐ、と叫びたい。これはどちらかといふと恐怖劇だ。^{「ランギニヨル}

殺氣が肌を焼き、綾瀬の視線が矢のように刺さる。ほんわかした言動のくせにそれらは本物だ。

もし綾瀬が外套を着ていたら、中から遙の死体が出てきそうなくらいの修羅場なのだ。

明人は背を向けて一目散に駆けた。一応の措置だった。もちろん、逃げ切るなんて不可能なのは承知している。

ひとまず、綾瀬の気が済む方法を考えながら逃げるのだ。

幸い綾瀬の方もすぐに追い詰めるつもりはないよう見える。

綾瀬の場合、何を考えてその行動に至っているのか逆に怖いということもある。明人はネズミをいたぶる猫気分でないことを心の中で祈った。

夜の町に靴音が響く。もはや空虚ではない。生命の躍動を感じさせる力強い疾駆。

明人にとって綾瀬との奇妙な再会がもたらしたのは恐怖だけではなかった。頭の片隅、心の底では彼女を信頼しているのだ。希望もまた確かに存在しているのであった。

第14話B・災会 -happy reunion-

明人は闇雲に夜道を逃亡していた。彼を追う靴音はだいぶ前に途絶えていたが、油断は禁物である。なにせ追手はあるの綾瀬である。気がついたら目の前にいました、なんてことはよくあることだろ？

「ひい、ふう……」

明人は息切れを押し殺しながら、偶然通りかかった公園の片隅に身を潜めた。草木が茂って枯葉が人知れず積もっており、隠れるにはお詫び^{あつび}向きだ。

辺りを窺うも街灯に照らされた寂しい遊具群しか確認できない。BGMは声だけなら好感が持てる秋の虫たちのコーラスだ。

すでに冷えた汗が流れてきた。しばし休憩だ。すっからかんの腹で肌寒い町を疾駆すれば体力の消費も半端じゃない。

息遣いも安定し、冷静になつてみると想い出したことがある。興奮しているほうが空腹や疲労は感じない。休憩はミスかもしれなかつた。

そんなことより事態は深刻だ。

綾瀬の凶行^{いたずら}は今に始まつたわけではないが、今回は度を越していく。まして性格的に本心が図りがたい。猫が鼠を嬲るようなものなのか、じやれているだけなのか分からぬ。どっちにしろ殺人未遂はかなり悪質だ。

綾瀬を信用しているし、嫌いになつたわけではないが恐怖を感じたのも事実。

「お前何がしたいんだよ……」

明人は深く溜息を付いた。活力を吐いて、代わりに空虚と無力と寂寥を吸い込んだみたいだ。血管に流入した秋の毒が全身に回つて、筋肉を弛緩させる。

どつと疲れが押し寄せて、明人は地べたに腰を下ろした。柔らかな枝葉の死体が優しく受け止めてくれた。

両親の死。綾瀬や藍、遙との決別。策を巡らせる小夜。毒はネガティブを生み出し、今まで何とも思わなかつた出来事をトラウマに進化させていった。

現実逃避だつてことは百も承知、それでも眠つて目覚めたら平穏無事な世界に戻つている、そんな夢を見たい。

「俺はよくやつたよ、そろそろ休んでもいいんじゃないか」

深層^{ダム}心に溜めた陰鬱^{いきな}が噴き出す。引き起こされた黒い鉄砲水^{いさな}が全てを飲み込んでいく。粘着質の闇に誘われ、明人は眼を閉じた。

どれくらい時間が経つただろうか。何かが明人の顔に触れた。

「うつ」

悴^{かじか}む身体になお冷たい氷のような感触にビビッて眼を開けたのが、周囲は真っ暗なままだ。

背後には人の気配がある。息がかかるほど近くにいるそいつの手で目隠ししているのだと分かつた。

綾瀬？ もう追いかけっこは終わりなのか。
「だうれだ？」

後ろから聞こえたのは紛れも無い藍の声だった。

だが、藍がここにいるわけがない。今頃は小夜に……。

「綾瀬だろ。もう手の内は割れてんだよ」

力無く答えると、藍の声は場違いに明るい調子で返してきた。

「ぶー。正解は『明人のことが大好きで24時間一緒にいたいと思^うあまり、トイレのドアをこじ開けようとしたらさすがに怒られた綾瀬ちゃん』でした」

「わかるかつ！」

明人は思いつきり身体を捻ると後ろの人物に覆いかぶさる形で倒れこんだ。

そして勢いがつきましたので少々乱暴ではあるが、くちびるにキスをした。綾瀬をびっくりさせて黙らせるために考案した最終手段をこんな形で使うことになるとは後悔の至りだった。

「んんっ！？ むぐうっ……！」

やけに暴れる。驚きすぎてパニックになつてているのかもしない。草むらで絡み合つ2人を月があつかなびっくり照らし出した。

「いやあああ！？」

謎の人物が明人を跳ね除けて、草むらから飛び出した。

「うわああっ！？ どういうことだ！？」

キスしていたのは恋人達ラヴァーズではなく正真正銘兄妹ブランザーズだった。

「お、お、おにいちゃん！ なにすんのよ！」

直感した。紛れも無く本物の藍が怒鳴り散らしている。明人は本当に言葉を失つたかのように、やわらかい感触の残るくちびるをパクパクさせるだけだった。

「ねえ知ってる？ 近親相姦つてタブーなんだよ」

神出鬼没豆型不快生物みたいな文句が聞こえた方向に、明人の首が粗悪なロボットのような動きで向いた。

「明人顔色悪いよ。病院行けば？」

極悪な天使の笑みを湛えた美少女、もとい綾瀬はどこまでも愉快そうだった。

「お、お、おまつ……！」

脳内が遠心分離機にかけられたようにじちゃ混ぜで、正常な思考などできない。明人は溢れ出るままの感情に身を任せ、足音荒く綾瀬に歩み寄つていく。

明人の烈火の如き憤怒の形相を見て、綾瀬も今度ばかりはやりすぎたと思ったのだろう。怯えて逃げることもせず、ぎゅっと眼を瞑つた。

明人は縮こまっている綾瀬の肩を掴むと、今度こそ恋人の震えるくちびるにキスをした。

綾瀬の鼓動も速くなつていいくのが分かる。明人自身もそうだった。たっぷり十数秒ほどの口付けを交わした後、明人は一旦離れた。口元を結ぶ透明な架け橋が月灯りを反射してキラリと光ると、やがて途切れた。

どこか切なそうな表情で瞳を潤ませている綾瀬を無言で抱きしめる。

独りよがりの性分は損なものだ。気付かないほどの寂慮を少しづつ蓄積し、最後には呑み込まれてしまいそうになる。だから今は支えて、繫ぎ止めていて欲しかった。

とても温かく自分を迎えてくれる彼女に少しでも疑心を持つていたのが恥ずかしくなつた。思わず腕に力が入る。

「ちょっと、いたいよ」

「ごめん。でももうすこし、このままでいさせてくれ

もぞもぞと身体を揺らす綾瀬だが、嫌そうには見えない。明人は湿り気のある声で謝り、彼女が楽なように幾分力を弱めた。

「……明人、泣いてるの？」

「泣いてねえ。なんでもねえよ！」

明人は声を荒げたが、水気を払拭することはできなかつた。

綾瀬もいつものように馬鹿にするでもなく、ただ悲愴を汲み取つて明人の背に手を伸ばした。自分より大きいこの男がひどく小さくて弱弱しくて、愛おしく思えた。

しばらく抱き合つていると明人の方から離れていった。綾瀬は少し残念そうな、それでいて満ち足りた表情を浮かべていた。

「……サンキューな、それとおかえり」

「何それ、カツコつけてんの？」

綾瀬が戻つてきたら最初に言ってやろうと思つていた言葉。彼女は予想通りこちらが困る反応を示したわけだが、それがまた嬉しい。「口でくらいカツコつけさせてくれ。俺なんて何もできない人間なんだからさ」

「キスはできるじゃん」

カウンターが鋭い。今思い返して少々恥ずかしく感じていたところなのだ。

「いや、その、なんだ……」

「ふうん、やつぱり妹ちゃんがいいんだ。このシステム！」

綾瀬の言葉は藍が敏感に聞き取っていた。恋人達の愛情を垣間見て、誤キスの件は不問にしようと思っていたのに、その一言で再炎上した。

「兄さん、そうなんですか？」

「……そんなわけないだろ」

「なんですかその間は！？」

「システムコンシステム……」

冗談がキツすぎたようだ。藍はツーサイドアップの髪を立てて憤つていて、綾瀬はナイフを明人にだけ見えるようにチラつかせている。それ幻覚だよな、信じていいよな？

大丈夫ラヴァーズだし、という根拠のもとそれを片付けると、明人は妹に向き直った。

「すまん。ホントあの時は気が動転してたんだ」

「……もういいです」

藍は半分赦して半分恨んでいるようだった。もう構わない方がいいと思った。

「じゃ、なんでここにいるんだ？」

「小夜ちゃんと家にいたら綾瀬さんが来たの。それで気付いたらここに」

綾瀬を見ると、したり顔で小さく舌を出していた。

「なら旦隠しは？」

構わないと誓つたばかりだが、謎が深いので聞きたくなってしまった。藍には我慢してもらおう。

「……あれしたら兄さんが元気になるし仲直りもできるって綾瀬さんが」

「頼まれたくらいでよくやる気になつたな」

「私だつて兄さんが小夜ちゃんにあんなことするなんて信じられないからたし、何かワケがあるんじやないかなつて」やはり話さないわけにはいかない。これ以上先延ばしにしても悪影響しかでないだろい。

「もちろんある。長いけど、いいな?」

明人の問いに神妙に頷く藍。明人は深呼吸して、発端となつた春の朧月夜の話を始めようとした。

その時、公園の上空に冷たい光を纏う人影が飛来した。それは明人ら3人の姿を見るや、その背に負つた光翼を音も無く羽ばたかせた。

「冷光の白雨」

放された羽根は光輝く豪雨の如く公園中に降り注ぎ、遊具を両断し、地面に無数の穴を開けていく。

3人の中で襲撃の前兆に気付いた者はおらず、回避もままならぬうちに光に飲み込まれた。

光弾が止み、夜の静けさが戻ると襲撃者は怯む3人の前に降り立つた。

「さ、小夜ちゃん……そのカツコは……」

最初に立ち直った藍が、友人の異形への変貌を目の当たりにして驚愕のあまり固まつてしまつた。

「どうなつてんだよ、なつ……」

「もう来ちゃつたんだ」

明人と綾瀬も復帰し、小夜とまみえた。

全身を覆えるほどの巨翼を生やした小夜。その姿は天使を彷彿させる。

だが灰色の髪と深紅の双眸までも強調され、どこか墮天使のよう

な雰囲気も醸しだしている。例の「スロリならむりに際立つのだろ
う。

「藍ちゃんは返してもらいます」

諸諸の反応を無視して小夜は落ち着いた足取りで歩み寄ってきた。
「まづいな」

小夜を見据えるも何かできるわけでもなかつた。

「妹ちゃんと逃げて。私が足止めするから」

綾瀬もいつに無く真剣な面持ちで異形と対峙する。

「綾瀬……氣をつけろよ」

明人は突つ立つたままの藍の手を引いて駆け出した。本当は綾瀬の傍に居てやりたかったが、足手まといになると直感し戦略的逃走を選んだのだった。

「綾瀬さん、貴方では無理です。私も同胞を傷つけたくはありません」

外気以上に冷たく、心電図の平行線みたいな声だった。
最初に会つた時はもつと普通に喋つていたはず。お仕事モードつてわけね。

綾瀬に恐怖は無かつた。明人のためにも負けられない。

「あはつ。そんのはやつてみないとね」 使い古された文句を言つてみる。意外と悪くない気がした。

「そうですか。 静かなる月、聖なる夜光よ、我が手に淨化の刃を」

一瞬で小夜の右肘あたりから先が月光を集めたよつた淡く透き通る光の長剣に変化した。

「《月宮の天使》、いきます」

小夜の名乗りが終わると同時にあらかじめ公園内に張つた《虚構の樂園》^{エリュシオン}が展開された。発生した夢幻の闇に2人の少女が呑み込まれた。

第15話・幻闘・i l l u s i o n b a t t l e (前書き)

ちよつと遅くなつました。スミマセン。

評価をいただいたモト様、PAPAS様、サンクスです。励みになります。

おかげで次はもうちょい早く上げられそう。

「今宵の特別ゲストはこちら、オーガの皆さん！ 腕力、精力、浅知恵の持ち主でーす」

闇が晴れるとそこは元の公園だつた。

筋骨隆々とした2メートル強の巨人が4体、手に手に棍棒や斧を持ち臨戦態勢にはいつているのを除けば、

「くだらない幻覚。一度ならともかく2度目は通用しない」

小夜は冷徹に状況の分析をし、勝利を確信した。

「くだるわよ。夢幻だつて分かつてんんだろうけど逃がさないから。あなたの精神^{ハート}なんてズタボロだよ」

どこからともなくハイな綾瀬の声が聞こえてくる。

おそらくは近くにいる。私は何も無い公園のど真ん中で突っ立つてゐるが、寝てゐるだけ。

グオオオッ！

巨人が下等な唸りを上げて突進してきた。一步が長大故に物凄く早い。

小夜はさつと飛翔してかわし、斜めに急降下しながらタックルを空振りしたオーガへ斬りかかった。落下のエネルギーに羽ばたきが加わり弾丸のような速度である。

右手の光剣がオーガの背中を斜めに切り裂き、巨体が汚い断末魔と血しぶきを搾り出して果てた。

小夜は地面レスレを飛ぶと再び空に舞い上がった。速度のため小回りが利かず、急上昇と急降下を繰り返しての攻撃にならざるえないのだ。

そうはいつてもまさに光速の斬撃を鈍重な巨人たちが知覚することは無く、巨大な肉切れに変わつていた。

「終わりです」

ふわりと着地して小夜は宣言した。身体中血で汚れていたが、呼吸1つ乱れていなかった。

藍が誘拐された時と同じなら、これで《虚構の樂園》^{（ヒリューション）}は消えるはずだった。

「……勝負にならないなあ。でもお

ややあって姿を見せない綾瀬からの返答があった。
この異空間を司る《幻象》がこの場においては、そうそう幻覚も消えはないのだろう。

「く、あつ。こ、この痛みは……？　どこから」

突然小夜が小さく悲鳴を上げて、横腹を押さえた。
外傷はない。巨人の血で赤くなつた服がそこにあるだけだ。

理由はどうあれ、敵がこの隙を見逃すはずはなかつた。

巨大な物体に体当たりされ、小夜の小柄な身体が吹つ飛ばされた。
頭を打つたせいで視界が揺れる。

地面に放り出された彼女に向かつて、黒い塊が押し潰そつと落下していく。

「くつ……」

無我夢中で羽を動かし空へ回避した小夜は、地面に埋もれた謎の物体を確認した。

それは小夜が斬りおとしたオーガ胴体だった。

見れば周囲には骨をチラつかせ、赤黒い体液を滴らせた氣味の悪い肉がいくつも浮遊していた。

「死体のリサイクル？ 新しいわね」

正体が分かれれば、重量を活かした直線的な突撃しかできない肉塊など恐れるに足りない。

「なによクールぶつて、出られないくせに」

さして驚いた様子もなく軽くあしらう態度が、綾瀬は気に入らな

かつた。

「ふふん、だつたら……おいでませ不淨の肉紐くんたち、生意氣な小鳥を捕縛しろ」

綾瀬の一言で巨人だつたものが震えだした。よく観察していればそれは腹部だけだといふことが分かる。

小夜もそれに気付き、警戒しつつ剣を構える。

静寂は大きな肉を素手で引き裂いているような音で破られた。現れたのは言葉通りの無数の肉紐。正式名称オーガの腸管。人間でさえ7～9メートルある器官だ。3メートル近い巨体にはどれほど詰まっているのか計り知れない。

「趣味ワル」

感情をあまり出さない小夜も今度は顔をしかめた。一応元は人型をしていたのだ、その腸を引きづり出して操るなど生への冒涜だった。

綾瀬の夢想によつて動くそれは、繋がつている他の臓器を引き連れて上空の小夜に向かって伸びた。

「ふつ！ たあつ！」

小夜は絡み付こうとするそれらを微細な翼の動きによる華麗な円舞でかわしながら切り払つていく。

光刃が一振りされる度に詰まつた汚物と腐臭を撒き散らして腸管が両断される。

千切れたものは分かれて再び動き出しが、それでも地獄に招かれた天使は圧倒的だった。

しかし勝利は易々と手に入るものでない。

「が……っ」

横腹を襲つたのと同種の痛みが今度は右肩を抉つた。右腕と同化した剣の動きが止まる。

さつきから、何なの……

「いやあ！ 離れて、離れてよお」

自らの叫びがこの痛みへの思考を中断させた。

不快感の塊のような肉紐が小夜に群がり、縦横無尽に身体中をのさばる。

「ゴムのような感触に不釣合いな力強さで、剣を動かすのはおろか身じろぎすらままならない。

吐きそうな臭いを放つ怪物の腸が雪色の翼に汚物を擦り込んでくる。

見るの耐えない光景に小夜は気が触れてしまいそうだった。

これは幻覚。そう念じても汚物の侵食は止まらなかつた。

「天使を穢す背徳感つてすごいんだね。それじゃ邪魔なハネハネを取りまーす」

無理やり翼が広げられ、腸管で固定された。肉の十字架に磔にされた憐れな天使の図だつた。

ぼきつ、べきつと恐ろしい音がしたかと思うと、脳内が漂白されるような激痛が全身を疾走した。

ぬめる肉蛇に首を動かされて小夜が見たものは無残な光翼。折られて捻じ切られ、かつての純白を真つ赤な血に汚染された翼とむしられ散らされた羽根の織り成す異風景だつた。

オーガの巨腕が浮遊し、その暴力的重量が羽を完膚なきまでに破壊しようと執拗に振るわれる。

白銀の羽根が夢く散つて小夜の視界を埋める。

翼は完全に折り取られ、眼下の公園に捨てられた。もう肩甲骨のあたりに翼の付け根のみが残るだけだつた。

攻撃対象を失つた野太い腕が拘束された小夜の身体を豪打するのに時間はからなかつた。

腕だけではない。褐色の脚、生氣の失せた氣色悪い頭部も寄つて集つて翻つてくる。

殴られ、蹴られ、時に噛み付かれて、あちこちの骨が折れた。生きたまま火葬されるような苦痛が燃え盛る。

綾瀬の趣味なのか顔は全く攻撃されない。

だが無事なことは必ずしも良いことではなかつた。

意志に抗い瞼が裂けんばかりに開かれて、小夜の紅眼に残虐無比な光景を焼き付けるのだった。

安穏な死を望むほどの痛みに苛まれていたが、小夜の精神は崩れる足場にしがみついて離れない。

肉体は何度でも再生するのが《幻象》^{ファンミナ}の特徴だが、心は一つしかない。

《起源》^{オリジン}に願望を伝えた、そのときの分しか持ち合わせていない。精神崩壊、これすなわち《幻象》の死も同義。

崩れ去る寸前の小夜の精神が暴虐の中に見出したのは消滅への覚悟ではなく、藍の笑顔だった。

藍ちゃんは誰からも敬遠される灰髪と紅瞳を持つた異形^{わたし}に、分け隔てのない微笑をくれた。

もう会えないかもしれない。心を壊されて、藍ちゃんを認識することができなくなる。

「やだよおおお！」

発狂していくような声で小夜が叫んだ。

死ぬ間際において高速で思考を巡らす。この悪夢を終わらせる方法を模索する。

腸管が小夜のボロ雑巾みたいな身体を持ち上げ、更なる高みへと連れて行く。

地上十数メートルに上り詰めると、グルッと一回転させてそのままの勢いでぐつたりとした小夜を地上へ叩き落した。

頬を切り裂くほどに風がぶつかってくる。地表が目前に迫る。落ちていく身体とは逆に、1つの矛盾が浮上した。

何故、翼から血が出ているのか。

現実ならこれはありえない。この翼に実体などないのでから。

それが頭の片隅に引っかかった途端、落下感と激痛が和らぎ、代わりに脇腹と右肩の痛みが鮮明になってきた。
さりに念じると半透明になつた地面の向こうに綾瀬の姿が見え隠れする。

小夜は矛盾への思考に全神経を動員した。
ぼんやりとした地面に墜突する間際、真夏の太陽の「」とき裂光が
小夜の視界を埋めた。

「……ん？ 『樂園』がおかしい」

『虚構の樂園』に異常を感じ取つた綾瀬が小夜が横たわる場所に視線を遣る。

そこにはジャングルジムの棒で肩と脇を貫かれた天使が横たわっている、はずだった。

「いない！ どこに……」

焦つて公園を見回す綾瀬。時すでに遅かつた。

「はあああ！」

高度な機動力を誇る翼を活かした光剣による鋭利な刺突。容易く綾瀬を串刺しにすると小夜はそのまま突進し、1本の木に綾瀬を繫ぎとめた。

大きく木が揺れ、葉がさわさわと鳴つた。

「ぐぎぎ、げぼっ」

信じられないといつた顔で綾瀬が小夜を見る。口は血を流すだけで言葉を紡がない。

「終わりです。輪廻を経て、再発生を待ちなさい」

綾瀬の腹に沈んだ刃が鼓動するように光つた。

綾瀬の身体が端のほうから霧のように立ち上り消滅していく。苦しまないようにしてやつたのは、同胞への思いやり故だつた。

小夜は浄化が完了すると、綾瀬の墓となつた木に背を預けてほどんど倒れるように座り込んだ。

『虚構の楽園』の後遺症か全身がひどい幻視痛に見舞われていた。精神的にもかなり消耗していて、憂鬱このうえない。心身共に傷の回復には通常より時間がかかりそうだ。

「……くう

小夜は深呼吸して歯を食い縛ると2本の金属棒を抜いた。右肩をやられたせいで剣と化した右腕を動かすのが困難を極めた。それで無理に綾瀬を斬つたものだから更に悪化したらしい。傷は2、3時間あれば塞がるだろうが、今それを待つ余裕はない。この町は住民たちが思うより危険な状態なのだ。そんなところを非力な人間の兄妹がふらふらしていたら何が起こるか知れない。

「行かないと……まだ話していないことがいっぱい、ある

立ち上がろうとして、小夜は傷を押さえて俯いた。荒い吐息が白く漂う。

その靄を散らして誰かが目の前に立った。

「苦しそうだね

「え？」

小夜が頭を上げようとすると、顔を殴られた。後ろに突き飛ばされて、逆戻りになってしまった。

「あははっ、油断したなあ。まさか破られるなんて思つてなかつたし。でも一重に掛けといてよかつた」

酷薄な笑みを浮かべて綾瀬は負傷している小夜の脇腹に片足を乗せて踏みしだいた。

「ぐ……何でっ、邪魔するの」

歯を食いしばって囁くほどの声で小夜が聞いた。

「アンタは明人を取ろうとするから嫌い」

綾瀬から笑顔が消え、小夜の存在さえ認めないとよつた眼差しが放たれる。

「そんなことしないつ。だからどいて」

「ダメだよ。アンタが行つたら明人が怖がるでしょ」

「その明ちゃんが、『幻象』になつても、痛つ、いいの」

「……ふふ、あははっ」

綾瀬は小夜の質問に本当に楽しそうに笑つた。純粹で無邪気な子供のような表情で。

「それが、あなたの目的……なの」

「好きな人と永遠に一緒にいたいだけ。誰の差し金か知らないけど、アンタのおかげで明人は悲劇を味わつてゐるから『起源』のお眼鏡にかなうかも。それに妹ちゃんもいるから心配ないよ」

小夜は綾瀬を利用していると思っていたが、それは大きな間違いだつたと氣付いた。

気分と感情で行動する綾瀬は知つてか知らずか小夜の計画を破綻させていた。

小夜自身も藍との出会いから生まれた自分の変化を感じたときに計画に限界を感じていた。

それを綾瀬が正体不明の怪物に昇華させたことで今プランは破棄された。

「……藍ちゃんを巻き込むな」

計画が消えた空虚な心に残つた本音が出た。

小夜は右腕を綾瀬に向けた。月光を纏う手が小夜の意志に従つて光の刃に変わる。

綾瀬は驚いてバックステップで距離をとつた。

「まだやる気？　ふふつ今度は何を使って責めようかな……」

無邪気を装つて思考する邪氣の塊。今にも悪魔の空間が再起動しよつとしているのが伝わつた。

「もう遊びに付き合つつもりはない」

小夜が空いている左手を地に向ける。

「消え去れ！」

見る間に公園の地表が淡い輝きを帯びていき、眩しい奔流となつて公園を包んだ。

ガラスの碎けるような音と共に、白光が止む。

「備えあれば……か

『レイドバイアントスコール』

冷光の白雨を最初に放つたのは牽制のためだけではない。月を司る能力を持つ小夜は夜の間のみそれを利用した能力で浄化を扱うことができた。

羽根が沈んだこの土地は小夜の命令で一挙に浄化され、仕掛けられた『虚構の楽園』も消滅したのだ。

元はといえば浄化という名目で自分を虜めていた奴らを殺戮するために『起源』にもらった力。

復讐はとっくに終わった。というよりやめた。

何も生まないし、小夜自身満たされたことがなかつたからだ。

最近はもっぱら『起源』とあるお方のために尽力してきたのだが、それももう潮時かも知れない。

小夜は重傷の心を背負つてのろのろと立ち上がつた。依然として全身は実体無き苦痛に苛まれ、肩と横腹はジクジクと痛んだ。木立から出てみると、どこにも綾瀬の姿は無かつた。逃げられたようだ。

安堵で溜息が漏れた。命の奪い合いでピンと張りつめていた空気がふつと緩む。

冷たいけれど静かで優しい風が公園を吹き抜けた。

「待つてて、いま行くから……」

小夜はとっくに限界だった。

でも、私が行かないと誰も『起源』や綾瀬を止められない。

遙を誘導したことが悔やまれたが、もはやどうしようもない。自分が招いた結果だ。自分でカタをつけてやる。

小夜は弱弱しい足取りで進んでいった。しかしながら、その心は力強い決意に燃えているのだった。

第15話・幻闘 - i l l u s i o n b a t t l e (後書き)

綾瀬のいう二重掛けとは、一度目は精神を切り離して幻覚をかけ、それが破られ肉体に精神が戻ると今度はその2つに影響する幻覚が発生する。というお話。
煩わしいね

第16話・血戦 -blood battle(前書き)

明人の（本当は小夜の）情報を頼りに『起源』がいるという廃寺に赴いた遙。彼女を待ち受けるモノとは……

第16話・血戦 -blood battle-

苔むした石段を登ると、ほんもりと茂った木々の中に使われていない古寺が幽霊のように建つていた。

その周りを囲むように置かれた燭台には蠟燭の灯が揺れ、厳かな雰囲気を作り出している。

『起源』オリジンの好みそうな趣向である。

決戦の舞台に立つた遙は獰猛な三叉の剣『怨疾毒蛇』ハコリョウヘイを構え、仇が現れるのを待っていた。

が動いた。

ワオーン

どこかで野良犬の遠吠えが聞こえた。

じれつたいほどゆっくりと時間が流れ、その人物が全貌を明らかにした。

「な……」

遙は驚きを露わにしていた。現実を目の前にしても信じられない。莫迦みみたいに口を開け閉めした後、ようやく言葉を吐き出すことができた。

「…………アキラ」

「なんだ、驚きすぎて挨拶もできないのか」

彼女は柔らかな光を放つ蠟燭の側に立つた。

細めのジーンズにピチッとしたロング、黒のジャケットを羽織つている。

短めに切られた髪とスラリと伸びた背、多様な武道を嗜んで鍛えられた身体。それでいて女の子らしさを失わない美しい曲線を描く。同性の遙でさえ見惚れてしまいそうなかつての友人がそこにいた。

「どうしてこんなところに……？ それより生きて……」

震える声で疑問を口にする遙。数多の感情がひしめき合つて中から、友達を刺した感触が甦つてきそつて怖かつた。

そんな遙を見て、アキラは微笑んだ。

「怖がらなくとも、ちゃんと生きてる」

「これ、幻……？」

「夢でも幻でもないわ。あたしはちゃんと存在してる」

「つ……来ちゃダメ！」

ひやりと踏み出そうとするアキラに遙が叫んだ。刹那、伸びた銀色の毒牙が暴れた。

『起源』を切り刻めると期待していた『怨疾毒蛇』が腹を立てているようだった。

ギリギリ掠ることもなく、2人は安堵した。

遙は剣を消し去ると自分からアキラに寄つていった。

近づくほどに罪悪感と懐古感が募り、泣き出したくなつた。

「ごめん。取り乱して、でも会えて嬉しい」

それは本音だった。

「あたしも」

どちらからともなく身を寄せる。

それは殺しきけ殺されかけた罪の関係が元に戻ろうとしているかのようだつた。

「……他のみんなは？」

「……あの時死んだよ。残つたのはあたしだけだ」

「ごめん。私があんな」

謝ると同時にアキラが『幻象』だけど『出来損ない』なんだと気付いた。

そうでなければ『毒蛇』による傷は再発生しても治らず、永劫の苦しみを味わなければならないから。

「いいよ。あの時遙も正氣じやなかつたみたいだし。じゃなきゃあんなことはできない」

「うん……」

いたたまれない気持ちになつて遙は目頭が熱くなつた。赦されるわけないのに、どうしてアキラはこんなにも優しいのだろう。私にはできないな、と遙は感服した。

「そういえば、なんでここに」

銃を乱射しているような、何かがすごい速さで石段を駆け上がりてくる音に問い合わせられる。

遙は考えるより先に、アキラを引っ張つて横に飛んだ。真つ黒な物体に今立っていた参道の石畳が抉られた。

グルルル

大きな犬が戦慄を覚えるような唸りをあげて、2人を睨んでいた。夜より暗い闇色の毛、血に飢えた紅い眼、犬というより狼のような凶暴性を漂わせる。

姿勢を低くし敵意とナイフのような牙を剥き出しにする様は、命を狩り慣れた殺し屋のものだった。

「なんだコイツは」

「『幻象』……？」でも動物のなんて聞いたことない

のそりのそりと魔犬がにじり寄つてくる。それに合わせて遙たちも下がつていく。

山の中腹を切り崩して建てた狭い境内なので、すぐに舗装された岩肌に背中がついてしまつた。

「アキラ、闘える？」

「はっ、あたしを誰だと思つてんの」

もともと武術に長けているアキラが『幻象』になつてさらに身体能力が底上げされているのだ。これほど頼もしいことはなかつた。

「そうだよね。でも、あんまり私に近づかないで」

『毒蛇』が勝手に動いて斬つてしまつかもしない。それだけは絶対にしたくない。

頷きを交わすと2人は左右に散つた。

「こっちだ、クソ犬！」

アキラが挑発すると、魔犬が風を切り裂いて飛び掛つた。

「やあっ！」

気合の入った掛け声と共に長く力強い脚が中空の魔犬を蹴り上げ

た。

蹴り上げるとほぼ同時に、アキラは刃の前に浮遊する魔犬にストレートを叩き込んだ。

流れるような一連の動きに遙は一瞬見惚れてしまった。それも束の間、魔犬が遙の方へ飛ばされてくる。

「はっ！」

遙はアキラの意図を汲み、大きく踏み込んでそれに銀の刃を叩き込んだ。コートが鋭い風に煽られ音を立てる。

闇色の獣は真っ二つに裂かれ、粘っこい影のようなものを撒き散らせて地面に落ちた。

「やつた」

連携が華麗に決まり、遙は素直に喜んだ。

なんだか友情が確認できたみたい、そう思つともつと嬉しく感じられた。

遙がアキラに微笑むと満足げに頷いていたアキラの表情にひびが入つた。

「痛ッ！？」

違和感を覚える間もなく、遙は左太ももに何かを打ち込まれ、すぐさまその場を離れた。

去り際に自分の踵のあつた所に斬撃を繰り出すと、何か手応えがあつた。

「アイツ不死身か……」

2人の目線の先で魔犬は立ち上がった。

遙に真っ二つにされた胴体がどうぞとした影のような物質となつて、地を這い身体を再構築しようと集結していく。

不完全な犬型の身体からは先の切られた鋭い針が飛び出でいて、ドロリとした黒色のモノが滴つていた。

このまま好きにさせるわけにもいかない。

再生途中の怪物に遙が銃弾を浴びせかける。

当たる度に黒い粘液のような身体をよじらせるが、効いている風ではなかつた。

遙は弾の無駄だと判断し、銃撃を止めるとアキラのところに左足を踏み出した。作戦を練るなら今しかない。

「いたつ」

「大丈夫か？」

膝をつきそうになつた遙を、アキラが支える。

「平気、すぐ治るから。それよりもアイツを」

完全に元に戻つた魔犬が水でも浴びてきたみたいに身体を震わせていた。

それが終わると、闇の獣がギラつく双眸で2人を睨みつけた。戦意は衰えず、むしろ傷を負つたことでますます猛り狂つているようだつた。

「あたしが引きつける。遙は回復に専念して」

アキラは一方的に言いつけると、本殿の裏手に向かつて走つた。そこには蠍燭が無く、どこまでも深い黒が居座つている。

「そつちは危ない」

人間同様、『幻象』は特殊な者を除いて夜目が利かない。しかも五感の鋭い獣相手では極端に不利なフィールドだ。

遙の叫びも虚しくアキラは闇に飛び込んだ。

魔犬は遙と裏手とを見比べるように首を動かした。その微々たる逡巡の後、遙に突進してきた。

これでアキラに無理をさせなくて済む。

遥は安堵しつつも、氣を引き締めて魔犬を迎え撃つべく剣を振った。

3つの刃が軌跡を生む。

しかし、黒い怪物は大きく跳躍すると遥を飛び越した。

「く……つあつ！」

無防備な背中を魔爪が切り裂いた。コートの生地と一緒に血が弾け飛ぶ。

魔犬は見向きもせずに寺の裏へ回つていった。

「ぎやあああ！」

すぐにアキラの絶叫が聞こえた。

遥は弾かれたようにその暗がりに走った。足や背中の傷は氣にならない。

アキラを助けないと。それしか頭に無かつた。

思つたとおり裏は表よりもさらに分厚い木の葉の天蓋のせいでも何も見えない。

アキラの荒い息遣いが聞こえた。

遥は危険を承知で意識を探知に向けた。

すこし離れた所で動かすにじつとしている点とその周りを徘徊している点が見えた。

「アキラから離れて！」

遥が叫ぶと、その点は遥に突進してきた。

すっと身体をずらすと、脇を死の風が吹き抜けるのを感じた。そこに回し蹴りは放つ。

鋭い蹴りが魔犬を正確に捉え、明るい表側に叩き出した。

「アキラ、早く出て」

遥は一言叫ぶと魔犬を追つて表へ躍り出た。立ち直りつつある downstream 黒い物体に剣を振り下ろす。

魔犬は滑るように斬撃をかわすと、石畳を叩いた衝撃で痺れてい

る遙に飛び掛つた。

遙はすでに影響の無い左手の銃口を向けていた。放たれた3発の鉛弾が回避不能の状態にある魔犬の頭部を穿つた。

しかし魔犬は止まらない。刃を取り揃えた強靭な顎が白い首筋を狙う。

遙は咄嗟に左腕を戾してガードした。魔犬の大顎がその腕に喰らい付く。

「ぐうっ、ああああ！」

想像を絶する苦痛に遙は、髪を振り乱して身悶えた。そのせいでバランスを崩して、魔犬に覆い被される形になる。

魔犬の牙は骨にまで届き、さらに噛み碎かんと喰いしばる。

さらに鎌のような形に変形した前脚が振り回され、コートを裂いて白い肌を刻んだ。

飛び散った血が月光を浴びて白く光る石畳を汚していく。このままじや殺される。

遙は言つことを聞かない身体を無理やり奮い立たせ、無事な右手で無駄に大人しくしている『毒蛇』を魔犬の喉元に突き刺した。血なのかもよく分からぬ墨みみたいな液体が大量に噴き出して、遙の身体にぶちまけられた。

魔犬は千切れそうな頭部を従えて遙から飛び退いた。

「はあ、はあ……つう」

使い物にならなくなつた腕を庇いながら何とか立ち上ると、遙はみるみる傷が癒えていく魔犬と対峙した。

視界が不安定に揺れ動く。ふとした拍子に気を失いかねない。コレは使いたくなかった。でもそんなことも言つてられない。身体が動く内に使わないと乗つ取られる。

「罪深き鮮血の虐殺者よ、この身体貸してあげるわ」

遙の囁きで『怨疾毒蛇』の3つの刀身がめっちゃやたら暴れ出した。

それは異形の舞。血に飢えて気が触れた銀色の怪物の狂乱であった。

ズクン、ズクン……

心音が異常に大きく聞こえ、嫌な感覚が身体中に染み渡つていく。忌諱すべきもう一つの自分が歓喜の産声をあげた。同時に遙は意識を手放した。

「……ククツ」

ヒステリックな笑いが血塗れた少女の口から漏れた。

そこに立っていたのはもう人間と呼べるモノではなかつた。

痛々しい傷が徐々に塞がつていく。虚ろだつた瞳は爛々として禍々しい光に侵蝕されていく。

『復讐の女神』^{ネメシス}の原点。

「ク、ハハハツ！」

闇色の獣でさえ、その変容を感じ取つたらしい。

自らと同じで傷が塞がつていく遙に一瞬恐れを成したもの、遙の咲笑に対抗するように咆哮した。

ダダダダッ

吼え声と共にブラックホールの如き口内から放たれたのは無数の銃弾。魔犬は遙に撃ち込まれた弾を撃ち返していた。

弾のほとんどは乱舞する刃に弾かれたが、数発は遙の身体を貫通した。が、その程度のこと、狂える虐殺者は氣にも留めていない。

『女神』は弾が撃ち尽くされるのを待つて、それを合図に飛び掛つた。踊り狂う蛇の柄を片手で持ち、魔犬へ突き出す。

魔犬は頭部を黒い槍に変え、地面を蹴つた。

激突する両者。

槍が『女神』の肩を深々と抉つた。のも束の間。

『女神』の配下の銀蛇たちが暴れ、粉々にしていく。

『女神』は満面の笑みで魔犬を地面に叩きつけ、斬り潰した。大型のモノがミキサーに入れられた果実よろしく粉碎されていく。

最後の力を榨り、全身を変異させた無数の針で殺戮者の身体を貫

くも無意味だつた。

バラバラにされ無に帰す魔犬。再生しようと集まる影も、跡形もなく消滅していった。

「また1匹！ ああ、ハハハツ」

『女神』は楽しくて堪らなかつた。狂氣染みた高笑いを隠そうともしない。

その喜びに同調して『毒蛇』も魔犬の黒い物質で濡れた身を躍らせる。

「遙……？」

アキラが重そうに身体を引きずりながら現れた。
友人へぐりつと首を向ける『女神』。正気などどこにも見当たらぬ。

刹那、アキラの前に現れる。

「もう1匹みつけた」

血に酔つた遙を見て、アキラは恐怖した。
あの日遙が目前にいる。

「なんか見たことあるヤツだな。ま、カンケーないけど」

遙が胸の前にうねる剣を構える。

全身の筋肉が強張り、呼吸すら止まる。まさしく蛇に睨まれた蛙のようだ。

あつ。あたし死ぬんだ。そう思つてアキラは目を瞑つた。

いつまで経つてもあの劇毒を盛られながら切り刻まれる苦痛はやつてこない。即死はこんなものかもしれない。

アキラが恐る恐る瞼を開けると、苦しそうな友人と眼が合つた。
胸の数センチ手前で銀色の死刑執行人が前後していた。

「に、逃げて……あき、ら、つ」

遙が消え入りそうな声で囁いた。汗だくなつて暴走する本能を懸命に食い止めていた。

アキラは半歩下がってしまった自分を叱りつけた。

「がんばれ、そんなのに負けんな」

アキラの口から自然と応援の言葉が出ていた。

その言葉に遙がゆっくりと頷くと、《毒蛇》が薄れ始めた。時折威勢を取り戻して抵抗するも、遙の意志が勝利した。

完全に剣を消し去ると、遙は倒れて死んだように動かなくなつた。だが、その表情は八苦を滅した行者のように穏やかだった。

「……お疲れ、遙」

アキラは包み込むような優しい口調で呟いた。しかしその表情には翳りが見える。

一旦遙から視線を上げて、空を見る。何もしてくれない月が彼女を見つめ返しただけだった。

アキラはもう一度遙の幸せそうな顔を見つめた。何をしても赦してくれるそうな人懐っこい表情だ。

アキラは血が滲むほど唇を噛み締めると、遙をおんぶして廃寺を後にした。

暗黒たる石段。ともすれば足元さえおぼつかない。

ポニー テールに纏められた遙の髪が踏み出すたびに揺れていた。

第16話・血戦 -blood battle(後書き)

えへ、やつとマトモなバトルが書けました。今までのはバトルって
いかか虐待やら虐殺の類。
巧く書けてますかね?

第17話 A・惑志・puzzled encounter (前書き)

puzzled encounter 惑いの邂逅

第17話A・惑志・puzzled encounter

立ち止まれない。止まればあの輝く翼で、光の剣で殺される。

明人と藍は緑が多すぎる公園周辺の地区を抜け、市街地の端のほうに来ていた。

夜風にざわめく暗緑の木々は数を減らし、同時に暗い気分も晴れていいくようだつた。

ちらほら人や車が見られ、なにより街灯同士の間隔がとても狭い。「ちょつ、痛いんだけど」

今までずっと沈黙していた藍が露骨に嫌そうな声を上げた。
最初は綾瀬や小夜についての質問をマシンガンのごとく撃ちまくつていたが、明人が何も答えないでいると押し黙つてしまつていたのだ。

「ああ、すまん」

知らず知らずのうちに力んでいたらしい手を放してやる。
藍はむすつとした何か言いたげな顔で明人を見つめた。

「なんだよ」「説明して」

人が見受けられるようになつて安心したからだろう。また疑問の波が押し寄せてきたらしい。

「しらばっくれないで！」

明人はうんざりして欧米を意識した肩の竦め方をして見せた。

「はいはい、んで、小夜のことか？」

「それ以外になにがあるの」

やはりか。話してやりたいがこのタイミングはマズイ。落ち着いてもらわなければ、致命的な誤解を生みかねない。

「今はダメだ」

何度も繰り返した言葉をまた口にする。

明人としては当然のことを言っているのだが、藍には伝わらなかつた。

「ふん、だつたら小夜ちゃんに直接聞くから」

そう言つて踵を返した藍の肩に素早く手を掛ける。

藍の精一杯の強がりはそれで止まつてしまつ。今の自分が夜一人歩きなどできないことは分かつていた。

サラリとした長い髪が手の甲を撫でて、その向こうに肩越しに振り向いた藍の恨めしそうな眼が現れた。

「ウザイ」

その言葉は辛辣で心外すぎる。

明人は一瞬で沸点に到達しかけた怒りを何とか鎮圧すると、口を開いた。

「死んでもいいのか」

あまり言いたくなかったが、それが現実になる可能性は十分すぎるほどなのだ。

「え……」

死。想像もしていなかつた言葉に藍は動搖を隠せない。

「行くなよ、俺じゃ守り切れないんだ」

そこへ更に弱弱しい兄の態度が冷水をかける。

少しきールダウンした頭で考えても何が何だか全然理解できない。それでも兄の心配だけは本物だと分かつた。

「……ごめん」

「もう行こう。綾瀬の稼いだ時間を無駄にしたくない」

2人は手を繋いで歩き出した。今さつきとは打つて変わって、いたわるようなペースだ。

藍の手は震えていた。手だけではない。全身が凍えたかのように小刻みに振動している。

当然だ。いきなり友達があんな姿で現れて平氣なわけがない。明人はふと取り戻した中学時代の記憶を思い起こした。

小夜は元来心優しい女の子だったと思う。それに少しばかり正義感が強い所があるのを知っているのは、俺しかいないうだろ。

誰も彼女を相手にしない、というより人間扱いしていかつたからだ。ただ容姿がちょっと変わってるというだけで陰惨極まるイメージを受けていた。小夜にしても誰か心を許せる友人が欲しいはずだ。なら藍を合わせてもいいかもしれない。小夜の風貌なんか気にしているいようだし。

明人は一瞬そう思つたがすぐに振り払つた。

『幻象』になつて彼女の中身は変わつてしまつた。幸せになりたい、とかいうワケのわからない理由で両親を惨殺したのがその証拠だ。

万一藍が命を落としてみる、綾瀬と違つて戻つてはこないんだ。

歩くことに喧騒と街の明かりが大きくなつていく。

一先ず胸を撫で下ろすことはできる。しかし何の解決にもなつていらない。逃避は解決の対岸にある。

藍の疑心は肥大化しているように見える、綾瀬の無事も知れない。どろどろと流動する不安が前向きな思考を呑みこんでいくような気がした。

その時、後ろを向いていた藍が小さく声を出した。途端に辺りが昼間のような明るさに包まれた。

「う、眩し」

振り返ろうとしたら白い烈光が眼を貫いた。

きつく瞑つた瞼の向こうで徐々に光が収束していく。

ゆっくりと眼を開けると、今来た道の方向、公園の辺りに光が收まつっていくのが見えた。

「何があつた」

「知るわけないでしょ」

眼を擦りながら藍が不貞腐れたように言った。

「神の月明かり、といふのはどうで？」

不意に背後から聞き覚えのある声がした。

ぎょっとして首を回すと、この場においてはいけない人物が立っていた。

「やあやあ榎原さんズじゃあ「ぞいやせんか。」んばんわ、なんとも不思議な夜でさあね」

その和服の男は何が面白いのか胡散臭い笑いを刻んだ口を吊り上げていた。

「……オリジン」

「あ、九鬼さん」

明人はしまつたと感じたが後の祭りだ。

遙の話が頭にこびりついていて、つい口を突いて出でてしまった。言い訳にもならない。

さつと藍を見たが動搖していたおかげか氣付かなかつたようだ。九鬼も聞こえなかつたかのように表情を変えない。それが逆に怖い。

「また出会いとは、縁を感じますねえ。そうでもあ、ちよつくら付き合つてもらえませんかねえ？」

九鬼は和服の袖に引っ込めていた手を出すと、ポンと叩いた。

仕草は珍妙。その実恐ろしい提案。

この男の正体を知つてゐる今、ついていくのが何を意味するのか容易に想像できた。

「いいですよ」

危機感も警戒心も無く、お茶に誘われたくらいの気軽さで藍が返事をしてしまつた。

「決まりですねえ。わざ、じつちで「ぞいやす」

九鬼は心底嬉しそうに一ヤリと笑つた。

藍もつられて笑みをこぼす。

人間には無い包容力というか頼れそうな力を無意識に感じているのかもしない。

この時どうして無理やり手を引いて立ち去らなかつたのか。

おそらくは流れに身を任せれば、楽だから。それに悲劇に見舞われ疲れきつた少年には、運命のように抗いがたい異質な存在に立ち向かう余力はなかつたのだろう。

しかし、その決断にはある種無自覚的な思惑も介在していた。それは力への渴望。滞つたヘドロのような今の状況を切り開く異形なる力。すなわち『幻象』。

明人はどうにでもなれ、と投げやりな気持ちで2人の背を追つた。
欣喜雀躍（きんきじやくやく）の衝動を必死で押し殺したような、それでいて手放しの感情を発露させたほくそ笑みが雑踏の中を漂つた。彼がそれに気付く様子はつゆと無い。

明人はゴクリと唾を飲んだ。周囲の音が遠のいていく。

正面には《起源》がゆつたり腰掛け、明人の隣には藍が座らせられている。彼女は困惑したような表情でじっと明人を見つめていた。

「どうしゃした？ 早くしないと……」

戸惑いが頭を支配する。

۱

行き交う制服、絶えない談笑とリーズナブルな料理の匂い。

「」の和氣謹々（あいあい）とした何でもないただのアマミレス。

早く決めてよ

原『
が急かす。

明人の自制心は吹き飛んだ

な空腹。

明人は少しでも眼を惹いた料理を片つ端から注文していつた。遠慮はいらねえ。なんせ全部この男が持つてくれる。

- す。すこし……

残された2人は明人の奇行にそれぞれ驚愕していた。

「今宵はどうして外に出てたんで？」

藍は九鬼の質問に答えるのを一瞬躊躇した。

助けを求めるように明人を見たが、怒号の連續注文をした後すぐ
にテーブルにへばり付いてしまい、役に立たない。

「えっと、お散歩です。月が綺麗だし」

人が良すぎて嘘をつけない藍。ついてはいるが眼が泳いでいたりと拳動不審だつた。

「若いのに2人して素晴らしい」趣味で。いい友達になれそうであ

九鬼の方はといえば、感心した様子で何度も頷くと手を差し出した。

「よ、よろしくお願ひします……？」

よく分からぬが藍は一応握手しておいた。

痩せて骨ばつていうようで、得体の知れない力強さを持った九鬼の手。何とも言いがたい気持ちになる感触だつた。

「なあに畏まつてんですかい。あつしに敬語は不要ですぜ」

「でも、年上ですから」

「気にしない気にしない。見た目は大人、心は子供でさあパロディっぽい発言がますます九鬼の本質を霧に巻く。

「え、つと……」

「はははっ、まあ何でもいいでござんす」

返事に困っている藍を九鬼は笑い飛ばした。

明人は2人の会話を止めようとはせず、ぐつたりとテーブルに突つ伏していた。何か腹に入れるまで動きくなかった。

店内は遊び帰りの子供連れや学生の醺しだす日曜のオーラが漂つている。

『起源』もこんな人が多いところで何かしようとするのは愚かだろつ。

最近ここらで遙の周りで起きたような失踪事件は耳にしない。この中に『幻象』が混じっていることは無い、と決めた。

他の可能性は脳内を埋め尽くすハングリーな意識に食われたらしく思いつかない。諦めた。

「お待たせしました」

置いてあつたコップをぶつ飛ばすくらいの勢いで、脊髄反射的に明人は飛び起きた。

「明人さん？ 店員さんビビりますぜ」

「はっ！？ すいません。背に腹が代えられそうなんで」

言つて理解に苦しんだ。店員め、なに砂利食つたみたいな顔してやがる。

「いただきます！」

『起源』の相手を藍に一任して、明人はひたすら料理を食り始めた。

食べ盛りの少年を苦しめたお昼抜きの飢餓道がようやく終点に到着するのだ。

「九鬼さんは普段何してるんですか？ あむ

藍がフライドポテトをほおばりながら尋ねた。

「実はあつし自称旅人でしてね。お恥ずかしい話、ぶらぶらしてるだけなんですよ。道中、ボランティアもやってますが」

「なんだかすごいですね」

尊敬の念が籠もった眼差しに九鬼は頭を搔いた。

「そう言つていただけるとうれしいですねえ。全ての出会いは一期一会、会う人全てにまごころを。あつしの信条でさあ

やつぱりこの人は普通と違う。本物の詐欺師に会つたことはないが、九鬼とはまた違うのだと思う。

その認識が良いものなのか悪いものなのかよく分からぬが、話していると心地良かつた。

しばらくして会話が切れた。だが悪い沈黙ではない。

藍は何の気なしに視線を九鬼の後ろへ移した。

すると離れた席からこちらを見ていた人物とバツチリ眼が合つた。

その人は慌てて席に引っ込んだが、赤い大きなリボンがボックスからはみ出していた。

「綾瀬さん？」

「どこだつ！？ ツン！」

独り言だったのにパスタを猛然と飲んでいた明人が物凄い速さで反応した。ついでに麺が喉をせき止めた。

「落ち着いてつてば。ほら、あっちの席に」

指差したらもう明人はいなくなっていた。

恋愛ってスゴイなあ。そう感じた瞬間に心に亀裂が走った。

フラッショバックする悪夢の記憶。瘴気に満ちた倉庫、覆い被さる男達、下腹部の鈍痛。

吐き気が込み上りてきて、藍は口を手で押さえた。

染み出してきた暗い気分を搔き消そうと藍は活気に満ちた店内に眼をやつた。

「……っ」

こんな時に限つてカップルの姿がやたら目に付く。みんな幸せそうに笑っている。テーブルの料理も自分のより美味しそうに見える。藍は気分転換どころか、ますます惨めになつて俯いてしまつた。そういえば私、汚い子だったんだ。忘れてたな、もう普通の恋なんて……。

じんわりと視界が潤んでくる。

「大丈夫ですか、顔色がよろしくありやせんが？」

ブラックコーヒーを啜つていた九鬼が藍の顔を覗き込んだ。

ほんの少し眼を上げてその顔を見ると、本当に心配そうな九鬼と眼が合つた。藍は込み上げる嗚咽を飲み下し、儂い声で呟いた。

「なんでも、ないんです」

「とてもそつには見えませんが……」

「すいませんっ！」

急激に目頭が熱くなるのを感じ、藍は咄嗟に席を離れた。変な眼で見られようが関係なかつた。

「綾瀬、いるなら声かけてくれよ。心配してたんだ」

明人は2つ離れたボックスにいた綾瀬を見つけた。

ポツンと一人腰掛け、ストローでジュースをブクブクさせていた。何故か必死で明人の方を見ないように頑張っているようだ。

「小夜に何かされなかつたか？　おい、何とか言えよ」

明人が質問しても無視していく。

私がんばつたよ、褒めて〜。と擦り寄つてくるという理想が崩れ

ていく。

何気なくポンつとリボンで飾られた頭に手を置くと、電気が走つたみたいに綾瀬の身体が跳ねた。

「何だお前」

新しい反応に子供染みた悪戯心を駆り立てられ、何度もポン、ビ

ク、ポン、ビクを繰り返してみた。

「綾瀬は髪で感じる、うむ新発見だ」

「何なんだりよきみみぎや」

痺れを切らした綾瀬が大声を上げようとしたが、何を慌てていたのか舌を噛んだようだ。

猫が潰れたみたいな声を出してくねくねと身悶えしているのを見ていると、こちらまで痛みが伝播してきそうだ。

いつも通りかなり変なのだが、明人にとっては微笑ましい光景に見えた。

「元気そうでよかつたよ」

「うつ……」

慣れない演技が看破されたような気がして、綾瀬の中には恥ずかしさだけが残つた。

「ほらいくぞ？　甘いものとかいへりでも奢つてやるからな」

「ホントーーー？　行く行くう」

瞳をキラキラさせてさつと立ち上がる綾瀬。現金、とはちょっと

違う気がした。

「切り替え早えな」

「えへ、だつてね……むふふ」

「おかれりなせえ、明人さん、それに『虚構の樂園』^{ヒューシオント}」

戻つてみると笑顔の『起源』だけが待つていた。『起源』だけ。藍はどこだ。トイになら問題ない。それ以外なら……。

「あつ、でさあ、だ。久しぶり！」

「でさあ、じゃありやせん。あつしにはれっきとした名前が」

「檻人でしょ？」

「なんか、発音違いやせんか」

2人のしょもない会話を無視し、藍を探したが見る限り店にいなかつた。

明人は黙らせる意味も込めて綾瀬の手を握り、『起源』と向かい合つように座つた。

「藍をどこへやつた？」

「さて何処でしようねえ」

「どこの吹く風、と言わんばかりに怒りを孕む質問は流された。

「ふざけんな」

明人が低く唸ると、『起源』は再び卑下た笑みを浮かべた。

「巫山戯けてなんていませんぜ。これはあつしの憶測ですがね、天使に会いに行つたとか」

「てめえ……！」

ガリツと歯が音を立てた。テーブルの上、握つた明人の拳が戦慄^{わなな}いた。

『起源』は眼を細めてじつとその様子を眺め、そして口を開いた。

「ほおう、殺す力ではなく、護る力が欲しいと」

「はあ？ いらねえよそんなもん」

図星だ。意地を張つて肝を冷やすような読心術に反抗を試みる。

「くつくつ、あつしの力を舐めてもらっちゃあ困ります。はつきりと見えてますぜ、明人さんの願望が」

『起源』の漆黒の双眸が彫りの深い顔の真ん中でギラついた。魔の提案。差し出されたその未知の力があれば、小夜に対抗できるかもしれない。

しかしその為だけに人間を捨てるのは踏ん切りがつかない。

「まさしく人生を左右する決断でああ。じつくり……」

言葉からして明人が持つ『幻象』の認識を知っているのだろう。不意に『起源』は話すのを止め、窓の外に眼を遣つた。

そこには晩秋の寒氣に身を縮ませて歩く人々しかいない。

「どうも困られましたね」

「どういうことだよ？」

「そのままの意味でさあ。なに、すぐに分かりますよ」

その時台風の目に入ったかのように店内が静まり返つた。この場にいる全員がただならぬ気配を感じ取り息を潜めていたようだった。窓の外、風景と変わらなかつた通行人が、首を捻じ切らんばかりの勢いで店の中を向いた。それは衆目を意に介さず、ガラスに突進してきた。

人々は碎け散るガラスに日常の崩壊を見た。

第17話 B・惑星・puzzled encounter (後書き)

予告通り遅れてしましました、すみません。
忙しそぎてキーボードに手が伸びない今日この頃。それに直ぐに書いてないと書き方って忘れるんですね。初めて知った。

『もしもし』

ケータイから気力に乏しい、不健康そうな細い声が聞こえた。

「貴様が《天網恢恢》^{ウラノス}か」

『誰アンタ』

質問に男の声がわずかに警戒の色を帯びた。加えて物凄い速さでキーボードを叩くような音も混入してきた。

「アタシも《幻象》だよ。頼みたいことがあるんだが」

『働きたくないで』『さる。働きたくないで』『さる』

不快なヤツだ。こんなのが幻象界隈の重要なポストにいるとは。だが、コイツの弱点はすでに我が主から聞いてある。

「そうか、《起源》に職務怠慢だと報告されたいのか」

『なん……だと……！ も、もちつけ！ それはよせ』

慌てる男。けれど、その脇で鳴り続けている音は止まない。

『やつてくれるな？』

『まったく、やれやれだぜ。でもお前のエロボティに免じてやってやるよ』

その言葉に肌が粟立つた。見られているのか？

『キヨロキヨロしちゃって、キツい割りにかわいいじゃねえか。上見てみな。漏れはそこだ』

電話を掛けているこの通りにはアーチが架かっており、そこに設置されている監視カメラが自分を捉えていた。

それだけなら何の問題も無いが、何となく邪氣を感じた。いつの間にかカタカタという音は止んでいた。

『やべえ、そのおぱーい揉みてえ……！ ちょ、おま、カメラ壊すな。緋森市が泣くぞ』

「黙れ。場所は分かつたようだな。ならむちと市内全域の情報操作を行え」

『へいへい、これだからネタの分からねえヤツは……。ああそうだ、1つ聞くが、カメラを壊したありやなんだ?』

「知りたいか?」

『質問に質問で返すなー。で、まあ漏れを雇つて何か仕出かそうとしてるヤツだしな』

「そうか。『忠誠』ケルベロス、アタシの名だよ』

『へえ……冥府神の犬か。ま、この天空神ことこの漏れが見といてやんよ。好きなだけやるがいいさ』

「ああ、恩に着る」

その後、淡々と内容を指示して、ケータイを切った。
さあ、次の仕事だ。

歩道に面した窓をぶち破つて人が次々と飛び込んできた。それはどこにでもいそうな若者や中年の男なんかである。彼らはガラスを踏みつけ、威嚇するような目つきで放心状態の客達を睨みまわす。

彼らの内の1人が黒い物体を掲げると、乾いた音と共に天井に風穴が開いた。銃にはサイレンサーが付いているらしい。

「見てんじやねえぞ、クソが!」

ハンドガンを持つた男が興奮で裏返りかけた声で喚き、鉛弾を撃ちまくり始めた。

連續するガラスの崩壊音と、照明が破壊されたことで増していく闇が恐慌を一気に絶頂まで押し上げ、人々に傍若無人な避難を強制した。

我先に出入り口に殺到する人の群れは殺人的だった。押し合い、掻き分け、薙ぎ倒して前進を図る。

子供達は泣き叫び、荒れ狂つた罵声が交錯する。

明人は何だかデジヤヴだな、と感じながらボックスに収まっていた。そこはまるでシェルターのように隔離された空間。

『起源』は瞑想でもしているように眼を閉じている。綾瀬に至つてはどこから持ってきたか知らないが大きなパフェを抱えて、大混乱をトップピングにそれを堪能している。

「明人ー、はいアーンして」

明人の視線を勘違いしたらしく、にこにこしながらスプーンいっぱいのパフェを差し出してきた。

氣乗りはしなかつたが食べてみた。甘い甘いクリームが恐ろしいくらい場違いだった。

そんな聖域に乱入してきたのはどこにでもいそうな中年サラリーマン。

おおよそ人間らしくないジャンプ力で座席群を飛び越えて明人のテーブルに着地した。

「和服男見つけマシター！ 死ねや、コラッ！？」

そいつは懐から拳銃を取り出して、即『起源』の頭に向かつて撃つた。同時に何故か当人の眉間に穴が空き息絶えた。

中枢を失った身体がバランスを崩し、明人のすぐ横に落ちてきた。ぐしゃり、といやな音が脳に刻まれた。

「騒がしくなつてきやしたね。そろそろ出やすか」

湯船から出るくらいの気楽さで『起源』が席を立つ。

「そだね。ほら、明人も行くよ」

綾瀬に腕を引っ張られて明人ものろのろと立ち上がる。

濃密な人の死を間近で見たせいで、ひどい目眩が襲つてきた。

「シカトしてんじやねエよ！」

立ち上がった矢先、近くにいた男が綾瀬に銃を向けた。綾瀬はさも面白そうに微笑んで、男を見つめ返すだけだった。

ひらりひらりと蝶が舞う。運ぶは夢。深遠たる悪夢の奈落。

「ひい！？ く、来るなああああああ！」

男は狂ったように喚き、ぐるぐると回りながら見えない何かに怯え出した。

「あはっ、怪物ランドに『』招待するよ」

秘めた狂氣が溢れ出したような綾瀬の表情。明人は肝が冷えるような気がした。

そして男は、仲間に向けて弾倉が空になるまで発砲しはじめた。突然の凶弾に反応できるわけも無く男達は倒れていった。

「……弾弾弾タマタマタマタマタマアアー！ 出ろよ、出でくれよ、ヒ、ヒヒッ」

力チカチカチカチ

仲間を殺し尽くし、1人残された男は空になつた拳銃をこめかみに押し付け、いつまでも引き金を引いていた。

店から逃げた野次馬達はこれくらいの距離なら大丈夫、と遠巻きに事件現場を観察していた。そのまま大抵の者は逃げ出してしまつたが、ここにいる十数人は好奇心故に残つていた。

今銃声は止み、彼らは少し安心したのか、手に手にケータイを持ち、友人知人彼氏彼女と連絡を取ろうと試みていた。

だが、今度も何故かケータイは機能しなかつた。

店から飛び出した直後の警察への電話も繋がらなかつた。

それは回線が混んでいるものと思つていたが、今試したメールもネットさえもそうだつた。

しきりに首をかしげ、居合わせた者同士疑問を投げ掛けあう。皆全て統一された不安顔だ。

人々を繋ぐ万能ツールが使えない。平和ボケした現代人たちを震え上がらせるのには、目の前で起きた彼らの認識で言つ強盗事件よりある意味効果的だつた。

外部とのつながりが切れた感覚。人々は、徐々に言い知れぬ恐怖を感じ始めた。

そんな彼らに追い討ちを掛けるが如く、真綿にくるまれていくような静寂が何処からともなく広まつていった。心臓の鼓動がやけに大きく速い。

次第に入々は、パラパラと散開していった。

彼らは精神の安らぎを渴望していた。我が家や、別の通りなら得られるかもしね。魂に植えられた恐れを緩和してくれるかもしない。

足早に歩きながら、あるいは深海の如き重圧に負けて駆け出しながら、人々はそう思ったことだろう。

既知の世界がグラグラと揺れる。その感覚は言葉にはできない。しかし、誰も彼もが己の魂が縮み上がるのを感じていた。

本能的に怯え、事件に関わることを忌避しようと蠢く人の群れ。その中逆行していく少女がいた。

彼女は周りの事など意に介した様子も無く、意思の強そうな瞳でじっと前を見つめ現場のレストランに近づいていった。

「片付きましたね。『樂園』、よくやりました」

「大したことない奴らだったね。何者かな？」

血生臭い店で繰り広げられる異能達の会話。

明人はそれを聞き流しながら、混沌に沈みゆく現実に頭を悩ませていた。今までの事が児戯に見えるよつた、そんな変化が起こりそうな気がした。

一陣の冷やかな風が荒れた店内を吹き抜けた。

3人がふと道路側に目を向けると、そこに人が佇んでいた。外の明かりでその人物の前面は影に覆われ、その全貌は見ることができない。

「お久しぶりですね。《起源》」

凛とした力強い声が影の人物から響いた。背が高いが、どうやら少女であるようだ。

「……アキラさん、ですか。《出来損ない》のあなたがここで何をしているんですかい？」

「それはご存知でしょう。だから、足止めに来たんですよ。……立て！ 貴様ら！」

アキラの一喝で空気が震えた。凶弾に倒れた男達が緩慢な動きで身体を起こし始めた。

「コイツら死んでないのかよ」

「そのようではさあね。そつちの頭がなくなっちゃった兄貴は違うみたいですが」

明人の問いに、《起源》は思索半分と言つた感じで返した。次にアキラはへたりこんだままの男に近づいた。

「貴様は何をしている？」

「キヒヒヒ、しぬ、ヒッ、クヒッ」

男には何も見えていないようだつた。血走った眼球をギョロギョロと動かしながら、一心不乱に銃口を側頭部に叩きつけるだけだ。「憐れだな」

ポツリと呟くと、アキラは何の躊躇いもなく男の頭部に目にも留まらぬ回し蹴りを喰らわせた。

ぼぐつ、と骨肉が潰れる歪な音がして、男の頭はほとんど粉碎された。頭に詰まっていた物を噴き出して男の身体は崩れた。

アキラがそれを気に留める素振りは全く見られない。ただ、ムゲンの苦しみから解放してやつたに過ぎない。

こいつも人間じゃなかつた。

予想通りすぎる結果を明人は拒むのもやめて受け入れた。

それよりもアキラという名前は最近どこかで聞いた気がした。

思い出せない。」ういう時に限つて人の記憶は役に立たないものだ。

「『樂園』、ちょっと頼まれごとをしてくれませんかね？」

明人が必死に思い出そうとしている時に、『起源』が綾瀬に囁いた。

「なあに？」

「今襲つてきたみたいな野郎がどれくらいいるか見ててくれませんかね。連中、眼を見ると分かります。それに報酬は、弾みます

あ」

そこで『起源』は一瞬明人を見た。彼は気付いていない。

「……りよーかい！ ほら、明人行くよ！」

綾瀬は花火が炸裂したかのような特大の笑顔で頷いた。

「ちょっと待て。藍の居場所を聞いてからだ」

綾瀬を止めて明人は『起源』を睨んだ。

「実は彼女、さつき明人さんが聞いてきた時は廁に行つてましてね。あの騒ぎで逃げたとは思うんですがね」

『起源』はこの戦場においてさえ軽口を叩く余裕を崩さない。

その廁云々が嘘かどうかは分からぬが、銃声なんかを聞いたら普通は逃げるだろう。トイレの近くに職員用の出入口もある。

トイレにいたとしても、今連れ出そうとすれば敵の注意を引いてしまう。

「綾瀬は何か知らないのか？」

「え、私は明人しか見てないけど」

綾瀬に聞いても二重の意味に聞こえる言葉しか返つてこなかつた。真剣な表情で嘘ではなさそうだし、ここでツッコミを入れられるほどお氣楽じゃない。

「……行こう。藍は無事だよ」

不安は残る。だが、藍は大丈夫だという漠然とした感覚があつた。命がかかっている時にそんなものを信じるなど自分でも正氣とは

思えない。けれども、他に信用の置けるものがない以上は勘さえ十分な動機だ。

今度は明人は綾瀬を引っ張り、台風が過ぎた後のような店を足早に進んだ。

アキラは出て行こうとする2人を横目で見ただけ。他の連中に至つては魂が抜けたようにだらしなく突っ立っているだけだった。

「さて、宴会の後片付けでもしやすかねえ。ま、これが本番とは思つませんがね」

2人を見送つて《起源》は渋い顔で呟き、復活した集団を眺め回した。

第18話B・夜宴 -Wa1purnas Niyan- (前書き)

「んにちは、んばんわ。GOR E改め闇十郎です。
長い間、無沙汰して本当に申し訳ありません。

何はともあれ幻象 - phenomenon、再開です。

「マジかよ。ちょっとイテえけど、オレ死んでねえぞ！？」
「信じらんねえな。あのガキの言つてたこと、ホントだつたんだな」
口々に驚きと感嘆の呻きを漏らす男達。

綾瀬に狂わされた男が放つた銃弾は、どれも心臓や頭といつた急所に当たっていた。それでも彼らは起き上がったのだ。

凶弾の痕は癒えず、生々しい傷口からは血を垂れ流しているにも関わらず痛みも大して感じていなじょうだ。

「ふむ……『幻象』はあの傷じやもちませんし、『出来損ない』にしては再生が遅い。一体何なんでしょうねえ？」

『起源』は芝居染みた大げさな困り顔をしてアキラを見た。

「答えるわけないでしょう、と言いたい所ですが、主の命令なので教えます」

アキラが戦闘態勢を解いて、場の空気が少し緩んだ。

「自分の発明を自慢したくてしょうがない、と。いつまで経つても子供でさあね」

『起源』はお見通しだ、と言わんばかりにせせら笑つた。

「それは言えます」

自然に肯定するアキラ。

「おひ、愚痴ですか？ あっしが聞きますよ。いくらでも」
調子よく喋る『起源』だつたが、アキラの態度はつれない。
「結構です。これ以上は不敬だ。拷問されてしまふ

「それはまた物騒な話でさあ。いよいよ壊れてきたんじゃないですか、彼女は？」

「主を悪く言わないでください。の方だつて色々あるんです」

アキラは棘の無い調子で言葉を紡いだ。その表情はどこか悲しげだ。

「それが貴女を彼女の元に留まらせる理由ですか？」

「ぐだらん」

『起源』の言葉を絶つたアキラには、もう一分の隙も無かつた。ただ主から仰せつかつた説明を復唱するのみ。

「ほつ……長年『幻象』を創つてきましたが、そんなことが起こることは知らなんだ」

『起源』はやや感心した風に頷くと凶器を構えて自分を取り囲んでいる者たちを見る。しかし、もはや人間ではない彼らの心を窺い知ることはできなかつた。

彼らもまた敵意を向けつつも、自分の正体を知つたことで何かしら感じていた。

ある者は一線を超したことを見つきりと理解して戦慄していた。ある者は人間を超えた存在に昇華できたと興奮していた。またある者は話の突飛さについていけず、何か悪い夢でも見てているのだと逃避していた。

考えは万別なもの、彼ら全てに言えるのはもう戻れないということ。

「う、あつ」

言い知れぬ渴きが全身をつつき回していた。米粒大の羽虫にたかれられるような不快感。

「オレ、もうがまんできねえっす」

1人の男が進み出てアキラに話しかける。その眼は跳ね回り、どこを向いているのか定かではない。

「そうか」

突き放すような冷淡な返事。焦らせばそれだけ凶暴性を引き出すのを心得ている。

「ソイツ殺るんですね？ そ、そいつすればもうええんですよね、あ、あの紅い……！」

飢えと乾きに急かされて焦つたような口調で男はまくし立てた。

最後のほうは言葉になつていない。

加えて声に出してしまつたがゆえに不快感の増大を留める術は失われた。

皮膚の下を這いずり回る畸形の幼虫。飢餓感なる名を持つ芋虫どもは、宿主を焦燥の極みへ追い立てる。

「……ああ」

たつぱりと間を空けてからの返事。

「り、りょうかいです。オイ！ おまえら！ ぶつ殺せ！」

男は咆哮した。臨界に達した魂の枯渇とそれを潤そとする欲望が声に乗つて流出する。

餓鬼の群れに漂つそれは、彼らを覚醒させていく。同じ痒みに苛まれていた彼らは一も二も無く発起する。

機が熟したと見るやアキラは激励した。

「さあ行け！ 失つものはない。貴様らの前にあるのは

「イエアアアア！」

餓鬼達は何も聞いていなかつた。じれつたいだけのプロパガンダなど耳に入らない。この気味の悪い感覚を紛らわせられれば何でも良かつた。

一切の整然さを見せない唸りを上げ、彼らは《起源》に四方八方から雪崩れ込んだ。

「あんたらは哀れですがね」

《起源》がゆっくり腰を落としていく。瞬きの合間に左手には鞘に収まつた日本刀が現れ、右手はその柄を握つていた。

「劣化魔作をほつとくわけにもいかんのでさあ」

知覚不能、神速の居合が放たれる。銀の刃影は雷電を撃ち出し、正面にいた男達と店のもの全てを両断しながらアキラに迫つた。

アキラは雷撃が発射される寸前、《起源》に向かつて跳躍するとでそれをかわしていた。

「はあっ！」

『起源』の目の前に降り立つたアキラは拳を振るつ。空気が破裂する音を生むほどの豪打。

「^{アイギス}『不壊』」

けたたましい金属の衝突音と共にアキラの攻撃は見えない何かに防がれた。

防がれるや否やアキラはばく転して距離を取る。胴体を両断せんと引かれた剣戟の軌跡が一文字に空を裂いた。

「オラオラオラオラ！」

そこへ左右に散つていた餓鬼達が拳銃を乱射する。それはどれも『起源』に届く前に中空で弾かれている。

「不可視の盾、か。厄介なものを」

それを殴つたアキラには凄まじい反動が返つてきていた。腕を覆う鈍痛はひびが入つたことの表れか。その痛みもすぐに痺れに変わり、やがてなくなる。『出来損ない』限定の超高速回復の賜物だ。

「正解でさあ。景品はありませんがね」

『起源』が刀を振ると、獣の慟哭のような音と共に刀身が蒼白い光を帯びた。

天井を突き抜けてきた落雷に外野^{げぼくたぢ}が焼き払われる。死の光が收まつたとき餓鬼達はほぼ壊滅していた。

火葬場の何倍もの悪臭に包まれながら、『起源』はアキラと向かい合つた。

「あらかた片付きましたね」

「……」

アキラは無言で佇んでいた。時間をかけて力を溜めさせた拳句にこの結果。不甲斐ない。

「アキラさん、もうやめませんか？ あつしもね、平和に過ごしたいんでさあ」

「ふざけているのか？ 貴様があらゆる苦しみの元凶だろつ」

静かな怒氣を発するアキラを前にしても、『起源』は涼しいまます。

「彼らは自分で望んでそうなつたんで。だいたい貴女も仰つたでし

ようよ。『死にたくない』と

「ペテン師が。そうなるように仕向けたくせに」

「ははっ、何ですか、その言い分は。まるで《復讐の女神》ネメシス」のよう

じゃあ「ゼニヤせんか」

「貴様……！ 遥まで馬鹿にするのか」

アキラは怒りに震えた。その憤怒に影が「ぼ」ぼと泡立ち、アキラの肢体にまとわりついていく。

「させませんぜ！」

鬼気迫るアキラの状態に危険を察知して《起源》が居合いの型をとる。

その時

「ウラアアア！」

《起源》の頭上、脆くなつた天井を破壊して大柄な刃物を振りかざした餓鬼が強襲してきた。

「む！？」

虚を突かれた《起源》だつたが、反応力は段違いだつた。集中力を欠いたため雷撃こそ出なかつたものの、抜き放つた刀で斬り上げ、男を両断する。

大量の血液が降り注ぎ、一瞬視界が奪われる。

それを隙と見たのか血煙の向こうから何かが突撃してくる。

「見えてまさあ！」

「グギヤ！？」

袈裟斬り。またしても血が噴き上がる。

視界を開くと次の相手がもう目の前に来ていた。

刀を反したのでは間に合わない。《不壊》を呼び起こし衝突を防ぐ。

悲鳴が無い。

「がら空きだ！」

《起源》はアキラの声を聞くと同時に、身体が宙を舞うのを感じた。

地面に叩きつけられる前に見たのは、身体から離れ離れになつた両足と今までに叩きつけられんとする魔獸の凶脚だった。

『起源』を上から襲う奴がいなかつたら、こちらがジリ貧になつて敗北を喫していただろう。

血による眼くらましと同時に『起源』に向けて半死の男を投げつけ、間髪入れずに足元にあつたテーブルの残骸も蹴り飛ばした。初撃に刀を使えば勝ち、盾なら負けの賭け。アキラはこれにも勝利した。

そして、剣と盾も封じられた『起源』の背面に回りこむ。怒りに流される者は話にならない。その怒りを力に換え、知略を纏つて制御をし、運も味方にけてこそその闘い。

平和ボケした日本で魔人揃いの『幻象』相手に戦争してきたアキラの哲学だった。

アキラの脚に固着した影のブレードが『起源』の脚を寸断した。足払いをかけるつもりでもこの状態では切断になる。

アキラはすかさず立ち上がりと、凶器そのものである脚を大きく振り上げた。

「でええ、りやあ！」

一喝。そして『起源』の腹部に全身全靈を込めた踵落しが決まる。はずだつた。

しかし、『雷霆』に巻きついていた紫電がまさしく電光石火のスピードでアキラに絡みついた。

それはまるで蛇の捕食、しかも干のいかずちを束ねたよつた破滅的な電圧。

「ぎやあああああああ！」

身体の水分が蒸発する。肉が焼ける。脳髄が爛れる。悲鳴が爆発する。

消し炭と形容されるよつた凄惨な姿で崩れるように倒れ伏すアキ

う。

舞い踊る雷は周囲に残っていた餓鬼を喰らい尽くして消滅した。

「げほつ……こんな大怪我、何年ぶりでしうねえ……」

僅かに遅かつた反撃。踵落しを完全に殺すことはできず、内臓を損傷したらしい。血反吐が止まらない。脚の出血も酷い。

この状況で軽口を叩けたのは、身体に刻まれた習慣のおかげに他ならない。

『起源』はしばらく半壊した天井を眺め、やがて意識を手放した。

キイ

死の静けさに包まれたファミレスの廃墟に物音一つ。隔離され戦火を逃れた空間から、少女がよろめき出でる。

少女の名は藍。擦れ違う兄妹の片割れ。

彼女もまた関わってしまう。『起源』ヒアキラの戦闘は回避できたが、次は無い。

夜宴の幕引きはまだなされない。ワルブルギスの夜はまだ始まつたばかりなのだから。

また間が開いてしまいました。申し訳ない（汗）

「はあ……」

藍は憂鬱そうに嘆息した。

苦しい。辛い。消し去りたい。

恋愛関係に過敏になる自分が。こんな所で一人になつて、さらに濁んだ暗情の沼に嵌る自分が。そしてなによりあの強姦の憂き田を。「はあ……何やってんだろ」「

何度もかの自問。答えは出そうにない。

忘れて明るく生きる。沈んだままでいる。人前では明るく、1人のときに泣く。いつも誰かに相談する。

色々と考えは浮かぶものの、どれも最善とは思えなかつた。きれいに掃除されたお手洗いの鏡を見つめると、見飽きた暗い顔の自分がいた。

明日はまた学校なのに、こんな調子じゃ迷惑がかかる。

「い……」
無理やり口角を上げてみる実験。ばつかみたい。人来たらどうすんだろ。

パンパンパパパン

「うわあああ！」「逃げろ——！」

銃声のような音が聞こえ、すぐに悲鳴と動乱が捲き起つる。藍は慌てて個室に逃げ込んだ。鍵を閉めて、耳を澄ませる。

強盗だろうか。でもこんな人の多い時間に？

兄さんたちは、大丈夫かな。ケータイは……バッグに入れたまま外にある。

考えを巡らせている間にも、外からはまるで戦争でもしてゐるかのような轟音と崩壊音が響いてくる。

その時、照明が落ちた。思わずその場に座り込む。

「いやああ、んむつ」

叫びそうになつて慌てて口を紡ぐ。

絶叫の衝動が過ぎると、目をつぶり耳を塞いだ。

真の闇の中、地響きだけが伝わってくる。恐怖は募るのみで、今にも得体の知れない怪物が入ってきたおぞましい予感までしてくる始末。

震えが止まらない。目の前の脅威のせいだけではない。暗黒が呼び起こすトラウマ、癒えぬ心傷が鎌首をもたげる。

「つあ、痛い……痛いよ」

嗚咽と共に声が出てしまう。藍はお腹に手をやつてこり自分に気が付いた。

苦悶の幻影に惑わされ、心も身体も呻きを上げる。

「たすけにきて、さよちゃん……！」

藍は知らずその名を呼んだ。

気付くと音は止んでいた。

その間氣を失っていたのか、起きていたのか、藍自身定かではない。完全な暗黒では諸感覚が狂つてしまふらしかった。

手探りで鍵を開け、壁伝いにそろそろとドアを目指す。

ノブはすぐに見つかった。

ドアを開けると、ぞつとする瘴気が風に乗つて鼻腔を突いてきた。火葬場と鏽の濃密な臭いに吐き気が込み上がる。

そんな忌避すべき汚臭に満ちたファミレスは、崩落した天井の穴から降る白い光で照らされあている。映画に出てくる遺跡に迷い込んだ気さえするほど、異常な光景。

テーブルなどは跡形も無く、壁と柱は半壊。建物 자체いつ倒壊してもおかしくなさそうである。

瓦礫の荒野を歩く藍の前に、黒い棒が生えていた。たとえるなら、5つの花弁を広げて月光を浴びる挿花。

たとえる？

それはまさに現実逃避だ。悪臭が立ち込めるているなら、その源も近くにあるのは自明の理。そつであるなら、この花の正体もまた……。

「 ひいっ！」

いいかげんにしてよ。やすやすと出でこないでよ。あんなものがその辺に転がってるほど日本はおかしくない！

藍は声にならない喘ぎを発して全力で駆け出した。足場は最悪だが、恐怖で感覚が鋭敏化しているのかこけることは無かつた。

途中あれを踏みつけたり、あれに引っかかつたりした。その度に硬いのか軟らかいのか分からぬ肉塊の感触が靴越しに登りつめてくる。

藍は無我夢中で道路に転がり出た。そして、そのまま道端に泣き崩れた。

単に怖いものを見たから。その感情は何の混じりつけも無い純粹であり制御不能。

さつさと立ち上がりてこの場を去る」とがどれだけ賢明か、藍も痛いほど分かつていた。それなのに膝が笑い転げて言うことを聞かない。

藍は肩を震わせてうずくまっていたが、そう長くはなかつた。人の気配が全く無い、異様な静けさに呑まれた無機質な街が自分を取り囲んでいるのに気付いたからだ。

その冷たく突き放すような気配は、藍に自分以外をあてにできないと語らせるには十分だった。

藍はゆつぐりと呼吸を安定させていった。両足で身体を支えることもできる。

まずは兄さんと連絡を取らないといけない。ケータイはガラクタの山に埋もれているが、探しだししてみせる。

すつ、と短く息を吸う。全身に氣力が満ちるようだつた。そして改めて廃墟を眺め、自分が座っていた席の場所に目星をつける。

幸いそれほど奥まで行く必要はないようだ。

藍が1歩踏み出そうとしたとき、聞いたことのある曲が流れ始めた。話題のアメリカンシンガーの最新曲。それはケータイの着うただつた。

藍は臆することなく廃屋の門をくぐった。切れてしまつ前に見つけないといけない、その一心で。

瓦礫の隙間に明滅する光が見え、音も大きくなつた。礫片をどかすとバッグ共々ケータイを発見できた。少なくとも兄の亡骸と対面することがなかつたのは素直に喜ぶべきだろう。

藍はわき目もふらずに電話に出た。話しながら店を抜ける。

「もしもし」

「怖かったのによくがんばつた」

「え……」

聞きなれない男の声に緊張が走つた。

ディスプレイに表示されているのは、文字化けしたような奇怪な字面。

「誰なんですか？ デリして私の番号を」

「漏れ？ ネットの神こと『天網恢恢』^{ウラノス}さ。神なんで、知らないことはない」

返事は意味不明。真剣さの欠片もない、人を嘲ることに重きを置く声色だ。

「ふざけないでください。今大変なんです、切りますよ」

「死体ごろごろでもし~んぱ~いなさいーー！」

「やめてください」

不快極まる相手だが、何故か切ることができない。異次元の磁力が切らせてくれない。それにこの感覚は以前体験したことがある気がした。

「そんなこと言つていいのか？ サツとか呼びたくないわけ？ 今

この街の情報網を支配してるのは他でもないこの漏れなんだが？」

「支配つて、何の話ですか。もつなんでもいいですから、警察呼ん

でください」

「無理だなあ。サツはアイツが握つてゐる。今頃ラリつてハイになつてんじやねえの、仕事なんかしやしないだろうし」

この街の警察全部が麻薬で汚染されてる。しかも相当重度に。「冗談にもなつてない、と藍は思つた。

そんなこと警官がするわけないし、できるわけない。

正義の御旗の直下で違法行為が横行していたとなれば、この国始まつて以来の大スキンandal。すぐさま一斉捜査で麻薬は根絶やし、職員は全員検挙されるのが道理。

藍の考えはそんなものだつた。至極当前で堅牢な論理だが、この街にはすでに外法の根が張り巡らされているのを藍は知らない。

「わかんねえよな……」

『天網』が更に続けようとしたとき、異変が起きた。

この世のものは思えない慟哭が夜を震え上がらせた。

夜さえ吃驚させるそれに、人間が耐えうるはずも無い。藍は腰が抜け、その場にへたりこんでしまつた。

「何があつた？」

毒素の抜けた真面目な声で『天網』が囁いた。

「……わ、わかりません……こっちに来る」

藍の目の前で起きた異常。それは例のレストランの中から噴出した。

凶悪な赤い光が2つ、廃墟の闇に浮かんだかと思つて、ゆらゆらと藍のいる通りへ進み始めた。

藍は気圧されて後退してゐた。闇の抜けた光景だが、動けなくなつるより幾分かマシだと思つた。

月下に立つ異貌。三次元に現れた影。赤くギラつく双眸以外は全てが黒に包まれてゐるが、それは人型をしてゐた。

「じつとしてる。そいつを刺激するな」

ケータイからは切羽詰つた指示が聞こえる。

藍は素直に従つた。冷や汗を滲ませながら影が去るのをじつと待

つことにした。しかし、影は立ち尽くしたまま動く気配がない。

何もかもが静止しているこの場所では絶対的な時間の概念さえ狂い、体感時間は遅く長くなっていく。

そのとき、風が吹いた。冷たい夜氣と一緒に焦げついた人の脂肪の臭いがやってきた。

「うつ」

反射的に嗚咽が漏れてしまつ。それは小さな小さなものだつたが、後悔してももう遅かつた。

影が目の前にいた。いつ動いたのか分からなかつた。少なくとも10メートルは離れていたのに。

影をぼろのようになじみたそれが、見下ろしていく。巨大な壁が押し潰してきているような圧迫感。

凍りついたような沈黙の間を異臭が抜けていく。臭いは底知れない影の中から漂つてきていた。

「逃げる！」

『天網』の声と同時に動いたのは、影のほつだつた。

影が霧消する。生まれたままの格好で、長身の少女が立つていた。一瞬の間をおいて少女が藍の方に倒れてきた。

支えようとしたのか、我が身を護ろうとしたのか自分でも分からなかつたが、伸ばした藍の両手は虚しく空を突いた。少女は膝を着き、自力で身体を支えた。

再びの沈黙。

なんと声をかけていいのか、藍には見当もつかなかつた。

ただ阿呆みたいに少女の裸体を見ていた。

鍛えているのがすぐに分かる張りのある肢体。それでいて女性的な魅力は失われておらず、むしろさらに強調されているといつてもいい。月明かりを反射してつやつや光る肌は、触れてみたいと思わ

せてくる。

それゆえか、藍は行き場をなくした手を少女の肩に乗せてみた。もちろん、声をかけるきつかけ作りも兼ねて。

「あの……」

思ったとおりのすべすべだった。それは良かつたが、次の瞬間手のひらに異様な感触が生じる。触れている肩の皮膚下で何かが蠢いたのだ。

とつさに手を離して後ずさると、少女と目が合つた。

「氣味が悪いだろう……見ないでくれ……」

かすれた声で囁かれて、藍は申し訳なくていたたまれなくなつた。

「そんなことないです！」

「つー？」

藍は名も知らぬ少女に抱きついていた。

背中に回した腕にも、押し当てた胸にも得体の知れない蟲が蠕動するような感触が纏わりつく。それは嫌惡以外の何者でも無かつたが、藍は必死に耐えた。

「じついうのは偽善つて言うのかな。ふとそんな思いがよぎつた。驚いて離れてしまつたことを取り消したいと思わなかつたわけではない。他の理由は、と聞かれても答えられない。

否、仲間意識。そういう答えがある。

この子も同じなんじゃないだろうか。

楽しいひとときを潰された者同士。凄惨な事件に巻き込まれた仲間。被害者というカテゴリー。

すなわち、傷の舐めあいがしたいだけ。悲劇の内容は関係ない。巻き込まれたという枠があるといつことに意味がある。

「ありがとう、でも無理するな。もう大丈夫だから」

少女 アキラはそっと離れようとした。それでも藍は追いすがる。離れたくないかのように。

アキラは己の肌に水滴が落ちているのを感じた。泣いているのか。

騒ぎを起こした張本人を慰めようとしてくれた彼女こそ本当に慰めを欲している。

なんとなくアキラはそう理解した。

異能を駆使し、『幻象』という人にあらざるものに近づくほどに人の痛み、気持ちが分からなくなつていく。

特にアキラは血霞の戦場にいた。心身共々痛みに鈍感にならなければやつていけない。己が爪牙にかかる獲物の気持ちを考えていれば、敗北を喫すことになる。

だから今のような感情を抱くことは珍しい。重傷を負つた今だからこそ命ある人間に近づいたということなのだろう。

アキラは無言で藍を抱きしめた。

まだ『呼び鈴』は鳴っていない。気持ちだけでも人間でいられる時間は希少だ。そうだといふのに……

「藍ちゃんから離れなさい！」

静寂を破る敵意に満ちた声。アキラには聞き覚えがあった。

「……『月宮の天使』」^{セレナ}

名残惜しげに藍を放して、数メートル離れた所に立つ白蝶の少女と対峙する。

夜風に踊る灰白色の髪。その肌は陶器の如く白光り、包む衣は夜の黒。ただ意志に燃える深紅の瞳が、人形のような彼女を人間然とさせていた。

「藍ちゃんこっちに！ 急いで」

「え……？」

藍は戸惑っているようだつた。小夜が来たのは喜ばしいことのようだが、何をそんなに慌てているのか分かっていない。

「行つてやれ。彼女が待つてゐる」

アキラは背中を押してやつた。

昔大事にしていた武人の矜持というやつだ。大儀は忠誠であるが、

命令にない戦闘は私闘。ゆえに無関係、否、人間の感情を多少なりとも思い出させてくれた少女を巻き込むのはアキラの流儀に反した。

「悪いけど、人質にするんだと思つていたわ」

藍を背に庇い、小夜は少し意外そうに言った。

「そこまで墮ちてはいないさ。ところで、お前がその子を護るというのは叛意の表れか。もしそうなら、捨て置けないな」

アキラの全身を再び影が覆い尽くす。恥ずかしげもなく晒していった素肌は、闇の黒に染まる。

それは防具であり武具。彼女と同体をなす、暗き餓狼の変化した姿である。

小夜も即座に戦闘態勢をとる。闇を照らす一対の光翼が背に顕現する。

アキラは、戦意に満ちた小夜の顔に走った一縷の苦悩を見逃さなかつた。

今のは出されたのが原因であるのは間違いなさそうである。

「今夜は見逃してやる」

理由は3つ。第一に万全の状態ではない。

『起源』の雷撃は尋常の破壊力ではなかつた。骨から内臓、筋肉、神経に至るまで全てがイカれている。今も外見を取り繕つているだけで、それらの修復が急ピッチで行われている。

そんな状態で戦つて勝利が得られるほど、小夜は甘い相手ではないはずだと感じていた。

第一は藍についてだ。

その時、暴力的なほど凶念の奔流が死んだような街を駆け巡つた。常人でも不吉な何かを感じざるを得ない魔性の波動。

それが第三の理由である。彼女が、主がお呼びなのだ。

自身の怪我など気にしてはいけない。『忠誠』たる彼女は、命令に対する絶対服従こそが最優先事項なのだ。

アキラは近くの背の低い建物に飛び乗り、そこから疾風さながらの速度でビル群を渡つて夜の底に飛び去つた。

取り残された藍と小夜は、しばらくアキラが消えた方をぼんやりと眺めていた。

「オーケー、話を整理しようか。まず……」

だんまりを決め込んでいた藍のケータイが意地の悪い声で何やら言いかけたので、藍は瞬時に電源を切った。

隠された真実に向かい合う時が、ついにやつてきた。真実を掴めば変化は避けられない。破滅か救済、いずれかの未来が訪れる。死線を踏み越える恐怖と答えを見出す期待とで震えが止まらない。藍は重たい唇から、決意に揺れる言葉を紡いだ。

「……小夜ちゃん、話してくれるよね」

第1-8話 C・夜宴 - W a l p u r g i s N i g h t (後書き)

ちょっと長かったですかね。なにはともあれ夜宴はお開きです。
しかしながら夜はまだまだ続きます。濃いですね、ホントに。

第19話・五蛇 - *subordinate swamp*(前書き)

ワルブルギスの夜、遙サイドの物語。

第19話・五蛇・subordinate swamp

「ん……？」

混濁した意識の中、遙は目を覚ました。

背中に感じるのはふかふかとしたベッドの感触。忌むべき力を使い、体力を根こそぎ奪われた身体に安らぎを感じてくれる。

ここ、どこだろう。アキラは？

周りを見ようとしたら首が動かなかつた。

力が入らないわけじゃない。感覚は無いが何かで拘束されているようだ。

戸惑う遙のもとに薫り高い茶葉の匂いが漂ってきた。

アキラが紅茶を淹れているのかと思ったが、彼女の好みではないはずだ。遙も特に好きというわけではない。

「やつと、起きたのね」

冷たい声が聞こえた。どこかで聞いたことがあるように思えた。そうする許可が降りたように、遙は声のしたほうに顔を向けることができた。

窓辺に置かれたガラスの円卓が月明かりを受けて静かに光っていた。その光を呑み込むようにセツの椅子に真っ黒の人影が腰掛けている。

「……私を覚えているかしら？」

細い指でカップを置いて、黒衣が向き直る。

白金の髪は夜天から注ぐ天然灯に輝き、蒼空の瞳は魔的な魅力を投げ掛ける。幼い容姿の女の子。

通常幼子が持ち得る無垢という概念は、立ち上る邪氣としか言いようのないものに押しつぶされていた。

悪意で彩られた悪魔の子。

「死んだはず、そう思つてゐるでしょ？……低脳。この私が、アレ
くらいで滅ぶか！」

怒氣の発露を我慢していたのだらう。無機質な仮面は一気に砕け
散つた。

遙は思いつきり身体を起こして立ち上がるうとした。一刻も早く
この悪夢めいた存在を消し去りたかった。

途中まで起きかけた身体、しかし物凄い力で引き戻され、次は縫
い付けられたような感覚が全身を包む。

視界が暗黒に落ちた。否、そこには邪惡な光を灯す赤眸が2つ。
遙の目の前で形を成したのは、ついさつき滅ぼした魔犬の寸分違
わぬ頭部であった。

牙を打ち鳴らし、いつでも噛み碎けるぞ、と威嚇する魔犬。首か
ら下は実体を有する影となり、遙の身体を包み込んでベッドに縛り
付けていた。

「ああ、一思いに殺してやりたいわ」

『魔姫』の声と共に魔犬の頭部が退いた。

それでも見えるものは赤と黒。深淵の娘、彼女の持つ黒鉄の大鎌
とそれを飾る血の宝珠。

「なら、早くしなさいよ！」

「言われなくても」

闇の鋼が音をも殺し、弧の軌跡を描いて遙の喉元に迫つた。
刈られる。我知らず眼を瞑る。

「……あ、イイコト思ついたわ」

鎌刃は停止していた。元から殺すつもりは無かつたようだが、そ
こに慈悲などあるわけもない。

『魔姫』はわざとらしく手を打つと、嗜虐の微笑を浮かべた。

「結局殺せないんだ。何もできない箱入りお嬢さん？」

「……ゴミクズは自分が『幻象』だってことも忘れたのかしら？
すぐ生き返るんだもの、死ぬことに意味なんてないわ」

悔し紛れの悪態を吐き、《魔姫》を見る。薄皮一枚隔てて、激情が煮えたぎっているのが分かる。短絡な部分も変わらないようだ。

「ハリクズはお前よ！」

遙は脇に立つ《魔姫》に罵声を浴びせ、そのまま舌を噛み切らうと歯を下す。

『幻象』は死を超越する。たとえ今この肉体が滅んでも、場所を変え再び己が血肉が生成される。

逆に言えば、今死ねば《魔姫》の拘束から逃れられる。態勢を整え、今度はこちから仕掛けることもできる。

「自殺しよう、そう思つたんでしょう？」

お見通しよ、と暗青の瞳を三日月のよつて並めて小さな悪神が嗤つた。

遙の口には例の魔犬の一部が突つ込まれ、それに阻まれ歯は舌に届かない。

膨らませた風船の空気が逆流して口の中で暴れ回つているような、そんな感触。

「やまあないわ。それより、この私を侮辱した罪は重いわよ」

鎌の刃に埋められた深紅の宝玉が一斉に輝きだした。それは一般人なら気が触れてしまいそうな鋭利な紅い狂光を発し、やがて止んだ。

身体に異常は感じられない。もつとも、《魔姫》の力を鑑みれば精神汚染の類である方が有力だが、その兆しも無い。

「フフ、なにビビってるの。これはただの呼び鈴」

「……呼び鈴？」

「もちろん、下僕を呼ぶものよ」

不吉な微笑を見ていると、おかしくなりそうだった。

「お呼びでしょうか、我が主」

その声が心臓に冷水を注いだ。それは勢いよく全身を駆け巡り、遙を凍えさせる。

ドアが開き、血の臭いが流れ込んできた。

「その格好は何。私の前でそんな醜態を晒すのかしら……いや、後にじよつ。そこの虫けらに顔見せなさい」

死臭纏う少女が遙を見下ろす位置に来た。

ボロを纏つように影を身体に巻きつけた長身。今殺し合いをしてきたような格好と疲労と罪悪感をないまぜにした悲しげな表情。それがどんなに異様でも彼女は遙にとつて紛うことなき友達の1人である。

「……アキラ」

凶兆の予感は的中した。

果てしない絶望から泣きそうな声で遙がその名を呼ぶ。アキラもまた沈痛な面持ちを強める。

「ああ、そんな名前があったわね。昔。今は『忠誠』^{ケルベロス}つていうの。それこそ犬のように忠実よ」

この暗鬱なる空間において1人だけ楽しそうな《魔姫》は、再び椅子に腰掛け脚を組んだ。

歪みきった心は未だ満足する」となく、新たな苦しみを味あわせんがため駆動していた。

「よく見たら靴が汚れてるじゃない。ほら『アキラ』、綺麗にしなさい」

「……はい、我が主」

女王然と君臨する《魔姫》の前にアキラは跪き、黒い光沢のある靴に舌を這わせ始めた。

「な、なにしてるの……ー?」

眼を背けることもできず、遙は歪んだ主従を目に焼き付けられるしかなかつた。

「ふふ、お分かり? 《冥界の柘榴》に手を出したが最後、身も心も全部私のものなんだから。あ、もういいわよ《忠誠》。靴が汚れるとから」

「ひ、どい……なんでこんな、こと……」

心に風穴を開けられ、そこから一切の善い感情が吸い取られていく

るようだった。

遙の瞳から流れた涙が、月光に光っていた。

「屈服の涙も見れたし、そろそろ私のものになつてもらおうかな」
『魔姫』が遙の右に立つた。その白く小さな手からは、ちやらち
やらと音を立てておもちゃのような悪魔の紅玉が溢れ出していた。
後ろに控えていたアキラは一瞬『魔姫』に手を伸ばしかけたが、
瞼とともに静かにその手を下ろした。

「イヤア！ アキラ！ 助けて！」

もがいてももがいても魔犬の拘束は外れない。

「無駄よ無駄。うーん、そうね。意識があるうちは言ひときましょ
うか」

一瞬の間隙。それこそ悪性の極みだった。

「その犬の手綱、アキラが持つているのよ」

そう言つと『魔姫』は一步下がつて、アキラを前に出させた。
遙は戦慄も覚えたがその胸には希望が宿つた。

「アキラ、お願ひ。これを解いて」

遙の声にアキラは眼を開けた。戸惑いを秘めた瞳が薄闇の部屋を
泳ぐ。

「待つのは嫌いよ。あと10秒で決めなさい。10、9……」

産み落とされる隸属へのカウント。

「こっちを見てアキラ」

落ち着きのある静かな声にふたりの視線が交錯する。ぶつかり合
い、せめぎあうと友情と呪縛。

「……信じてる。だから私も信じて」

「1、0……友愛なんて、無かつたわね」

魔犬は遙にのしかかっていた。そこを退く気などさらへないよ
うだ。

遥の身体は拒絶された絶望からか弛緩しており、《魔姫》がその口を開かせるのは簡単なことだった。

「さ、失望を抱いて暗き淵に沈みなさい……ん」

その時《魔姫》は気付いた。遥の左腕だけが、解放されていることに。

「そつちこそ」

瞬時に具現化する三つ首の銀蛇。

《魔姫》も回避に移つたものの、そのスピードは《怨疾毒蛇》に敵うべくもなかつた。

しかし切つ先が心臓を刺し貫こうと迫るなか、《魔姫》は笑つた。三日月に眼と口を曲げた冷笑。悪魔はあくまで悲劇の幕を降ろすつもりはないようだ。

遙に届いたのは刀身が骨肉を裂く感覚と押し殺した友人の悲鳴だけだつた。

アキラは《魔姫》を庇つ形で、自らの背に3本の凶刃を受け止めていた。慌てて引き抜こうとする遙だが、アキラの背中から沸き立つ魔犬の影に刀が押さえられてしまう。

無理に動かそうとするとアキラを傷つけてしまう。しかし超回復を誇る魔犬を振り払うにはそれが必要だ。

逡巡。

その隙に《魔姫》が躍り出た。小柄な体躯に不釣合いの大鎌を振り上げ、一気に振り下ろす。

遙の左腕は床に転がつた。

絶叫を吐き出すために無意識に開いた口にすぐさま《魔姫》の手が滑り込み、口の中に《冥界の柘榴》を流し込んだ。

血を甘くしたような恐ろしい味を認識するとすぐ、魔薬成分が粘膜に吸収された。

総身の神経が焼き切れたような苛烈な電流が駆け巡る。一度に大量摂取したせいか快感などなく、単なる苦痛の津波でしかない。

自分ではどうしようもない激しい痙攣が全身を襲い、遙の意識は

消し飛んだ。

「まったく非道よね。友達ってなんのかしら」

悪魔が囁く。

先の反逆と結末は出来レースだったと。

その咳きにアキラは沈黙する。

「だんまりは面白くないからやめて。裏切りの罪咎を噛み締めて、苦しむ声を聞かせてよ」

どうしようもない壞人の性。2年の間にさらに歪んできている。「あたしは友達をこんな目に合わせてまで生きていたくない。でも死ねない。あなたも殺してしまいたい、でも」

応える言葉は明らかな殺意と憎悪、そして悔恨の塊。

主従関係を無視した言動にも、《魔姫》は満足そうに先を促す。

「でも？」

「できない。あなたが消えたら、あたしは生き地獄に墮ちる」

「その通り。あなたが消えたら、私は滅びる。最後まで付き合つてもううわ、一緒に死ぬまでね」

異常な絆を確認する2人。

忠誠があるわけでもないのに《忠誠》。冥府の王であるのに生にしがみつく《墜落の魔姫》。

永劫不死の辛苦を中和するため、生きて貪るため、絡み合つしかなかつた力ドウケウス。

「それで、《起源》は仕留められたのかしら？」

「重傷を負わせましたが、反撃にあつて失敗しました。それに《天使》が裏切り、呼び鈴のこともありましたので追撃は断念しました」

2人は一瞬の間を置いて、いつもどおりの状態に戻つていた。

「あいつも私の魔薬が効いてるはず。裏切るなんて」

「ですが事実です」

《魔姫》の顔に困惑がよぎる。それを拭うみつてアキラは語氣を

強めた。

「そうね。まあ、あいつらはこれに任せようかな。安定したら試運転兼ねて殺してやる」

『魔姫』はベッドに横たわる新たな手駒を見てほくそ笑んだ。

第19話・五蛇 - *subordinate swamp*(後書き)

呆れるくらい悲劇吸引体质の人が多い。

沼でのたくる三つ首の蛇と二股の蛇。実は皆等しく隸属しているのかもしねい。

第20話 A・結絆 - bound by bond (前書き)

お待ちかねの小夜・藍編です。

「あの夜、藍ちゃんが犯されたのは私のせいなんです。私がそうするように命令したから」「うう」

凍結した街に一つの告白が生み落とされた。
でも、あれはそそのかされて……。そんな言い訳もやれりつと思え
ばできる。

それでも結局、《魔姫》の『教えてくれる』』褒美に眼が眩んだ自分
がやつたことなのだ。

俯いている小夜に藍の反応は窺えない。それは幸せと呼べたかも
しれなかつたが、続く沈黙は終焉を告げている気がした。

藍に突き放されれば終わりだ。

『魔姫』の元へも帰れない。

いや彼女ならあるいは……。優しく包み込んでくれた悪魔の魅力
は未だ小夜の内奥にくすぐつていた。

藍ちゃんの前でなんて不謹慎なんだろう。
胸にぞっとする冷気が噴き出し、ズタズタに切り裂いてしまった
い衝動が頭を巡った。

「それに藍ちゃんのお母さんとお父さんも手にかけてしまった。そ
れを綾瀬に隠蔽させたのも私」

何か言つたびに藍から離れていつている気がする。それがあまり
にも辛く苦しく、涙が異常に白い頬を伝つていつた。

「どんな罰も受けます。私を憎んで、恨んで、殺してください。私
死ねないから、生き返つてもまた殺して。死ぬまで赦さないで」

何を言つているんだろう。こんな誰も喜ばないのに。

小夜はあまりの痛みに耐え切れず、泣き崩れてしまった。

「ああっ、『ごめんなさい』。泣きたいのは藍ちゃんなのに、あああ！
藍ちゃんなんて呼んじゃダメ！ どうしたらいいの。早く殺して

ください」

小夜は正体をなくして悶えた。

身を裂く罪悪感。告白の先にある破滅か救済の未来。慈悲深い魔の包容。

小夜は圧死させんと肥大化していく軋轢からの逃げ道を模索し始めた。同時に逃げることしかできない自分の矮弱に目を向けることになり、余計に苦痛が増幅していく。

「顔上げて、こっち見てよ」

その時、だんまりを続けていた藍が口を利いた。

いかなる感情からか、その声には起伏が皆無だった。

「ごめんなさいもつしません赦し、うあ私は何を言つて赦して、赦さないでください！」

小夜はその声を恐れ、藍を見ようともしない。

「こっち向きなさい」

滑稽ともとれる狂態に、藍は苛立ち混じりで口調を強めた。

それでようやく小夜は顔を上げた。不憫なくらい涙でぐしゃぐしゃだ。

濡れた瞳の先には人型の暗黒が立っていた。明るい月を背負つているせいで藍は影に沈んでいた。

「ねえ、言つてる割に謝る気があるようには見えないんだけど。狂つたふりして逃げてない？ そういうの精神鑑定狙いの犯罪者っぽいよ」

普段の藍からかけ離れた容赦のない言葉に小夜は震え上がったが、気付いたこともある。

どんな罰も進んで受けると言いながら自己保身のために異常をきたした演技を続けるという大きすぎる矛盾だ。

「わ、私は……何をしたら」

人間とは思えない圧力に息を詰まらせて、小夜が喘ぐように聞いた。

返答はない。まるで自分で考えるとでも言わんばかりに藍は押し

黙っている。少なくとも小夜はそう感じた。

そんな強迫観念が身を焦がし、罪滅ぼしでも何でもいいから藍の傍に居たいという小夜の邪な望みを崩していく。

脳裏で悪魔が人懐っこく微笑んだ。

「…………つ」

一緒にいたいなんて言えない。

小夜はよろよろと立ち上がり、藍に背を向けた。滴つた涙がアスファルトをさらに黒く染めた。

羽を広げる。心を映したように弱弱しい。それでも彼女の元へ飛びことはできるはずだ。

「…………さよなら…………」

トン、と地面を蹴るとふわりと小夜の身体が浮き上がった。ここなら顔が見える。これが最後と、小夜は藍を顧みた。

藍もまた小夜を見上げていた。怒りや憎しみが見当たらぬ、別離の悲愴をさらけだした潤んだ目をしていた。

疑問と熱い感情が込み上げ、視界がぼやけた。

次の瞬間、小夜は手を引かれ藍の胸に抱かれていた。

「『めんね。酷いこと言つて。だから行かないで、小夜ちゃん

「…………どうしてなの」

自分にこの抱擁を受け取る資格はないと思ったが、振り払うだけの勇気もなかつた。

「だつて自分が赦せないよ。気付いてたのに、関係が壊れるのが怖くて言い出せなかつた。それでこんなことに」

藍は自責していた。切り出せず、あまつさえ敵のもたらした展開で小夜に言わせてしまったことを。

「ホント意味がわかんない。おかしいよ。優しくするよ」

憎まれ口。

昔明ちゃんに似たようなことを言つた気がする。この兄妹には救

われっぱなしだ。

「大切なものを犯して殺したんだよ。そんな私が……何の咎めもな
くいてもいいわけない」

「咎めが欲しいの？ ならこんな汚い私と一緒に居てくれる」とだ
よ。天使さま」

曇りない冷天名月の下、傷だらけの少女達はようやく抱きしめあ
うことができた。

2人はしばらくの間、抱擁を交わし涙を流していた。溜め込んで
きた苦惱をお互いの熱で溶かし、絆へと昇華させていくかのように。
小夜は心の底から喜んでいたが、冷ややかな目で事態を見ている
自分がいることに気付いた。

はたしてこれは現実か。こんなに都合よく願いが叶つものなのだ
ろうか。

陵辱されるというのは確かに辛い。絶望して自ら命を絶つ人だっ
ているだろう。

それでも両親が殺されることよりは、軽いのではないかと小夜の
冷静な部分は考える。

畜生児の小夜にとって親とは、呪われたこの肉体を生んだ存在。
嫌悪こそすれ情愛を感じたことはないし、向こうもその気はなかっ
た。

だが藍は違う。親の愛を一身に受け育つた。いくら強くてもこ
の一瞬で割り切れるはずがない。

疑心の灯が点る。吹き消そうとする手におえなくなる。
これは現実か。

小夜はやわらかな胸に埋めていた顔を上げた。どうしてもこの幸
せの確信が欲しかった。

「私が藍ちゃんを犯したみたいなものなんだよ
「それはもういいよ」

藍は、小夜が不安そうな顔をしているのを見て偽りのない微笑み

を返した。

「お父さんとお母さんも私が殺したんだよ」
やめておけばいいのに小夜は両親の話に繋げた。すると奇妙な反応が返ってきた。

「うん？ 言いたいことがあつたら遠慮しないで」

藍は小首をかしげた。

「聞こえてないの？」

「聞こえてるよ」

かみ合わない会話。親の死に関する言葉は藍の耳に入る前に消えてしまっているかのようだ。

「おかしな小夜ちゃん。さ、おうちに帰ろ。もう遅いし今日は泊まつていってね」

憑き物のとれたような表情で藍は微笑んだ。

ぎこちなく笑い返す小夜の目が、藍の頭上に動くものを捉えた。
蝶が舞っている。蒼白く内光り、ガラスの砂のような鱗粉を振り撒いている。

これは現実か。

疑問に答えるように脳裏に『虚構の楽園』と呼ばれる少女の姿が浮かんできた。あれの近くにいると何が本当で何が幻想か分からなくなる。

私が掴んだのは、本当に仲直りする展開なのか。

ふつと意識が遠のきかけて、暗いもやが目の前を漂いだした。

奇妙な浮遊感に襲われた小夜の耳に、藍の悲鳴が幾重のベールを隔てて聞こえてきた。

「じつして白雪の肌のお姫様は醒めない眠りに落ちていったのです
……バッドエーンド！」

綾瀬が後ろから小夜の肩に手を掛けた。

突然のことには悲鳴を上げてへたりこみ、小夜は電流でも走つ

たように大きく跳ねた。

「別にあんたのためじゃないんだから。明人と妹ちゃんが悲しむからね、耳に入らなくしてはるだけだよ。シロスケ」

耳元で綾瀬が囁いた。

「……ありがとう」

綾瀬自身は言葉通りの意味しか考えていないくとも、小夜の味方になってくれた。再び零が頬を伝い落ちた。

反応が面白くなかったのか、綾瀬はふんと鼻を鳴らして離れると助けを求める藍の元に駆け寄った。

「い、腰が抜けちゃって」

「ビビりすぎだよ。妹ちゃんは」

小夜はそんな光景を見て、これが入るべき輪なのだと分かつた。藍と自分と綾瀬。そしてそこに加わるうとする新たな影。

「はあはあ、置いてくなよ……藍！ 大丈夫だつたか」

明人が白い息を切らして合流した。

平気だよと頷くのを確認して、まだ少しショックの余韻に冒されている小夜に目を向ける。

視線がかち合う。旧知の仲だからか、それとも強い思念が伝わってしまうのか、それでお互い相手の主張が理解できた。

「小夜ちゃんもおいでよ」

藍が呼んでいる。その打ち解けた様子を見て、明人も警戒の色を薄める。

「綾瀬にいじめられたくらいで泣くんじゃない」

「かわいいからね。もっといじめちゃうよ」

小夜はその白い纖手で涙を拭いて、輝く輪に飛び込んだ。輪は小夜を温かく迎え入れる。

「ううう、私がんばるから。天使なのに、助けられてばっかりは嫌だから」

いつかきっと本当のことを藍に打ち明けよう。

でも今は、この輪を大切にしていきたい。この恩に全力で報いて

いきたい。

小夜は初めて嬉し涙を流して、心に誓つたのだった。

第20話 A・結絆・bound by bond (後書き)

月1の更新になつてゐるのが作者としても残念無念不覚の至り。
綾瀬にツンデレ疑惑。

そんなことよりお気に入り件数が増えて感激です。今後ともよろしくお願いします。

第20話 B・結縛・bound by bond

明人は灯りが点る部屋部屋を内包した地上1-2階のアパートを見上げて溜息をついた。

遙の呼び出しから始まり、小夜との対峙、家を追われ、帰つてき綾瀬に驚かされる。妹と禁断の接吻を交わすし、『起源』と少女の戦闘に巻き込まれ、わけも分からず薄気味悪い連中がうろつく街を歩き回った。

濃密過ぎる非日常体験のせいで、ひどく懐かしい感じがした。

これで、最後だ。

明人はしみじみと家の雰囲気を噛み締めながら、女子3人を振り返つた。

「藍と綾瀬は先に戻つてくれないかな。俺は、コイツと話がしたい」

藍と笑いあつていた小夜の表情がにわかに厳しくなる。
とつさに不穏なものを感じ取つた藍だが、真剣な雰囲気に押されて言葉が出なかつた。

「つーかーれーたー。早く入れてよー」

「は、はい」

子供のように駄々をこねる綾瀬に促されて、藍は背を向けた。明人は心の中で綾瀬に感謝した。

「……夜食、作つてるから。2人も早めに戻つてきて」

何かを危惧するような口調で言い残して、藍たちは自動ドアを抜けていった。

冷たい夜の秋風が枯葉を弄んで音を立てる。それ以外静まり返つた街路を明るいとはいえない電灯が照らしている。

「……お前のこと、信じていいのか」

ポツリと明人が漏らした。それは小夜に対する疑惑というより、自らへの問いを反芻しているようだつた。

「藍のことは分かつてゐる。俺だって知らない仲じゃないんだし疑うようなことはしたくない。けど力のない俺たちが身を護るためにできることなんて、それくらいしかないんだ」

「証拠がないと信じてくれないと？」

小夜はおもむろにポケットに手を入れた。そして取り出したものは、夜闇に包まれてもなお紅く輝く宝石に見えた。

「街を回つてたときにも見たが、それは何なんだ？」

一目見ただけで恐怖にも似た感覚を引き起こされ、冷や汗が背中に浮いてくる。それなのに触れてみたいという欲望を掻き立てられる。

「『墜落の魔姫』の使う薬。快樂と引き換えに隸属を余儀なくされる代物よ」『魔姫』、薬、隸属。それは遙が悔恨と悲愴に震えながら語つた出生との共通項。

だが何故、何故それを小夜が持つている？『魔姫』は遙に滅ぼされたと聞いたのに。

「『幻象』でも抗うのは難しいわ。まして人間なんて」

小夜の声が耳元で聞こえ、明人は我に返つた。小夜は背後から明人の首に手を回していた。

「……」

冷ややかな肌の感触に心臓が跳ね上がつた。恐怖も加わり反射的に撥ね避けようとしたが、小夜は肢体を絡めてそれを許さない。

男がか細い少女を振り払えないという異常な構図を『幻象』の力が可能にしていた。

小夜は明人の口をこじ開けて、魔薬を1粒放り込んだ。

「げほげほっ！」

白い月の抱擁から解放された明人は大きく咳き込んだ。魔薬を吐き出そうにも一瞬で溶けてしまい、おぞましい甘さが残つてゐるだけだった。

「やっぱり騙してたのか！」

「ばつぱつとする頭で必死に怒鳴る。

酩酊感はすぐになくなり、五感、六感に至るまでの全感覚が鋭敏化していく。身体中の濁んだ気が全て消え去り、血流が全身を駆け巡る。世界は見る見る明るくなり、タガが外れたように気分のインフレが止まらない。

「くくく、ははははハはっ！」

何がおかしいのか自分でも分からぬまま、明人は笑いながら拳を繰り出した。

『魔姫』の命令がない今、紅い魔薬はあらゆるコンピューターを外す機能しか備えていない。自分と藍を裏切ったという怒りが増幅され、凶暴性を燃え上がらせていた。

「分かつた？　これがたつた1粒でも支配される、危険なものだつてこと。そして私の能力は」

風を切つて振るわれる拳の連撃をかわしながら、小夜は右腕を光の刃に変えた。そのまま一抹の躊躇もなく明人の胸を刺し貫く。

「私が不浄と思うものを消し去ること！」

肉に埋まつた刃が煌々と輝いて、明人は全身を支配していた魔薬が浄化されていくのを感じた。

しかし無償というわけにはいかない。たとえるなら、身体中の細胞に張られた根を力任せに斬り取られるような痛みが身を焼いた。

「ぐぐぐああえええ！」　明人はその場に倒れこむと思いつきり吐いた。脂汗がだらだらと流れ、異様な寒気に肌が泡立つた。

「明ちゃん」

呼ばれるままグロテスクな吐瀉物から顔を上げると、小夜が見せ付けるよう例の丸薬を口にしていた。片手に盛るほど量だ。

やめると叫びたかったが、縊身がこわばつて声が出ない。

ついに白い喉をゴクリと鳴らして、小夜は魔薬を嚥下した。

「あなたの両親を殺したのも、藍ちゃんを酷い目にあわせたのも、全部これが原因。

でも悪いのはこんなものに溺れてしまった私自身。　私の覚悟、

見せてあげる」

凄まじい快樂に冒されながら小夜は宣言した。

その間にも口角が釣りあがり、狂った笑みを作っていく。雪のよ
うな頬に赤みが差し、熱っぽい吐息を漏らす。

「おい、しつかりしる」

ようやく余韻の抜けた明人が肩を揺すつたが効果は薄い。焦点の
合わない目が時折まっすぐになる程度である。

『魔姫』の狂気に魅入られて変貌していく小夜を繋ぎとめる手段
など、一介の人間が持ちうるはずもない。

「待ってる、今綾瀬を呼んでくる」

それは覚悟を見せると言った小夜への裏切り。誰かに助けられること
望んでいるはずがない。

「一人にしないで……もつ一人ぼっちは嫌なの。何でもするから…

…

必死に明人の手を掴む小夜。低い体温と共に離れるのを病的に恐
れる気持ちが伝わってくる。

薬が描き出したのは色を欠いた少女の深層。忌み嫌われ、拒絶さ
れ続けた孤独。

赤い瞳を濡らして訴える小夜を見ていると、辿ってきた道が分か
るような気がした。

認めてくれる誰かを探して、精神的、肉体的に異形揃いの『幻象』
の中に飛び込んだこと。『魔姫』に脅されて、命令を実行してい
たこと。

思わず支えてあげたくなる脆さ。例に漏れず腕を回した明人を、
なんと小夜は突き飛ばした。

「もう媚びたくない！ 対等でいる！ 藍ちゃんと一緒にいたいの
！」

そう絶叫して、自らの身体をかき抱く。

収めようもなく奥底から沸き起こる震えは、小夜の葛藤を如実に
表していた。

小夜の全身から光が零れた。体内に巣く汚濁を浄化する聖なる

輝き。

「 ッ！」

伴う苦悶もまた明人の比ではない。堪えられない悲鳴が上がる。鋼鉄の茨でがんじがらめにされて転がされるような激痛。快樂と依存の棘はどこまでも深く鋭く突き刺さり、抜こうとする手さえも貫き穢す。

『帰ってきたと思つたら、またどこかに行つてしまつたのね』頭の中で幼い声が響く。魔薬が活性化する。

『魔姫』の支配下にあつた小夜は、投薬でその繋がりを取り戻していた。

呑きつけられる悪魔の誘惑を追い払うように、小夜は狂つたように頭を振つた。

『聞きわけのない子。私が来いと言つたらすぐ来なさい』命令と共に黒々とした夜空に紅い波動が进る。

『何だ……』

それは『魔姫』の一端に触れた明人にも見ることができた。アキラを呼び戻したあの呼び鈴。服従を強要する横暴の象徴。『もうあなたには従わない！ 藍ちゃんと一緒にいるつて決めたんです！』

光が輝きを増す。それは身を焼く焰に薪を投じることになるが、自由へのただ一つの道もある。

苛烈を極める葛藤。衝突により生まれる痛みも否応無く高騰していく。

ぐらりと小夜の身体がバランスを崩す。いつ墜ちるとも知れない危うさが見て取れる。

『小夜！』

明人の叫びに小夜はほんの少し微笑んだ。この孤独な戦いにも手を差し伸べてくれたことが嬉しかった。

『 けない』

小夜はなんとか態勢を整えて、うわ言のよつに呟いた。

『何？ あなた一度墮ちた分際で這い上がると思っているの』
『魔姫』が嘲る。もう虫の息だと見下した調子がありありと聞き取れる。

「あなたなんかに、負けるわけにはいかないの！」

小夜は気概に満ちた声を張り上げた。包む光はもはや直視できな
いほど強烈になっていた。

『つ、お前の大切なもの全部奪つてやるから！』

途切れの憎悪の声。天使の刃が呪われた戒めを断ち切った瞬間だ
った。

「頑張つたな」

明人は背中の小夜に囁いた。

ぐつたりと脱力して目を瞑る小夜の顔はいつも以上に蒼白い。眠
つているのかと思ったが、淡い笑みを口元に浮かべた。

「明ちゃんのおかげだよ」

ほとんど力が入っていない弱弱しい声。あの後いきなり倒れたこ
とといい、消耗が著しいようだ。

「俺は何もしてないだろ。小夜が一人でやつたんだ」

「違う！ そうじやなくて、名前、呼んでくれた」

「あ、ああ、まあな」

氣恥ずかしい沈黙を従えて、エレベーターに乗り込む。

鈍重な動きで上昇していく箱に耐えかね、明人は墨に灯籠を浮か
べたような街を見下ろしてみた。すると小夜が折れそうな声で鳴い
た。

「……ごめんなさい

「きなりどうした」

「ちゃんと謝つてなかつたから。お母さんやお父さん、藍ちゃんの
ことも。あと今日の色々。本当にごめんなさい」

「気にしなくていいよ。それより藍にはちゃんと言つたんだな？」

自分より藍を気にかける態度は褒められよつ。しかし小夜は、自身を蔑ろにしていそうな気配に言い知れぬ不安を感じた。

「うん。でも親が亡くなつたつてことは《樂園》が伝わらなによつにして」

「俺がそいつさせたんだ。あんなこと、知らないほうがいい」

「そう……今は私も仕方ないと思つてる。でもそれじゃダメだよ。

私はいつか本当のことを話す」

小夜は力強く言い切つた。

意外そうな顔をする明人。

「もつと保守的な奴かと思つてたんだけど」

「それは明ちゃんのほうでしょ」

「そうかもな。それよりさつきから明ちゃんつて」

「いいじやない。せつかく仲直りできたんだし」

「そりだけど、綾瀬があ……」

脳裏に浮かぶのは包丁を持った大きなリボンの美少女。あれは刺激が強すぎた。

「ふふ、鬼嫁だよね」

「嫁じやねえよ」

「そんなこと言ひと怒るんじやない？ 帰つたら嫁宣言ね」

なんで俺はこじりれキャラになつてなんだと、つべづべ思つ。何か仕返しを……。

「お前だつて、なんからしくない台詞吐いてたじやん。藍ちゃんと一緒にいたいとか負けないとか、帰つたらお姫様のナイト宣言な」
むず痒さを紛らわすために言い返す。

「……それは、言つちやダメ……でも、ナイト……」

小夜は背中に顔を押し付けてそれきり黙つてしまつた。

反応はかわいいのだが、何かあぶないものを目覚めさせてしまつたのかかもしれない。

「ただいま

「おかれり！」

重なる2組の声。完成した輪。その半分が非日常の存在でも、それは強固で温かく回っていく。

第20話 B・結絆・bound by bond (後書き)

良い最終回だった(嘘)

これにて中編は終了です。

次は幕間挟んで後編かな。ほのぼのしたのがあつたほうが、ハデスさんの凄惨さが映える気がします。彼女にもアップが必要ですしね(笑)

どうも日常会話が上手く書けないので次回が心配。

第21話A：狹間 - intervalic moment

「月には不思議な力があるんでさあ」

和服の男がのんびりと空を仰ぐ。廃寺の縁側に腰を下ろし、あたりを取り囲む木々の先にある真円を見ている。

小夜もその隣で血のような赤の瞳に月を映していた。

「人工の灯が無い時分は月が人を惑わしていたんださあ。妖怪なんてのは月の狂気にあてられた人間が見た幻想。今は妖怪なんていいでござんしょ？ こんな田舎でも街灯がありやすい、都会じゃ昼夜の区別なんてありやせん。お月さんも狂気を失つちまいまして男は喋り続ける。何の目的があつてそんなことを語るのか、小夜には見当も付かない。

突然この寺に来た彼と何度もこんなやりとりをした。今だ理解はできないがちょっととした共感を持つていた。

「現代は逆なんですよ。太陽が人を狂わせてるんでさあ。日が長くなる春あたりにおかしな連中はうろつきますし、晴れた日に犯罪が多いと言います。逢魔が時なんてまるつきり太陽出でますぜ。

命芽吹くあの季節に、夕焼け燃えるあの刻に、事故やら事件やらがたくさん起きるなんてお天道様も罪なお方でさあ。そうは思いませんか？」

「……それで何が言いたいんですか？」

疲れを切らして小夜は聞いた。回りくどいのは嫌いだった。いじめにしても直接的なものより間接的なものの方が辛い。

「まあまあ、最後まで聞いてください。そんでもって、お月さんは太陽がばら撒いた狂気をこの静かで清らかな光で浄化してるんだと思つんでさ。現代は。小夜さん見てて落ち着きませか？」

「まあ、少しば」

まだ続くのか、とうんざりしながらも小夜はちょっと考えてみた。

昼よりも夜、太陽より月が好きだった。

色素欠乏症の体質的に紫外線を受け付けないと云うものもあるが、目立ちたくないという願望が夜を肯定していた。月はさしづめ穢士を見下ろす隠者のようだ。

気付けば小夜の抱く月と夜のイメージは、男のそれとよく似ていた。

「あなたもどうして分かつてらつしやる」

「ずいと男が顔を近づけてきた。

彫りの深い顔立ちにどこか生氣の欠けた黒の瞳。若いとも老いているともれる年齢不詳さが目立ち、そればかりで記憶に残りにくそうな顔だ。

「あつしのお母さんになつてもうえませんか」

「……はい？」

奇怪なプロポーズに小夜は目をしばたいた。お母さんとはこの男にとつて何なのだろう。

「あつしの仕事、知りたがつてましたよね。教えてあげます。あつしはいわゆるセーフティネット、救済措置つてやつですか」

次々と理解に苦しむ言葉を残していく男。

「生まれてきたことを後悔したことはありやせんか？ どうして自分だけが酷い目に遭わないといけないのだと恨めしく思つたことは？ もちろん誰にだつてありますでしょう。

しかしね、時間を置いたり努力のじょうによつちやあ人並みの幸せを得ることもできる」

それは私の努力が足りないと言いたいのか、と怒鳴りたくなつてくる。だが、何となくそういう意味ではないと感じてもいた。

「それができる人等はまだ幸福でさあ。世の中にや生まれながらにその権利すら剥奪された人がいますからねえ。あつしやあなたのような」

男は低く囁つた。自分の生まれのことを囁つたのか、そんな不幸を生んだこの世界を囁つたのか。ともあれ男の笑みは何かを嘲つているようだった。

「あなたも同じ」

「さよう。あつしには他人の心、特に欲求が何もしなくて漫画のフキダシみたいに見えてしまつ。綺麗な願いからドス黒い欲望まで、街を歩けばそちらじゅうに浮かんで見えるんださ。おや、信じてくれないんで？」

「いきなりそんなこと言われて信じられるほつがおかしいです。証拠見せてください」

露骨に疑惑の眼差しを送り、小夜は言つた。「冗談とも本気ともつかないが、この男は底知れぬ何かを秘めていると直感した。それを見てみたかった。

「うーむ、致し方ない。本当はやりたくないんですけど……」

男はカツと目を見開いた。半死の眼に異様な光が漲つていく。

小夜は頭の中を覗かれたような奇妙な感覚を味わつた。

「殺意の源は、猫、水。そういうやここに住んでいた野良公が見えませんな。溺死ですか。むごい事をする」

男は次々と小夜の身に起きたことを釣り上げる。一つ釣りあげれば芋蔓式に関連する記憶や感情が引きずり出される。ブレインワインガーブリンクトとマインドリードの恐怖の融合。

おぞましい感覚はうねりを上げ、数多の眼球に内側を翻られるものへ変わっていた。

黒々と乱立する影。少女を捕らえて放さない腕。冷たい水しぶき。必死に這い上がろうともがく4本の足。静まる水面。正氣とは思えない鬼の爆笑。冷たい毛の塊。

小夜の忘れようとする意志があまりに強かつたため、記憶は強烈なシーンの細切れだつた。それでも一度甦った精神的な痛みは容赦なく進行していく。

「求められたこととはいえ、申し訳ありませんね。止めておけばよかつた」

男もまた傷ついていた。心を読めてもろくな事は無い、と改めて絶望したような顔をしていた。

「あなたが見たというのは地獄の一角に過ぎません。私が積み上げた12年は全部生き地獄です。そこから連れ出してくれるなら、なんでもします」

しばらくの後、落ち着きを取り戻した小夜は男の力を認めたようだつた。まだ力が入らずへたりこんでいるが、一切の疑いを排除した真剣な顔つきで、今にも土下座しそうな勢いで懇願していた。

「ええ、ええ分かりますよ。伝わります。狂おしいほどの渴望が男は小夜の手を取つて立ち上がらせた。

「さあ、小夜さん。あなたは何を望みます。これから始まる新しい人生に、常人は得られぬ第二の生に」

「私は……」

言えば現実になる。だが、私が本当に望んでいることは一体なんだろう。

色素欠乏症を治してもらいうことだらうか。それとも私を追い詰めたクズを葬る力だらうか。……明ちゃんともっと仲良くなることだらうか。

分からぬ。望み、人生の道しるべをそんな簡単に決められるのか。永久に固着されてしまうのに……。

「私の思う悪を滅ぼしたい。世界に害しかもたらさない人たちを変えてみせる」

「つまり死による沈静ではなく、生きながらの浄化と

「はい」

誰かが答える、誰かが頷いた。徐々に明るくなる世界。男も少女も森も寺も、全てあやふやになつて渦に呑まれていく。

「了解ですか。願わくは、その望み果たされんことを

「 さん、小夜さん」

「んんっ……『起源』？」

田を開けようとすると強烈な光が視神経を焼いた。目が慣れるのを待つて、自分の状況を再確認する。

空を覆うように木が茂つていて決して明るいとは言い難いが、大小いくつもの木漏れ日の筋がオーロラみたく輝いている。

その一方で老朽化の進んだ木造の社屋が深い影を落としている。苔むした屋根に打ち破れた戸や障子、そこから覗く畳は日焼けで黒く変色している。その姿は失われた信仰をそのまま表しているようだ。

そんな夢とは昼夜を異にした世界の一角で居眠りをしていたらし。木々の隙間から降る一條の口差しが、ちょうどビスピットライトのように小夜の雪肌を照らしていた。

「おはよづござえます。今日も御綺麗ですか」

夢と同じ和服姿の『起源』が傍にいた。親しげな表情もそのままだ。

「ありがと。私が呼んだのにごめんなさい」

「いいんですよ。待つのも待たされるのも得意なのでね」

そこで小夜は『起源』の変化に気がついた。彼は空中にあぐらをかいて浮いていた。

「どうしたんですか」

「いや、昨夜手痛くやられちまつてですね。情けないことじ、両脚

がばつさりでさあ。治るまではこの盾が脚代わりでさあ」

何でもないことのように『起源』は語り、コンコンと不可視の盾を叩いて見せた。よく見れば

脚があるべき場所には布が漂っているのみ。

小夜は驚きを隠しつつ聞いた。

「誰にやられたんですか」

「アキラさんですよ。『忠誠^{ケルベロス}』とも名乗っていましたねえ」

「彼女は『墜落の魔姫^{ハドス}』の従者です。つい昨日まで私の同僚でした」

『起源』は合点がいったと頷いた。小夜が自分を呼んだ訳、昔頼

んだスパイ行為の結果を報告するためだ。

話題は小夜の報告へ移行した。

「最後に連絡があつてからだいぶ時間が経ちますね。あの魔薬のせいでござんしょ」

「はい。始めの内は意志で持ちこたえられましたが、だんだんと濃度が上がるにつれて全く身体が言うことを聞かなくなるんです」

思い出すだけでも怖氣の走る生活を小夜はポツポツと語りだした。しかし支配されている間の記憶は曖昧で、まともな報告にはならなかつた。

その中で一つ、小夜が罪悪感を抱えるものがあった。

「『復讐の女神』^{ネメシス}を引き渡したのですかい？」

それを聞いた《起源》は見る間に表情を険しくさせた。その詰問するような口調には、いつもの余裕が消えていた。

「で、でもまだ『魔姫』の手中に落ちたとは……」

気圧されながらも何とか言い訳をする。まさかそんな反応が返つてくるとは思わなかつた。

『女神』は『幻象』の敵で、『魔姫』も危険視されている。明人にメモを渡す時支配されてはいたが、2人をぶつけてどちらかが潰されれば脅威が減ると考えていたからだ。

「『魔姫』なら『女神』は勝てたでしょうが、『忠誠』というなら話は別でさあ。『忠誠』と『女神』は友人同士、しかも『女神』は自分が彼女を殺したと思っているはず。もし仮に死んだと思つていた親友が目の前に現れたら、どうしますか？」

「それは……」

戦うという選択肢が出るわけがない。

「分かっていますね。もう『女神』は冥界に呑みこまれたと考えるほうが良いでしょ？」「でも、敵が一方にかたまつたのは良いことでは？ は避けられます」

『月宮の天使』^{セレナ}、あつしは『女神』を敵だとは思つてませんぜ。

むしろ敬うべき、愛おしむべきと思つておつまわる

口調を和らげ《起源》は言つた。

「なんですか？　あいつは私達の仲間を何人も滅ぼしているんですよ？　いくらあなたの被造物についても許されることではないと思ひますが」

理解できないといった風に小夜は刺々しく言つた。

「それも一理ある。いやまさしく正論である。そういう意味で葉巻を聞く度にまた罪を重ねてしまつたと身に染みますな」

懺悔者のような悲哀な響きを込めた声。

「どういう意味ですか、それ」

《起源》が内情らしきものを見せることは珍しかったので、小夜は突つ込んでみた。

「後悔はいつまで経つても先に立つてくれませんね。今回もまた繰り返すだけかもしれませんが、あつしはあるしなりの全力をつくすつもりでさあ」

小夜の問いを若干無視する形で《起源》は話を続けた。

「《女神》を救出してください。あつしもサポートはしますが、これはあなたにしかできない。聖淨の月よ」

《起源》は頭を深々と下げた。どう答へよつかと迷つてゐる間も微塵も態勢を崩さない。

それを見ているとだんだんとむず痒くなつてくる。どうも私はお願いというものに弱いらしい。

「顔を上げてくださいよ。元々私の軽はずみが招いたことです。私が責任を果たさないといけないんですから」「といふことは引き受けてくれるんで？」

「はい」

パツと《起源》の表情が明るくなつたかと思つと、嬉し涙まで流しながら小夜の手を取つた。

死灰から燃え甦る不死鳥の如き急変化に少し面食らひ。

「ああ、ありがたいことだわ。先ほどの《女神》に対する言い分

を聞いたときには、もはやこれまでと覚悟しましたよ」

「別にあいつのためじゃないです。敵に回つたままだと厄介だし、あなたが悲しむのも見たくない」

小夜にとって《起源》は自分を救つてくれた恩人。彼の力になれるなら何だつてやるつもりだった。

《女神》も助けてくれた相手にすぐさま刃を向けるような真似はしないだろう。一時的に共闘も可能なはずだ。

「なんと……」

言葉が出ない様子の《起源》。だがいつまでも感傷に浸つてているわけにはいかない。感動に緩んだ表情をすぐに引き締める。

「現状、あつしらは後手に回るしかありませんでさあ。それに《魔姫》は短気ですから、何をするにもあまり時間は残されていないと思いまさあ」

「ではどうすれば」

「とりあえず、あつしは《天網》^{ウラノス}をあたつて居場所を割り出します。あなたは街の中毒者共を片つ端から浄化していくください。《虚構の樂園》^{ヒコロシヨン}にも協力するよう言つておきます」

あの気まぐれな《樂園》が素直に協力してくれるかどうか、小夜はいきさか不安だった。

協力するしないで揉めるならまだしも、享楽に身を任せであちら側につく事だつてあるかもしね。意外と気の抜けない相手だと思つてはいるのだった。

「確かに彼女は信用には値しないかもしね。あつしの力をもつてしても読めない人ですから。ですが逆に彼女ほど有事において力になる者もいませんぜ」

小夜の不安を読んで《起源》が言つた。それが正しいことはだいたい理解できるが、胡散臭さを全て払拭することはできなさそうだ。そもそも何故私がこんなに警戒しているのかが分からぬ。概ね良好な関係だつたと言つていいはずなのに。

「『天使』……思いつめる必要はありませんぜ。注意を怠らないのは良いのですが、それを目的と勘違いするのは危険でさあ。いざという時、動けなくなりますぜ」

忠告を残して『起源』は去っていった。

和服が消えるのを見届けて、小夜は気合を入れなおした。まずは『樂園』を探さなければいけない。

第21話 A・狭間 - intervalic moment (後書き)

遅筆です。すいません。

ほのぼの書くとか言つていましたが、無理でした。

『ふえのみな!』とかやりたいのに(笑)

第21話B・狹間・intervalic moment

深紅の鎖に繫縛された三つ首の銀蛇は、毒牙を振り乱し、身をくねらせ暴れた。

しかし鎖が築いた呪縛の歴史は恐ろしく深い。喰らうことを抑圧され続けた蛇とは違い、己の実力を遺憾なく發揮し、洗練してきたのだ。

飲み込まれるな、と蛇が喚いている。

それを跳ね除けて何になるの？ 遥は蛇を見つめた。

答えは自明である。見渡す限りの殺戮の荒野。血塗れた物語の続きを紡ぐだけだ。

殺しの苦悩と快樂に翻られるだけなら私は奴隸でいい。アキラと一緒に過ごせれば、それで。

尾を引く絶叫は怨嗟にまみれて、蛇は鎖に絡め取られていった。鎖の次の標的は無論遥だつた。

足元から這い上がり、胸を、腕を、首を戒めていく深紅。遥は抵抗しなかつた。むしろ進んで受け入れたというほうが正しいだろう。気付くと遙は跪いて、小さな指に口付けていた。

顔を上げると《魔姫》の蒼眼が見下ろしていた。見ている間に口元に三田月が刻まれた。

「今日からここがあなたの家よ。家族、そういうことになるわね」そう言つた彼女の顔は慈愛に満ちていた。遙はそう思った。

「《忠誠》^{ケルベロス}、彼女を開いている部屋まで案内なさい」

「はっ」

脇に控えていたアキラに手を引かれ、遙は《魔姫》の部屋を後にした。

遙は案内された部屋でベッドに寝転がつて天井を眺めていた。

不思議な感覚だつた。我が身を苛んでいた蛇の慟哭が露ほども感じられない。それでいて喜びもない。たゆたうような虚無があるだけだ。

果たして自分の選択は正しかつたのだらうか。

堂々巡りの思考に陥りそうなつた頭を現実に叩き戻す。
まだ始まつたばかりだし、悩んでもしようがない。今までの孤独に比べれば、アキラといられるだけでも幸運だ。

「霜崎様、いらっしゃいますでしょうか」

謙虚なノックが部屋に響き、次いで女性の声がドアの向こうから聞こえた。

遙が返事をすると、黒の服に白いHプロンのいわゆるメイドが扉を開けた。

見れば自分と大して変わらない少女だ。そんな人に様付きで呼ばれるのは心地の良いものではなかつた。

「お着替えの準備ができております。どうぞ」「ひらく」

「着替えって、何かあるんですか」

「霜崎様のための晩餐会でござります。あらかじめお伝えしなかつたことをお許しください」

遙の疑問に答えて、メイドは深々と頭を下げた。

何だか気持ち悪かつた。厭われるのには慣れているが、いつも丁重なもてなしをされるのは初めてだからかもしれない。

「晩餐会？ 何で私に？」

「それはお嬢様が霜崎様を家族と認められたからです。これまでも幾度となく行れてきた慣例行事でござります」

逡巡。断る理由は見当たらない。

私は誓いのキスをした。あの時から《女神》の名が聞いて呆れるほど一縷の憎悪も抱けなかつた。

漠然とした畏敬と埋め火のよつた渴仰があるのみ。それも次第に形を得ていつているような気がする。

「よろしいでしょうか。では、こちらへどうぞ」「

メイドは遙が心を決めたのを敏感に感じ取り、部屋の外へ促した。

「その前に1つお願ひがあるの」

「何でしょ。なんなりとお申し付けください」

「敬語はやめてくれない？ 私と年も変わらなさうに見えるし」

「あいにく職業病でして。不治の病なのでござります」

「シ、とメイド少女はいたずらっぽく笑う。

遙も笑い返した。「こへ来て初めての笑顔だつた。

「お好きなのをどうぞ」

メイド少女 菜々子に連れてこられた部屋。

遙は目を見開いた。その瞳が失っていた無垢な輝きを取り戻すのに時間はかからなかつた。

背の高いタンスが壁を埋め、煌びやかな衣装が所狭しと置かれた部屋。

「うわあっ……」

「ゆっくり決めてくださいね。時間はまだまだありますから」

あれこれ手にとつて、試着をして、ポーズを決めてみて。途中からは菜々子も混ぜて、騒いでみる。

それは奪われた青春の一幕のよ。

「今夜は何着る？」

「そうですね、いつも黒ばかりなのでたまには違うのを着てみませ

んか。お互に」

「なら私も白とかにしようかしら」

カチャリ、ドアが開く。

そこへやってきたのは、白金の髪を靡かせた悪魔と影のような従者。手を繋いで笑い合う姿は親子に見える。

両陣営ともその時まで気付いていなかつたらしく、視線を交わしてまま固まる。

「お嬢様、《忠誠》様！？ ええと、いつときはなんて言え

ば

「はあ、あなたの従者病も大したものね。そんなに悪まらないでもいいのに」

「そうですけど、あつ、ドレスどうなさいます?」

「切り替え早いわね……」

『魔姫』があんなに親しげに……幻覚?

呆気に取られて見ている遙の肩にアキラが手を乗せた。

「あれくらいで驚いてちゃきりが無いぞ。対外的には厳しいが、身内にはあんな風だから変に力を入れないほうがいい。疲れるだけだ」本当の子供のようにはしゃぐ『魔姫』を見ていると、頭を往来する『女神』と遙の立場のことも気にならなくなつてくれる。

「何してるの2人とも。決めないのかしら?」

「あの~お嬢様?」

「何、菜々子?」

「私もこここの衣装着てパーティ出たいなあ、なんて」

「あなた不治の職業病はどうしたの」

「あーうー」

「仕方ないわね。あなたはなかなか優秀なメイドだし、『」褒美つてわけじやないけど許してあげる。ただし、後で皆に自慢する」と。分かつた?」

「ほんとですか。ありがとうございます!」

「その方が労働意欲が湧くわよね」

異質な者のそれとは思えないほど、平和な空気が満ち満ちてくる。しばらく4人の無邪気な笑い声が止むことはなかつた。

スイッチの切り替わる音と共に、遙の姿が複数のライトで照らし出された。

白いクロスの掛かった円卓群。そこに座る異邦同邦の老若男女が注目する。

マリンブルーのワンピースからすらりと伸びる足には白のパーティサンダル。肩には黒花のコサージュ。

遥は照明に艶めくブラウンの長髪を波打たせながらその間を抜け、ゆっくりと、しかし力強く壇上へ向かう。

ステージの端には《魔姫》とアキラがいる。

レースの付いたアイボリーのボリュームドレスを着た《魔姫》。子供っぽい可愛らしさを押し出しているように見えて、その内面が揺るぎないことを瑠璃色の瞳が物語ついた。

その一步後方で影が紅蓮に燃え上がっていた。

深いスリットの入ったドレスが、アキラのたおやかな脚線を中心^{ネメシス}に全身のラインを強調している。煽情的な肢体を衆目に晒しながらも、炎は微塵も揺るがない。

「今日から家族の一員になつた《復讐の女神》よ。異議ある者は、その由この場で述べなさい」

遥がステージの中央に立つと、《魔姫》がその名を告げた。透き通つた声はどこまでも深く場に染み渡つていった。

所々でざわめきが起きる。人間と《幻象》の境界に住まう彼らが、首切り役人の名を知つても不思議ではない。

遥の立つ舞台から程近い場所にいた菜々子も口元を押さえ、目を見張つていた。

「危険はないのですか！」

誰かが叫ぶ。

「無い。とは言い切れないわ。まあ、去勢はしておいたけど」「会場から笑いが漏れる。

遥は顔を赤くして俯いた。

「お、俺は反対だ！ あんただつて言つてたじやないか。《幻象》は自分の欲望を最優先させるだつて！ じゃあそいつは生まれながらの殺し屋だろ？ いくらあなたの支配力が強かるうが……」

今度は若い男の半狂乱になつた主張が飛んだ。敬語すら忘れていたところを見ると、最近《幻象》絡みで生命の危機でも感じたのだ

ろづか。

自分が男を追い詰めてはいないとほいえ、その言葉は胸を抉る。

「ならお前、ここへ登つてきなさい」

『魔姫』の冷たい声が響き、男は萎縮した。

「ぐずぐずしない！」

強制力を秘めた恫喝に抗える者はこの場にいるはずもない。

壇上に召し上げられた男は、いかにも氣の弱そうなひょろ長い男だった。

「知つてゐると思つけど、ここにいる人間は私の『柘榴』に適応して半分『幻象』になりかけてるわ。食べたことないわよね？ どんな味がするのかしらね？」

耳より流れ込み、霜崎遙といつ存在の根幹を搖さぶる呪詛。

氷杭を脊髄に打ち込まれたような悪寒。しかもその杭が貫いたのは感覚だけではなかつた。

「……！」

鎖の呪縛を逃れた半身が、鎌首をもたげているのを感じた。

「お、おい！？ どうこいつつもりだ！？」

凶兆を察知した男がもがく。身体は舞台に縫い付けられている。およそ100通りの興奮あるいは恐怖でホールは静まり返る。その静けさと反比例するように、蛇人混淆の叫びが頭蓋に轟き渡る。もはや意味などなく、抑制につづく抑制で剥き出しになつた『怨エロニコエス』の本能の咆哮だ。

「よいのですか。あのまま暴走されでは、あたしでも止められるかどうか」

「ふふっ、誰がなんと言おうと彼女は家族なのよ。信じてあげるが、私達の役目ではなくて？」

『魔姫』は目線を遙から外さず、自信ありげに笑つた。

主人の意向に逆らわないのが従者である。アキラもそれ以上は言わなかつたが、万ーの時は親友として飛び出すつもりでいた。

遙に2人の会話を聞く余裕などない。

今までに無いほど凶悪にギラつく三刃がすでに発現している。猛烈な飢餓感と眩暈と絶叫が主導権を奪おうとしていた。

「寄るな！ 寄るなあああ！」

知らず右足を踏み出していたらしい。無様に腰を抜かした男が喚いている。

汗の臭い、怯えた声と拳動、脈拍の上昇。どれもが蛇を興奮させる。恐怖の染み込んだ獲物ほど舌をとろけさせるものはない。

左、右、また左。焦らすように意味が増すように、ゆっくりと歩を進める。

音も無く銀の舌が伸びて、獲物に触れる。

「いえ、アアアア、ア！？」

振り切れた男は信じられないほど素早い動きで剣先をかいぐり、遙に飛び掛った。

予想外の反撃に対応できず、遙はそのまま押し倒された。頭を打ちつけた衝撃で全身が麻痺した。剣は真っ先に弾き飛ばされた。

男は泣き笑いしながら殴打と絞首で追撃する。細腕の血管が全て浮き上がり、尋常ならざる怪力を物語っている。

私、死ぬのかな。

ふとまともな考えが浮かんだ。《毒蛇》の凶念が薄れたせいだろう。

視界の端を赤と黒の閃光がはためいた。

咄嗟に脚を曲げ、男の腹の下に入れて突き出す。男の身体が浮くと同時に身を起こし、男に覆い被さる。

暴行だけに心血を注いでいた男は、いつも簡単に立場を逆転される。

「ぐつーーー！」

背中を黒のブレードが切り裂く。凍えるような痛みが神経に食い込む。

「大丈夫、ですか」

痛みに負けじと尋ねる。

男は酸欠でも起こしたように口を開閉している。驚きで目を白黒させている。

「遙、すまない。あたしは……」

駆け寄ったアキラは後悔を顔に滲ませていた。命令されて行動したわけではなさそうだ。

「分かつて。助けようしてくれただけなんでしょう。ありがとうございます」と幸い傷は深くない。遙は顔をしかめる代わりに、笑顔で立ち上がつた。

「私の右腕に仲間殺しをさせないため。自分を罵った男を助けるため。なにより認められたいため。彼女は身を投げ打つのです。同じことがあなた達にできます？」

その決意を見せてもらつたからこそ、私も誓うわ。もし彼女があなた達に危害を加えるようなことがあれば、私が全力で守ります。じゃあ改めて贊否を問おうかしら」

一瞬の間。会場からは割れんばかりの拍手が巻き起こつた。満場一致の承認。

「言つておくけどこれは『やらせ』じゃないわよ。自分の意志も表明できない者をこの船に乗せたりはしないから。まあ、こじつけがましいのは承知の上よ」

『魔姫』は真剣な眼差しで言つた。

「どうした!? 痛むのか?」

突然泣き出した遙を見て、アキラは慌てふためいた。会場もざわめぐ。

「違うよ

アキラのこんな姿はなかなか持めるものではない。少しおかしかつた。

「もう一人じゃないんだなあ、って思つたら、何だか……」

久しく忘れていた感覚。受け入れられる嬉しさ。

「どうぞお手を貸して下さい。自分にできぬことは、何だつてやるつもりでいる。

「ありがとうございます！これからよろしくお願ひします」

まだ顔も名前も分からぬ家族を向き直つて、遙は深くお辞儀した。

第21話 B・狭間 - intervalic moment (後書き)

これで終章入るとか言つてましたが、何だか半端。だらだらし過ぎ
かな…

第22話・聖沌 - sacred and swirling(前編)

お久しぶりです。長い間ストップしていたにも関わらず、多くの人に読んでもらえて感激しました。

佳境に入りつつあるこの物語、お楽しみいただければ幸いです。

第22話・聖沌 - sacred and swirling

緋森市街を囲む田園風景は、街の明るさとは裏腹に夜の帳を色濃く下ろしていた。

街の中では壊れかけのライト程度の光量しかない月も、この宵闇ではほんの少しだけ活躍していた。

いつからか夜に沈んだ森の一角がぼんやりとした光に包まれていた。飴細工の美しさ、儂さを体現した光だった。

その光の中は、日付も変わらうかという時間帯にも関わらず人で溢れていた。100人かそれ以上いるだろう。

全員が全員夢遊病を発症したような忘我の表情で立ち尽くす様は、不気味以外の何者でもない。

「順調……今夜で浄化が完了するのに、『墜落の魔姫』たちが動く気配もない。綾瀬はどう思う？」

「ゴシックロリータ。黒と白のひらひらした衣装を着た少女が、不気味な群集に向かつて手を翳しながら心配そうに言った。

日本人というより、白人にもいよいよ白すぎる肌。色こそ灰色であるが艶のある髪。眼は血液が透けて赤く染まっている。

少女は、いささか人の形を逸脱していた。

「邪魔がないのはいいことでしょ」

綾瀬と呼ばれた女の子は、しゃがんで何かしながらしぐれっと答えた。彼女は先の少女 小夜に比べるとごく普通の人間に見えた。寒そうな格好の小夜とは対照的に、ジャンパーにマフラーを着ている。

外見で言えば、茶色の髪につけた大きめの赤いリボンが目立つこと、絶えず天真爛漫な笑みを浮かべていることくらいである。

その時、トランス状態で月光浴をしていた群集に変化が起きた。その中の1人が身体を折つて苦しみだし、延焼するように伝播し

ていく。

浄化が第一段階に入つたのだ。

小夜の異能。月による浄化という独特的の理論を実行し、彼らの体内に巣くう『魔姫』の『冥界の柘榴』を消滅させる。

重度軽度の違いはあれど、『柘榴』は心身に深く根を張っている。やめようとしても、生じる痛みで心が折れるという麻薬の性質が強調されている。

ここにこころ毎晩浄化をして回つているが、他でもない自分の手で苦痛を与えていたという感覚は相変わらず耐え難いものだつた。顔を背けそうになるが、集中しなければ彼らの苦痛を伸ばすだけなので、小夜はしかと見つめなおした。

「やな感じなのは分かるけど、仕事だつて割り切っちゃえば平氣だよ」

小夜の心中を察したのか、綾瀬は笑つて言った。

言いながら綾瀬は群衆の頭上に石をばらまいた。百何十の虚ろな目が、一斉に宙を舞う石を凝視する。

落下地点にいた人々は、我が口にと口をパクつかせて待つてゐる。鯉の池に餌を撒く光景を彷彿させる。

石に噛み付いた人たちの歯が砕けた。

「何してるの！」

小夜はぞつとして叫んだ。

小石を『魔姫』の『柘榴』に見立てて投げてゐるのに気付いたからだ。

何故怒られているのかまるで理解できない。そんな苦笑にも似た微妙な表情で、綾瀬は小夜を見た。

「この人たちがどれだけ苦しんでるのか分かるでしょ？ 後悔しても後悔しても、やめられない薬に翻弄されて。今だつて解放の代償に痛い思いをしてるのよ。そんな気持ちを弄ぶなんて」

「自分でも試したみたいな言い方だね」

「ええそうよ。私もついこないだまで『魔姫』の所にいた。でも今

は、こうして過ちを正してゐる

小夜はそう確信して言つたのだが、中身の見えない綾瀬の瞳を見ているとぞぞろに不安を覚える。

「過ちね……。自分の願いに沿つて行動してるだけなのに、そんな風に取られて、彼女、心外だと思つた」

「《起源》は人間に危害を加えないように生きる、とも言つたわ。

『魔姫』は害悪をばら撒いてるだけじゃない

「でも薬がもらえたならそんなこと気にならなくなるんじやない?

こんな風に

いつの間にか、綾瀬の手にはルビーのような色合の顆粒のようなものが乗つっていた。

それこそ、ここに集まる人々を『魔姫』の奴隸に堕した『柘榴』であつた。

「何がしたいの。私はとっくに卒業済みなんだけれど」

ピリッと走つた微弱な電流を無視して綾瀬を睨みつける。

「あははっ、怖い顔。なうことなどはどう?」

綾瀬が指を鳴らすと、辺りに生える木々に続々と禁断の果実が実りだした。収穫が終わつて閑散としていた田んぼでは、深紅の稻穂が夜風にそよいでいた。

気の触れそうな赤一色の誘惑界が顯現していた。

『虚構の樂園』^{エリコ・シオン}なる名前を持つ彼女は、世界を侵蝕する幻を操る『幻象』である。

浄化の対象を集めただけあって、その出来は本物に勝るとも劣らない。

小夜は消し去つたはずの欲求がフラッシュバックしそうで、言い知れぬ恐怖を感じた。

それを誤魔化すため、月光で作り出した剣を綾瀬の喉元に突きつける。

「こんなことをして、何が目的なの?」

「私は邪悪?」

小夜が対象を邪悪だと認識しない限り、小夜の能力は殺傷力を持たない。

今、小夜は怖くて剣を向けた。恐怖の源を邪悪と認知することは難しいことではない。だが、自分の勝手な都合で他者を傷付けるのは小夜の最も忌み嫌う行為であった。

いじめの記憶。彼らは小夜の異貌に恐れをなし、邪なものとして排斥しようとしていたのだろう。それを知つてか知らずか、綾瀬は生命の危機などどこ吹く風と不敵に笑つてゐるのだった。

「質問に答えなさいよ」

「目的があ……明人から引き離すことかな。なんか邪魔だし」「ふざけたような答えを述べて、綾瀬は赤い幻景を引っ込んだ。

小夜は溜息を吐いて刀を霧散させる。

無駄な争いなんかしていいる場合ではない。気持ちを切り替えて淨化に専念しなければ。

「ふん、ふふ～ん」

どこにそんな要素があつたのか。機嫌が良くなつたらしい綾瀬は鼻歌を歌いだした。あまりに前後の整合性を欠く行動。

彼女を理解できる人物などこの世にいないのではないか。そう思わせるほどに、不安定で捉えどころのない性質が露呈していた。

早く終わらせて帰ろう。今夜で魔薬に汚れたこの街はもとの姿を取り戻す。そうすれば明日からは綾瀬と一緒に行動する必要はないのだから。

「ただいま

午前1時すぎに2人は帰宅した。

リビングに入ると、藍が淡いピンクのパジャマを着て、セミロングの髪を適当に縛ったラフな格好で出迎えた。

「おかれり

明日も学校があるので寝ているだろ？と思つていたので、嬉しかった。

「2人ともお疲れさま。あ、ちょっと待つで」

藍は台所に向かうと、すぐに湯気の立つマグカップをトレイに乗せて戻ってきた。

「ココアだ。妹ちゃん気が利くね」

綾瀬が子供のよにはしゃぐ。

小夜は胡乱な眼差しで彼女を見ている自分に気付いた。
もうやめようと思う。全部思いつきと反射で動いているような人だから、一つ一つを掘り下げる袋小路にしかならない。

「はい、小夜ちゃんにも

「ありがと」

冷えて疲れた身体をほこらばせるにはぴったりの飲み物である。
渡されたカップを包むようにして、手を温めつつ小夜は言った。
「藍ちゃんもこんな時間まで起きてなくとも良かったのに」「ううん。小夜ちゃんたちが頑張ってるから、私にもできることがあればいいなって思つただけだから。これくらいしかできなかつたけど」

「十分だよ」

容姿のせいで疎外され続けていた小夜にとって、些細なことでも自分に気を配ってくれるのはありがたかった。

『起源』に認められ、『幻象』として過ごすうちにコンプレックスは改善されてきた。『幻象』という元は傷を抱えた人々が生んだ、同病相憐れむといった風土で過ごせたことによる所が多い。

そして紆余曲折を経たものの、藍というかけがえのない親友もできた。

人間に戻れたら……。最近ではそう思うことも珍しくない。

ココアを一口啜る。それだけで全身に幸せな温かさが漫透していくようだった。

「「めん、うとうとしてた」

黒のスウェットを着た明人がリビングに入ってきた。

「妹ちゃんは待つてくれてたのに、明人が寝てるついでにこいつ」と。体たらぐじやん

綾瀬がむすっとした表情で明人を見る。

「悪かつたつてば。でも藍だつて昨日も一昨日も待つてたわけじゃ」と。

「言い訳しない」

「何で私を引き合いに出すの」

「藍ちゃんはいいんです」

3人から予想外の反撃を受けて、明人はたじろいだ。「り、理不尽だ。小夜のなんか理由にもなってねえし」

「はいはい。そうだ、兄さんもいる?」「ココア」

まだ何か言いたそうな明人を無視して、藍が聞く。「じゃあもうおうかな……何だその指は」

藍は二口つと笑つて明人の後ろ、台所を指していた。「自分で淹れろつてことじやないかな」

「正解です」

「何の仕打ちだよ!」

それ以上言う前に、話は逸れていった。

「やつた。賞品があるんだよね、妹ちゃん」

「えつと……」

「それなら明ちゃんが用意してくれますよ」

真面目に問い合わせられて、困り顔の藍の代わりに小夜が答えた。

「助け舟出してんじやねえ」

「ほんと?」

突つ込みも虚しく、話を鵜呑みにした綾瀬がじいっと見つめてきた。

「ち、ちなみに何が欲しいんだ?」

「私に言わせるの?」

いつの間にか茶番の空気は消え失せていた。綾瀬は真剣に答えを

引き出そうとしているようだった。

藍も小夜も展開を飲み込めないようで、身じろぎもできず困惑するばかりである。

「……なんだ、俺か……って、は？」

明人は内なる何かに導かれるように口が動くのを感じた。

「ぴんぽーん。大正解！ 景品として、私をあげるよ」

言うが早いが、綾瀬は抱きつくようにして明人を押し倒した。

「じゃ、じゃあ兄さん、綾瀬さんおやすみなさい」

「置いてかないでー」

金縛りが解けたように藍がそそくさと出て行くと、小夜も慌ててその後を追つていった。

部屋が急に静かになった。

「ねえ、私が何を考えてるか、分かる？」

さあ。明人はそうはぐらかせて、今度こそ綾瀬に言わせようとした。

しかし、先ほどと同じく自己の内側から湧き出るものがあった。それが何なのか確かめようと/or>して、明人は口を噤んだ。

「もうすぐ分かるよ」

そんな明人を見て、綾瀬の瞳が妖しく閃いた。

今や2人の身体は完全に密着して、心臓の鼓動すら同調していくように思われた。

「1つになろう、明人」

第23話A・紅霧 -scarlet disorder (前書き)

最終章に入ります。

「この場合三平方の定理を使って、うん、できていますね」
1限。清水という若い男性教師が生徒に書かせた問題を解説している。この授業は解説しかないため、最初の指名さえ抜ければ退屈な時間が続く。

明人も例に漏れずそんな生徒の1人だつた。

予習をしていないせいで、元から複雑な問題が何をやっているやらさっぱり分からぬ次元に昇華していた。

今から黒板のを「どうかと思い、いやいやそんなことしても力は付かないと却下する。かといって後でやるはずもないのだが。

葛藤というのもおこがましい怠惰な思考。原因は分かつていた。『幻象』の強烈な印象に比べると、今までの世界が空虚に思えてしまうからだ。

綾瀬、小夜、遙……彼女らのような存在を垣間見、その力の一端に触れた。日常は砂上の楼閣で、ふとした拍子に倒壊してしまうのではないか。

だから何も手に付かない。いつか訪れる可能性のある世界の反転を前に、この日常にしがみつく意味があるのでどうか。

明人は吐息した。

馬鹿か。悪口ではないが、綾瀬のような病的な妄想をするのもいい加減止めなくてはいけない。

彼女とは住む世界が違うのだ。影響を受けすぎるのではなく日々の生活に齟齬をきたすかもしれない。

そういえば、結局昨日は何もなかつたな。

薄く結露した窓の外を見やり、懐古する。

甘い囁き。熱い吐息。誘惑していたのかもしだれないが、綾瀬はそのまま寝てしまった。

疲れていたのだろう。毎晩小夜と出掛けでは、遅くまで浄化を手伝っていたのだから。

それで明人も睡魔に身を任せることにした。

滲んでいく夢と現の境界線。おぼろげな色のヘアピンがゆらゆらと漂つて……。

ガターンッ

椅子が倒れる音で明人は目を醒ました。
いつの間にか眠つていたらしい。時間的には5分も経つてはいなかつた。

見れば、教室の真ん中辺りで男子が席を立つていて、机と椅子がひっくり返つていた。

藤堂は大抵クラスに1人2人いる、所謂素行不良だった。授業もサボりがちで、今日も1限から出てきているのは珍しい。

そんな生徒だから、清水も何か問題を起こされるのではないかと構えたようだつた。

クラス中の視線を浴びながら、藤堂は土下座でもするように身体を折り曲げて床に座り込んだ。静まり返つた室内にゼイゼイという荒い息遣いが漂う。

「具合が悪いなら、保健室に……」

本当に体調が悪そうなのを曰にして、清水は藤堂に歩み寄つた。
しゃがみ込んで肩に手をやつた清水が、静電気でも受けたように跳ねた。

「どうしたんですか?」「

「いや、なんでもありません」

近くの女子の問いに、冷や汗を垂らしながら答えた。清水は明らかに動搖している。

「保健室に連れて行きますので、静かに自習していなさい」

腹を括つたような表情で藤堂の脇に腕を入れ、肩を貸しつつ清水は立ち上がった。

だが体格が良い上にほとんど力が入っていない藤堂の身体は想像

以上に重く、逆に清水がぐらついた。

「先生、手伝いましょうか」

「いけません！」

滅多に大声を上げない清水が物凄い形相で拒絕した。手を差し伸べかけた男子生徒は驚いて引き下がつた。

何が気弱な教師をここまで駆り立てるのか、明人には分からなかつた。しかしだた事ではないという空氣は感じられた。

周りでも好奇や不安が入り混じつたざわめきも大きくなる。

それでも何とかドアの前まで来た時、藤堂が目を覚ました。死人のような顔で何か言いたそうに清水を見る。

「大丈夫ですか？ 一人で歩けますか？」

聞いた瞬間、藤堂が血煙を浴びせかけた。

あまりのショックに藤堂を投げ出し、清水は煙から逃れた。藤堂は床にうずくまり、喘息のような呼吸と共に不気味な赤い気体を吐き出し続けている。

「早く出なさい！」

清水が叫んだ。

半ばパニックに陥つた生徒達が前の扉に殺到した。外れた扉が倒れ、大きな音を立てる。

窓側にいた明人は、それを見て逆に冷静になれた。

廊下に出ると追撃を掛けるようにガラスが割れる音や絶叫が木靈した。

見れば隣に並ぶ教室からも、生徒と教師が逃げ出してきている。

「決められた通路を使ってグランドに避難！ くれぐれも落ち着いて移動するよう！」

現場の声に少し遅れて、逆にパニックを招きそうな警報と校内放送が鳴り始めた。

肌寒い風が吹き抜ける校庭に緋森高校の生徒と教員が集まつてい

た。何が起きたのか理解できている者は1人として居ない。

教員達は各々のクラスの点呼を繰り返している。

錯乱して校外に逃げた生徒が何人もいるらしかった。

どこへ逃げようが関係ない。

明人は街を見て、叩き落された気分になつた。

住宅地も商店街もオフィス街も、街中至る所から赤い煙が立ち上つてゐる。少なくとも徒步で行ける範囲に逃げ場は無いように思えた。

それならここで集まつていたほうが、不安を共有できて多少気も紛れるだらう。

明人は藍の安否が気になつていた。

生真面目な藍が指示に従わずに行動することはないだろうが、やはり自分の目で確かめたい。かといってちょっと見ていよつと出歩けるような雰囲気でもない。

回線が混雑しているらしく、メールも電話も繋がる様子がない。どうしようかと決断しかねていると、担任が出席簿を持って点呼に回ってきたので、明人は小声で話しかけた。

「先生、ちょっと確認してもらいたいことがあるんですけど」「何ですか」

「1年4組の神原藍のことなんですが」

「確かに君の妹だったね。分かつた。聞いてきます」

忙しいだろうに担任は二つ返事で聞き入れてくれた。

明人はお礼を言つて、ほつと一心地つけた。

それから校外に逃げた生徒が何人か戻つてきたり、教員達が今後のこと話を話し合つていたりしたので大分時間が経つた。

体育館でも例のガスが発生しているので、今しばらくはここで待機。そんな救いようのない指示が出たところで、担任が戻ってきた。

「神原君、言いにくいのですが……」

そう切り出した担任の顔はかなりやつれているように見えた。

もう結果は見えていたが、彼の言葉を待つた。

「藍さんの行方は確認できていなうそです。でも気を確かに持つて、先ほどから校外に逃げた生徒も帰ってきていますし、すぐに会えますよ」

氣休めのような助言を残して、担任は教師の集まりに戻つていった。

考えまいとするほどに嫌な予想が膨れ上がつていく。

血のような息を吐き出していた藤堂。藍がああなつてしまつたら、そう考えると震えが止まらなかつた。

いつもと変わらない1限目終了のチャイムが鳴つた。異変の只中において何か意味があるとすれば、それは恐怖劇が次なる幕に差し掛かつた合図でしかなかつた。

キヤアアアアア！

つんざくのような金切り声が整列して座っている学生達の間で次々と上がった。

藍のことでの空だった明人の後ろでも悲鳴が上がった。

電流が走ったように、明人を含めほぼ全員が一斉に起立した。そのまま押し合いへし合いしながら悲鳴の中心から離れようとする。殺人的に揺れ動く人波の隙間から見えたのは、苦しげに蹲る女生徒だつた。押された口元からは紅い煙が漏れ出している。

同じことがグランドのあちこちで起きている。

「さっきまで何ともなかつたのに……どうして！？」

急変を曰の当たりにしたらしい女子が別の友達に泣きついている。もはや避難できる場所はどこにも残されてはなかつた。

次は誰がああなるのか。

疑心暗鬼に駆られていることを表すよつて、他人と距離をおいて立つている者も少なくはなかつた。

教員らは必死に集合を呼びかけているが、集まる者は曰に見えて減つていた。

じりじりと後退しながら明人は煙を眺めていた。

我を忘れて逃走するほど理性を失つておらず、かといつて状況を冷静に分析するほどの余裕があるわけでもない。

緩慢な思考停止の中で気付いたこともある。

煙には空へ上る流れと地を這う流れがあるのだ。
だからどうした。

明人はその発見を一笑に付した。

いたぶるような緩やかさで、前方から煙が這い寄つてくる。

そして背後には校舎の異容が聳え立つ。窓の隙間や換気口から紅煙が流れ出し、白塗りの壁を伝つ様はまるで血を流しているようだ。

見える。

前後を挟まれ、周りの町も同じく紅に煙っている。
進退窮まった。このまま煙に巻かれ、あそこに蹲る生徒と同じよう
に生殺しの恐怖を味わうしかないのか。

ヴヴヴ

ポケットの中でケー タイが振動した。藁にも縋る気持ちで明人は
ケー タイを開けた。

送信者：藍。本文：助けて 屋上

たつた一言が鈍器で殴られたような衝撃を生んだ。
明人は紅霧に包まれた学校の屋上に目を凝らした。
人影は確認できなかつたが、明人は走り出していた。
結局は吹つ切れるきつかけが欲しかつたのだろう。

人間いつかは死ぬ。どうせ死ぬなら、足掻き切つて死のう。

そんな達観を明人は持ち合わせていない。

ただ、唯一残された肉親が助けを求めているのなら、全力で手を
差し伸べなければいけないと思つただけだつた。

校庭に繋がる渡り廊下の前で、明人は思わず立ち止まつた。風に
乗つてやってきた香りに既知感を抱いたのだ。
そこで決心を固め、ある確信を持つて校舎に乗り込んだ。
爛熟した果実を思わせるねつとりした甘さが総身に絡みついてく
る。

やはり。

明人はこの紅霧を知つていた。

『冥界の柘榴』。^{ハヌス}『墜落の魔姫』^{ハヌス}が用いる隸従の魔薬である。

形は違えど、小夜が決意を示すのに使つたものと同じだ。あの時
明人も不本意ではあるが、この薬を口にしていた。

つまりこれを吸つても死にはしないということだ。

そうと分かれば、躊躇うことなどなかつた。粘つくような空氣を

押し退け、進む。

3階まで駆け上がり、屋上に続く別の階段へ向かうため廊下をひた走る。自分の足音のほかに、喘息をこじらせたような呼吸音が滞留している。

途中開け放たれた教室の扉から明人は中を見た。

1人の男子生徒が土下座の姿勢で蹲っていた。その背中には肥大化した肺とでも形容すべき肉塊が乗っていた。否、生えていた。その肺状器官が収縮するたび、人間部分の口が大量の魔薬の霧を吐き出している。

あんなものがクラスに1人はいると思うと嘔吐感と鳥肌が止まない。

あれは『魔姫』の奴隸どころか、紅霧を維持・拡大させる装置でしかないのだろう。

確かに死にはしないが、自分もああなる可能性がある。明人はすでに手遅れの生徒達に心中で祈つて先を急いだ。

屋上前のスペースの空気はいくらか澄んでいた。ドアが少し開いており、風と一緒に話し声が聞こえてきた。放置された備品に隠れるようにして、明人は隙間から様子を探つた。

校舎内ほどではないが、空気は薄く染まっていた。薄紅のベールの向こうに2つの人影が見えた。

明人に背を向けて男子生徒が立つており、彼にやや距離を置いて藍が対面していた。

一触即発の事態を予想していたが、どうやらそこまで差し迫つているわけでもないようである。

とりあえず何か武器が要るな。

幸い、備品の影に折れた机の脚が転がっていた。心もとないが、

他を探す時間はあまりない。彼が背中を向けている隙に先手を取ることのほうが大切だ。

慎重にドアを開け、最小限の隙間に滑り込む。

彼我の距離は約10メートル。完璧な不意打ちを狙つなら、もう少し距離を詰めなくてはいけない。

息を潜め、足音を忍ばせ接近する。

急激に速まった心音。気取られるのではないかといつ恐怖が身を強張らせる。

藍と目が合つた。目が見開きそうになるのを押し殺した様子で、藍は視線を戻した。

「先輩の気持ちは分かりました。けど、今はこんな状況なので返事は落ち着いてからじやだめですか？ 焦って決めても良くないと思うんです。私にとつても先輩にとつても大事なことなんですから。それに……」

注意を引くつもりなのか藍はいつになく長舌だ。演技とも思えなが、部分部分で言いよどむのも引き付けるのに一役買っている。その間に明人は3メートルまで近づくことができた。この際内容については気にしないことにした。

この距離なら勘付かれたとしても反撃されることはないだろう。凶器を握る右手と両脚に力を込めた時、眼前の男子の背中が動いた。

しまったと思つより早く、明人は飛び込むように姿勢を低くして駆け出した。

だが、標的は一般人とは思えない滑らかな動きで藍の脇をすり抜けた。そのまま組み付く。

「藍ちゃんのことは何でも知つてゐる。やつぱり君は嘘がつけないな。そこも可愛いんだけどね。

で、誰かと思えば教祖様じゃないか」

「山下！ 藍から離れろ！」

怒りに任せて叫んだが、藍が人質にされているためそれ以上何も

できない。

打開策を求めて思考を張り巡らせる。

山下の登場には少々驚いたが、少し考えれば彼の動機も理解できただ。

藍のファンが魔薬でネジが飛んで暴徒化。つまりそういうことだろ？

「触らないで！」

藍が猛烈に抵抗しているが、山下はびくともしない。

「手荒なことはしたくないが、僕も男なんだ。それに嫌がってるフリなんかしても、僕にはバレバレなんだな」

山下の言動に常軌を逸した色が滲む。

藍が悲鳴を飲み込むように口を噤んで、戦意を喪失してしまった。山下は獣のような眼で明人をねめつけながら、藍の髪に顔を埋めた。

「ああ……いい匂いだ」

藍は込み上げる悪寒にただただ身震いするしかなかつた。

「やめろっていつてんだろ！」

明人は一步前に出た。

「聞こえなかつたのかよ、『教祖様』？ お前が焚きつけたんだ。分かつてんだろ」

山下がいやらしく口元を歪めた。

怯えていた藍が疑惑の目を明人に向ける。

最も知られたくない事が最もまざいタイミングで露呈しようとしている。

「藍ちゃん、君のお兄さんは君を売つたんだ。2年の間じゃ有名な話なんだよ？」

「……どういうこと？」

藍を盾にされている以上、続く告発を止める手立てはなかつた。

明人は歯を食い縛つて、我が身を引き裂きたくなる衝動に耐えた。

「じつうこと」

山下がケーキを藍に見せた。

「これ……私……」

「可愛い水着だな。笑顔も素敵だ。場所はアメリカのどっかだろ
うな。他にもいっぱいあるんだけど?」

明人が渡した画像を見せているらしい。

藍は戦慄を抑えきれないようだが、目線はディスプレイから離さ
ない。それが汚らわしい肉親から目を逸らしているように思えてく
る。

「かわいそうに。藍ちゃんはあいつのくだらない人氣欲しさかなに
かの餌にされたんだよ。こんなと一緒には居させられなうわああ
ああ!」

奇声。一人語りに夢中の山下のケーキを藍が叩き落としたのだ。
よほどデータが大事なのか、山下は半狂乱になつてケーキを弄
つている。

拘束を逃れた藍が明人の横を走り抜けた。逡巡はなく、一警もな
い冷淡なスピード。

明人は追いかけられなかつた。

ここに残るより行つて説得したほうが何倍も良いのは分かつてい
る。だが身体が言うことを聞かない。

憤怒を表したような灼熱の塊が身体中を駆け巡つてゐる。

「榎原アアアアアア!」

山下が吼えた。人を人たらしめる大切な何かが壊れた顔をしてい
た。

そしてだらりと弛緩した姿勢から驚異的な速さで突つ込んできた。
明人は鉄棒を振り下ろし迎撃した。だがまともに受けた山下は怯
まず、もろともに倒れこんだ。

マウントポジションを奪つた山下が拳を滅茶苦茶に振るう。

赤白赤白。視界が明滅する。不思議と痛みはない。ただ熱い。

身体は動かないだろうと思っていたが、何の障害もなく軽々と動
いた。身を起こすついでに山下の顔面に頭突きを食らわせ、脱出す

る。

「オオオオオ！」

明人の口から獣の言葉が進る。

同属に墮したのだろう。山下の、いやこの紅霧が生む魔物の行動原理が分かつた。

それは衝動であり反射であり本能。至極単純化された、思考とも呼べないものが生物のリミッターを破壊し続けている。

再び向かってきた山下と真っ向からぶつかり合う。

衝撃で死に体になるも、わざと身体を痛めるように無理矢理体勢を戻す。

一切の知略、防御、回避が存在しない、狂人の争いが始まった。鎗が外れた攻撃はどれも骨を碎く威力を持つ。防いでも折れるなら、蹴つて殴つて折れたほうが良い。

その帰結としての攻勢一点張り。

両の拳はどうに砕けた。骨が皮膚を突き破つても殴り殴られ、押し倒され。破れた鼓膜は音を拾わず、ザーザーとノイズが流れている。

脱臼した肩。割れた顎。アバラは清々しいほど粉々で、いくつか内臓に突き刺さっている。

潰し合いは次第にスピードを失い、からうじて機能する部位を使い捨てる醜い消耗戦と成り果てても終わらない。

赤い泥沼でのたうつだけの無様な独楽と化し、お互いの意志の力でどうこうできるレベルの負傷を超えたおかげで、意味のない戦闘は幕を降ろした。

明人は仰向けに倒れていた。

稼動しているのかも定かでない肺腑を酷使し、息を吸う。

失った大量の血の代わりに紅くて甘い霧を循環させる。

魔薬の過剰摂取で全身の神経は、焼き切れんばかりに敏感になつていて、それでいて痛みを感じないのは、感じた傍から快樂に置かれている。それでいて痛みを感じるのは、感じた傍から快樂に置かれている。

換えられてはいるのだろう。

おかげで精神だけなら踊り狂えるほどに元気だが、満身創痍の肉体はついていかない。

仕方なく空を見る。

恐らく顔はスクラップになつてゐるので本当に見えてはいるのか怪しいが、空は紅かった。飽きるほど網膜に焼き付けた血と霧の色。紅い暗闇の中何かが動くのを昂つた感覚が察知した。

擦るような振動を背中に感じる。

すぐ近くで気配が止まつた。

空気の微弱な揺れ。そいつの独り言だろうか。

金属質の物が静かに傍に置かれた。静電気のようなざわめきが過敏な神経を伝う。

久しぶりに痛痒が感じられた。

そいつはしばらくじつとしていたが、空気を渦巻かせて去つていつた。

無音全盲の孤独が訪れた。今までの躁狂が嘘のように静まり返つていて、逆に総毛立つほどだつた。

明人は正体不明の存在が自分で身内で尋ねき合つを感じてはいる他なかつた。

第23話B・紅霧 -scarlet disorder-(後書き)

山下?な人は第12話参照。重要なことはあまり書いてないけれど
作者ツイッターもよろしく。<http://twitter.jp/us>
er-yamijyuro

「大変なことになりやしたねえ」

主のいない榎原家で『起源』はソファに腰掛け、香氣に煙管を弄んでいた。

人の家ということで一応は我慢しているらしい。

「落ち着いてる場合ですか。はやくこの霧をなんとかしないと」それを注意する小夜はもどかしそうに窓の近くをうろついていた。

あちこちから上がる紅い狼煙が、空前の大異変の始まりを告げていた。

その数は尋常ではなく、人口密集地を中心に凄まじい速度で拡散している。

地上8階の榎原家からその様子を見ている」としかできない。

小夜は唇を噛んだ。

「確かにあなたの力ならこの霧」というか『冥界の柘榴』に対抗できまあ。しかし、この霧のシステムはちょいとあっしらの手に負えない」

「システム?」

「ここに来る前に見たんですがね、霧を吸った人間が霧の発生装置に変わるんでさあ。それも見るに堪えない醜い姿になつて」

息をのむ小夜。

つまり街中の人間を浄化しなければ霧は消えず、霧を消さなければ装置になった人を浄化しても何度でも機能を取り戻す。人も霧も一度に浄化しなければ、終止符を打てない。

不可能だと絶望しかけた小夜だったが、あることを思いついた。「でも『魔姫』の居場所は調べがついているんでしょう? 彼女さえどうにかできれば……」

廃寺で会つた時、『起源』はそれを調べていたはずだ。

『天網』は気に入らない人物だが、その能力は高い。あらゆる情報網を見張る彼ならば、人一人の居場所を特定するくらい容易い。「それがね、いや、分からんんですよ。『天網』はどうやらあちらに加担しているようで、一切連絡が取れないんでさあ」

やはり焦つた様子もなく『起源』は小夜の希望を切り捨てた。

「……だつたら私達はどうすればいいんですか？　このまま指を咥えて見ていろとでも？」

「それしかありませんな」

『起源』は抑えがきかなくなつたのか、ついにマッチを擦つて煙管に火をつけた。

紫煙を吸い込んで満足げに吐き出す。

小夜には理解できない刺激臭が部屋に漂う。

「どうしてそう能天氣ですか！」

その態度があまりに悠長で、小夜は声を荒げた。

「あなたはもつと冷静な人だと思つていたんですがね、『天使』。今は座して待つ時だと思いませんか」

『起源』はやんわりと小夜を諫めた。

『魔姫』はこの霧を広げる手一杯。おそらく彼女が姿を現すのは自分に有利な場が整つてからであ。

ですが、彼女の性格からしてそれまで大人しく待つているということはないでしょう。『復讐の女神』の能力をもつてすれば、あつしらの位置を特定するのは容易い「

小夜の中ではパズルがどんどん組み上がつていった。

「つまり私たちを狙つてきたところを返り討ちにすると？」

「御明察。『女神』の洗脳を解きさえすれば、おのずと異変は終わりましよう。『女神』の手で」

果たしてそううまく事が運ぶだろうか。

小夜が不安を抱くのも無理はない。

偶然の積み重ねで成り立つ計画。綻びはいつどこででも生じ、結

果全てを破滅させるだろ？

「心配いりませんぜ。何年彼女に付き添つていたと思います。それ故悲しくもありますがね」

『起源』は憂いを漂わせる表情を浮かべた。彼の中では異変などとつくな終わつていいかのようだ。

小夜は思う。彼は『魔姫』らを滅ぼすつもりなのだろうと。

それは仕方ないこと。これほどまでに大規模な異変を起こせば、人間・『幻象』双方に深い傷痕を残すだろう。

それならば私はどうなのだろう。

榎原家に不幸をもたらした罪は決して許されるものではない。

肅清されたところで未練はあれど文句は言えない。だが自分だけが残されたのでは、あまりに後味が悪い。

「ところで『樂園』はどうしました？ 襲撃に備えて準備してもらいたいのですが」

「え？ さっきからそこに座つて……！」

小夜は『起源』の隣を指差した。

彼女はそこでテレビを見ていたはずだった。

だがその姿は影も形もない。

「くく、彼女らしいと言えばそつなんでしょうが、いやはや困ったものだ」

呆れを通り越した『起源』の苦笑。

それが小夜には何か満足げな響きに聞こえたのだった。

目を閉じ、遙は視ていた。

黒いフィールドの中で一際輝く光点が二つ。自分のすぐ傍にいる。

「どう、見えているかしら？」

幼い声に是と頷き、遙は視界を広げていく。

この建物を出たところから、急にフィールドが薄く霞んだ光に包まれた。

言つなれば『魔姫』の一部である魔性の霧のせい。私の目が捉えるのも無理はない。

索敵に支障はないので、視覚可能域を一気に拡大する。

薄明るい視野に、光る点2つ接触しているのを発見した。

『起源』？　『天使』？　それとも『楽園』？

誰かは分からぬが位置は特定できた。

遙は瞼を開かけた時、別の点に気付いた。

不安定に明滅を繰り返す弱い光。それで今まで認知できなかつたらしい。

『幻象』しか映りこまないフィールドにあるのだから、その点もそうなのだろう。だがそんなものを見るのは初めてで、遙には正体が分からなかつた。

頭の片隅にでも置いておこう。

そう思い、遙は改めて目を開けた。

「見つけたか？」

しなやかな肢体に密着する黒のスーツを着込んだアキラが確認する。

「うん」

「なら行つてきなさい。『起源』は滅ぼしてもいいけど、『天使』は連れて帰つてね」

『魔姫』は足を組んで椅子に座つたまま命じた。

「了解」

遙とアキラは連れだつて紅い外界に赴いた。

初動から約5時間。時刻は午後2時をまわつた。

魔薬の霧は緋森市をドーム状に覆つてゐるが、『魔姫』が言つには密度はまだまだなのだという。

それでも太陽の光はほとんど通らざ、冬の境界に踏み込んでいることもあり气温は極端に低い。そのうち紅い雪が降るかもしけない。狂氣じみた冷氣と快樂にあてられて動けなくなる魔境が広がつてゐる。

常人には耐えがたいが、『魔姫』の僕と化した者にとっては、自動で燃料を補給してくれる天国である。

そんな魔界の恩恵を賜つて、狛犬と毒蛇は獲物目掛けて疾駆する。

第23話 C・紅霧 - scarlet disorder (後書き)

待たせた割に内容薄くてごめんな。
次回波乱の予感……！

「アキラ、寒くない?」

遙は長袖の制服の上に黒のロングコートを羽織っているが、アキラは肌に張り付くような奇妙なスースだけ。胸や関節部分には装甲があるものの相当寒そうに見える。

「大丈夫だ。これは機動性を最大限に活かす造りだが、見た目より頑丈だし保温性も上々だ。ちょっと恥ずかしいのが難点だけど」

「セクシーなボディラインがくつきりだよ?」

「言つたな! ああもう余計恥ずかしくなつてきた」

顔を赤らめるアキラ、くすくすと悪戯っぽく笑う遙。

紅い霧に満ちた住宅地に人影はなく、道端には人体を冒瀆したような歪な発生装置が転がる。そしてこれから殺し合いに出向くようには見えない2人の無邪氣さ。

それらを異常と感じる者はすでにいない。

しばらく歩くと田的池が見えてきた。

「ここよ

遙が指差し、アキラが見上げる。

紅いベールに包まれたマンションはゲームの中の魔物が巢食う塔のようだ。待ち受けるのが人間ではないあたり、その形容もあながち間違いではない。

ふとそんなことを考え、遙は瞼を閉じて索敵を開始した。やはり光点が2つここにいる。

俯瞰的な見方でしか場を捉えられないため、何階に標的がいるのか分からぬ。遙の能力はこういった多階層の構造では真価は發揮できない。

だがここには一度、明人と来ていた。おそらく彼の家が拠点になつてゐるのだろう。

遥とアキラは武装の最終点検を手早く済ませた。

「ついてきて。たぶん8階にいる」

遥の声は少し強張っていた。

2人でエレベーターに乗る。

遥は明人と仲直りした後、彼の家にお邪魔したことばんやりと思いつ出していた。

あの時もこうしてこの狭い箱に乗つていった。

お互い利用しあう欺瞞的な関係。

彼の『天使』抹殺計画は頓挫した。

遙も偽の情報に踊らされた結果、仇敵の下僕になっている。『魔姫』に従うのは今でも違和感があるが、アキラと再会し家族のような枠に入れたことは素直に嬉しかった。彼はどうしているだろう。

チンと音が鳴り、思考は中断された。

エレベーターの扉が開く。

遙が先に降り、敵の気配を探ろうとした瞬間だった。金属のロープが切れる音がした。

「アキラ！」

目の前でアキラを乗せたままエレベーターが落下した。

脳髄に突き刺さるような金属同士が奏でる不快音が響き渡る。

慌ててシャフトを覗き込むと、暗い縦穴に火花を散らしてエレベーターは落ちて行くのが見えた。

罠？ 襲撃が悟られていた？ 何故？

「分断は成功よ」

声が耳に届くか否かの刹那に遙は三つ又の剣を振り抜いた。

空ぶつた銀色の刃の向こう。そこには白い翼を開け、霧中に浮く小夜の姿があった。

ゴスロリ風の黒装に包まれた白蝶の身体。霧と同じ色の瞳が無表情に遙を見ている。

小夜は手にしたケークをポケットにしまった。

金属がひしゃげる轟音と衝撃がマンションを揺りした。

「何故『魔姫』に従つてゐるのですか？　あなたの出生を鑑みれば随分おかしい気がしますが」

小夜が遙に問いを投げかける。

すぐには仕掛けてこないらしい。だがアキラを助けよつともこの狭い縦穴に入れば、上からくる小夜を止められない。

考えた末、遙は時間を稼ぐことにした。アキラの治癒力と破壊力をもつてすれば、脱出にそう時間はかかるないはずだ。

「あなたこそ戻らなくていいの？　『魔姫』さまはお怒りよ

「お断りします。それでこっちにつく気はありませんか？　私は『柘榴』を無効化できるので、その心配しなくてもいいですよ

「……何が目的なの？」

「もちろん『魔姫』を滅ぼしてこの毒霧を消すためです」

遙は眉をひそめた。

『魔姫』を滅ぼす。その言葉に眠っていた毒蛇が静かに目を覚ますのが感じられた。

「私にメリットがあるとは思えないわ。どうせ『起源』の差し金です

しじうじ

「……やっぱり、あなたが言つたとおりでしたね」

小夜が溜息をついて、妙に弛緩した体勢をとる。

とつれに迎撃の構えをとつた遙を、側面からの重撃が襲つた。

「な……！？」

見えない何かに弾き飛ばされ、廊下の端の壁に押さえつけられた。逃げようにも上半身ががつちりとホールドされていて動けない。

「だから言つたでしょ。『天使』早くしなさい。彼女が戻つてきまさあ

忘れもしない声が遙の耳に届いた。

「『起源』！」

胸を圧迫する不可視の盾のせいで遙の声は掠れていたが、より怨嗟を強調する形となつた。

不俱戴天の男が通路の奥から悠然と歩み寄つてくる。

黒い羽織が紅い風にゆらめく。灰色の着物の袖から伸びた細腕が煙管を弄ぶ。平素の生気に乏しい目がいまや爛々として歪光を滾らせていく。

真っ向から視線をぶつける両者の間に、小夜が降り立つた。そして浄めの月光で構築された剣が遙の右腕を貫いた。

「ぐあ、うううつ！」

神経が焼切れるような痛みに襲われ、思わず《毒蛇》を落としてしまう。

「《魔姫》の呪縛から解放してあげます。もつ少し辛抱してください」

盾越しに小夜が遙を抱擁する。

光り輝く翼に包まれて遙は声なき声で絶叫した。

赤熱するワイヤーで縛られるような痛みが全身を苛む。

頭や両足が勝手に暴れている。背後の壁に打ち付けたせいで後頭部からぬるりとした液体が滴つた。

そのうちに苦痛の中に別の感覚が生まれてきた。

鎧が落とされ、がんじがらめの鎖が緩むような解放感。あるべき場所に帰りつつある安心感。

それらに身を任せようとした時、地獄の底から溢れ出す鬼の咆哮を聞いた。

「《天使》！」

エレベーターの天井が破壊される音を聞きつけ、《起源》が警告する。

「あとちょっとなんです」

小夜は遙から離れようとしない。

《起源》は小夜に駆け寄つた。

「……あなたを失うわけにはいかんのでさあ…」

背後でシャフトの金属壁が抉られる音が高速のビートを奏する。

『起源』は小夜を無理やり引きはがして抱えると、通路の格子を飛び超え空中に身を躍らせた。

触れるもの全てを切り刻んで、今いた場所に黒い暴風が到達するのとほぼ同時だった。

「遙！ 大丈夫か、しつかりしろ！」

軽く頬を叩かれて、遙は意識を取り戻した。

「あ……か……っ」

息ができない。喉の奥がカラカラに干上がっている。

アキラが素早く『柘榴』を何粒か取り出し、遙に飲ませた。

窒息しそうになりながら何とか飲み下すと、気分が落ち着いた。

「ありがと」

「アタシがもつと注意していればこんなことには……戦奴が聞いて呆れる」

「油断した私が悪いんだから気にしないで。それより今は」

遙は立ち上ると眼下に目を走らせた。

下の駐車場に2つの影が立っている。

「やつと見つけた。アイツを滅ぼさないと」

「みんなの仇だからな」

もう戻れない日々の映像が脳裏をよぎった。アキラにしても同じなのだろう。

「行こう」

どちらからとも言わず、2人は中空へ身を投じた。

地上で待ち受ける小夜は翼を羽ばたかせた。舞い散る純白の羽根が弾幕となり発射される。

紅霧を割断する光の洪水が落下する2人を飲み込んでいく。

遙の剣が3つの鎌首を振り立てて光弾を両断する。怨敵を前に強化された身体能力と剣の防衛本能が、バランスの取れない空中において驚異の剣捌きを披露する。

アキラは壁を強く蹴って、さながら砲弾のように突撃した。

魔犬の護りを無効化する弾。被弾の苦痛は想像以上だったが、一直線に小夜へと向かう。

「おりやあああ！」

右腕にブレードを形成し、推進力に乗せて振り下ろす。

アスファルトを碎く一撃は避けられたが、結果として小夜は弾幕を中断せざるを得なかつた。

その間に隙の大きい着地・受け身を完了させ遙は、《起源》との距離を詰める。

「《起源》！」

「来なさい《復讐の女神》（ネメシス）。あなたの目を覚まさせてあげましょう」力の限り《怨疾毒蛇》（エリーコエス）を叩きつける。

強烈無比の一撃を見えざる《不壊》で受け止め、その衝撃を利用して《起源》は後方に飛び退つた。

遙の右手に伝わる衝撃は思わず剣を手放してしまいそうになるほどだ。

今はそんなことを憂慮している暇はない。紅いベール越しの日光に輝く刃を自在に伸縮させ、刺し殺さんと追い縋る。

側面、頭上、アスファルトを突貫しての真下からの攻めも難なく全て弾かれてしまう。

「どうしました？　あっしを貫くための牙でしょう。仕留めてみな

せえ

『起源』もやられてばかりではない。攻撃の合間に不可視の盾を飛ばし、殴りつけてくる。

「ふつ」

一度受けた攻撃であり、霧のおかげで気流が読みやすい。当たることはない。

勝負は膠着状態に入つていった。

「相変わらず堅いわね。『外側』は」

「ふふ、あなた方の狙いは分かつています。だが……」

「分かつていてるからこそ焦るんじゃない?」

自信に満ちた言葉が『起源』を遮つた。
チラとアキラの方を見遣つた。

アキラは『出来損ない』の回復力にものをいわせ、攻撃に対して一步も引かない。

対して打たれ弱い小夜は遠距離戦に持ち込もうとしているようだが、距離を詰めることを念頭に置いた立ち回りをされて思うように動けない。

大振りの回し蹴りを躱した小夜は、その隙に空へ逃れようとした。
「逃がすか!」

いやに冷たい感触が右足に絡みついた。

見れば、アキラの身体からどす黒い影の触手が生えている。

地面に叩きつけられる寸前に切り離すことができたが、逃げの一
手というわけにもいかないようだ。

四肢に生えた漆黒のブレードと脅力を活かし、アキラは隙あらば
退避しようとする小夜を追撃する。

一見アキラの優勢に見える戦い。その内実は逆である。

切り結ぶ度に小夜はアキラの得物を打ち消す。それはアキラの核
を為す『柘榴』を搖るが大打撃である。

並みの外傷ならものともしない屈強な肉体でも、裂かれた心の傷

からはどうぐどうと血を流しているのだ。

小夜が攻勢に転じれば、防御する術がない。

敗北も覚悟の上。それでも接近戦を維持しなければいけない。

遙に『起源』を滅ぼすチャンスを『えるためにも。

アキラは拳を握り締め、小夜に食らいついていった。

アキラ、負けないで。もうすぐだから。

心の中で祈りながら、遙も攻め手を緩めない。

むやみやたらと攻撃しているように見えて、『起源』を小夜の方へ移動させないように『毒蛇』の三つ首を振るつていて。もう何十発と打ち込んでいるが、息が切れる事はない。

「く……」

平静を保っていた『起源』の顔が陰った。

遙はその瞬間を待っていた。

「効いているようね」

『起源』は忌々しそうに眉間に皺を寄せ、遙をねめつけた。

紅霧もとい『冥界の柘榴』は『魔姫』に身を委ねる意志のない者には毒と同じだ。

特に『幻象』は自我が固まっているため、他者に従属するのを嫌う傾向にある。それが毒性を強めることになる。

ふいと『起源』が目を逸らした。

「やああああ！」

集中の糸が切れたのだと悟り、3つの刀身を束ねて跳躍、刺突する。

『起源』の心臓を狙つた渾身の一撃。

盾と剣がぶつかり合う壮絶な音が木靈した。

防がれはしたが、今までの頑健さが僅かながらも失われているようを感じた。

「何のこれしき！」

盾に押し返され、傍にあつた車に磔にされる。

「芸がないのね」

遥は冷ややかに笑うと、剣を握る手首を軽く動かした。
あつという間に車は解体され、崩れ落ちた。

「それでも時間稼ぎにはなりますあ」

『起源』は小夜へと距離を詰めていた。小夜もその意思を汲んで
向きを変えた。

「させない！」

拘束の最中にピンを抜いておいた手榴弾を間に投げ込む。
爆発物に怯んだのは小夜だつた。まっすぐ合流しようとしていて
いたのを軽く軌道修正した。

そこへアキラが割り込み、更に阻止する。

それを見た『起源』は早々と退避に移つた。

同時に乾いた音ともに手榴弾が炸裂する。仕方ないこととはいえ、
爆風と破片がアキラこと『起源』を襲う。

アキラは纏つていた魔犬を背面に集中させ、防御した。そして影
が飲み込んだ破片を小夜目掛けて撃つという離れ業をやってのけた。
一方の『起源』も『不壊』で背後の爆発から身を守る。

「これで終わりよ！」

背後に気を回している『起源』に、遥は鞭のように剣を振るつた。
これまで以上に多角的な攻めを展開する。

その都度弾かれてしまうが、それくらい想定の内だ。

遥は腰に付けたマシンピストルを抜き、引き金を引いた。

『起源』の頭から足先まで隈なく掃射する。空の薬莢が大量に零
れ落ち、軽やかなリズムを奏でる。

遥の読み通り、致命傷になる『毒蛇』と頭部への銃撃は防がれた。
だが防衛的が前後左右に分散していることと魔薬の干渉が功を奏
し、数発だが両脚を撃ち抜くことができた。

「おおあ……」

『起源』が苦痛に呻き、膝を着いた。

遥は身震いした。『毒蛇』が我慢ならないように激しくのたうつ。

躊躇せぬよう、怖氣づかぬよう。深淵から湧き出す破壊衝動に遙は身を任せることにした。

「そんな……《起源》……」

今まさに決着がつかんとしているのを田の当たりにして、小夜の動きが鈍つた。

アキラはがら空きの腹に黒い拳を叩き込んだ。

命令なので消し去るわけにはいかない。ダメージもあって十全といえる威力ではなかつたが、小夜の身体は地面に崩れ落ちた。

「遙！」

友人の元に駆け寄りとした時だつた。視界が暗転し、前のめりに倒れてしまった。

起き上がろうとするが、腕に力が入らない。体内の《柘榴》を大量に削られたせいらしく、魔犬を呼び出すこともできない。

「くそ……」

あの男は最後まで油断はできない。遙も分かつてゐるだろうが、2人でいた方が対処しやすいに決まつてゐる。

霧だけでは足りない。持つてきた《柘榴》を全て噛み砕いて転下する。

痺れるような快感に至福の酩酊を覚える。

だがいつまでも酔つてゐるわけにはいかない。自らを叱咤し、立ち上がる。生まれ変わつたように身体が軽くなつていた。

低く轟くような雷鳴が紅い空気を震わせた。

感じる違和感。その正体は突如、世界を白く塗りつぶして落ちてきた。

田を潰す烈光に続き、立つていられないほどの揺れが襲つてきた。手榴弾など及ぶべくもない、爆音と熱風を孕んだ衝撃波に吹き飛ばされた。

気付けばアキラは無様に打ち捨てられていた。

数秒ほどで五感が戻り、アキラは変わり果てた風景を目にした。遙と『起源』がいた場所を中心に、まるでミサイルでも落ちたかのようなクレーターができていた。

その傍で豪快にひしゃげた車両が炎上し、空氣は火事場のように熱を持っている。

そんな戦場跡に2つの人影が立っていた。

「凄いよ、明人。流石に才能はあるね」

「……」

血塗れの制服を着た榎原明人。生氣のない立ち姿。その手に握られた日本刀だけが刺すような光を帯びている。

表情の無い、鳥類のような目がアキラを捉えた。

心底楽しそうに明人の周りを跳ねていた綾瀬も氣付く。

「お前たち、何をした？」

修復中の身体から絞り出すようにアキラが聞いた。
榎原明人。今回の作戦の鍵。すでに変容が始まっているらしい。少女の方は会つたこともない。

「アキラちゃんとか言つたっけ？ あなたは知らなくても私は知つてるよ、君のこと」

「なに……」

心を読まれたみたいで不快だった。

「でも今はあんたに付き合つてる時間はないんだよね。おへそもうとも消えてしまえ！」

嫌な予感がして綾瀬が言い終わる前に、アキラは死ぬ氣で綾瀬へ跳躍した。

今までいた場所に光の塔が聳えていた。超高压の電気エネルギーが地面を抉り飛ばしている。

「おつと！」

すれ違ひざまに綾瀬を斬りつけたが手応えがおかしかった。綾瀬は何食わぬ顔でアキラを見ている。

攻撃はどうあれ、あの雷を避けられたのは僥倖だった。だが次はないのは明らかだ。

「無差別攻撃もも楽しいけど、ちゃんと狙つて当てる練習もしなきやね。それっ」

綾瀬の合図で、明人が刀を振った。

獰猛な唸りを引き連れた雷速の槍が、アキラを貫いた。身体が石になってしまったようだった。耳も聞こえず目も見えず、叫ぼうにも口舌が硬直して呼吸さえ不可能。体機能は軒並み危険域で、死の淵まであと僅かだ。

この感覚、夜の街で『起源』と引き分けたあの時と同じだ。違うことといえば治し方を覚えているのか、回復速度があの時の比ではないとか。

ますます化け物に近づいている。

ふらふらと立ち上がりながら、アキラは嗤わずにいられなかつた。

「やっぱり『出来損ない』は無駄に頑丈ね。あんたは度を越して変態性能みたいだけど」

まあいいや、と綾瀬も笑う。

「仕事は済んだし、もうひいていいよね」

エンジンを噴かせて突っ込んできた黒いワゴンがアキラを撥ね飛ばした。

着地もままならずボロ雑巾のように地面に叩きつけられた。

「じめん、もう退くから許してね」

綾瀬は明人を引っ張つて、意気揚々と車に乗り込んだ。

朦朧とする意識を現世妄執の治癒力で繋ぎ留め、アキラは見た。後部座席で昏々と眠る遙の姿を。

遙が奪われる。

痛み、憎しみ、怒り、友と居たい気持ちも。ありとあらゆる感覚や想念が『起源』への殺意に置き変わっていく。

体内の『柘榴』が負感情と欲望を増長させ、暴走状態に陥つてい

く。それを止められる余力は残されていない。

力なく横たわるアキラの周りに3匹の魔犬がうろついている。

彼らは互いに溶けて混ざり合い、紅霧を吸い込んで更に大きくなつていく。

やがて無抵抗のアキラをも取り込んだ巨大な闇の塊が、不気味に胎動を始めたのだつた。

第25話 A・逃避 - escape journey

紅霧が滞留する道路を黒いワゴンが進んでいく。視界は最悪で2、3メートルすら覚束ない。明らかに霧の濃さが増してきている。

事故車が放置されていたり、変態が完了した人間が蹲つてしたりするため無闇にスピードを上げるわけにもいかない。いずれアキラも追つてくるはずなので、何重にもじれったく感じてしまう。

「ん……う、ん」

助手席で気を失っていた小夜は、ぼんやりと目覚めた。

倒してあるシートから起き上がるひつとした途端にアキラに殴られたお腹に鈍痛が走り、顔を歪めた。

「目が覚めましたか。早速で悪いんですがね、浄化をお願いします」「は、はい！」

状況を思い出して一瞬で頭が切り替わった。

小夜は『起源』の胸に淡い光を帯びた右手を乗せた。

聖淨の月の力が流れ込み、『起源』は苦痛とも解放感ともとれる大きな溜息を漏らした。

「辛くはないですか？ 今日のあなたは力を使いすぎている

疲れの浮いた顔で『起源』が言つ。

「それはこっちの台詞です。侵蝕も深い所まできてますし、酷い怪我じゃないですか。起こしてくれればよかつたのに

脚の銃痕からはまだ生温かい血が流れている。時折、苦患の表情が垣間見える。

アクセル・ブレーキは器用に『不壊』を使って行つているようだが、その姿は痛ましい。

「あなたには休めるときに休んでおいて欲しかったんですね」「

「気持ちは嬉しいですが、『柘榴』の処置は早い方がいいんです」

「それは分かつてますがね……ありがとうございました。後ろの方に
もしてあげなせえ。もちろんあなた自身にも
後ろを覗き込むと遙の姿が目に入った。

「『女神』は後回しでいいですね」

「ええ、ここで暴れられては困りますあ」

小夜は言われた通りに動き出した。

後部座席で明人はドアに靠れていた。目を瞑り、血塗れの格好で
人形のように微動だにしない。死んでいるのかと錯覚してしまうほ
どだ。

こちらもこちらで痛ましい。一体何があつたのだろう。

小夜は綾瀬を盗み見た。

綾瀬は起きる気配のない遙のコートをひっくり返して何か探して
いた。

「彼を浄化してもいいわよね」

「ん？ ああ、どうぞ。ただ『柘榴』だけにしつかないと痛い目に
会わせるよ。すぐ分かるんだから」

いつもの笑顔で遙の持っていた小銃を突き付けられた。
だけど、言うからには他のものもあるのだろう。

明人の手を握りながら、探しを入れてみる。

漠然と3つの力を感じる。『柘榴』は確定としてあとは『樂園』
だろうか。もう一つは力が強いのに掴みどころがない。

「私を殺したのはこのピストル？ それともこのサブマシンガン？
はたまたこの手榴弾かしら」

綾瀬は遙の得物を並べて、怪しい笑みを浮かべている。

「殺されたことがあるの？」

明人の浄化を進めながら、小夜が聞く。

「あれはあなたが日本に帰ってきた日かな。撃ち殺されたらしいん
だよね」

「らしい？」

「私じゃないからね。……あれ、理解できないみたいだね」

曖昧な顔をしている小夜に、その方が理解できないという顔を見てみせる。

「『幻象』の再生能力を応用すれば、分身することができるって知らないの？」殺されたのはその一人

「は、初耳よ。知つていましたか『起源』？」

「理論的には。あつしにはできませんがね」

驚いた小夜が『起源』に聞くとそつけない答えが返ってきた。

「分かりやすく言うと細胞分裂みたいなものかな？ あれは細胞内の染色体を一時的に倍にして分かれるけど、私たちは身体の一部を千切れればそれが元の姿に戻るうと再生するんだよ」

綾瀬は得々と話しだした。

『幻象』の自己再生能力は単に傷を癒すものではないらしい。

例えば髪を抜いて放置しておけば、そこからもう一人の自分が生まれる。

だが普通は抜けた時点で、現在もそれが自分だと正確に認識できる者は少ない。

『幻象』になつたとはいえ素体は人間。爪でも髪の毛一本でも身体を離れれば、それも自分だという常識など持ち合わせていないのだ。

自分が何人もいれば、誰しもが夢想したことだろう。だがそれは大抵分身を便利な奴隸としか見ていない。

実際は分身を生んだはずの自分が、いつのまにか分身に取つて代わられる。それは珍しくもない茶飯事。

人はアイデンティティーの危機を無意識下で忌避し続ける。まして自分殺しを敢行する狂氣も持ち合わせてはいけない。

そういう認識が障害になつて普通は分身できない。

「でも私はできるんだよね。互いに不干涉だけど、全員の経験と記憶は共有財産として使わせてもらつてるわ」

こんなの見たこともないけど扱いはお手の物よ、と白慢げに銃を

弄んでみせる。

「……スケールが大きい話ね。はい、次は綾瀬の番よ」
ひとまず明人は安静にして、綾瀬の横に移動する。

「痛くない？」

急に不安になつたのか綾瀬が尋ねてきた。こうこうしおらしげ一面もあるのかと、少し意外に思つ。

「大丈夫。まだそんなに定着してないから」

「そつか」

肩を寄せると綾瀬は安心したらしく身を任せってきた。
やわらかな燐光が繭のように2人を包み込む。

「この霧もさ、同じ方法で生まれてるんだよ。ただ私みたいに放任主義じやないだけで」

「どういうこと？」

「霧の一粒一粒がすごく小さい『魔姫』なの。再生が抑えられてるから霧みたいに見えるだけで」

「それじゃ『魔姫』を吸い続けるわけ？」

小夜は素つ頓狂な声を上げた。

「あはは、まあ血とかだと思うけどね」

それが体内で増殖・分裂して人間を紅霧発生装置に変貌させてしまつらしい。有り体にいえばウイルスと同じである。
「だからアイツがやろうと思えば、お腹を突き破つて出していくともできるんじゃないかな」

「うつ……」

少し想像して気分が悪くなつた。

『魔姫』と対峙する時は、浄化を欠かさないようこしないといけないと、肝に銘じた。

「まあ無理だろうけど。アイツみたいなやつは自分が世界に2人もいるのを認めるわけないんだから」

「はい、完了。さつきから『魔姫』のことだけに詳しいみたいだけど」

「ああ、それはあっしがスパイをさせていたからでさあ。あなたは早々に魅了されてしまったようですか？」

「え……、あ、すみません」

申し訳ない気持ちになつて小夜は白い頬を朱に染めて俯いた。

「なに、謝ることはありませんぜ。あなたは立派に役目を果たした

じやないですか」

何かできたことがあつただろうかと、記憶を反芻してみるが思い当たらない。これ以上恥ずかしい思いをするのも嫌なので、小夜はそこに追及しなかつた。

第25話B・逃避 - escape journey

小夜たちを乗せた車は先ほどから高架上を走っていた。
「ここでも街中ほどではないが片側一車線の道路に壊れた車やバイクが乗り捨ててある。

午後3時も半ば過ぎ、冬の太陽は早くも傾き始めたらしい。血を吸つた綿のような雲の切れ間から斜陽が射し込んでいる。

高所から見ると緋森の町は紅いダム湖に沈んでいるようだつた。
「どれほど範囲を広げたんではさ。終わりが見えませんぜ」

小夜の隣で『起源』が呆れたように呟いた。傷はだいぶ塞がつたようで、今は普通に足でアクセルを踏んでいた。

「仕方がありませんな。『女神』を浄化してやつてくだせえ。脳に直接電流を通しましたんで、途中で起きることはないでしょ」「綾瀬に武装解除された遙はシートベルトできつく縛られていた。初動を少しでも遅らせることができたら上出来という程度の拘束でしかないだろうが。

「了解です」

小夜が早速取りかからうとした時、洞窟の崩落を思わせる音が車を揺さぶつた。

激しくも大きくもないが、生存本能を齎かす部類の超重音だ。

「見て！」

後部に座っている綾瀬が緊張した様子で叫んだ。

トランクの窓の外、紅い霧の中に追跡者の全貌を確認する。

2メートル強はあるだろうか。影を凝縮した巨大な何かが四つん這いに近い体勢で迫つてきていた。

狼とも虎ともれる頭部には炎が2つ燃えている。異様に発達した前肢に備わった大振りの鉤爪がアスファルトを抉り、進路にある車両を薙ぎ倒す。

力強く荒々しい前面に對して、下半身は氣化しているようにおぼろげだ。陽炎のように揺らめいてマント状に広がっている。

戦車と幽靈。影の魔物は別種の恐怖を同時に表現していた。

「見るも無残といつべきか、流石の忠節といつべきか」

『起源』はバックミラーで確認して嘯いた。

「ちょうどいいのもあるし、獣狩りと行きますか」

遙から取り上げたハンドガンをジャキッと構える綾瀬。

「トランクを開けまあ。しつかり狙つてくだせえ」

「オッケー」

ドアが開くや否や綾瀬は獸の頭に狙いを定めて引き金を引いた。銃弾は狙い通り額に吸い込まれていったが、何の痛痒も与えられないようだ。

逆上した影の獸はおもむろに単車を鷲掴むと、投げつけてきた。

「『起源』右！」

身も竦むような急な動きで車が車線を変える。すぐ左で単車がアスファルトに衝突して派手に爆発した。

「ひやあ！？」

「淨化に集中して！あれを滅ぼせるのはそいつだけなんだから」思わず頭を庇つた小夜に、綾瀬は振り向きもせず鋭い注意を飛ばした。

綾瀬の背中からは冷たく研ぎ澄まされた鬪気が立ち上つているようと思われた。

そう、ここはまだ紅の領土。氣を休めていい時間などないのだ。小夜は遙の胸に軽く手を当て、清めの月光を巡らせる。

やはり他の人に比べて侵蝕が進んでいる。自分から求めてしまったこともあり、中枢が冒されているのは明らかだ。

相当の痛みを伴つのだろう。遙は無意識に小夜から離れようと身動きしている。

迅速に、慎重に。小夜は氣を引き締め己が職務を全うしにかかつた。

もう数発撃ち込んでみたが、手応えを感じられない。ならば、と

綾瀬は手榴弾のピンを抜いて放った。

沼に石を投げ入れたような感触と共に、爆弾は怪物の腹に吸い込まれていった。

空隙の後、破裂音。相克する黒煙と赤炎の様相が呈される。

怪物が巨体をよじり上半身が弾けた。まるで花が咲いたような形状になつている。

闇の花弁の中央に腰から下が埋もれた状態でアキラが据えられていた。

「そこにいたんだ」

何の呵責も感じさせない滑らかな動きで綾瀬は銃口を向け、弾を発射した。

命中するたび黒い衣から血がしぶく。無抵抗なアキラは衝撃で身体を揺らすだけだが、影の魔物は痙攣して追跡を緩める。

「やつぱりあんたがコアなの。なんだかゲームみたい」

狂える微笑みを浮かべながら綾瀬はマガジン1本を使い切つた。リロードの隙に怪物はアキラを包み込んで横に跳躍した。黒い尾を引いて高架下に消えていった。

「やつた！」

ガツツポーズを決める綾瀬を小夜は複雑な目で見ていた。ためらいもなく人を撃てることがショックだった。

「浄化は終わりましたか？」

ふつと一息ついた《起源》が尋ねてきた。

「ほとんど完了しました」

マンションで強引に浄化したのが幸いした。あの時、蓄積し固く定着していた部分を崩していくければこうも簡単にいかなかつただろづ。

アキラが与えた数粒の《柘榴》と霧では鎖の補強には足りなかつたようだ。

遙の体内にもうほとんど《柘榴》は残っていないはず。

あとは精神力次第だ。体力が回復しさえすれば、目も覚めるだろう。

小夜は汗を拭き、息抜きに窓の外に目をやつた。紅霧が薄くなっているように感じるのは気のせいだろうか。

何かを暗示するような空隙があった。

次の瞬間、車の左側、高架外の中空から黒い津波が押し寄せた。

「くそつ！」

『起源』は思いつきりハンドルを切り、影から逃れようとした。その甲斐なく金属のドアを紙か何かのように貫いて、影の爪牙がなだれこんできた。車は左へ引き摺られ、妙な浮遊感も伝わってきた。

「ぐつ！ ん……」

逃げ場のない車内。小夜の左肩を漆黒の爪が抉った。鋭い痛みが刻み込まれる。だがそれ以上の快感が押し寄せ、逆にとろけてしまいそうになる。

一度『魔姫』に従属した身。意識で依存から抜け出ようと、味をしめた小夜の身体はすんなりと快楽を受け入れてしまう。

「やああああ！」

倦怠な吐息を振り払い、氣合の声を上げて小夜は光の剣を振るつた。

スッパリと裂かれた闇が痙攣し、侵攻を止めた。

「早く！」

綾瀬と明人はトランクから、『起源』は運転席のドアから脱出した。

影を食い止めながら、小夜は遙を縛るシートベルトを外すのに四苦八苦していた。

影は車を覆い尽し、金属の骨組みが鈍い悲鳴を上げている。汗がじっとりと浮かび、心臓が破裂しそうになる。

何とかシートベルトを外し、遙を抱える。ドアを塞ぐ影を斬り裂いて外に飛び出した。

間一髪。歪んだ音を立てて車はスクランプに変わり、巨大な影に飲み込まれていった。

息つく暇もなく、小夜は異変に気付かされる。

小夜たちは高架から引きずり降ろされ、空を舞っていたのだ。

「いやああ！ 死んじゃううう！」

綾瀬の悲鳴が下から聞こえてくる。

スカートを押さえながら、落下していく綾瀬が見えた。

即座に純白の翼を展開。霧を退けながら急降下し、綾瀬を捕まえ

る。近くにいた明人の手も掴む。

能力を使つたことで麻酔^{まやく}が切れ、焼けるような痛みが左肩に再來した。

体勢を元に戻そうとしたのだが、3人分の体重が小柄な身体にかかり、翼から力を奪つていく。

「も、無理……！」

翼が霧散し、4人の身体が自由落下を始める。

地上でどぐろを巻いていた影から4人を槍玉に擧げるべく触手の群れが突き上がってきた。

小夜の両手が塞がつていい。防御も攻撃もままならない。

綾瀬の幻覚もこれを止める即効性を持たない。明人への命令も同じだろう。

軽い風切音がして、目も開けられないほど鋭利な風がすぐそばを通り抜けて行つた。

明人と綾瀬を掴んでいた感触が消える。

ゴオオオオアアア！

暗闇の中、魔物の慟哭が聞こえる。

「あぐっ！」

背中から地面に落ちて、呼吸が止まりかけた。

何とか身体を起こすと、痛みに混乱する視界に影法師が揺りめいていた。

「はあ……やつと解放されたわ」

その声が、気配が周囲の温度を墜落させていく。

『柘榴』による暴走よりも厄介な存在に今更気付いた。

冷氣を帯びた硬質なものが小夜の首から頬をなぞっていく。

「震える。うふふ、かわいそうに」

指一本動かせないほど硬直している身体。その中で行き場を失った恐怖が暴れている。

ようやく視力が戻ってきた。目の前を白刃が生物的な滑らかさで主の元へ戻つていった。

伝承にある復讐の3女神、その蛇髪の、とき死毒の剣がゆつたりと身をくねらせている。

友のため復讐の道を歩む彼女とは違う。冷めたようで熱い心を持つ彼女とは違う。遙とは別の何か。

無の地平に血生臭い欲望だけが聳え立つ。唯一『幻象』を討滅でき、そのことしか頭に無い者。

「……ネメシス」

呻きに似た呟きが零れ落ちた。

「あなたは食べごたえがなさそう。今殺しても困るし、そこで見ていればいいわ」

血の通わない声が小夜に猶予を告げる。

女死神の背後で黒獣が咆哮した。筋骨隆々とした腕を振りかざし、ブレークが壊れたトラックの勢いで最愛の友に突進してきた。

「こないだ殺し損ねた奴か。私のために肥え太ってくれたの？」

斬撃に風が泣き叫ぶ。

杭のような爪を備えた巨腕がやすやすと切り裂かれ、粘度の高い墨汁を思わせる体液が滴つた。

それでも獣の勢いは死なず、巨体が遙の身体を押し潰したかに見えた。

だが遙の周りを高速で踊り狂う蛇剣が、触れるそばから獣の身体を解体していく。獣は自らミキサーに飛び込んだも同然だった。

遂に影の獣の胴体は突貫され、風穴が空いた。

音もなく影の獣は地に伏した。形を維持できなくなつたのか、もはや巨大なスライムにしか見えない。

「次は誰？」

細められた目が舐めるように動く。

凍りついたように動かない小夜。離れたところで警戒している綾瀬と彼女に付き従う明人。

「あなたは……」

明人を見たとき、何か言いかけて遙は口を閉ざした。

軽い溜息を漏らし、遙は目を閉じる。

それが見開かれた時、何も変わっていないにも関わらず、もう人間らしさは残っていなかった。

確実に視覚以外の情報を取得している異形の眼。それが再び明人

を捉える。

その視線を遮るように綾瀬が前に出た。全身をスキヤンされているような不気味な感覚に鳥肌が立つた。

「いつか想像していたことになつたわけね。容赦しないわよ？」この娘の情なんかに流される私ではないわ

「絶対殺させたりしないわ。護つてみせる」

綾瀬が真っ向から受けて立つ氣概を見せるも、それを気にした様子もなく遙は目線を外した。

重圧が消えて綾瀬が安堵の吐息を漏らすのが聞こえる。

しばらく何かを探していた遙の眼がある一点で止まった。

高架付近の交差点、車が玉突き事故を起こしている場所。無残な金属の墓石の群れに和服姿の魔人が靠れていた。

「待ち侘びたわ。この時を」

恨み呪つた運命の相手を前に遙は舌なめずりをした。

これだけ我慢してきたのだから、手にかけた時の悦楽たるや尋常のものではないはずだ。『復讐の女神』はそのために存在しているのだから。

「それはもう、焦がれるほどでさあね」

殺戮と復讐の眼差しを一身に受け止め、『起源』は身震いした。

遙が歩を進める。『起源』もゆつたりと車から背を離した。

因縁の戦いが幕を上げようとしている最中、急速にエンジン音が接近してくる。

「だけどまたお預けのようね？」

「そのようで。くく、あつしとしてはもう慣れましたがね」

「気が合ひじやない。私もよ」

遙が悪戯っぽく笑い、『起源』も唇を歪めた。

『起源』の後ろの潰れた車をジャンプ台にしてバイクの連隊が次々と飛び出してきた。先頭の1台が乱暴に着地を決めると、鎖を振り回しながら遙に向けて突撃してきた。

だが鉄の鞭が遙の肌を裂くことあたわず、騎手もろとも人の形を

無くした。派手に横転したバイクが血の海を滑っていく。

それを目の当たりにした他のライダー達は、威嚇するように遙の周りを旋回し始めた。所詮獅子には敵わぬハイエナ。彼我の実力差は承知しているようだった。

そこへ割り込むクラクション。見れば道路の向こうから大型バスが走ってきていた。

バスがブレーキを響かせて止まる。アーマーとメットで武装した黒ずくめの兵士が靴底を鳴らしながら降車し、バスの横に整列した。その数20。

一層濃い瘴気が満ちてくる。窒息しそうなほど甘く、快樂信号を絶え間なく流し込んでくる。

紅い世界の支配者は黒のドレスを身に纏い、ダンスホールに出向くような優雅さでタラップを降りてきた。真っ黒なフード付き外套に身を包んだ側近がすぐ後ろに付き従う。

「おまたせ。さあ、舞踏会を始めましょ。私のために踊り狂いなさい」

自然とした命令が下る。統制のとれた動きで兵士たちが一斉にマシンガンを構えた。

綾瀬と明人の姿がぐにゃりと歪み、陽炎の向こうに溶け消えた。盾を持つ《起源》は余裕に構え、遙と小夜はそれぞれ手近な車の陰に身を隠した。

けたたましい音と共に鉛玉が撒き散らされる。車体やアスファルトで跳ね返り、恐ろしい弾幕を形成する。

防御手段を持たない小夜は、消えた2人と《起源》がこの状況をどうにかしてくれるのを待つしかなかつた。

「時間稼ぎなどさせないわ」

《魔姫》の声が鈴の音のことく、紅い大気を渡していく。

小夜はハッとアキラの方を見た。

黒い塊は大きく脈打ち、魔薬の霧を吸収して獸の形を取り戻しかけていた。銃弾が飛び交う中でアレと戦うなど分が悪すぎる。

恐怖心を払い、小夜は飛び出していた。地面と水平になりつつすれすれを飛ぶ。

空気抵抗を極限まで殺し、今まで感じたこともない速域に達する。全身に月光の力を纏つた姿はまさに彗星。そのまま再生中の影の獣をぶち抜いた。

「！？」

確かにそのビジョンが映った。だが、実感がない。小夜を影が覆っていた。影の魔物の影。

魔物は跳躍していた。

不定形の塊は《魔姫》の傍に着地した。銃を構える近衛を踏み潰して。

恐ろしい人体損壊の濡音が響き渡る。鮮血に濡れる骨肉や臓腑を無遠慮にかき混ぜる音。

潰した兵士だけでは足りないのか、触手を伸ばして捕まえては闇の中に引き摺り込んでいく。

優秀な近衛兵とは《柘榴》が詰まつたタンクと同義なのだ。血肉はもちろん悲鳴さえ飲み込んで、黒獣は身体を取り戻していく。

一瞬唖然としていた《魔姫》がニヤリと笑つて言った。

「お腹が空いていたのね？　でも私の家族を食べちゃうのは許し難いわ。まあ、その分しつかり動きなさい」

「承知しております。我が主」

我を取り戻したアキラの身体に影の獣が吸い込まれるように消えた。

ぬめる光沢に覆われた骨と銃器がバラバラと零れ落ちる。

アキラは小山をなすほど積まれた死骸を無造作に崩し、静まり返つた戦場を見渡した。

「邪魔よ」

銃撃が止むと同時に行動していた遙は、黒の主従のすぐそばに来ていた。

姿勢を低くして接近する。アキラにむかって《毒蛇》を下から振

り上げた。

だが白い刃は黒い手に握られ、友に届くことはなかつた。

「放せ！」

「遙、今ならまだ間に合ひ。あたしと来てくれ」

アキラの真剣な眼差しを遙は真つ向から切り捨てた。

『毒蛇』は本物の蛇のように暴れるが影の獣が変じた籠手はビクともしない。

「聞こえてないわよ。私を生んだ敵2人を前にして私を抑えようなんて、見ぐびらないで」

遙は『毒蛇』を置いて距離を取つた。

アキラの手元から三叉の剣が消え、再び遙の右手に戻つてきた。
「だつてさ、殺してしまえばいいわ。『女神』も欲しいけど本命じゃないし」

「それはできません」

「なに？」

思わず反逆に『魔姫』の声が低くなる。紅霧の中で蒼く輝く瞳がアキラを突き刺す。

「遙が意識を取り戻せば、我々の元に帰つてくるはずです。今は『女神』に乗つ取られているだけです」

「ふうん、で？ そんな甘いこと言つてて勝てるの？」

いつの間にか『魔姫』の手には大鎌が現れ、アキラの首にかけられていた。鎌を引きよせて首を顔の前に持つてくる。

「勝ちます。あなたの右腕を信じてください」

『魔姫』の眼を見据え、アキラは言い切つた。

「……好きにしなさい」

「ありがとうござります」

アキラは一礼して遙を向き直つた。

「今の間に何回死ねたのかしらね」

嘲笑う遙の言葉を黙殺し、真っ向から視線をぶつける。

例え『魔姫』の元での偽りの安息でも遙は喜んでいた。もはや変

えよひのない《幻象》としての生を少しでも変えてやりたかった。

「遙、手を貸すから戻つてきてくれ」

「そんな血塗れの手で私が救えるの？ やつてみせよー。」

「……いくぞ！」

剣であり鎧である影を纏いアキラは地を蹴つた。三つ首の《毒蛇》を従え、遙がそれを迎え撃つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0226g/>

幻象-Phenomenon

2011年7月7日03時33分発行